

豊後大野市所在
かみ た はら ひがし
上 田 原 東 遺 跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

（第1冊分）

2024

大分県立埋蔵文化財センター

豊後大野市所在
かみ た はら ひがし
上 田 原 東 遺 跡

— 県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

（第1冊分）

2024

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部豊後大野土木事務所の依頼を受けて実施した、上田原東遺跡の発掘調査報告書です。

上田原東遺跡は豊後大野市三重町の北方、大辻山－牟礼岳山塊の北西に張り出す台地上に所在します。眼下に蛇行する大野川を見下ろし、三重盆地の北端を押さえる要衝といえる場所にあたります。

発掘調査の結果、縄文時代後期後葉～晩期後葉、弥生時代中期～後期初頭、古墳時代前期後半、古墳時代後期後半の4つの時期を中心に、竪穴建物をはじめとした多数の遺構や遺物が確認されました。中でも、これまで県内でほとんど確認されていなかった、縄文時代晩期後葉の多数の竪穴建物や、遺跡の南に位置する県指定史跡で4世紀後半の築造とされる前方後円墳の立野古墳とほぼ同時期の集落を初めて確認できたことは大きな成果で、今後の地域研究に資する良好な資料となることが期待されます。本書が、埋蔵文化財の保護と啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和6年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター
所 長 後 藤 晃 一

例 言

1. 本書は令和2年度に実施した、大分県豊後大野市三重町上田原に所在する上田原東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴い、大分県土木建築部豊後大野土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 上田原東遺跡の発掘調査は令和2年5月8日～令和3年1月21日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課 副主幹 横澤 慈、調査第二課会計年度任用職員 綿貫俊一を主担当者として実施した。
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
・株式会社イビソク大分営業所（調査技師 佐藤孝則、木付雄大、調査助手 高木啓司、幸重由香）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、写真撮影、トレース等の整理作業は令和3～5年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。
6. 土器の表出圧痕分析は令和5年度に熊本大学大学院人文社会科学部教授 小畑弘己氏に依頼し、第8章に分析結果を掲載した。
7. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
8. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
9. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SH（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SA（柱穴列）、SP（柱穴）、SX（埋納遺構及び性格不明遺構、攪乱）
10. 各遺構の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』（1997年度版）を参照した。
11. 本書の執筆及び編集は横澤が行った。

目次

【第1分冊】

序文

例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	3
第3節 資料整理・報告書作成の経過	5
第4節 調査組織の構成	5
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 1区の発掘調査成果	9
第1節 調査区の設定と基本層序	9
第2節 縄文時代の遺構と遺物	12
第3節 弥生時代の遺構と遺物	21
第4節 古墳時代の遺構と遺物	24
第5節 古代・中世の遺構と遺物	46
第6節 近世以降の遺構と遺物	57
第7節 その他の遺構・遺物	61
第8節 1区出土遺物	68
第9節 旧石器時代の確認調査	68
第4章 2区の発掘調査成果	69
第1節 調査区の設定と基本層序	69
第2節 縄文時代の遺構と遺物	72
第3節 弥生時代の遺構と遺物	100
第4節 古墳時代の遺構と遺物	112
第5節 古代・中世の遺構と遺物	162
第6節 その他の遺構	164
第7節 包含層その他の出土遺物	164
遺物観察表	166

【第2分冊】

第5章 3区の発掘調査成果

 第1節 発掘調査の概要

 第2節 調査区の基本層序

 第3節 遺構と遺物

 (1) 縄文時代の遺構と遺物

 (2) 弥生時代の遺構と遺物

- (3) 古墳時代の遺構と遺物
- (4) 古代・中世の遺構と遺物
- (5) その他の遺構と遺物
- (6) 包含層その他の出土遺物
- (7) 旧石器時代の確認調査

遺物観察表

【第3分冊】

第6章 4区の発掘調査成果

第1節 発掘調査の概要

第2節 調査区の基本層序

第3節 遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

(2) 弥生時代の遺構と遺物

(3) 古墳時代の遺構と遺物

(4) 古代・中世の遺構と遺物

(5) その他の遺構と遺物

(6) 包含層その他の出土遺物

第7章 5区の発掘調査成果

第1節 発掘調査の概要

第2節 調査区の基本層序

第3節 出土遺物

第8章 自然科学分析

第9章 総括

遺跡の年代の変遷

縄文時代晩期の遺構と遺物について

弥生時代の遺構と遺物について

古墳時代の遺構と遺物について

古代・中世の遺構と遺物について

遺物観察表

【第4分冊】

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	県道三重新殿線バイパスの計画路線と発掘調査遺跡 (1/50000)	1
第2図	上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1500)	2
第3図	確認調査出土遺物実測図 (1/1)	2
第4図	上田原東遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行2万5000分の1地形図「犬飼」・「三重町」に加筆)	8
第5図	上田原東遺跡の調査区配置と1区的位置図 (1/1500)	9
第6図	上田原東遺跡1区の遺構配置図 (1/200)	10
第7図	1区土層断面図 (1/60)	11
第8図	SH662実測図 (1/30)	12
第9図	SH662出土遺物実測図 (1/3・1/2)	13
第10図	SK557実測図 (1/30)	13
第11図	SK557出土遺物実測図 (1/2)	13
第12図	SK571実測図 (1/30)	14
第13図	SK571出土遺物実測図 (1/3)	14
第14図	SK579実測図 (1/30)	14
第15図	SK579出土遺物実測図 (1/3)	14
第16図	SK591実測図 (1/30)	15
第17図	SK591出土遺物実測図 (1/3・1/2)	16
第18図	SK595実測図 (1/30)	17
第19図	SK595出土遺物実測図 (1/3・1/2)	18
第20図	SK642実測図 (1/30)	19
第21図	SK642出土遺物実測図 (1/3)	19
第22図	SK651実測図 (1/30)	19
第23図	SK651出土遺物実測図 (1/3)	19
第24図	SK664実測図 (1/30)	20
第25図	SK664出土遺物実測図 (1/3・1/1)	20
第26図	SK666実測図 (1/30)	21
第27図	SK666出土遺物実測図 (1/3・1/2)	22
第28図	SK675実測図 (1/30)	22
第29図	SK675出土遺物実測図 (1/3・1/2)	23
第30図	SK691実測図 (1/30)	23
第31図	SK691出土遺物実測図 (1/2・1/3)	24
第32図	SH600実測図 (1/30)	25
第33図	SH600出土遺物実測図 (1/3)	25
第34図	SH667実測図 (1/30)	26
第35図	SH667出土遺物実測図 (1/3)	26
第36図	SH687実測図 (1/50)	27
第37図	SH687出土遺物実測図 (1/3・1/2)	27
第38図	SK665実測図 (1/30)	28
第39図	SK665出土遺物実測図 (1/2)	28
第40図	SD589実測図 (1/50)	29

第 41 図	SD589 出土遺物実測図 (1/3)	29
第 42 図	SD690 実測図 (1/30)	30
第 43 図	SD690 出土遺物実測図 (1/3)	30
第 44 図	SH535 実測図 (1/50・1/30)	32
第 45 図	SH535 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	33
第 46 図	SH536 実測図 (1/50・1/30・1/20)	34
第 47 図	SH536 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/4)	35
第 48 図	SH537 実測図 (1/50)	37
第 49 図	SH537 出土遺物実測図① (1/3)	38
第 50 図	SH537 出土遺物実測図② (1/3)	39
第 51 図	SH537 出土遺物実測図③ (1/2)	40
第 52 図	SH537 出土遺物実測図④ (1/2・1/3・1/4)	41
第 53 図	SH610 実測図 (1/50)	42
第 54 図	SH610 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	43
第 55 図	SH620 実測図 (1/50)	44
第 56 図	SH620 出土遺物実測図① (1/3)	45
第 57 図	SH620 出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	46
第 58 図	SH620 出土遺物実測図③ (1/4)	47
第 59 図	SK604 実測図 (1/30)	48
第 60 図	SK604 出土遺物実測図 (1/3)	48
第 61 図	SK612 実測図 (1/30)	49
第 62 図	SK612 出土遺物実測図 (1/3)	49
第 63 図	SK674 実測図 (1/30)	49
第 64 図	SK674 出土遺物実測図 (1/3)	49
第 65 図	SD558 実測図 (1/50)	50
第 66 図	SD558 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	50
第 67 図	SH570 実測図 (1/50)	51
第 68 図	SH570 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	52
第 69 図	SA1 実測図 (1/50)	53
第 70 図	SA1 出土遺物実測図 (1/3)	53
第 71 図	SD556 A (SX556) 実測図 (1/60)	54
第 72 図	SX556 B 実測図 (1/50)	55
第 73 図	SD556 (SX556) 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	56
第 74 図	SX619 実測図 (1/60)	57
第 75 図	SX619 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	58
第 76 図	SD554 実測図 (1/50)	59
第 77 図	SX534 出土遺物実測図 (1/4)	59
第 78 図	1 区攪乱分布図 (1/200)	60
第 79 図	1 区攪乱出土遺物実測図 (1/3・1/2)	61
第 80 図	SK568 実測図 (1/30)	61
第 81 図	SK596・SK597 実測図 (1/30)	62
第 82 図	SK596・597 出土遺物実測図 (1/3)	62
第 83 図	SK616 実測図 (1/30)	62

第 84 図	SK616 出土遺物実測図 (1/2)	62
第 85 図	1 区遺構実測図 (1/30・1/20)	63
第 86 図	1 区遺構出土遺物実測図 (1/3)	63
第 87 図	1 区出土遺物実測図① (1/3・1/2)	65
第 88 図	1 区出土遺物実測図② (1/1・1/2・1/3)	66
第 89 図	1 区旧石器時代確認調査トレンチ配置 (1/200)	67
第 90 図	1 区旧石器時代確認調査トレンチ土層断面 (1/30)	68
第 91 図	上田原東遺跡の調査区配置と 2 区の調査位置 (1/1500)	69
第 92 図	2 区遺構配置図 (1/150)	70
第 93 図	2 区土層断面 (1/60)	71
第 94 図	SH770 実測図 (1/50)	72
第 95 図	SH770 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	73
第 96 図	SH785 実測図 (1/50・1/30)	74
第 97 図	SH785 出土遺物実測図 (1/3)	75
第 98 図	SH871 実測図 (1/50)	76
第 99 図	SH871 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	77
第 100 図	SH871 出土遺物実測図② (1/2・1/4)	78
第 101 図	SH915 実測図 (1/50)	79
第 102 図	SH915 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	80
第 103 図	SH954 実測図 (1/50)	81
第 104 図	SH954 出土遺物実測図 (1/3)	82
第 105 図	SH955 実測図 (1/50)	83
第 106 図	SH955 出土遺物実測図 (1/3)	84
第 107 図	SH956 実測図 (1/50)	85
第 108 図	SH956 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	86
第 109 図	SH981 実測図 (1/50・1/30)	87
第 110 図	SH981 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	88
第 111 図	SH981 (SK1000) 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	89
第 112 図	SK782 実測図 (1/30)	90
第 113 図	SK782 出土遺物実測図 (1/3)	90
第 114 図	SK812 実測図 (1/30)	90
第 115 図	SK812 出土遺物実測図 (1/2)	91
第 116 図	SK898 実測図 (1/30)	91
第 117 図	SK898 出土遺物実測図 (1/3)	91
第 118 図	SK950 実測図 (1/30)	92
第 119 図	SK950 出土遺物実測図 (1/3)	92
第 120 図	SK970 実測図 (1/30)	92
第 121 図	SK970 出土遺物実測図 (1/3)	93
第 122 図	SK1053 実測図 (1/30)	93
第 123 図	SK1053 出土遺物実測図 (1/2)	94
第 124 図	SD774 実測図 (1/30)	95
第 125 図	SD774 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	96
第 126 図	SH815 実測図 (1/50)	96

第 127 図	SH815 出土遺物実測図 (1/3)	97
第 128 図	SH860 実測図 (1/50)	97
第 129 図	SH860 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	98
第 130 図	SK776 実測図 (1/30)	99
第 131 図	SK776 出土遺物実測図 (1/2)	99
第 132 図	SH29 実測図 (1/50)	100
第 133 図	SH29 出土遺物実測図① (1/3)	101
第 134 図	SH29 出土遺物実測図② (1/3)	102
第 135 図	SH29 出土遺物実測図③ (1/3)	103
第 136 図	SH29 出土遺物実測図④ (1/3・1/2)	104
第 137 図	SH29 出土遺物実測図⑤ (1/4)	105
第 138 図	SH724 実測図 (1/50)	106
第 139 図	SH724 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	106
第 140 図	SH726 実測図 (1/50)	107
第 141 図	SH726 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	107
第 142 図	SH730 実測図 (1/50・1/30)	108
第 143 図	SH730 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	109
第 144 図	SH731 実測図 (1/50)	110
第 145 図	SH731 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	111
第 146 図	SH731 出土遺物実測図② (1/4)	112
第 147 図	SH750 実測図 (1/50・1/40)	113
第 148 図	SH750 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	114
第 149 図	SH760 実測図 (1/50・1/40)	115
第 150 図	SH760 出土遺物実測図① (1/3)	116
第 151 図	SH760 出土遺物実測図② (1/3)	117
第 152 図	SH760 出土遺物実測図③ (1/2・1/4)	118
第 153 図	SH773 実測図 (1/50)	119
第 154 図	SH773 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	120
第 155 図	SH773 出土遺物実測図② (1/2・1/3)	121
第 156 図	SH801 実測図 (1/60・1/40)	122
第 157 図	SH801 出土遺物実測図① (1/3)	123
第 158 図	SH801 出土遺物実測図② (1/3・1/1・1/2)	124
第 159 図	SH896 実測図 (1/80)	126
第 160 図	SH896 床面遺構実測図 (1/30)	127
第 161 図	SH896 出土遺物実測図① (1/3)	128
第 162 図	SH896 出土遺物実測図② (1/3)	129
第 163 図	SH896 出土遺物実測図③ (1/1・1/2)	130
第 164 図	SH896 出土遺物実測図④ (1/2)	131
第 165 図	SH896 出土遺物実測図⑤ (1/3・1/2)	132
第 166 図	SH916 実測図 (1/50)	133
第 167 図	SH916 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	134
第 168 図	SH946 実測図 (1/50)	135
第 169 図	SH946 出土遺物実測図 (1/3)	135

第 170 図	SH1049 実測図 (1/50)	136
第 171 図	SH1049 出土遺物実測図① (1/3)	137
第 172 図	SH1049 出土遺物実測図② (1/2・1/3・1/4)	138
第 173 図	SK737 実測図 (1/30)	139
第 174 図	SK737 出土遺物実測図 (1/2)	139
第 175 図	SK761 実測図 (1/30)	140
第 176 図	SK761 出土遺物実測図 (1/2)	140
第 177 図	SK783 実測図 (1/30)	140
第 178 図	SK783 出土遺物実測図 (1/2)	140
第 179 図	SK789 実測図 (1/30)	141
第 180 図	SK789 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	141
第 181 図	SK791 実測図 (1/30)	142
第 182 図	SK791 出土遺物実測図 (1/2)	142
第 183 図	SK851 実測図 (1/30)	142
第 184 図	SK851 出土遺物実測図 (1/3)	142
第 185 図	SK888 実測図 (1/30)	143
第 186 図	SK888 出土遺物実測図 (1/3)	143
第 187 図	SK933 実測図 (1/30)	144
第 188 図	SK933 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	144
第 189 図	SK725 実測図 (1/30)	145
第 190 図	SK725 出土遺物実測図 (1/2)	145
第 191 図	SK736 実測図 (1/30)	145
第 192 図	SK736 出土遺物実測図 (1/3)	145
第 193 図	SK747 実測図 (1/30)	146
第 194 図	SK747 出土遺物実測図 (1/3)	147
第 195 図	SK940 実測図 (1/50)	147
第 196 図	SK940 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	148
第 197 図	SP759 実測図 (1/20)	148
第 198 図	SP759 出土遺物実測図 (1/3)	148
第 199 図	SD728 実測図 (1/30)	148
第 200 図	SD728 出土遺物実測図 (1/2)	149
第 201 図	2 区遺構実測図 (1/30・1/20)	150
第 202 図	2 区遺構出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/4)	151
第 203 図	2 区出土遺物実測図① (1/3)	153
第 204 図	2 区出土遺物実測図② (1/3)	154
第 205 図	2 区出土遺物実測図③ (1/3・1/1・1/2)	155
第 206 図	2 区出土遺物実測図④ (1/2)	156
第 207 図	2 区出土遺物実測図⑤ (1/2)	157
第 208 図	2 区出土遺物実測図⑥ (1/2・1/3)	158
第 209 図	2 区出土遺物実測図⑦ (1/3・1/4)	159
第 210 図	1・2 区出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	160

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

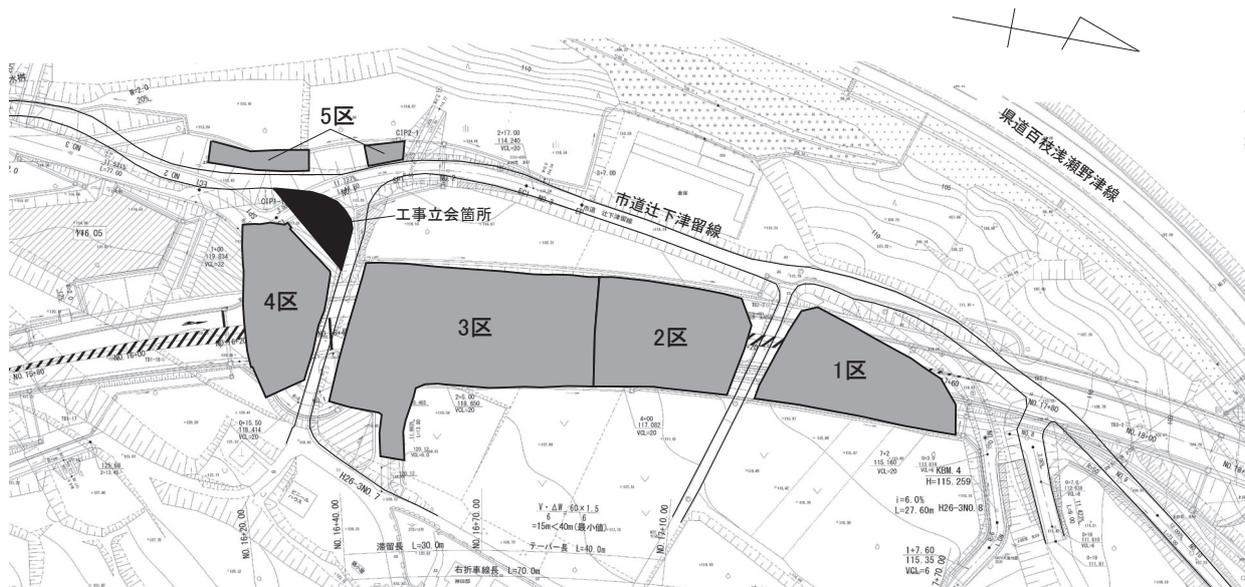
大分県道519号三重新殿線は、豊後大野市三重町（旧三重町）の中心部から豊後大野市千歳町新殿（旧千歳村の中心部）へ至る一般県道である。この県道三重新殿線は、地域の基幹的な道路として豊後大野市中心部（三重町）では特に自動車交通量も多く、通学路として歩行者や自転車の交通量も多いものの、現況では道路幅員が狭く安全な歩行空間が確保されているとはいえず、また、JR豊肥本線三重町駅北東の下田踏切では、市道高市停車場線との交差点と踏切が近接して存在するため慢性的な交通渋滞が発生するなど、課題となっていた。

このような中で、豊後大野市三重町秋葉から国道57号中九州横断道路千歳インターチェンジを結ぶバイパス工事が計画された。地域高規格道路である国道57号中九州横断道路と豊後大野市中心部の国道326号とを結ぶことで、県内内陸部の広域交流を支えるとともに、豊後大野市中心部の交通渋滞の緩和と利用者や周辺住民の利便性や安全性の向上を図り、地域の発展を目指す計画である。平成30年度にはこの三重新殿線バイパスの愛称が「豊後花咲きロード」に決定した。

バイパス工事は、三重町秋葉で国道326号から分岐し、三重町中心部を抜けて国道57号（中九州自動車道）千歳インターチェンジへ接続する、延長約10kmの計画路線である（第1図）。工事は平成10年度から着手し、既に前田新殿工区（千歳IC～千歳町前田間、延長2.3km）が平成16年4月、国道326号を高架で跨ぐ赤嶺工区（延長0.8km）が平成20年2月、内田赤嶺工区（延長0.74km）が平成25年8月、赤嶺牟礼工区（延長1.04km）が平成29年2月、内田工区（延長0.96km）が平成29年12月にそれぞれ供用を開始している。この間、道路建設と埋蔵文化財の保護の両立を図るため、随時計画路線内の試掘確認調査を行い、遺跡が確認された地点の発掘調査を実施してきた。県道三重新殿線バイパス工事に伴い発掘調査を実施した遺跡は、大園



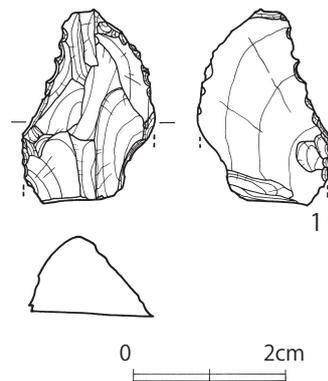
第1図 県道三重新殿線バイパスの計画路線と発掘調査遺跡 (1/50000)



第2図 上田原東遺跡の調査区配置図 (1/1500)

遺跡¹⁾ (古代の集落)・上門手遺跡²⁾ (中世城郭・近世墓地)・茶屋久保遺跡群³⁾ (茶屋久保B遺跡、旧石器時代の文化層)である。

上記の内、残る工区は秋葉内田工区 (延長 1.31km) と牟礼前田工区 (延長 3.04km) である。秋葉内田工区では令和 2 年度に試掘調査⁴⁾、令和 3 年度に立会調査を実施したが、遺跡は確認されず、本調査対象となった箇所はなかった。一方、牟礼前田工区は木ノ元山・大辻山山塊の西裾を通り、大野川を渡って前田新殿工区に接続する計画であるが、この計画路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地である原田第 1 遺跡や上田原遺跡群、上田原東遺跡が存在するほか、周辺には県指定史跡である立野古墳 (前方後円墳) や石棺群、豊後大野市指定有形文化財の円福寺石幢が存在するなど、遺跡や文化財の点在する地域であることから、遺跡の存在が予想されていた。



第3図 確認調査出土遺物実測図 (1/1)

千歳町前田～大野川間については平成 26 年度に原田第 1 遺跡の確認調査を実施した結果、一部で旧石器時代の遺跡が確認されたため、約 180m²の本調査を実施した⁵⁾。大野川～三重町牟礼間については、平成 31 年 4 月に木ノ元山西麓周辺の試掘調査を実施したところ、若干の遺物の出土を見たが遺構は確認されなかった。続いて令和元年 8 月に上田原遺跡群・上田原東遺跡の確認調査を実施したところ、上田原遺跡群では遺構は確認されなかったが、上田原東遺跡では弥生時代とみられる竪穴建物等の遺構を検出し、弥生時代の集落が広範囲に展開する可能性が示された⁶⁾ (第 2 図)。また、1 点ではあるが流紋岩製の角錐状石器 (第 3 図 1) の破片も採集され、旧石器時代の遺跡の存在も予想された。こうした結果を受け、関係機関と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、令和 2 年度に記録作成のための本調査を実施することとなった。

- 1) 後藤一重編 2001『大園遺跡－県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県文化財調査報告書第 120 輯、大分県教育委員会
- 2) 五十川雄也編 2004『上門手遺跡－県道三重新殿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県文化財調査報告書第 172 輯、大分県教育委員会
- 3) 綿貫俊一編『茶屋久保B遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 45 集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 4) 横澤 慈編 2021『大分県内遺跡発掘調査概報 24』、大分県立埋蔵文化財センター
- 5) 綿貫俊一 2018『原田第 1 遺跡－一般県道三重新殿線 (牟礼前田工区) 道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集、大分県立埋蔵文化財センター
- 6) 横澤 慈編 2020『大分県内遺跡発掘調査概報 23』、大分県立埋蔵文化財センター

第2節 発掘調査の経過

令和元年9月27日付で豊後大野土木事務所長から大分県立埋蔵文化財センター所長あて埋蔵文化財発掘調査（本調査）の依頼が提出された。これを受け事業者と発掘調査の実施時期や期間・経費等について調整を重ね、令和2年1月31日付けで発掘調査の実実施計画及び所要経費見積について回答した。令和2年4月23日には大分県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、豊後大野市教育委員会及び豊後大野警察署へ発掘調査への協力を依頼した。

本調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。作業班は2班とし、作業班1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員15名を基本とした。令和2年4月10日に大分県と株式会社島田組大分支店の間で上田原東遺跡の発掘調査支援業務委託契約を締結し（契約担当者：大分県知事 広瀬勝貞、業務受託者：株式会社島田組大分支店長 佐藤孝則）、令和2年8月31日までの調査期間で発掘調査に着手した。

本調査は周辺で行われている工事の都合も勘案し、3区→1・2区→4・5区の順に実施した。令和2年5月8日に3区の表土掘削に着手し、人力による遺構検出作業、遺構発掘作業、写真及び実測図による記録作成作業、空中写真撮影を経て、令和3年1月21日に調査区全体の埋戻し・調査事務所及び調査器材等の撤収を完了し、現地での発掘調査を終了した。この間、検出された遺構や出土遺物が膨大であり、また遺構同士の重複が多い上に周辺土壌と遺構埋土の識別が難しいといった条件も重なり、豊後大野土木事務所と協議の上、最終的に現地での調査期間を令和3年1月29日まで延長するとともに、発掘調査支援業務の期間を令和3年3月11日までとする契約の変更を行った。発掘作業は12月25日に遺構の発掘作業を完了、翌1月5日まで実測作業を行い、1月20日に調査区の埋戻し、調査器材等の撤収を完了した。1月21日には豊後大野土木事務所を交えて発掘調査の完了確認を行った。以上を受け令和3年1月26日付けで大分県教育委員会、豊後大野市教育委員会及び大分県土木建築部豊後大野土木事務所へ発掘調査の終了を報告・通知するとともに、1月29日付けで豊後大野警察署へ文化財保護法第100条第2項に基づく埋蔵文化財の発見を通知した。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄製品等、コンテナボックスにして387箱であった。3月11日に株式会社島田組大分支店から遺構実測図・遺構等の写真記録等調査成果物の納入を受け、3月19日の完了検査を経て委託業務を完了した。この間の発掘調査の経過は以下のとおりである。

調査日誌抄録

- 5月8日 3区の表土掘削開始
- 5月12日 作業員により調査区の整形作業、調査区周囲の環境整備を行う。豊後大野市教育委員会諸岡 郁氏、長屋佳歩氏来跡。
- 5月20日 3区の表土掘削終了。九州大学学生 諸岡初音氏来跡。
- 5月21日 3区の遺構検出作業開始。弥生時代の円形竪穴建物、方形竪穴建物等、弥生の竪穴を切る掘立柱建物を確認。
- 5月28日 竪穴建物等主要遺構の検出状況写真撮影。遺構の掘り下げ開始。
- 6月4日 大分県立埋蔵文化財センター 小柳和宏氏来跡。
- 6月10日 豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏来跡。
- 6月22日 大分県立埋蔵文化財センター 池見佳輔主事来跡。
- 7月2日 文化庁文化財第二課主任文化財調査官 近江俊秀氏、同文化財調査官 芝康次郎氏、豊後大野市教育委員会 高野弘之氏・諸岡 郁氏、大分県教育庁文化課 三重野誠氏、大分県立埋蔵文化財センター

後藤晃一調査第一課長来跡。

- 8月7日 3区の空中写真撮影。大分県教育庁文化課 井 大樹氏・津田佑美氏来跡。大分県土木建築部豊後大野土木事務所と発掘調査期間の延長について協議。
- 8月19日 3区に旧石器確認トレンチを4箇所設定、重機を使用し掘り下げる。
- 8月20日 旧石器確認トレンチの記録作成、終了後トレンチの埋戻し。埋蔵文化財センターインターンシップ生の現場見学。3区の調査終了。
- 8月21日 3区の埋戻し。
- 8月27日 1区の表土掘削開始、この日では掘削終了。
- 8月28日 2区の表土掘削開始。工事関係者による工程会議で発掘調査の今後の予定を協議。
- 9月1日 2区の表土掘削完了。台風接近の予報のためシート・テント等を撤収、強風対策を行う。
- 9月3日 1区の遺構検出開始。
- 9月4日 1区で方形の竪穴建物4基を確認。台風10号接近に伴い対策実施。
- 9月9日 1区の遺構検出状況写真撮影。遺構の掘り下げ開始。
- 9月14日 工事ヤードの都合で現場事務所・駐車場を3区跡へ移設。
- 9月29日 豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏来跡。
- 10月2日 2区の遺構検出開始。
- 10月12日 2区の遺構掘り下げ開始。
- 11月4日 現地説明会の開催について埋蔵文化財センターで協議。11月14日に開催を決定。新型コロナウイルス感染症対策として地元住民対象とし、報道発表等大々的な宣伝は行わない方針。
- 11月5日 現地説明会の開催について、地元区長への挨拶と、地区住民への周知を依頼。同日大分県土木建築部建設政策課・豊後大野土木事務所、大分県教育庁文化課、豊後大野市教育委員会へ現地説明会の開催を連絡。
- 11月13日 現地説明会のために調査区の全体清掃、導線及び遺構表示の設置。
- 11月14日 現地説明会開催。地元住民を中心に、47名が参加。
- 11月25日 1・2区の全体清掃。4区の表土掘削開始。
- 11月26日 1・2区の空中写真撮影。
- 11月30日 4区の表土掘削完了。
- 12月1日 寒気により現場に霜降。4区の遺構検出開始。
- 12月3日 4区の東側で大型の円形竪穴建物に方形の張り出しを複数確認。花卉形建物の可能性あり。
- 12月7日 豊後大野市立百枝小学校6年生現場見学（児童・教員等21名）。豊後大野市教育委員会 諸岡 郁氏、三重史談会会長 川原久芳氏来跡。
- 12月11日 5区の表土掘削開始。全体がローム層まで大きく削平を受けており、遺構が全く確認されない状況を確認したため、トレンチ調査に切り替え。
- 12月14日 5区の記録作成。旧地権者から清掃工場建設時に碎石を搬入し土地をかさ上げしたことを聞き取る。
- 12月16日 三重町史談会 川原久芳氏来跡。
- 12月17日 別府大学教授 田中裕介氏来跡。花卉形建物について教示。
- 12月18日 三重史談会の現場視察（約20名）。
- 12月22日 1区に5m×5mの旧石器確認グリッドを設定し重機で掘り下げ。旧石器の出土なし。
- 12月23日 1区旧石器確認グリッドの記録作成。4区全体写真撮影。1～4区の人力発掘作業を完了。大分県立埋蔵文化財センター 植田紘正主事来跡。
- 12月24日 調査区の埋戻し。
- 1月21日 調査区の埋戻し、機材撤収完了。完了確認の立会。以上で調査を全て終了。

第3節 資料整理・報告書作成の経過

発掘調査記録の整理及び出土品の整理は令和3～5年度にかけて実施した。出土品の整理作業は民間調査組織への委託により実施することとし、上田原東遺跡を含む当該年度整理実施調査を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。委託業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。作業内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。

遺構・遺物図版作成や原稿執筆、編集等報告書作成は整理作業と並行して行い、令和6年1月から原稿を入稿し、3度の校正を経て令和6年3月末に本書を刊行した。これを以て上田原東遺跡の発掘調査業務をすべて完了した。

第4節 調査組織の構成

上田原東遺跡の発掘調査に係る体制は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和2年度（本発掘調査）

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長兼調査第一課長）

調査事務 稗田 淳（大分県立埋蔵文化財センター総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹、本調査主担当）

土谷崇夫（同 調査第一課主査）

服部真和（同 調査第二課主査）

綿貫俊一（同 調査第二課会計年度任用職員、本調査主担当）

埋蔵文化財発掘調査支援業務委託受託者 株式会社イビソク大分営業所

調査技師 佐藤孝則・木付雄大、調査助手 高木裕司・幸重由香

令和3年度 資料整理

調査責任者 松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）

調査事務 藤原邦夫（大分県立埋蔵文化財センター総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 横澤 慈（同 調査第一課副主幹、整理作業担当）

吉田 寛（同 調査第二課長、整理作業総括）

小堀嵩史（同 調査第二課主事、整理作業委託監理）

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）

令和4年度 資料整理

調査責任者 松本昌浩 (大分県立埋蔵文化財センター所長)

調査総括 後藤晃一 (大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長)

調査事務 藤原邦夫 (大分県立埋蔵文化財センター総務課長)

山田哲也 (同 総務課主査)

平田愛香 (同 総務課主事)

調査担当 横澤 慈 (同 調査第一課副主幹、整理作業担当)

吉田 寛 (同 調査第二課長、整理作業総括)

小堀嵩史 (同 調査第二課主事、整理作業委託監理)

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所 (整理作業指導員 永井美香)

令和5年度 資料整理・報告書作成

調査責任者 後藤晃一 (大分県立埋蔵文化財センター所長)

調査総括 染矢和徳 (大分県立埋蔵文化財センター調査第一課長兼調査第二課長)

調査事務 藤原邦夫 (大分県立埋蔵文化財センター総務課長) ※5月14日まで

上條年明 (同 副所長兼総務課長) ※5月15日から

山田哲也 (同 総務課主査)

平田愛香 (同 総務課主事) ※6月まで

吉川小百合 (同 総務課臨時職員) ※7~9月

岩男修太 (同 総務課主事) ※10月から

調査担当 横澤 慈 (同 調査第一課副主幹、整理作業・報告書作成担当)

染矢和徳 (同 調査第二課長、整理作業総括)

小堀嵩史 (同 調査第二課主事、整理作業委託監理)

整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所 (整理作業指導員 永井美香)

発掘調査の期間中、事業者である大分県土木建築部豊後大野土木事務所をはじめ、地元の上田原地区、豊後大野市教育委員会には発掘調査への理解と多大な協力を賜った。また、発掘調査現場には以下の方々の来訪があり、発掘調査に関する種々の指導助言をいただいた(所属は当時)。

近江俊秀(文化庁)、芝康次郎(文化庁)、田中裕介(別府大学)、三重野誠(大分県教育庁文化課)、井 大樹(大分県教育庁文化課)、高野弘之(豊後大野市教育委員会)、諸岡 郁(豊後大野市教育委員会)、長屋佳歩(豊後大野市教育委員会)、川原久芳(三重史談会)、渡辺圓世(三重史談会・豊後大野の古墳を見る会)、諸岡初音(九州大学学生)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

上田原東遺跡の所在する豊後大野市は、大分県の中部に位置し、北は大分市、東は臼杵市、南は佐伯市、宮崎県、西は竹田市と接し、市域は603.14km²、人口は令和5年12月31日時点で32,765人である。市の周囲は、北は鎧ヶ岳や御座ヶ岳、天面山等、西は倉木山・小富士山等、東に佩楯山・大峠山等の300～1,000m級の山々が、南に祖母・傾山系の九州山地を構成する標高1,600～1,700m級の高山が連なり、その中に三重盆地や緒方盆地等、いくつもの盆地地形を形成している。この盆地を縫うように、阿蘇外輪山に源を発する大野川が蛇行しながら別府湾に流れ注いでいる。地質はAso-IVと呼ばれる約9万年前の阿蘇山の火砕流堆積物が厚く堆積し、大野川等の河川がこの堆積物を開析して各地に河岸段丘や開析谷を発達させ、盆地内に沖積平野を形成している。この台地や河岸段丘、沖積平野が生活基盤となり、農業を基幹産業として発展を続けている。交通は熊本と大分を結ぶJR豊肥本線が朝地～清川～三重～犬飼を通り、国道は大分から阿蘇を経て熊本、長崎へ通じる国道57号、宮崎県延岡市と豊後大野市を結ぶ国道326号、臼杵市と竹田市を結ぶ国道502号等が交わる交通の要衝となっている。

上田原東遺跡は三重盆地の北端部に位置し、東に大辻山-木ノ元山の山塊があり、北に大野川が大きく蛇行しながら東へ流れている。遺跡はこの大辻山の西側に張り出す台地状の緩斜面に立地している。大野川を眼下に見下ろし、三重盆地の北端を扼する要地ともいえる場所である。

第2節 歴史的環境

上田原東遺跡の周辺の遺跡について概観する。旧石器時代の遺跡では、牟礼ノ越遺跡(28)では、暗色帯の下部から石器が出土しており、後期旧石器時代の初期に属する最古級の石器群である。また、百枝(小学校)遺跡(22)や茶屋久保遺跡群(29)、原田第1遺跡(40)等で複数の文化層が確認されている。

縄文時代の遺跡として、中期・後期中葉の土器が出土した惣田遺跡(14)、後期～晩期の土器が出土した宇対瀬遺跡(6)が挙げられるが、この周辺で明確な遺構は確認されていない。

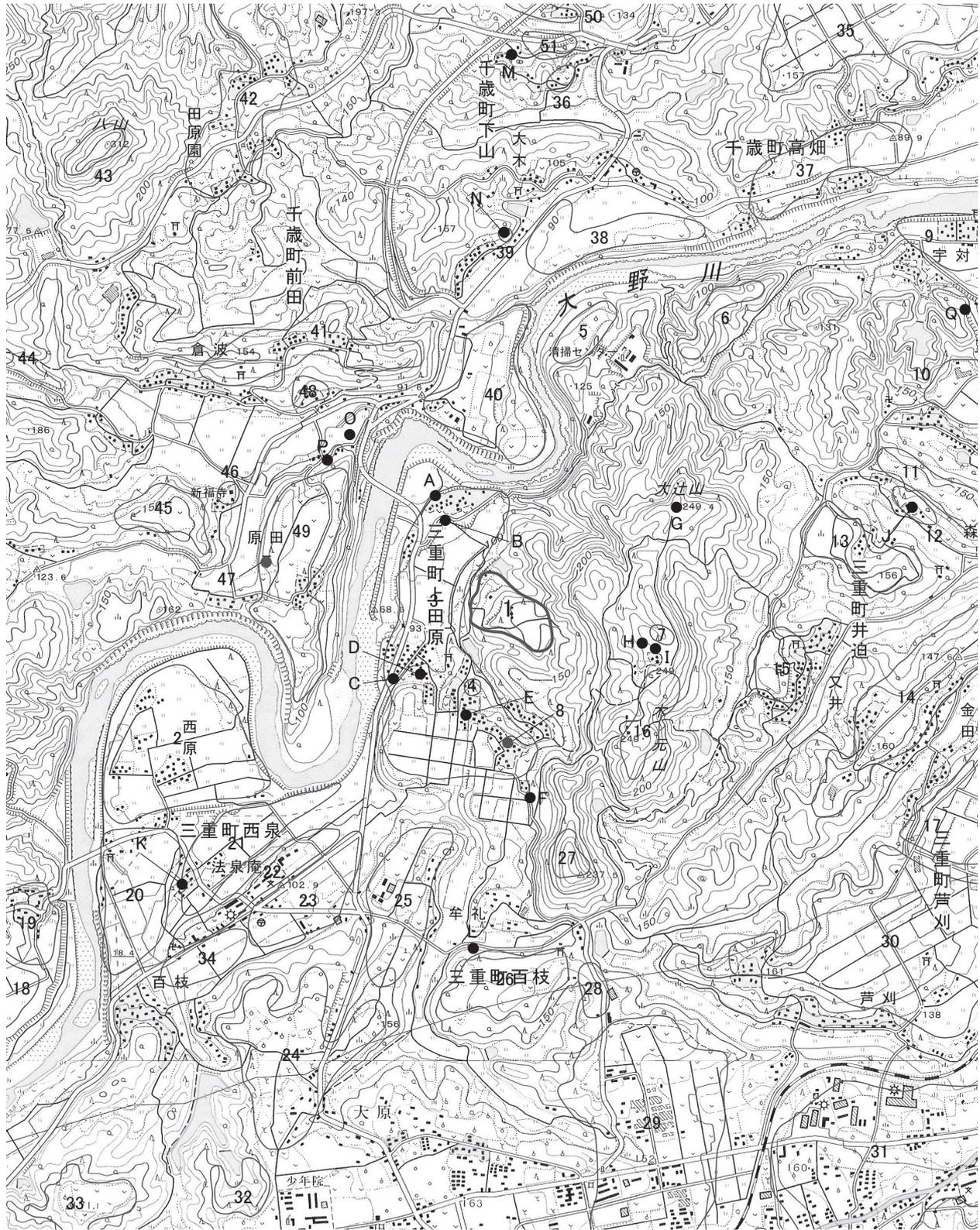
弥生時代では、惣田遺跡で中期の円形竪穴建物2棟が発掘されている。陣箱遺跡(23)は後期～古墳時代初頭にかけての多数の竪穴建物群が確認されており、花弁形建物も含まれる。折立遺跡(34)も同時期の集落遺跡で、百枝(小学校)遺跡も含めこれまでに150棟余りの竪穴建物が確認されており、県内でも有数の大規模集落とみられている。また、上田原遺跡群(3)でも弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物5棟を検出している。

古墳時代の遺跡として、まず立野古墳(8)が挙げられる。全長約65mの前方後円墳で、4世紀後半の築造とみられている。鉢ノ窪石棺群(4)は舟形石棺5基、箱式石棺1基で構成され、石棺の形状から中期に比定されている。下津留古墳群(B)はわずかに残存する墳丘に石棺が確認されるが、不明な点が多い。

古代の遺跡については調査事例に乏しい。中世では惣田遺跡で堀状の溝や掘立柱建物群が出土しており、豊後国守護の被官で三重郷の方分であった森迫氏の居館跡とみられる。回春庵跡(12)は15世紀中頃～17世紀末の石塔が残存している。回春庵は森迫氏の菩提寺と推定され、これら石塔類は森迫氏及び回春庵寺僧の墓碑である。このほかに中世石造物は各多く分布している。大辻山(G)山頂には回春庵の文叔座元正周により文禄5年(1596)～慶長8年(1603)に造立された角塔婆等の石塔22基が残されている。大辻山の南にある真言宗寺院の正福寺は、天文15年(1546)銘の宝篋印塔(I)をはじめとして境内に多数の中世石造物がある。また、西泉にある法泉庵宝篋印塔(K)は大野郡を中心に活躍した石大工「玄正」作の優品で、県の有形文化財に指定されている。大野川沿いの下津留墓碑群(B)は16世紀中頃～近世前期の小型の板碑・宝塔23基が群集している。

近世になると上田原一帯は臼杵藩稲葉家領に組み込まれ、幕末まで続いている。遺跡としては、上田原遺跡群(3)で近世の塚状遺構が発掘されている。

明治10年(1877)に発生した西南戦争は国内最後にして最大規模の士族反乱で、大分県でも竹田市、豊後大野市、大分市、臼杵市、津久見市、佐伯市が戦場となっている。木ノ元山の陣(27)は西南戦争に際して築かれた陣地跡で、一部発掘調査が行われている。



- | | | | | | |
|---------------|------------|-------------|----------------|-------------|-----------|
| 1 上田原東遺跡 | 2 西原遺跡群 | 3 上田原遺跡群 | 4 鉢ノ窪石棺群 | 5 井立遺跡 | 6 宇対瀨城跡 |
| 7 正福寺 | 8 立野古墳 | 9 宇対瀨遺跡 | 10 浅水遺跡 | 11 森迫館跡遺跡 | 12 回春庵跡 |
| 13 一木原遺跡 | 14 惣田遺跡 | 15 又井遺跡 | 16 牟礼嶺遺跡 | 17 金田遺跡群 | 18 向野遺跡群 |
| 19 浄土寺遺跡 | 20 法泉庵西遺跡群 | 21 法泉庵遺跡群 | 22 百枝(小学校)遺跡 | 23 陣箱遺跡 | 24 大原遺跡群 |
| 25 牟礼遺跡 | 26 宮山遺跡 | 27 木ノ元山の陣 | 28 牟礼ノ越遺跡 | 29 茶屋久保遺跡群 | 30 芦刈遺跡群 |
| 31 三重原遺跡群 | 32 穴井横穴古墳群 | 33 梶原遺跡 | 34 折立遺跡 | 35 宮園・筒ノ上遺跡 | 36 庵の平遺跡 |
| 37 高畑遺跡 | 38 大木遺跡 | 39 法積寺跡 | 40 原田第1遺跡 | 41 中原遺跡群 | 42 田原園遺跡群 |
| 43 八山遺跡 | 44 妙光寺跡 | 45 新福寺西遺跡 | 46 新福寺遺跡 | 47 池の上六柱社遺跡 | 48 賢龍寺遺跡 |
| 49 原田第2(長田)遺跡 | 50 上門手遺跡 | 51 飛迫遺跡 | | | |
| A 下津留古墳群 | B 下津留石棺群 | C 馬場石幢 | D 黒木石幢 | E 上田原石棺1号 | F 円福寺石幢 |
| G 大辻山 | H 正福寺宝篋印塔 | I 正福寺天文宝篋印塔 | J 森迫石幢 | K 法泉庵宝篋印塔 | L 宮山石幢 |
| M 大木の宝塔 | N 上津留の石幢 | O 庚申塔 | P 福生寺業師堂系第宝篋印塔 | | Q 智福寺跡 |

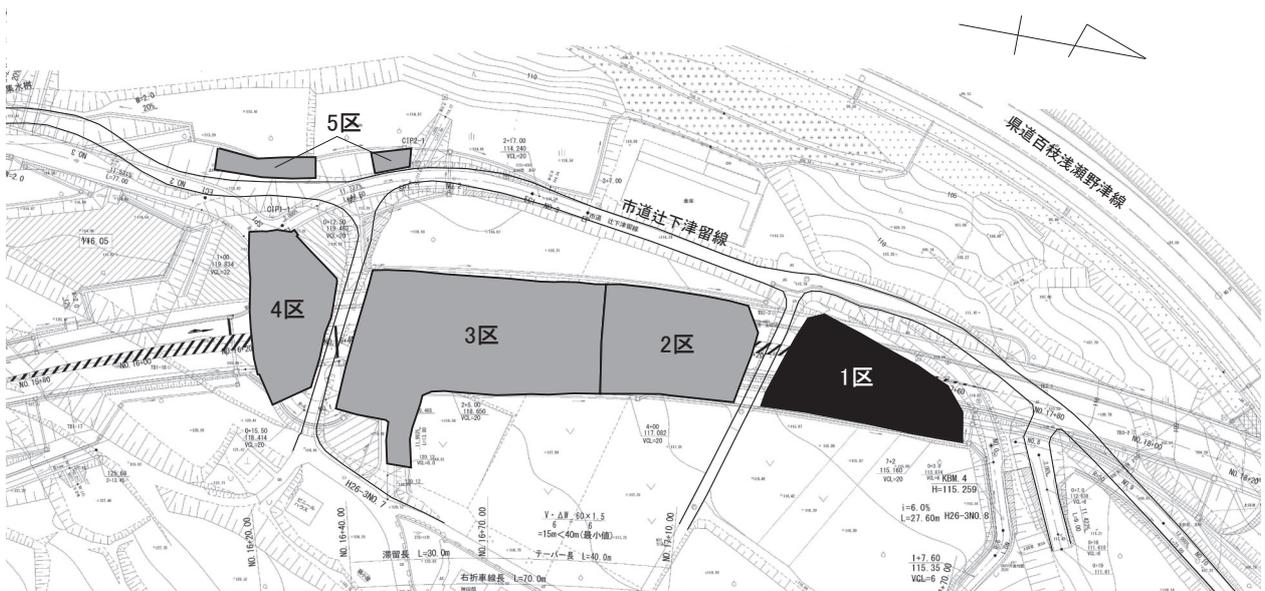
第4図 上田原東遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行2万5000分の1地形図「犬飼」・「三重町」に加筆)

第3章 1区の発掘調査成果

第1節 調査区の設定と基本層序

県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う上田原東遺跡の発掘調査は、豊後大野市三重町大字上田原地内、大辻山山塊の西側に張り出す台地上の緩斜面上である。事業用地内で発掘調査区と排土置場、調査事務所・駐車場等を確保するため、1～5区に分けて設定し、3区→1区→2区→4区・5区の順に発掘調査を実施した。調査地の地番は大字上田原字辻 1618-2・3（5区）、同 1681（4区）、同 1688-2・3、1689-2、1690-2、1691-3、1696-3、1697-2（3区）、1695-3、1698-2（2区）、1724-3、1725-2、1726-2（1区）で、地目は4区が山林、他は畑である。1区はこのうち最も北側に設定した調査区で（第5図）、北は下位の河岸段丘面に向かって急激に落ちる斜面となっている。調査前の標高は約 115.3～115.6 m、崖下の段丘面とは比高差で 17.6 m を測る。この設定した調査区に対し、世界測地系の座標に基づいて 10 m 方眼の調査グリッドを設定した。グリッド番号は、北から南にアルファベット、西から東にアラビア数字を付し、両者を組み合わせて使用した（第6図）。遺構は検出した順に「S-●●」の遺構番号を付与した。遺構は写真及び実測図で記録し、出土遺物は調査区ごとに遺構又は調査グリッド単位で取上げた。遺構の性格に応じた遺構略号は報告書作成時に付し、遺構番号については混乱を避けるため調査時のものを踏襲した。

調査区の土層断面図を第7図に示す。第Ⅰ～Ⅵ層は各調査区に共通する基本となる堆積層序である。表土である第Ⅰ層は褐色を呈する現代耕作（畑作）土で、層厚は 5～20 cm 程度、全体に耕起されており脆い。第Ⅱ層は暗褐色土で、層厚は約 15～40 cm を測り、縄文～近世の遺物を包含する。Ⅲ層との層界は北側では比較的安定しているが、中央から南にかけて、1 m ほどの間隔をあけて所々波打つように乱れている。この凹凸は畑の畝の痕跡と考えられ、近世頃の耕作土とみられる。第Ⅲ層はいわゆるクロボクと称される黒褐色土で、縄文～中世の遺物を包含し、層厚は約 5～30 cm を測る。上部は先述の耕作により乱れているが、Ⅳ層との層界は比較的安定している。なお、調査区の北端部、SD556A から北側では様相がやや異なり、色調は同じだが白色砂粒や地山の黄褐色土粒の混じりが認められることから、これを 3'層として区別した。クロボクを由来とするが、掘り返して整地した痕跡と考えられる。第Ⅳ層はアカホヤ風化土や黒褐色土が斑状に混じった黄褐色土で、この面が遺構検出面である。第Ⅴ層は約 7,300 年前の鬼界カルデラの噴火により飛来した K-Ah 層、いわゆるアカホヤ火山灰である。粘性がなくサラサラとした明黄褐色土で、堆積は部分的に認められる。第Ⅵ層は黒褐色土で、粘性が強く硬く締ま

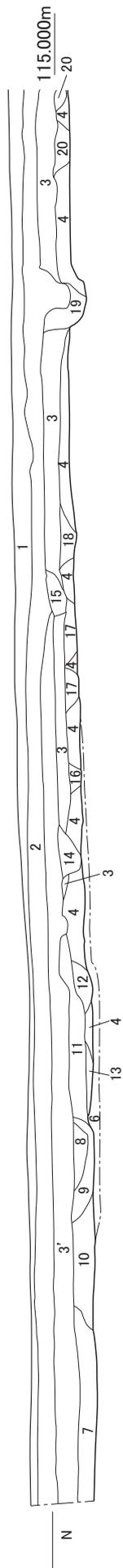


第5図 上田原東遺跡の調査区配置と1区的位置図（1/1500）

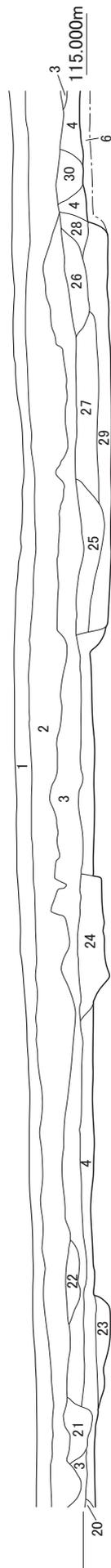


第6図 上田原東遺跡1区の遺構配置図 (1/200)

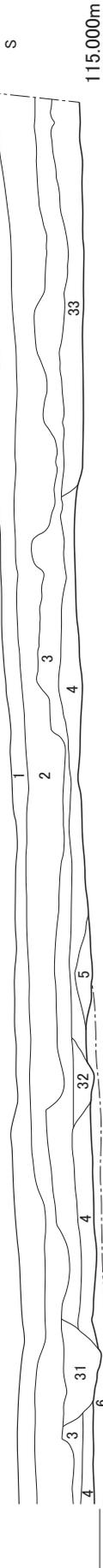
116.000m



116.000m



116.000m



- 基本層序
1. 褐色土(10YR4/3) 粘性弱、全体に耕起され脆い(第I層)
 2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性の弱い旧耕作土(第II層)
 3. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性の弱いクロボク層(第III層)
 4. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土・黒褐色土プロックが斑状に混じる(第IV層)
 5. 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性なくサラサラしたアカホヤ層(第V層)
 6. 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性強く硬く締まる(第VI層)
 - 3'. 黒褐色土() 3と同じだが白色砂粒・地山土粒が混じる
 7. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱くバサつく、アカホヤ風化土小粒混じる
 8. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性弱、アカホヤ細粒少量含む
 9. 黒褐色土(10YR3/2) 7とほぼ同質で、炭少量含む
 10. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性弱くバサつく、アカホヤ風化土プロック混じる
 11. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒少量・炭微量含む
 12. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック少量含む
 13. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ細粒微量含む
 14. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土プロック混じり
 15. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒混じり
 16. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土プロック多量含む
 17. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土プロック少量含む
 18. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
 19. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性弱、黒褐色土プロック少量含む(SD554)
 20. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒少量含む
 21. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ細粒・白色砂粒少量含む
 22. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、白色砂粒少量含む
 23. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック混じり(SK578)
 24. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土プロック少量含む(SK580)
 25. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ小粒少量・炭微量含む(SH536)
 26. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤプロック混じり、炭少量含む(SH536)
 27. 黒褐色土(10YR2/3) アカホヤ風化土プロック混じり、焼土小粒・炭少量含む(SH536)
 28. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土プロック多量・炭微量含む(SH536)
 29. 暗褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、地山土小粒少量含む(SH536)
 30. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤのブロックや細粒混じり
 31. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ細粒混じり、炭少量含む
 32. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、白色砂粒・アカホヤ・炭を少量含む
 33. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土プロックが斑状に混じる、炭少量含む(SH600)

第7図 1区土層断面図(1/60)

る。縄文時代早期に相当する地層である。

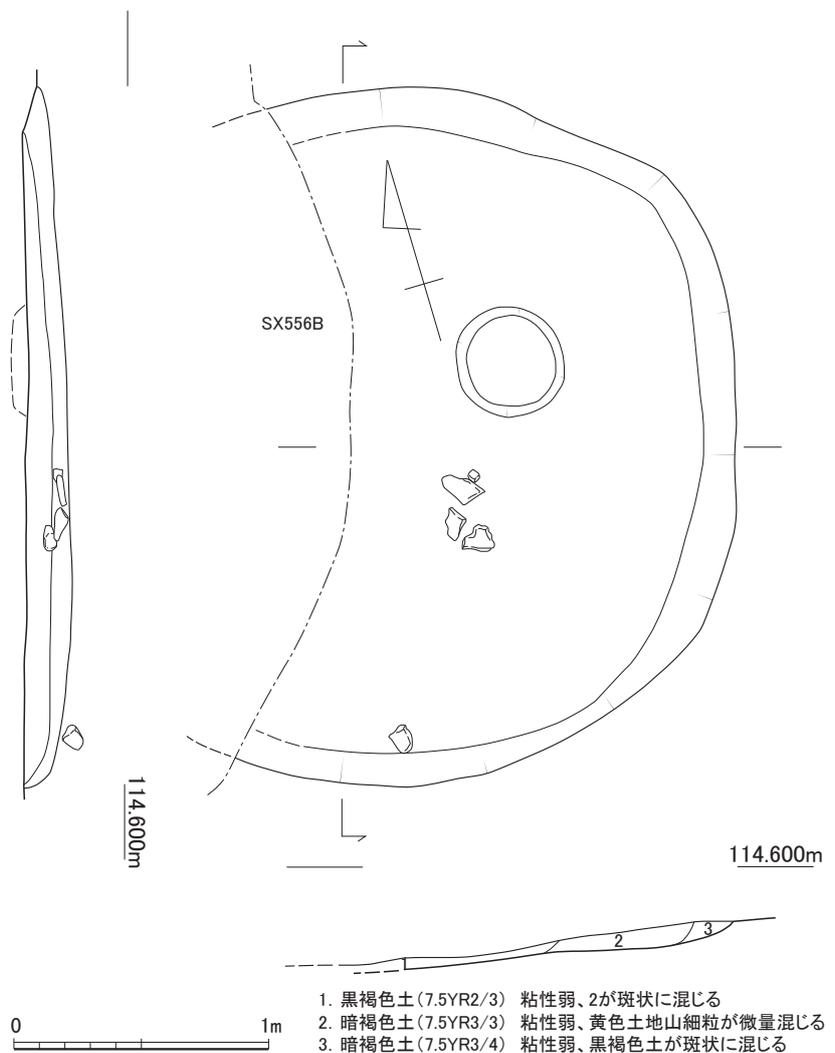
事前の確認調査では、第Ⅵ層より下位の黄褐色ローム質土の上面で遺構を検出していたため、当初は当該層まで重機で掘り下げ遺構検出作業を行う計画であったが、最初に着手した3区で、第Ⅲ層や第Ⅳ層上面あたりから比較的大きな土器片や石器がまとまって出土する状況が認められたため、機械による掘削は第Ⅳ層の上部付近で止め、第Ⅳ層上面を遺構確認面として人力により構検出作業を行った。その結果、竪穴建物をはじめとした多数の遺構を検出するに至った。しかし、第Ⅳ層は先述のとおり混じりが多いため遺構と自然堆積層との区別が難しい上に、多数の遺構が重複していたため、遺構の認定、前後関係の把握に多くの時間を費やすこととなった。結果として、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世以降の遺構を確認し、旧石器時代～近世の遺物の出土を見た。以下、時期ごとに遺構・遺物の概要を報告する。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、竪穴建物1棟、土坑がある。上田原東遺跡の遺構埋土の多くは黒褐色土ないしは暗褐色土であるが、弥生時代以降の遺構では、マンセル表色系による色相が10YRであるのに対し、縄文時代の遺構埋土はやや赤みがかっているのが特徴で、色相が7.5YRとなるものが多い。遺物の出土がない遺構であっても、この色調の違いで年代を推定しているものもある。

SH662 (第8図)

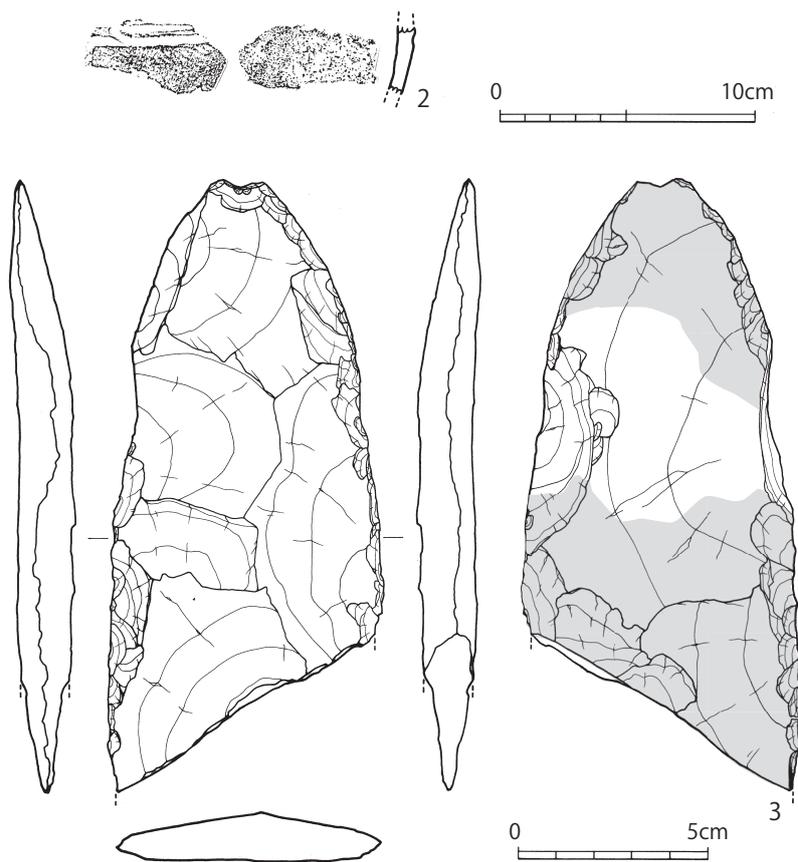
1区の南西部、D-4グリッドで検出した竪穴建物である。西半部はSX556Bに切られており全体の規模は明らかにはできないが、南北2.72m、東西1.95m以上、深さ0.23mを測る。平面形状は略円形を呈し、内部は皿状に浅く掘り込む。床面でピット1基を検出しているが、掘り込みは浅く柱穴となるかは判断としない。埋土は3層に区別され、中央部に黒褐色土、周縁部に暗褐色土が認められる。遺構規模がやや小さく、土坑とすべきかもしれないが、上部が削平されていることを勘案すると直径3m程度の規模になると推定されることから竪穴建物として扱う。遺物は少量ながら縄文土器、扁平打製石斧が出土している。出土土器から後期中葉の遺構と推定される。



第8図 SH662 実測図 (1/30)

SH662出土遺物（第9図）

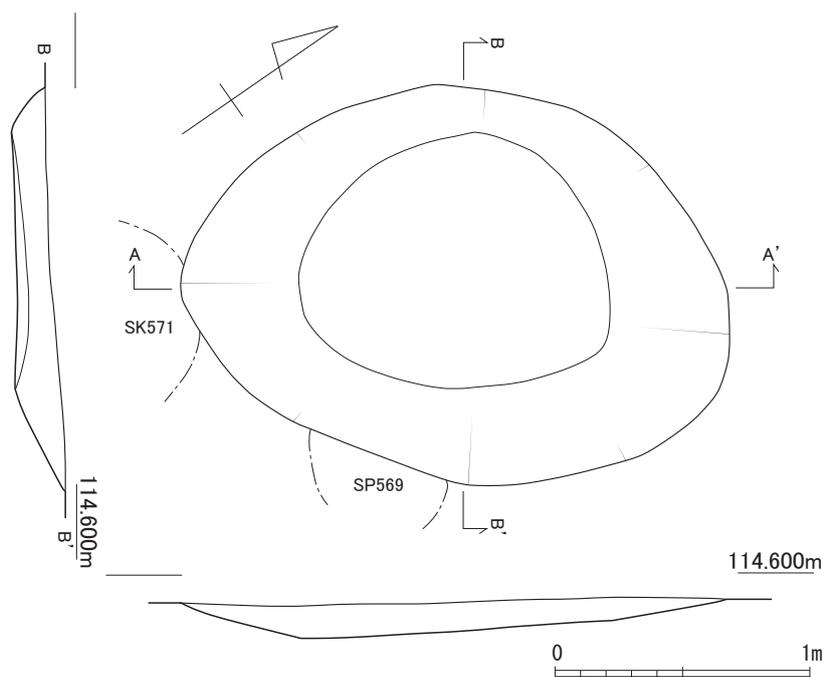
2は縄文土器である。上部に横位沈線及び細長い楕円形状を呈するとみられる区画沈線を施すもので、後期中葉に比定される。3は安山岩製の扁平打製石斧である。下部を折損するが、横長剥片を素材とし、周縁に粗い調整剥離を施す。腹面に煤の痕跡が認められるが、剥離面にも及ぶことから廃棄後に受熱したものとみられる。



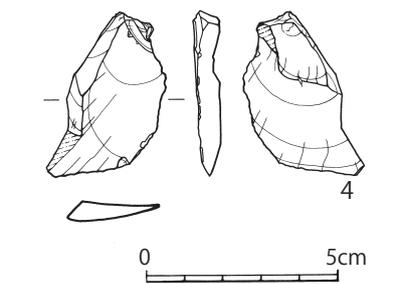
SK557（第10図）

1区のほぼ中央、C-5グリッドで検出した土坑である。一部SK571と重複しているが、SK557がSK571を切っている。平面形状は楕円形状を呈し、長径2.17m、短径1.57m、深さ1.23mを測る。埋土は黒褐色土の単層である。内部は皿状を呈し掘り込みは浅い。遺物は流紋岩剥片1点だけが出土している。

第9図 SH662 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第10図 SK557 実測図 (1/30)



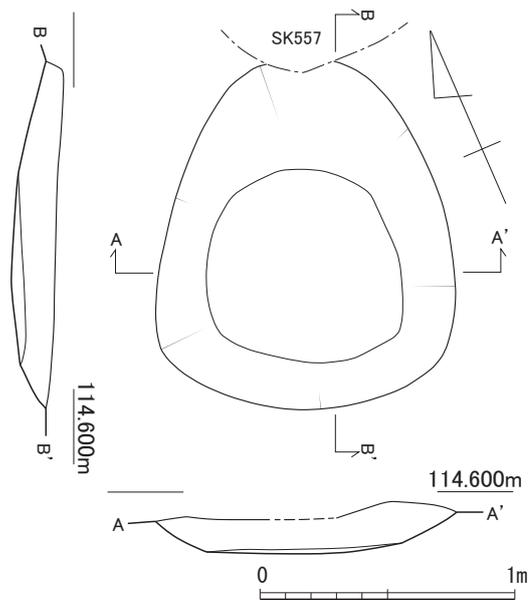
第11図 SK557 出土遺物実測図 (1/2)

SK557出土遺物（第11図）

4は流紋岩剥片で、旧石器時代の遺物である。

SK571（第12図）

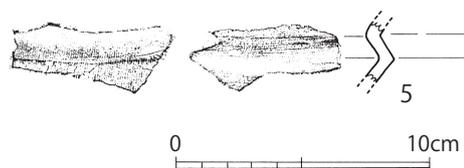
1区のはほぼ中央、C-5グリッドで検出した土坑である。先述のSK557に一部を切られているが、平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.34m以上、短径1.13m、深さ0.21mを測る。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は少量ながら縄文土器片が出土している。



第12図 SK571 実測図 (1/30)

SK571出土遺物（第13図）

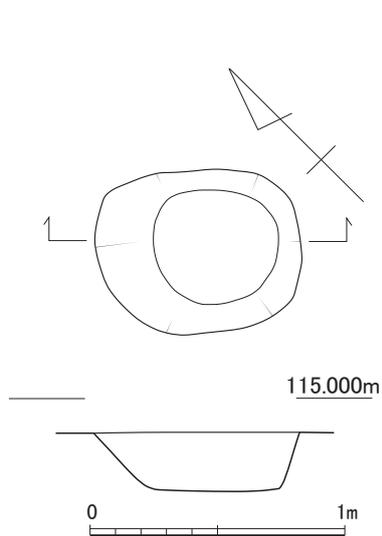
5は縄文土器浅鉢で、胴部が逆「く」の字状に屈曲する。晩期に比定される。



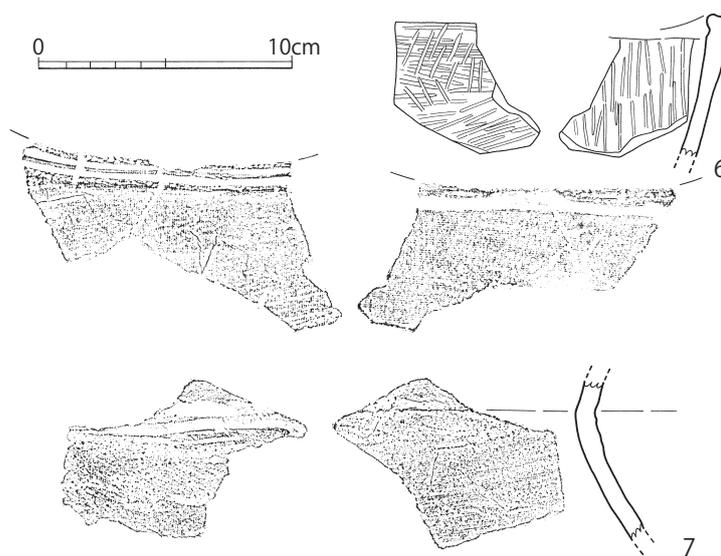
第13図 SK571 出土遺物実測図 (1/3)

SK579（第14図）

1区の中央東壁際、C-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形状を呈し、長径0.81m、短径0.65m、深さ0.23mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は縄文土器の他に弥生土器の細片が出土しており、若干の混入がみられる。また攪乱SX539出土の縄文土器と接合関係がみられた。遺物から後期中葉の遺構と判断する。



第14図 SK579 実測図 (1/30)



第15図 SK579 出土遺物実測図 (1/3)

SK579出土遺物（第15図）

6は縄文土器深鉢で、口縁部は短く内屈し、外面に2条の沈線と単節縄文、内面口縁直下に1条の沈線を施す。攪乱SX539出土の破片と接合関係が認められた。7は頸～胴部で、頸部ですぼまり、胴部が膨らむ器形を呈する。

SK591（第16図）

1区のはほぼ中央、C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径 1.37 m、短径 1.36 m、深さ 0.61 m を測る。埋土は2層に細分され、上層は微量の炭を含む極暗褐色土、下層は地山の黄褐色土微細粒を少量含む暗褐色土である。遺物は縄文土器や打製石斧が出土している。遺物から晩期後葉に比定される。

SK591出土遺物（第17図）

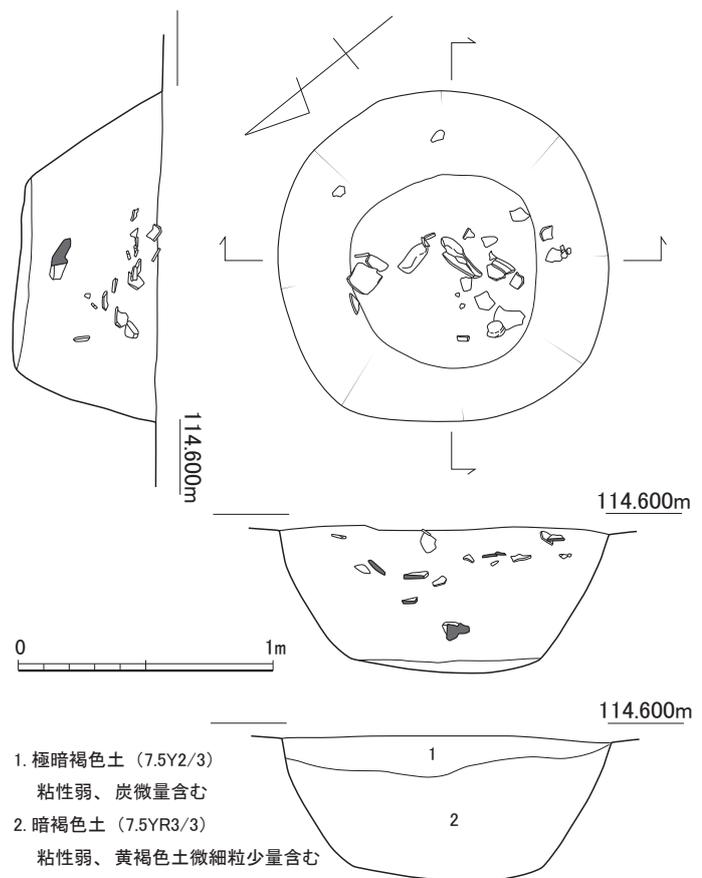
8～14は縄文土器である。8・9は深鉢で、口縁部外面に断面三角形状の凸帯を1条貼り付ける。いわゆる無刻目凸帯文土器で上菅生B式に比定される。10・11は無文の深鉢、12は深鉢の胴部片である。13は深鉢で、外面に大型の種子状の圧痕が認められる。14は黒色磨研土器の浅鉢で、口縁部は鍵状に折れる。15・16は打製石斧で、いずれも安山岩を素材とする。以上は晩期後葉の良好な一括資料である。

SK595（第18図）

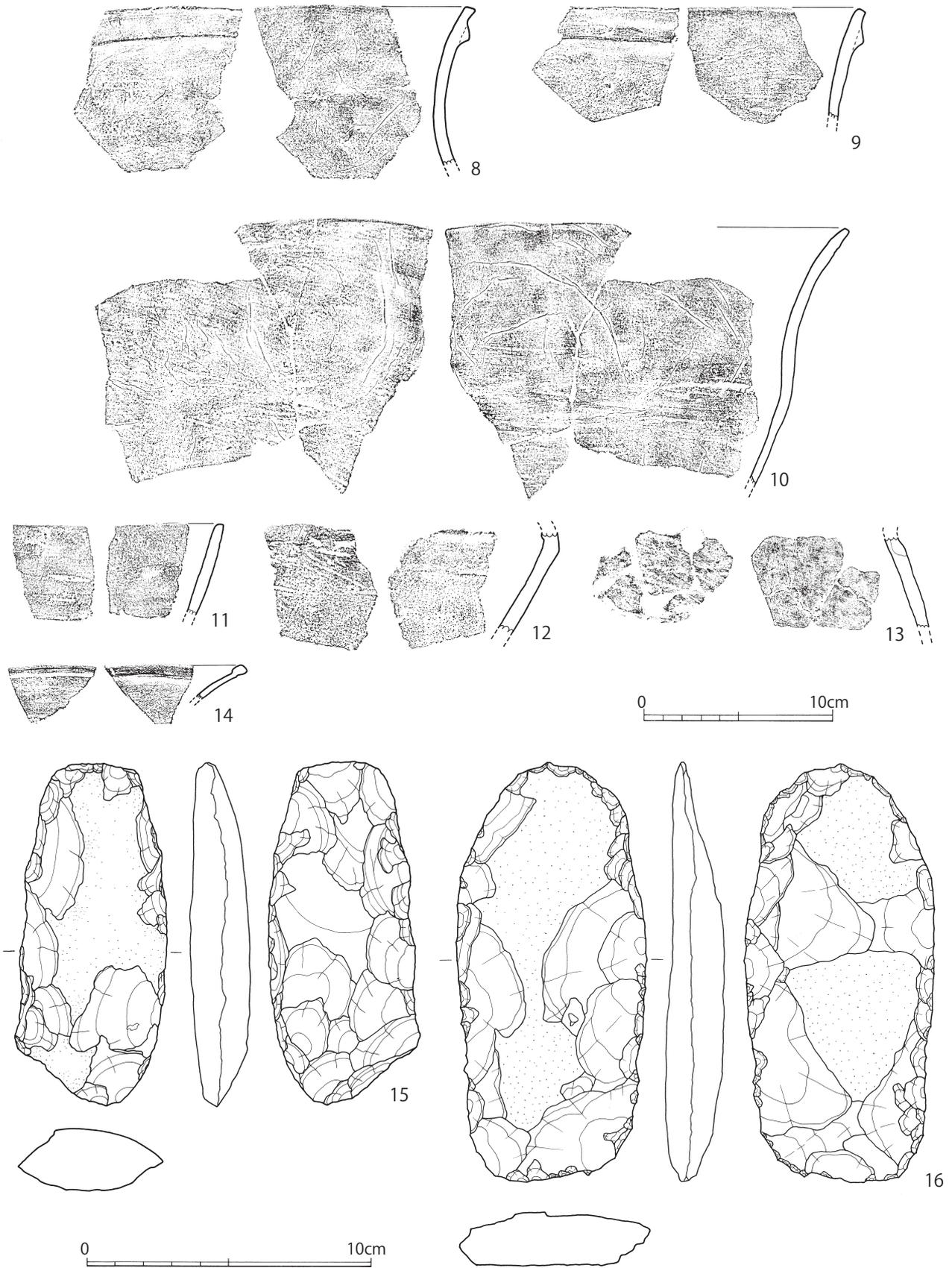
1区の中央部南寄り、D-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みをもつ三角形状を呈し、長径 2.50 m、短径 1.97 m、深さ 0.28 m を測る。内部は2段掘りとなっていて、南側は皿状の浅い掘り込みであるのに対し、北側は一段深く掘り込まれている。埋土は5層に分層され、うち1層は土坑埋没後の掘り込みで、土色から弥生時代以降の堆積層である。2層・5層には炭を、3層・4層には炭とともに焼土小粒を含んでいる。遺物は縄文土器の他、打製石斧や楔形石器が出土している。遺構の詳細な時期は判然としないが、出土土器から後期以降のものである。なお、SK595はSK640・SK673と切り合い関係にあるが、両者ともSK595の完掘後にその存在を確認したため、切り合い関係については十分解明できていない。特にSK673からは土師器片が出土しており、本来はSK595を切る土坑であった可能性が高い。

SK595出土遺物（第19図）

17は縄文土器である。外面に多条の横位凹線で施文し、口縁部には幅の太い刻みを施す。後期初頭の西和田式土器に比定される。18は腰岳産黒曜石を素材とする剥片石



第 16 図 SK591 実測図 (1/30)



第 17 图 SK591 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

器で、対向する上下辺に微細な剥離が見られることから楔形石器とした。19～21は打製石斧である。19は横長剥片を素材とし、粗い調整剥離を施す。21は縦長剥片を素材都市、下辺に細かい調整剥離が見られるが側辺の調整は粗い。こうした点から19・21は未成品である可能性が高い。石材は19はデイサイト、20・21は安山岩である。

SK642 (第20図)

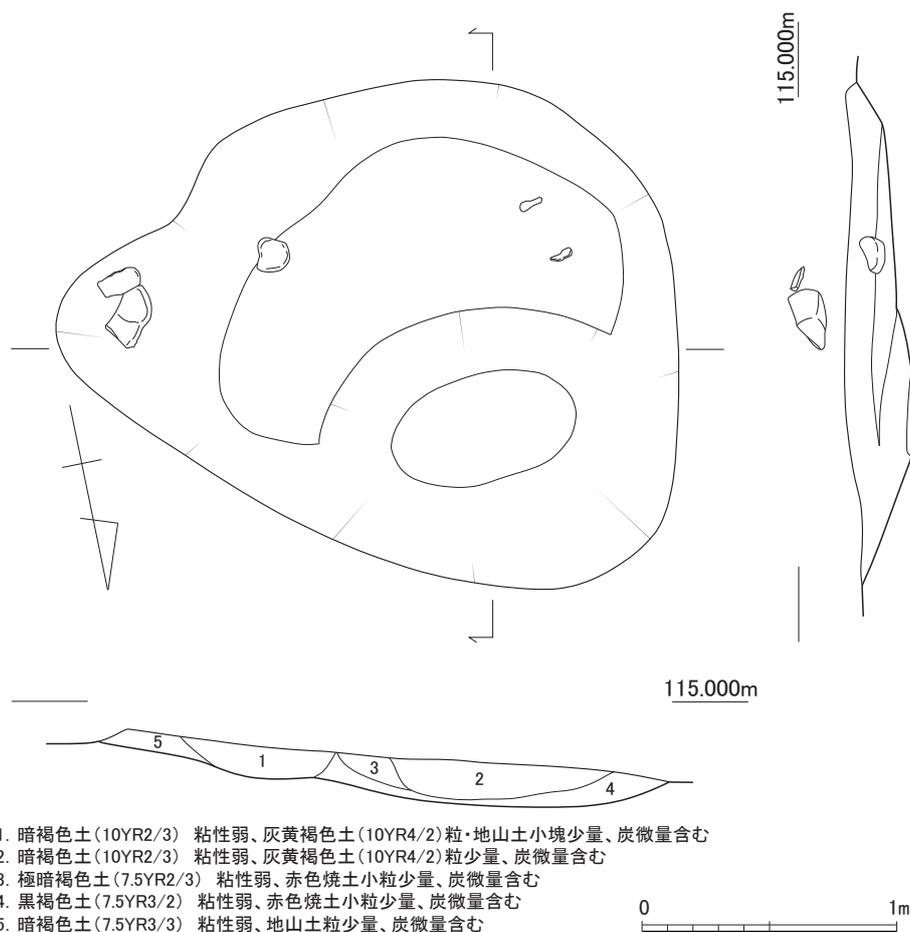
1区の北部、B-5グリッドで検出した土坑である。SK651と重複しているが、SK642がSK651を切っている。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.28m、短径0.98m、深さ0.14mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は叩石が出土している。土色から縄文時代の遺構であるが、土器の出土がなく詳細な時期は明らかにできない。

SK642出土遺物 (第21図)

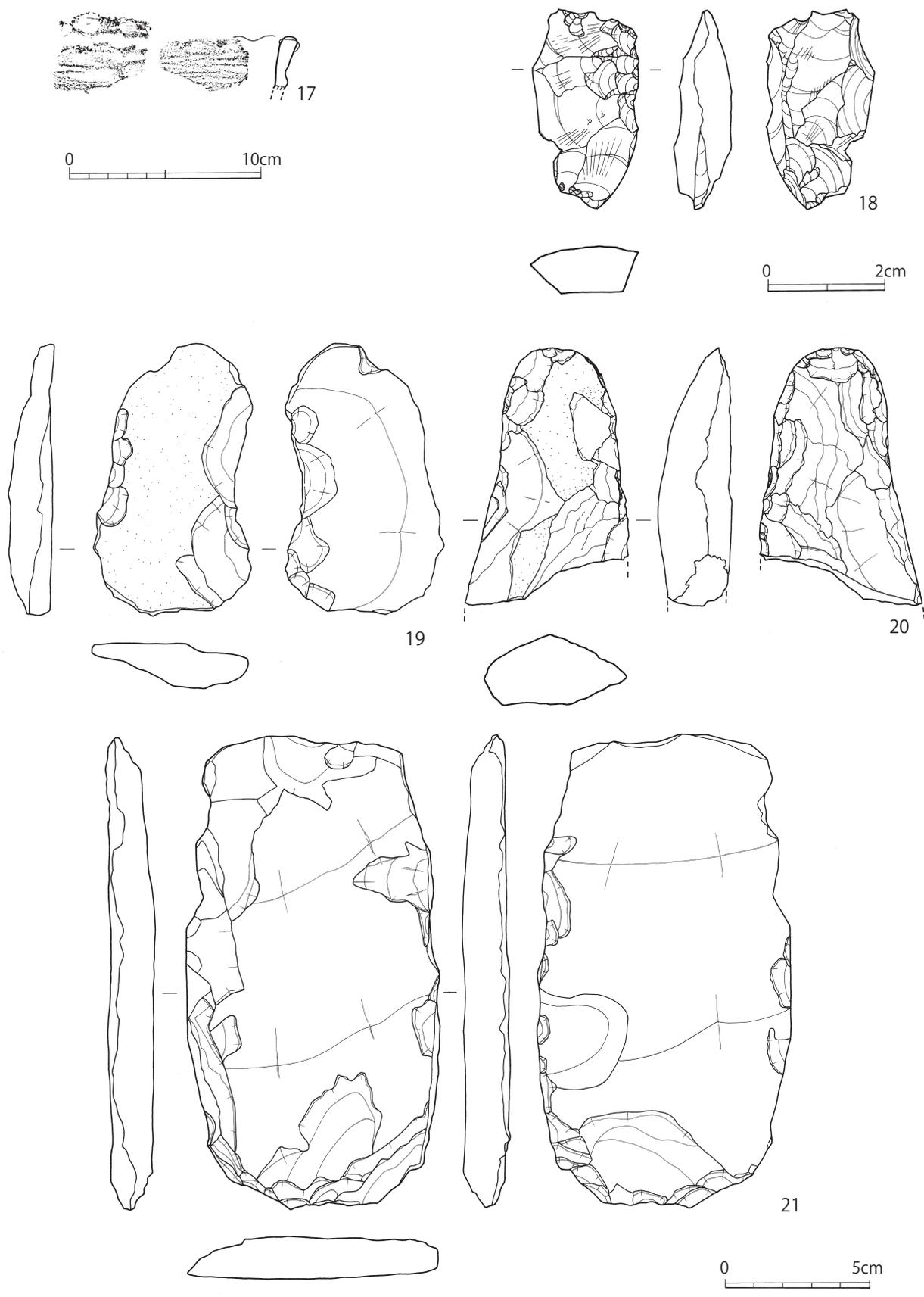
22は砂岩製の叩石である。上面・背面と上下両端に細かい敲打痕が残る。

SK651 (第22図)

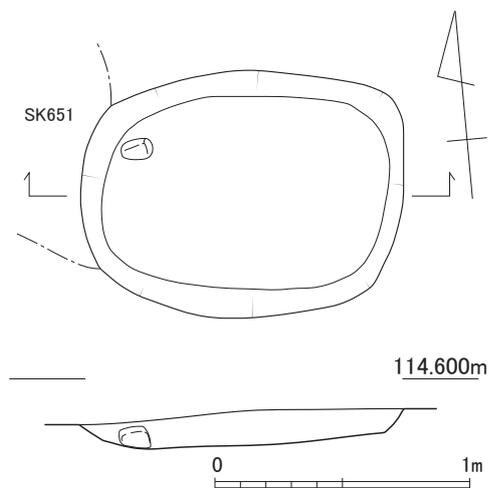
SK642と同じくB-5グリッドで検出した、SK642に切られる土坑である。平面形状はやや歪な鶏卵形を呈し、長径1.13m以上、短径0.74m、深さ0.43mを測る。遺物は縄文土器が少量出土しており、中には早期の押型文土器も含まれるが、小片でありこれが遺構の年代を決めるものかは判断が難しい。



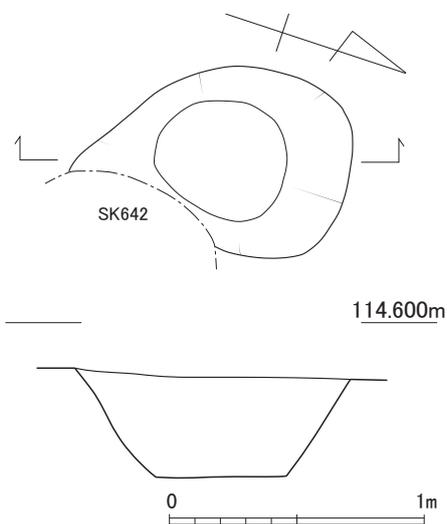
第18図 SK595 実測図 (1/30)



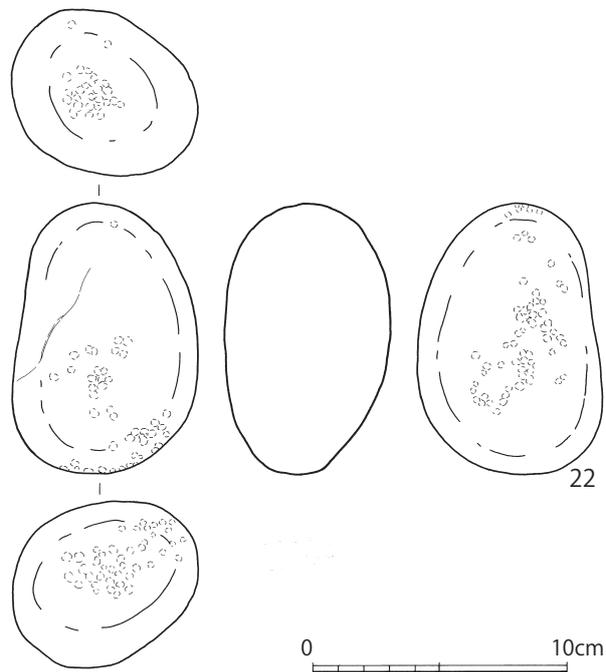
第19図 SK595 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



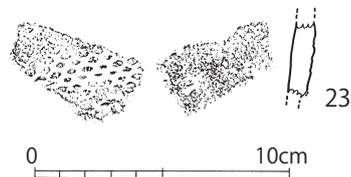
第20図 SK642 実測図 (1/30)



第22図 SK651 実測図 (1/30)



第21図 SK642 出土遺物実測図 (1/3)



第23図 SK651 出土遺物実測図 (1/3)

SK651出土遺物 (第23図)

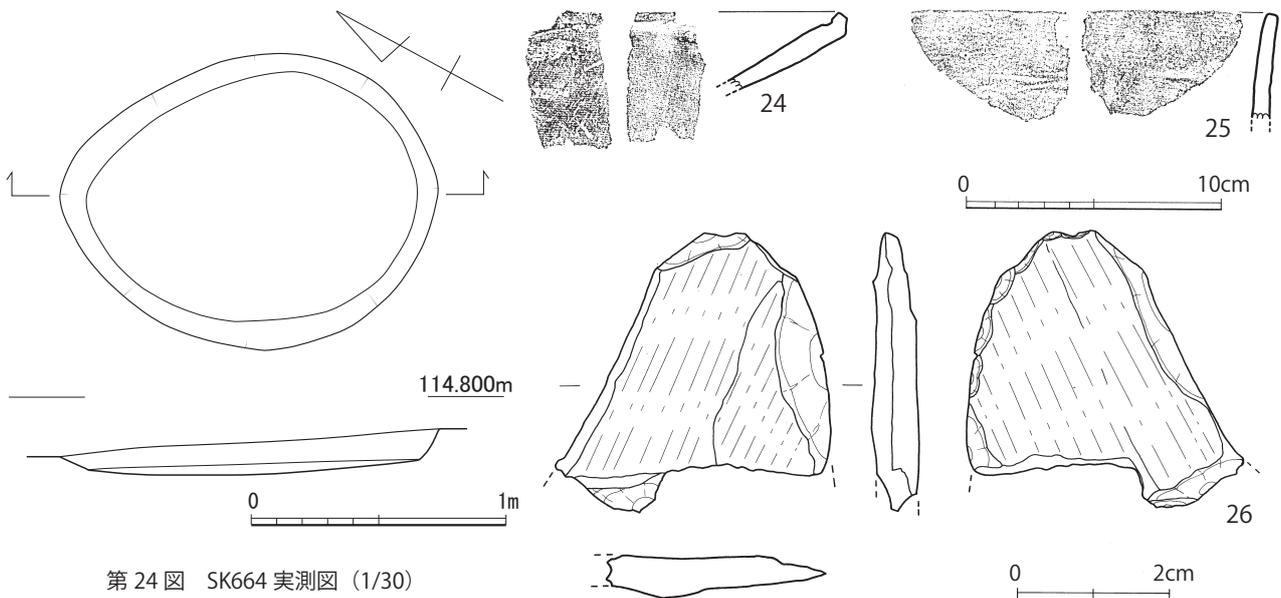
23は押型文土器である。無文部を挟んで横位の楕円文を施す、いわゆる帯状施文で、川原田式に比定される。

SK664 (第24図)

1区の中央部北寄り、B-5・C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.49m、短径1.18m、深さ0.18mを測る。掘り込みは浅く、内部は皿状を呈する。遺物は縄文土器、石器が出土している。後期後葉以降の遺構である。

SK664出土遺物 (第25図)

24・25は縄文土器である。24は深鉢で、内面の口縁部直下に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。25は無文土器の深鉢である。26は結晶片岩製の剥片石器で、両面が節理により剥離している。磨製石鏃の未製品と判断したが、その場合は混入ということになる。あるいは打製石斧の未製品か。



第 24 図 SK664 実測図 (1/30)

第 25 図 SK664 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

SK666 (第26図)

1 区の南端部中央寄り、E-4・E-5 グリッドで検出した土坑である。東側をSK612、西側を攪乱SX549に切られ、南は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、東西 2.75 m 以上、南北 1.77 m 以上、深さ 0.33 m を測る。埋土は 3 層に分層され、暗褐色土及び極暗褐色土からなり、いずれも地山の黄褐色土が混じる。床面では 3 基のピットを検出しており、うち南壁際のピットは深さが 0.40 m 近くあることから柱穴になる可能性もある。検出が部分的であることから土坑としているが、本来は竪穴建物の可能性もある遺構である。遺物は縄文土器の他、打製石斧が出土している。出土土器が無文土器のため遺構の詳細な時期は明らかにできないが、後期以降の遺構である。

SK666出土遺物 (第27図)

27 は縄文土器である。無文の深鉢で、内外面ともにナデ調整を施す。28 は打製石斧で、下部を折損する。横長剥片を素材とし、側円に調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK675 (第28図)

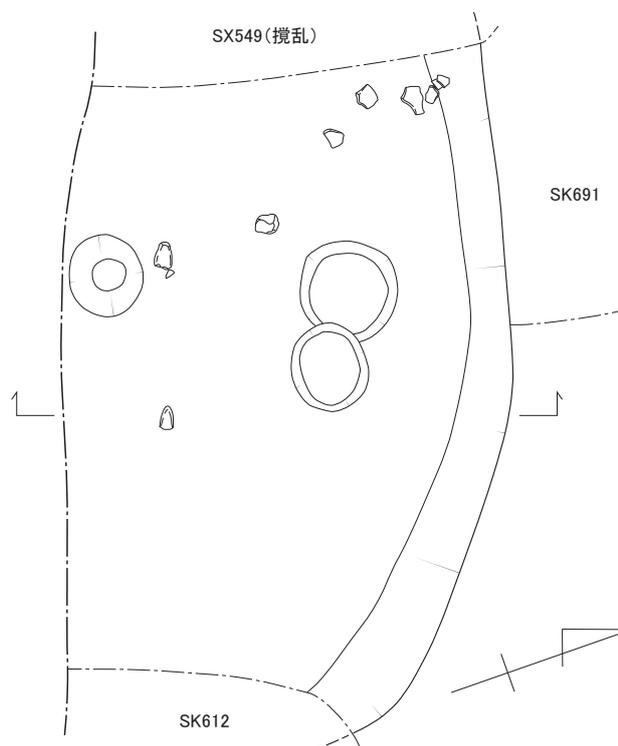
1 区の南西側、D-4 グリッドで検出した土坑である。西半部を落込み状遺構SX619、東側はSD589、南半部は攪乱SX542に切られている。残存状況は良くないものの、平面形状は楕円形状を呈し、長径 1.70 m 以上、短径 1.21 m、深さ 0.27 m を測る。遺物は縄文土器、打製石斧の他、弥生土器の細片も出土しているが、弥生土器は重複遺構からの混入である。出土土器から晩期後葉の遺構と判断される。

SK675出土遺物 (第29図)

29 は縄文土器で、黒色磨研土器の浅鉢である。胴部屈曲部から肩部にかけての破片で、本来は外反する口縁が付く。30 は打製石斧である。横長剥片を素材とし、周縁に細かい調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK691 (第30図)

1区の南端部、E-4グリッドで検出した土坑である。南はSK666、西は攪乱SX549に切られるため全体の規模は明らかにできない。平面形状は楕円形状を呈するとみられ、長径2.31m以上、短径1.29m以上、深さ0.36m以上を測る。掘り込み壁面の立ち上がりは緩く、内部は皿状を呈する。遺物は縄文土器の他、剥片や叩石・磨石等の石器が出土しているが、時期比定のできる遺物に乏しく、詳細な時期は明らかにできない。

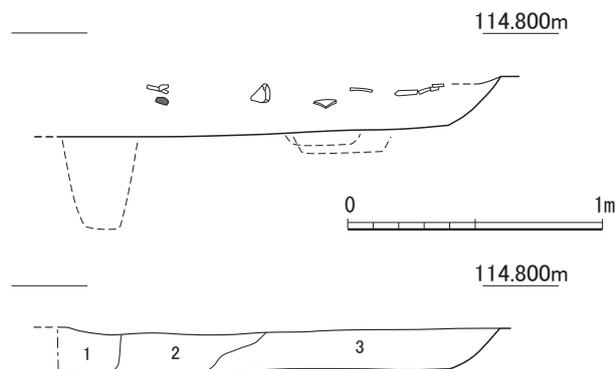


SK691出土遺物 (第31図)

31は流紋岩の剥片で、腹面上端中央に打点、打瘤が残る。旧石器時代の遺物の混入である。32は泥岩製の叩石で、側面を中心に敲打痕が残る。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、竪穴建物3棟、土坑1、溝状遺構2条を検出した。遺構の分布としては1区の南に展開する状況で、1区では弥生時代の遺構の分布は希薄である。遺構埋土は暗褐色ないしは黒褐色となるものが多い。ただし、土坑・ピットの中には出土遺物が少なく帰属時期が明確でないものも多く、その中に弥生時代の遺構が含まれる可能性を残している。



1. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、地山土粒少量含む
2. 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性弱、地山土小粒微量含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、地山土ブロック混じり、炭微量含む

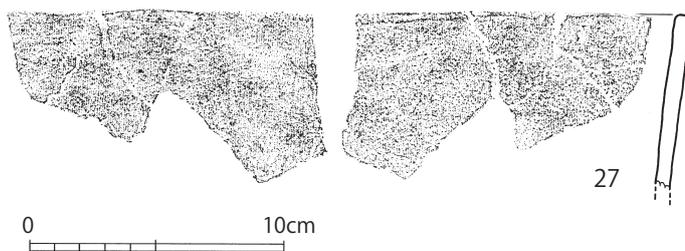
第26図 SK666実測図(1/30)

SH600 (第32図)

1区の南東端部、E-6グリッドで検出した竪穴建物である。東側と南側の大部分が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、北側で緩くカーブしていることから円形を呈する可能性がある。規模は検出した範囲で、長径3.50m以上、短径1.78m以上、深さ0.19mを測る。埋土は4層に細分され、2~4層は中央に向かってレンズ状の堆積となる。第1層は竪穴埋没後の掘り込みで、灰黄褐色土を呈することから比較的新しい掘り込み(攪乱か)である。床面は平坦で、南北に細長く緩く湾曲する溝状の土坑1基、北側壁際でピット1基を検出したが、これら遺構と竪穴建物の関係は明確ではない。遺物は弥生土器の他に縄文土器や、混入したとみられる土師器の細片が出土しているが、全体として量は少ない。遺構の時期を判定できる遺物に乏しいが、出土土器から弥生時代中期以降である。

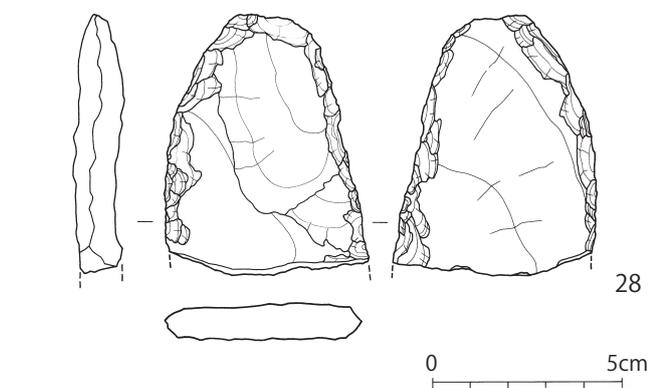
SH600出土遺物（第33図）

33は弥生土器で、外面口縁部下に2条の刻み目凸帯を施す下城式系の甕である。

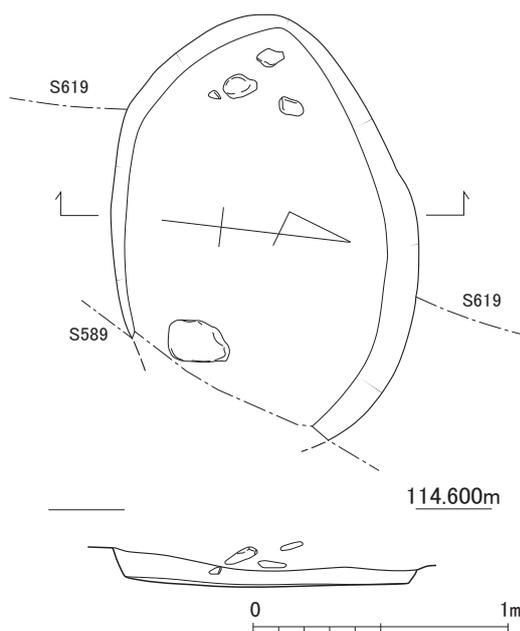


SH667（第34図）

1区の南西端部近く、D-4グリッドで検出した竪穴建物である。東壁の一端を古墳時代の土坑SK604に切られ、さらに上部は落込み状遺構SX619や中世のSX556Bにより削平を受けている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺3.23m、短辺1.74m以上、深さ0.21mを測る。埋土は3層に分層され、第1層は黒褐色土、第2層は地山の黄褐色土粒が少量混じる暗褐色土、第3層の暗褐色土には黄褐色土ブロックが斑状に混じる。床面で3基のピット状遺構を検出しており、うち2基は浅い掘り込みであるが、東側で検出したものは約75cmの深さがあり、これが支柱穴になる可能性が高い。竪穴建物の規模からすれば2本柱穴となる可能性が高く、恐らく西側にこれに対応する柱穴があるのだろう。遺物は弥生土器や混入したとみられる土師器の細片が出土しているが、全体として量は少ない。遺物から弥生時代の竪穴の可能性が高いが、時期判定できる遺物に乏しく、詳細な時期決定は困難である。



第27図 SK666 出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第28図 SK675 実測図 (1/30)

SH667出土遺物（第35図）

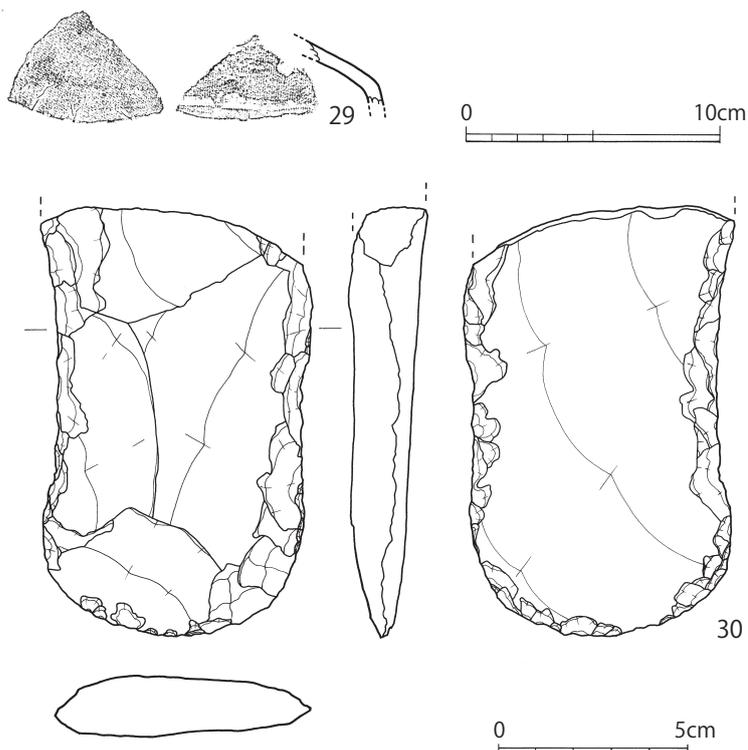
34は弥生土器甕の底部で、図示できるのはこの1点だけである。

SH687（第36図）

調査区の南部中央寄り、D-5グリッドで検出した竪穴建物である。南西側を古墳時代前期の竪穴建物SH620に切られ、さらにいくつかの攪乱に切られているためか、形状はやや不整形であるが、西辺がやや直線的になることから本来は隅丸方形の形状をとるのであろうか。遺構の規模は長辺3.76m、短辺3.04m、深さ0.30mを測る。床面では4基のピット状遺構を検出しており、うち土層断面を示した2基が支柱穴になると思われる。埋土は4層を確認しており、うち第1層を除いて残りの3層は赤みがかかった色相を呈する。埋土としては縄文時代の遺構埋土に似ているが、弥生時代早期の刻み目凸帯文土器が出土していることから、早期の竪穴建物の可能性が高い。縄文時代晩期後葉の集落から継続する、弥生時代初期の数少ない竪穴建物である。遺物は縄文土器、弥生土器、打製石斧、横刃型石器等が出土している。なお、若干土師器の細片が見られるが、これはSH620や攪乱といった構成の掘り込みからの混入であろう。

SH687出土遺物（第37図）

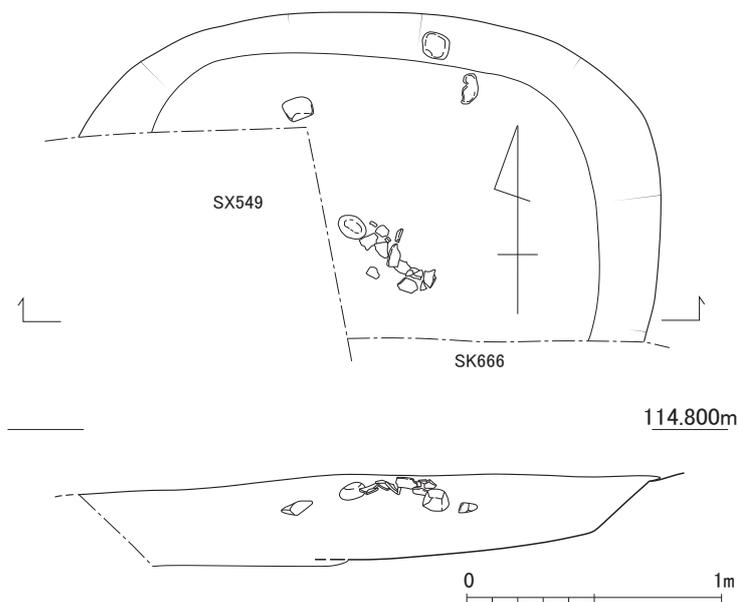
35は縄文土器の浅鉢である。ボウル形を呈するとみられ、口縁端部に右撚りRLの単節縄文を施す。36は内傾する口縁部に接して1条の刻目凸帯が付されるもので、弥生時代早期の下黒野式土器に比定される。上田原東遺跡で多く出土する、縄文時代晩期後葉の無刻目凸帯文土器（上菅生B式土器）は、大分平野では下黒野式土器と混在して出土することが多いが、上田原東遺跡では下黒野式土器はほとんど認められない。また、SH687から上菅生B式土器は出土していない。こうした点から両者には明確に時期差が存在するといえよう。37は安山岩の縦長剥片を素材とするもので、上辺頂部に面を持ち下辺が刃部となることから横刃型石器とした。38は安山岩製の打製石斧で、上半部を欠失する。



第29図 SK675 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK665（第38図）

1区の南東部、E-5グリッドで検出した土坑である。遺構検出作業中に大型の打製石斧が出土したことから、その周囲を慎重に精査してプランを確認した。北から西側の半分を攪乱に切られるが、平面形状は円形状を呈し、長径0.69m以上、短径0.59m以上、深さ0.17mを測る。遺物は上述の打製石斧1点が出土しただけで、遺構の時期を決める資料に欠ける。埋土色相から弥生時代以降の遺構であり、大型の打製石斧の出土という点から弥生時代の遺構と位置付ける。



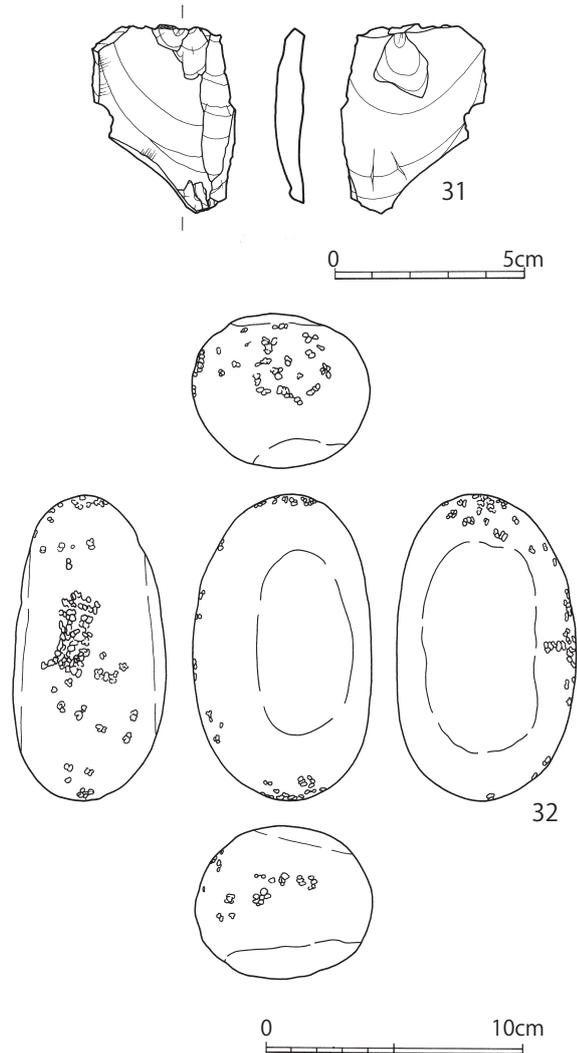
第30図 SK691 実測図 (1/30)

SK665出土遺物（第39図）

39は打製石斧である。背面は自然面を多く残し、側辺には粗い調整剥離を施すことから、打製石斧の未製品であろう。石材は安山岩で、長さ24.8cm、幅10.0cm、重量510gを測る。

SD589 (第40図)

1区の中央西寄り、C-5・D-4・D-5グリッドにかけて検出した溝状遺構である。南側は西へ緩くカーブしており、落ち込み状遺構SX619に切られている。また、中央西側では縄文時代の土坑SK675を切っている。長さ7.68 m以上、幅は0.73~1.07 m、深さは最大で0.32 mを測る。埋土は黒褐色土で上下2層に分層され、下層には少量ながら灰黄褐色土粒が混じる。遺物は縄文土器の他、弥生土器とみられる土器片が出土しているが、量は少ない。遺構の時期比定は困難であるが、縄文晩期後葉のSK675を切ることや弥生土器の出土から、弥生時代の遺構と判断する。



第31図 SK691 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SD589出土遺物 (第41図)

40は縄文土器の浅鉢である。外に開きながら立ち上がり頸部で上方へ屈曲させ、口縁部は内面側に三角形に肥厚する。外面には横位の沈線と、それを区切る曲線状の沈線文を配する。頸部には1条の沈線と刻みを、口縁端部には刻みを施す。縄文時代後期中葉の所産であろう。

SD690 (第42図)

1区の南部中央、E-5グリッドで検出した溝状遺構である。北は古墳時代の竪穴建物SH620に、東は攪乱SX615に切られている。

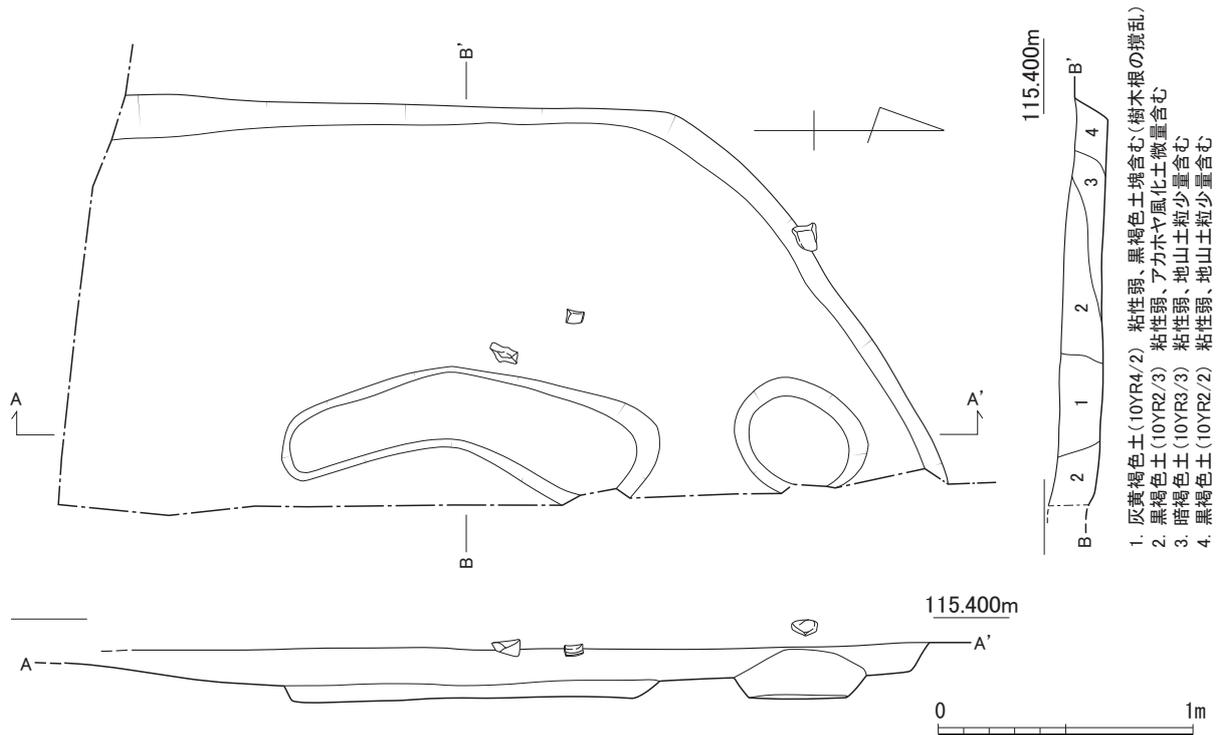
長さ2.50 m以上、幅0.42~0.95 m、深さは最大で0.55 mを測る。南端部は土坑状に一段深く掘り込まれている。埋土は上下2層に分層され、上層は黒褐色土、下層は地山の黄褐色土粒が混じる暗褐色土である。遺物は弥生土器の他、時期不明の土器片が少量出土している。遺物が少なく、遺構の詳細な時期は明らかにできないが、弥生土器の出土から弥生時代の遺構と判断する。

SD690出土遺物 (第43図)

41は弥生土器甕の底部である。

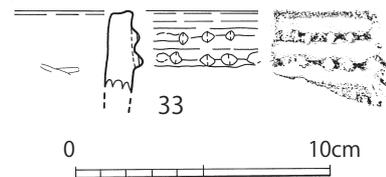
第4節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として、竪穴建物5棟、土坑3基、溝状遺構1条を検出した。古墳時代の遺構は大きく前期後葉と後期後葉の2時期に大別される。このうち竪穴建物は3棟が前期後葉、2棟が後期後葉で、後期後葉のものには竈が付く。遺構の分布はほぼ1区の全体に及ぶが、古墳時代前期の遺構は1区の南側に集中し、北半部には展開しない。時期によって土地利用のあり方に差があることが分かる。また、後期の竪穴建物は比較的浅いのに



第32図 SH600 実測図 (1/30)

対し、前期の竪穴建物は黄褐色ローム層を床面とするものがほとんどで他の磁器の遺構に比べてもひときわ深く掘り込まれるのが特徴である。



第33図 SH600 出土遺物実測図 (1/3)

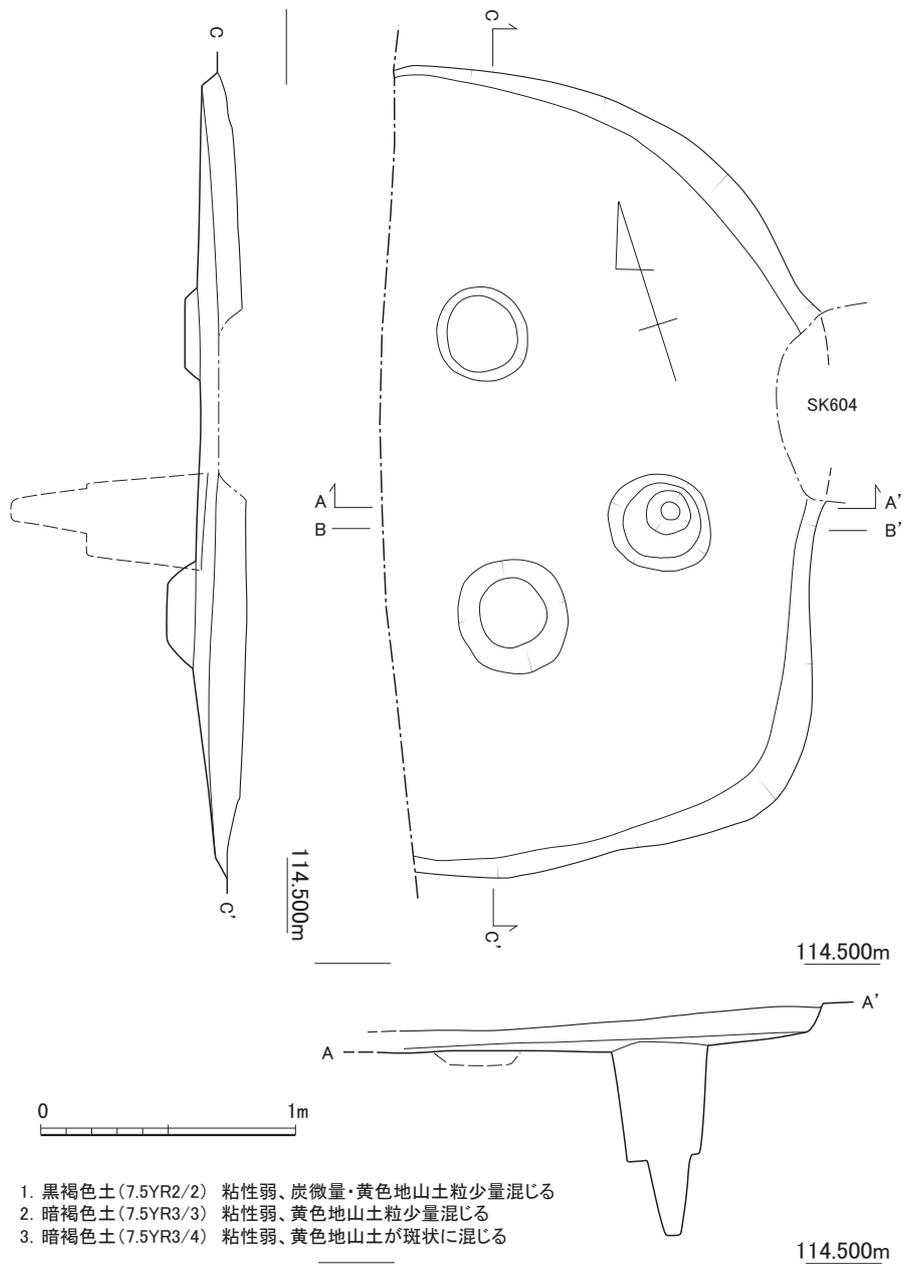
SH535 (第44図)

1区の北端近く、B-5・B-6グリッドで検出した竪穴建物である。

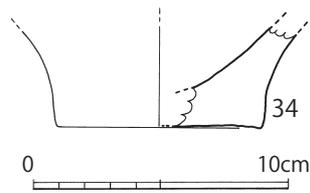
北辺を中世の溝SD556Aに切られている。平面形状は方形であるが、北辺と南辺の長さに差がありやや台形状を呈する。長辺5.84m、短辺5.04m、深さは比高で最大0.30mを測るが、平均的には0.1~0.15m前後である。埋土は6層で、中央に向かってレンズ状の堆積となる。貼り床は確認されなかったが、粘性が強くよく締まった基本層序の第VI層を床面とするためであろう。附属する遺構として、床面で9基のピットと、西壁の中央で竈を検出した。支柱穴は深さのある4本である。

竈は西壁のほぼ中央部に位置する。壁に対し逆U字状に土を盛り、粘土を貼って袖部を構築している。袖部は長さ0.52m、幅0.81m、高さ0.26mを測る。袖部の湾曲した中に、厚い焼土面を検出しており、これが焚き口である。焚き口には支柱石やそれを抜き取った痕跡はみられなかった。また、竈を廃棄する際に土器を用いた祭祀を行う例があるが、ここではそのような痕跡は見られなかった。竈のすぐ西には煙出しのピットとみられる掘り込みがあり、明確には確認できなかったが袖部にトンネルを穿ち排煙していたとみられる。断ち割り断面でも煙出しピットから焚き口の方へ流入した土層を確認している。焼土面を除去した後に精査をしたところ、竈の下部に焼土や炭を含む土坑状のプランが検出された。土坑はやや歪な円形状を呈し、長径1.20m、短径1.03m、深さ0.33mを測る。この土坑を掘った後、細かく土を埋めて整地し、最後に焚き口下を掘り返して整形した状況が土層断面から読み取れる。埋土に焼土や炭を含むことから、この整地の際に何らかの目的で火を焚いたものとみられるが、地盤を強化する目的であろうか。

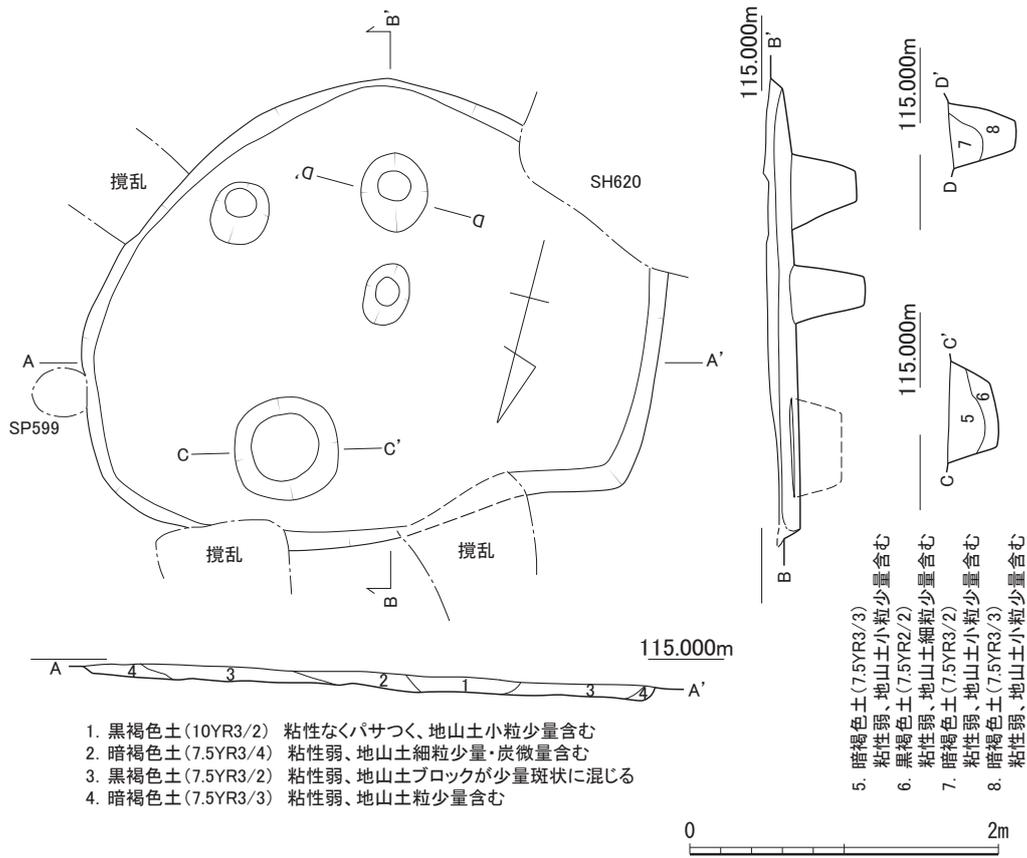
遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、打製石斧等が出土している。須恵器の出土から、6世紀後半に位置づける。



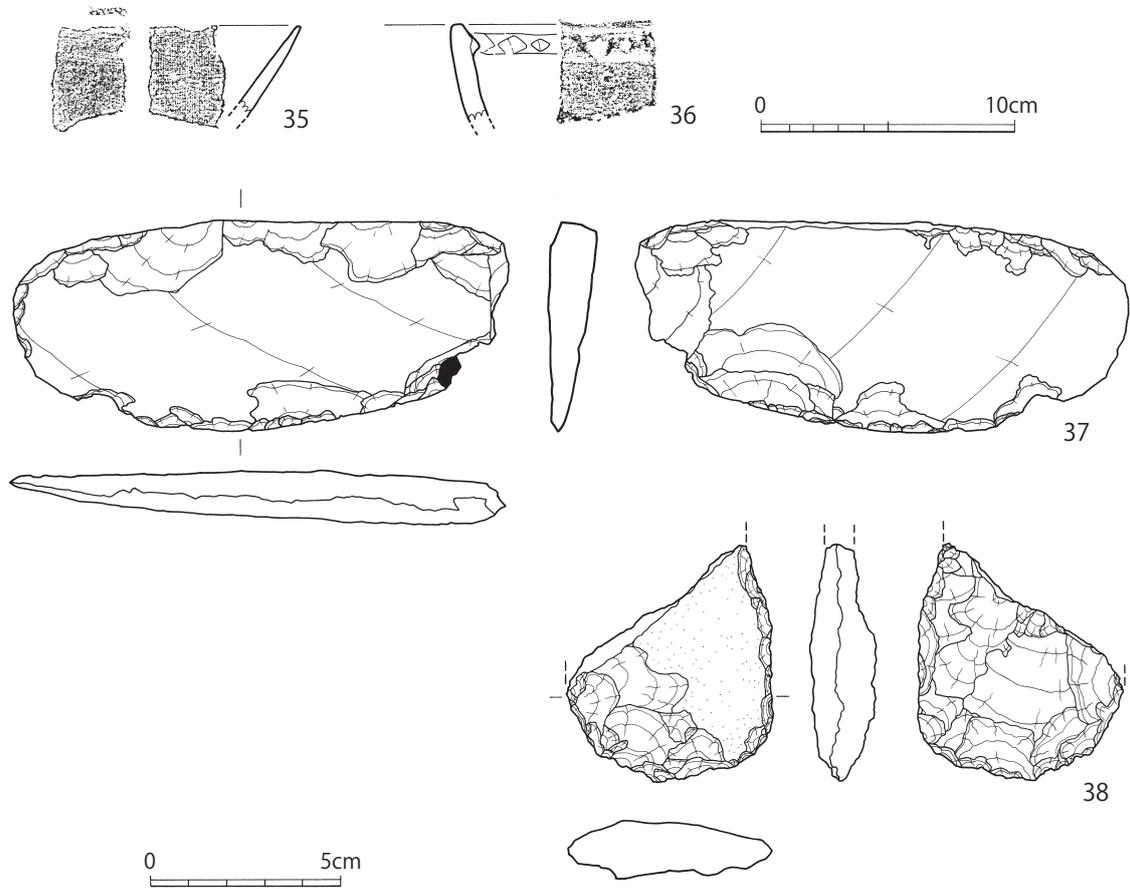
第34図 SH667 実測図 (1/30)



第35図 SH667 出土遺物実測図 (1/3)



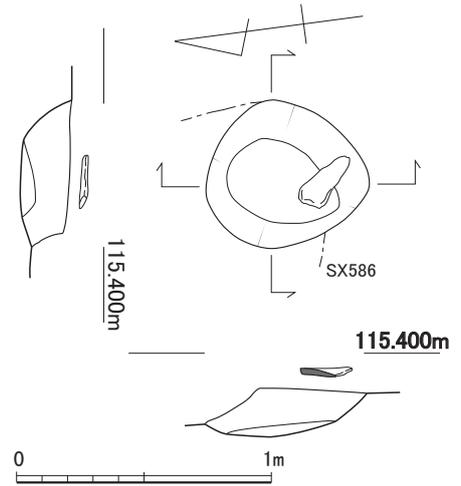
第36図 SH687 実測図 (1/50)



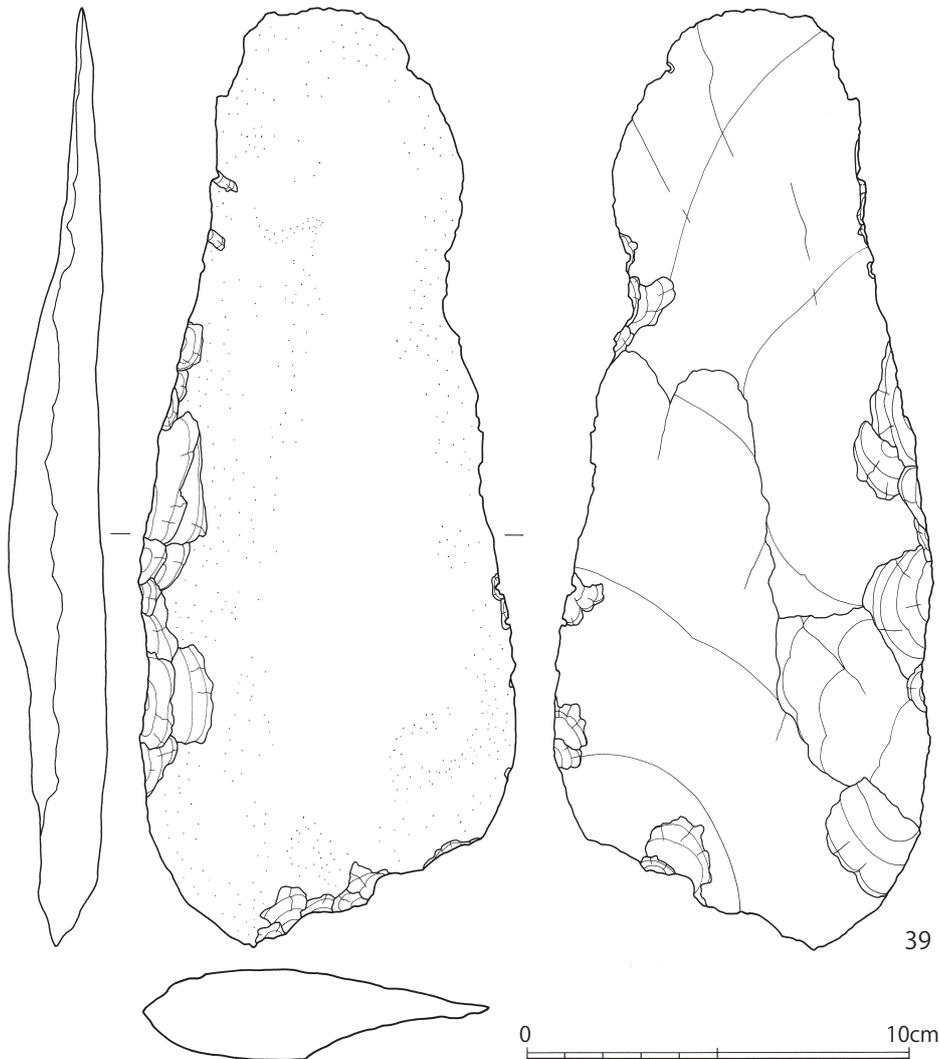
第37図 SH687 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH535出土遺物（第45図）

42～47は縄文土器である。42・43は外面口縁部下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。44は無文の深鉢である。45は浅鉢で、外面に2条の平行凹線文を施す特徴から後期後葉に位置付けられる。46は口縁部内面に段が付くもので、後期末葉の所産である。47は浅鉢で胴部が強く屈曲する晩期のもの。48は胴部片で、屈曲部に刻みを施す。弥生時代前期の土器片か。49は須恵器坏蓋、50は土師器の甕、51・52は土師器の鉢で、これらは古墳時代後期に位置付けられる。53は土器片を加工した円盤である。54は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、側辺及び下端部に調整剥離を



第38図 SK665 実測図 (1/30)



第39図 SK665 出土遺物実測図 (1/2)

施す。調整剥離が全体に及んでいないことから未成品の可能性が高い。

SH536 (第46図)

1区の中央東寄り、D-5・D-6グリッドで検出した竪穴建物である。西辺の一部をSK596・SK597に切れ、東端部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。平面形状は方形を呈し、長辺4.41m、短辺4.22m以上、深さ0.29mを測る。埋土は竈を含め13層に分層される。附属する遺構として、床面で支柱穴となるピット4基と、北壁の中央部で竈を検出した。

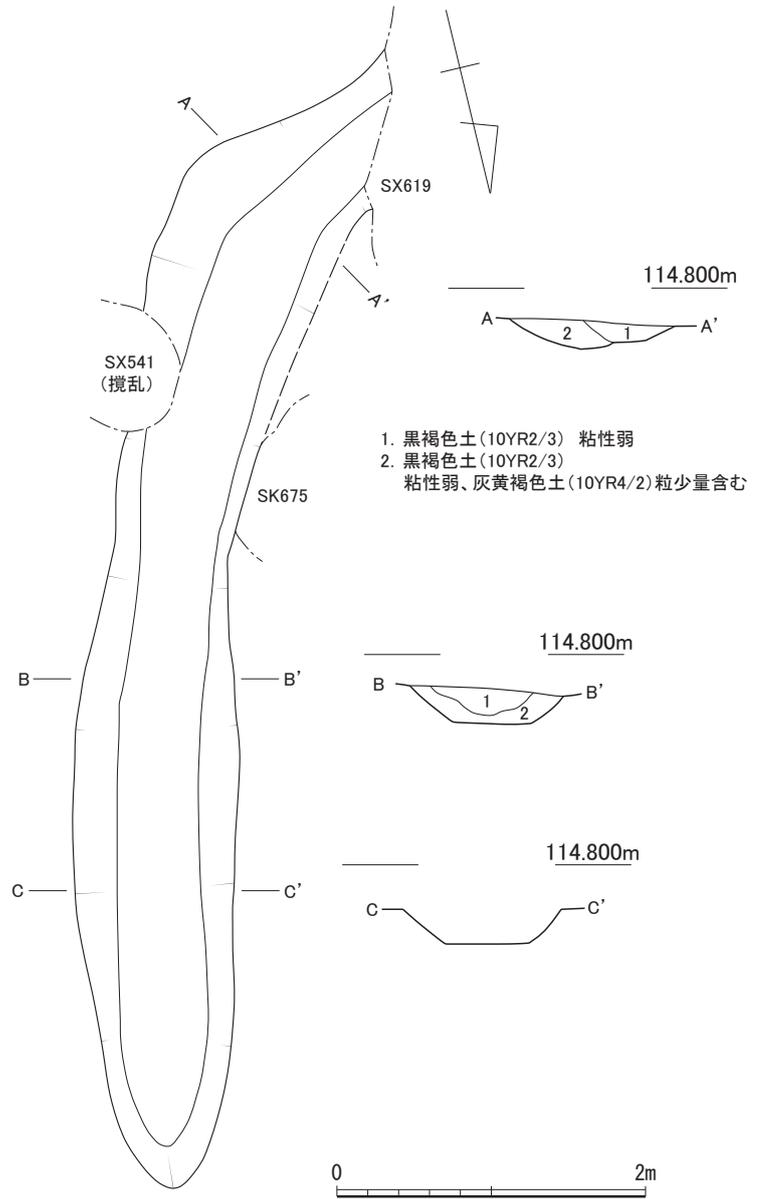
竈は北壁際ににぶい黄褐色の粘質土を逆U字状に盛って袖部を構築している。袖部は長さ0.59m、幅0.86m、高さ0.20m前後の規模を測る。この袖部は焼土混じりの暗褐色土や、袖部構築材であるにぶい黄褐色の粘土ブロックの混じった暗褐色土によって埋められ、その上に30cm大の扁平な安山岩板石が2箇所置かれていた。この板石は竈封じのために置かれたものであろう。この竈の封土を取り除くと、焚口において袖部に接して土師器の甌1点が据えられた状態で出土した。甌は袖側の約半分が残存していたが、竈を封じる際の祭祀行為として置かれたものであろう。焚口は焼土に黒褐色土が

混じった赤褐色土が堆積していたが、明確な焼土面は見られなかった。また、竈のすぐ北には煙出しのための小ピットを検出した。袖部を除去した後、その下部を精査すると、やはり少量ながら焼土や炭が混じる土が認められ、南北に細長い土坑を検出した。土坑は長径0.94m、短径0.52mの細長い楕円形状を呈し、深さは0.21mを測る。竈を作る際に整地の目的で掘られたものであろう。

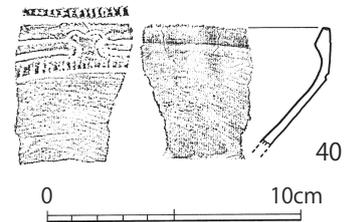
遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、砥石、石皿が出土している。出土遺物から、6世紀後半の遺構と判断する。

SH536出土遺物 (第47図)

55は縄文土器で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す上菅生B式土器である。凸帯と口縁が平行にならないため、凸帯は口縁を1周せず、連弧状になる可能性がある。56は土師器の甕か。口縁部は緩く外反する。57は

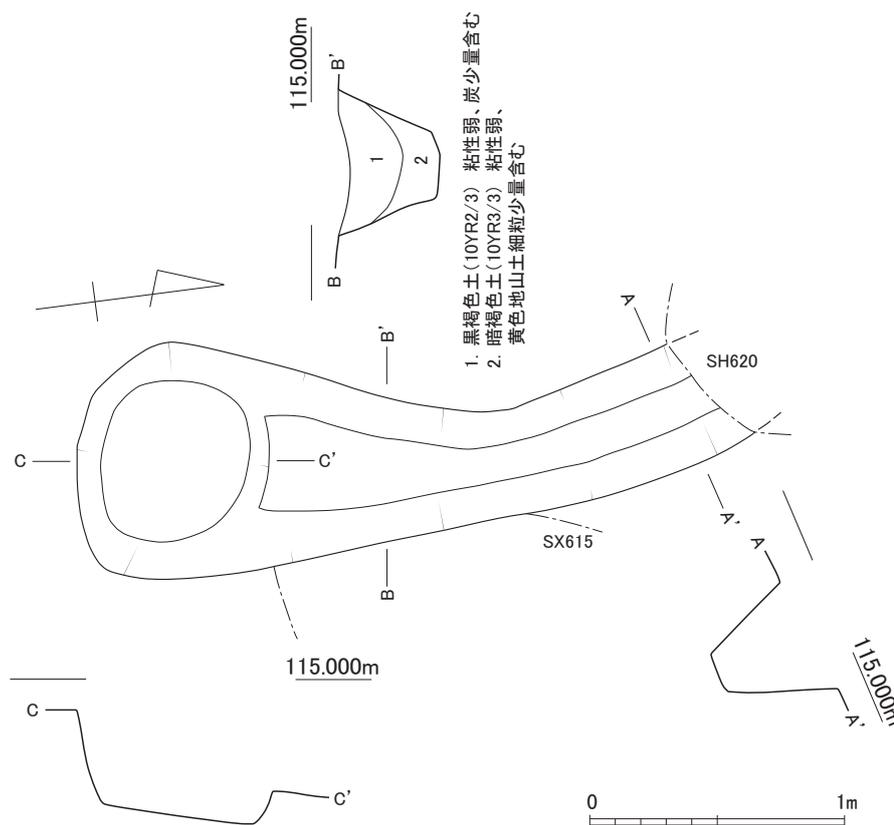


第40図 SD589 実測図 (1/50)



第41図 SD589 出土遺物実測図 (1/3)

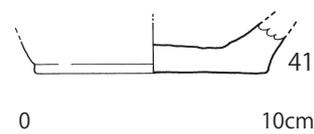
土師器の甕で、頸部で緩く屈曲し、胴部の膨らみは弱い。58は土師器の鉢か。59は土師器の甑である。59は焚口に据えられた状態で出土したもので、復元口径 16.2 cm、復元底径 8.0 cm、器高 20.0 cmを測る。底部は中空となっている。60は砂岩製の砥石で、台形柱状を呈し周囲の4面を使用面とする。61は安山岩の縦長剥片を素材とする打製石斧で、背面側左辺は欠失するが周囲に調整剥離を密に施す。62は南壁際から出土した、砂岩製の石皿である。上面を使用面として、無数の擦痕が残る。



第42図 SD690 実測図 (1/30)

SH537 (第48図)

1区の南部東寄り、D-5・D-6・E-5・E-6グリッドで検出した竪穴建物である。南壁の一部及び西壁の一部をそれぞれ攪乱に切られるが、残存状況は良い。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺 4.16 m、短辺 3.52 m、深さは最大で 0.62 mを測る。埋土は 11 層に細分されるが、南北土層ベルトの中層にあたる第 5 層は多量の炭を含む黒褐色土で、この層の下、北東隅部付近一帯において 3 箇所の焼土の広がりが見出された。このため焼失家屋の可能性も考えられたが、炭化部材の出土は顕著ではなく、焼失建物ではない。竪穴廃絶後に何らかの目的で火を焚く行為が行われたとみられる。この炭層の上部、上層の第 1~3 層からは多量の土器や石器が出土しており、火を焚く何らかの行為を行った後、廃絶した竪穴建物跡の窪地をならすために不要な土器などを一括して廃棄し、一度に埋め戻したものと考えられる。



第43図 SD690 出土遺物実測図 (1/3)

第 5 層の炭層及び焼土面を除去し、下層を掘り下げたところ、竪穴の北東コーナー近くの床面の少し上から、打製石斧 4 点がまとまって出土した。整理作業の過程で、これらのうち 3 点が接合することが判明し、またもう 1 点も接合こそしないが同一母岩から作られたものである可能性が高いことが分かった (第 53 図 89A~C・90)。SH537 廃絶時の確実な遺物であり、古墳時代前期においても打製石斧が用いられていたことを示す資料である。また、北側の支柱穴となるピットのすぐ傍で、やや床面からは浮いた状態ではあったが炭化した柱材が立った状態で出土した。支柱となる柱材が残存したものである可能性が考えられるが、支柱穴からは炭化材は出土しなかった。

黄褐色土ローム質土の床面上では、中央のやや東寄りで炉跡とみられる土坑を 1 基と、土坑を挟んで南北に支柱

穴となる2基の柱穴、その他3基のピットを検出した。土坑はやや歪な鶏卵形を呈し、長径0.62 m、短径0.48 m、深さ0.11 mを測る。主柱穴は直径0.35 m前後、深さは0.30～0.40 m前後である。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器といった土器類の他、土製品、打製石斧、叩石、石皿が出土した。大部分は上層から出土したものであるが、下層から先述の打製石斧の接合資料や、炉跡となる土坑の上部からは叩石が出土している。出土遺物から、古墳時代前期後半の遺構である。

SH537出土遺物（第49～52図）

63～68は縄文土器である。63は早期の押型文土器で、横位の楕円文を施す。64は波状口縁を呈する深鉢で、内面口縁部下に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。65は端部を欠くが、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す深鉢で、晩期後葉の上菅生B式土器である。66は無文土器の深鉢、67は後期末葉の浅鉢で、口縁部の内外面に1条の沈線を施す。68は深鉢の底部で、底面が凹む上げ底となる。69は弥生土器の甕で、口縁からやや下がった位置に1条の刻目凸帯を配する。70は壺の肩部で、横位の凸帯を巡らせる。これらは中期後半に属する。71～87は土師器である。71・72は小型の甕で、ともに底部内面に粒状の炭化物の痕跡が残る。73～77は甕で、口縁は外反し、頸部で屈曲して胴部は丸く膨らむ。77を除き、外面に煤が付着する。78は複合口縁となる甕で、瀬戸内系の影響を受けたものか。79・80は壺である。81は鉢で、外面に指頭圧痕が残る。82は平底となる器形で鉢の底部か。83は高坏のミニチュアで、脚裾部に指頭圧痕が顕著に残る。84～87は高坏で、84は坏部の見込みに線刻を施す。85は脚部で、坏部との接合は円盤充填である。86・87は坏部接合部まで中空となっており、これらも円盤充填により接合するものであろう。88は板状を呈する不明土製品である。

89～95は石器である。89は安山岩製の打製石斧で、固まって出土したA～Cの3点が接合する。90も89と同じ石材であるが、接合はしない。調整剥離は粗く、未製品であろう。91はデイサイト製の打製石斧であるが、下部の刃部調整がなされていない未製品か。92は安山岩製の打製石斧で、上部を欠失する。93は安山岩の剥片の周縁に調整剥離を施した、打製石斧の未製品である。94デイサイトの円礫を素材とした叩石で、上面・下面及び側面に敲打痕が残る。95は砂岩製の石皿・台石である。

SH610（第53図）

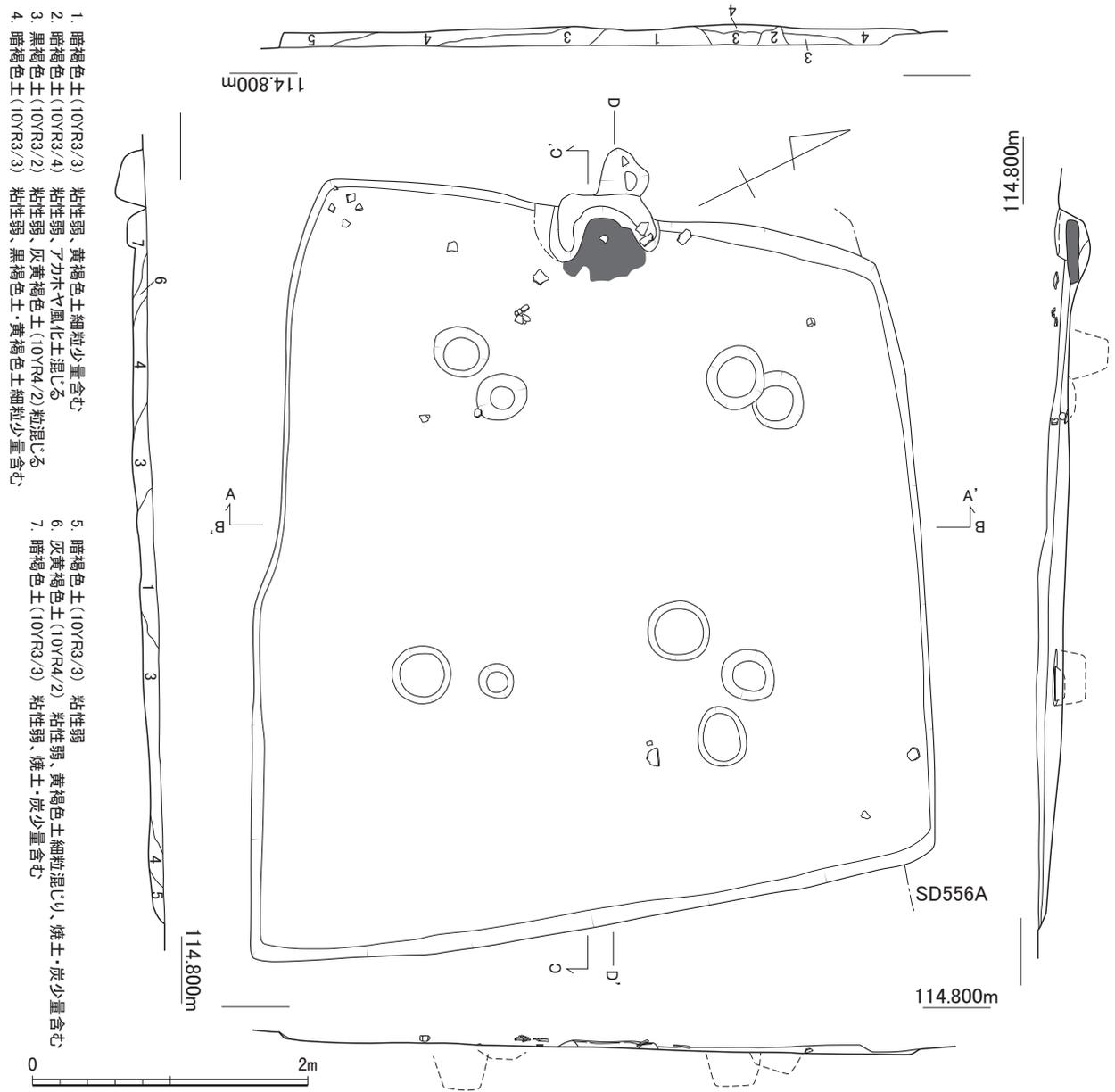
1区の南西隅部で検出した竪穴建物である。西側及び南側が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形である可能性が高い。検出した範囲で、東西・南北ともに3.50 m以上、深さは最大で0.60 mを測る。埋土は5層に細分でき、中心部に向かってレンズ状の堆積を呈する。黄褐色ローム質土の地山層を床面とし、この面で8基のピット状遺構を検出した。このうち、中央で2基が連結したピットの東側のものが50 cm余りと深く、これが主柱穴になると思われる。建物規模からすれば2本柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、土製品、石器が出土している。土師器の出土や、黄褐色ローム湿度を床面とし深さを有することから、古墳時代前期の遺構と判断する。

SH610出土遺物（第54図）

96は土師器の鉢である。口縁部は外反し、内面にはわずかに赤色顔料を塗彩した痕跡が残る。97は土器片を転用し半円形状に加工した土製品である。98は花崗岩の円礫を素材とした叩石で、特に上面・下面に顕著な敲打痕が認められる。99は白色チャートの剥片である。

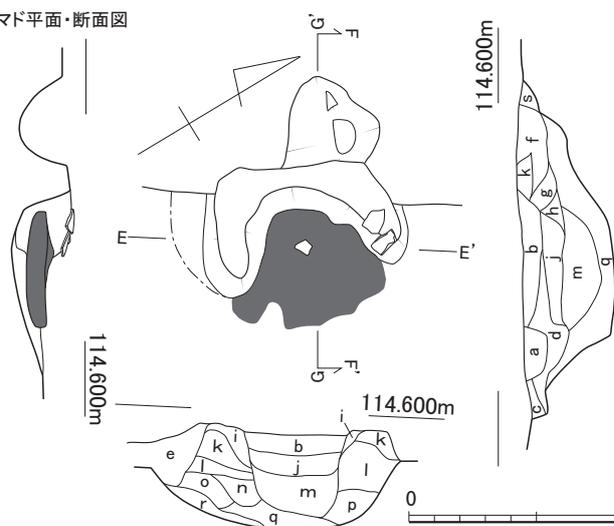
SH620（第55図）

1区の南部中央、D-5・E-5グリッドで検出した竪穴建物である。南西部は上面が確認調査トレンチで少し削られているとおり、確認調査においてその存在を把握していた遺構である。また、北東隅部は弥生時代層の竪穴建物SH687を切っており、南東部では攪乱SX614に切られている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺3.85 m、短辺



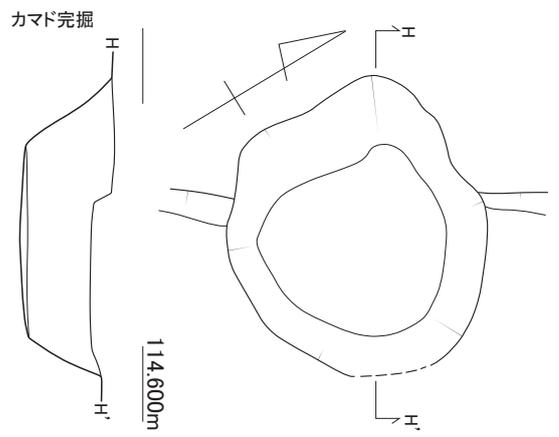
1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土混じる
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、灰黄褐色土 (10YR4/2) 粒混じる
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土・黄褐色土細粒少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱
6. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性弱、黄褐色土細粒混じり、焼土・炭少量含む
7. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土・炭少量含む

カマド平面・断面図



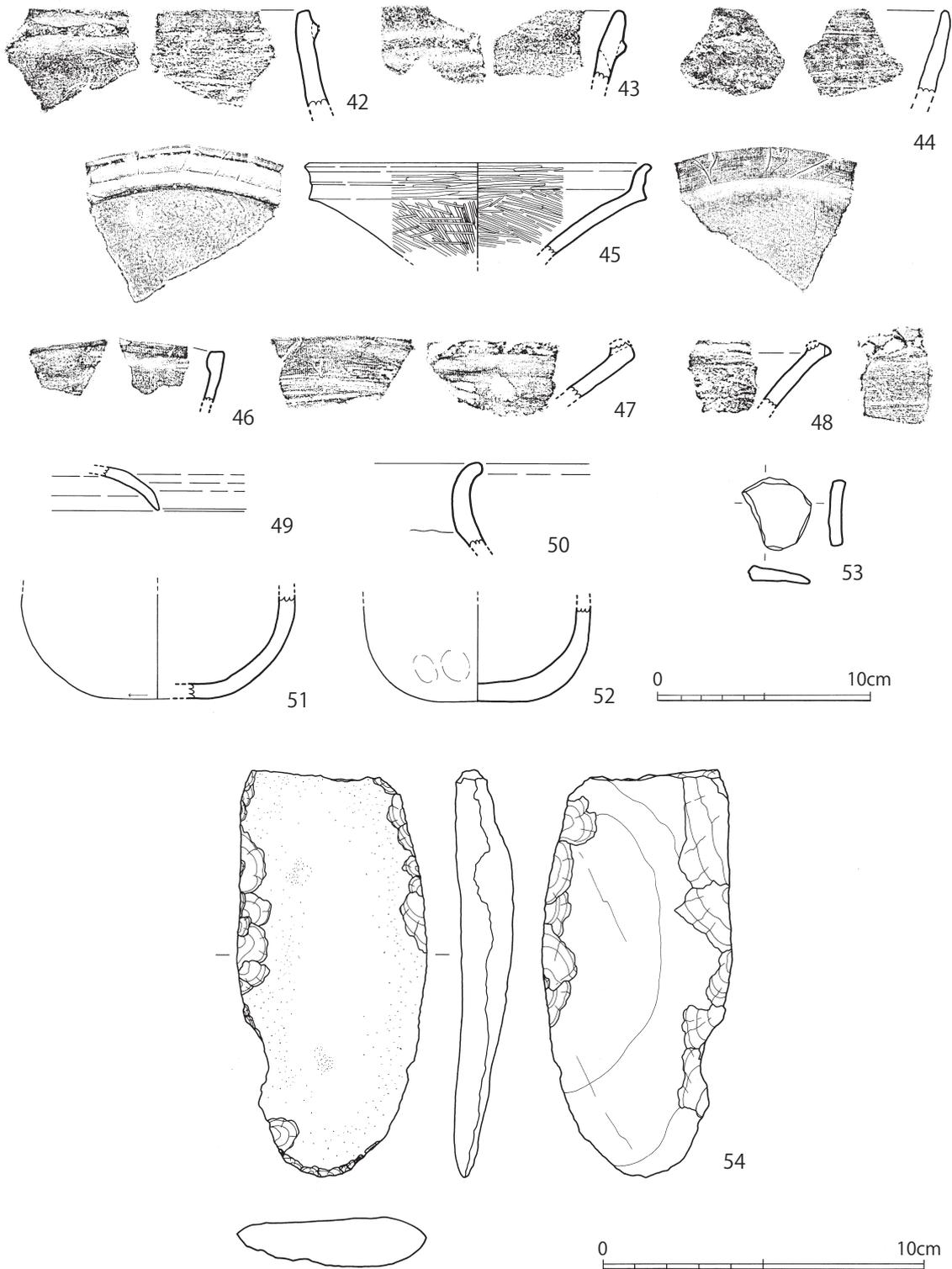
- a. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、焼土粒少量含む
- b. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、焼土粒多量・炭含む
- c. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 堅穴土層の6層
- d. 暗褐色土 (10YR3/3) 堅穴土層の7層
- e. 褐色土 (7.5YR4/4) やや粘性あり、暗褐色土粒が斑状に混じる
- f. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、上部に焼土粒を含む
- g. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、焼土粒混じる
- h. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、焼土粒少量含む
- i. 赤褐色土 (5YR4/6) 粘性あり硬く締まる (袖表面の被熱層)

カマド完掘



- j. 赤褐色土 (2.5YR4/8) 被熱により硬化、上部に炭含む
- k. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性あり硬く締まる、焼土細粒混じる
- l. 褐色土 (10YR4/5) 粘性弱
- m. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、炭・焼土小塊少量含む
- n. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土の大ブロック混じる
- o. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、白色砂粒少量含む
- p. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、アカホヤ風化土微量含む
- q. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱くバサつく、炭・焼土細粒少量含む
- r. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土少量含む
- s. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、暗褐色土が斑状に混じる

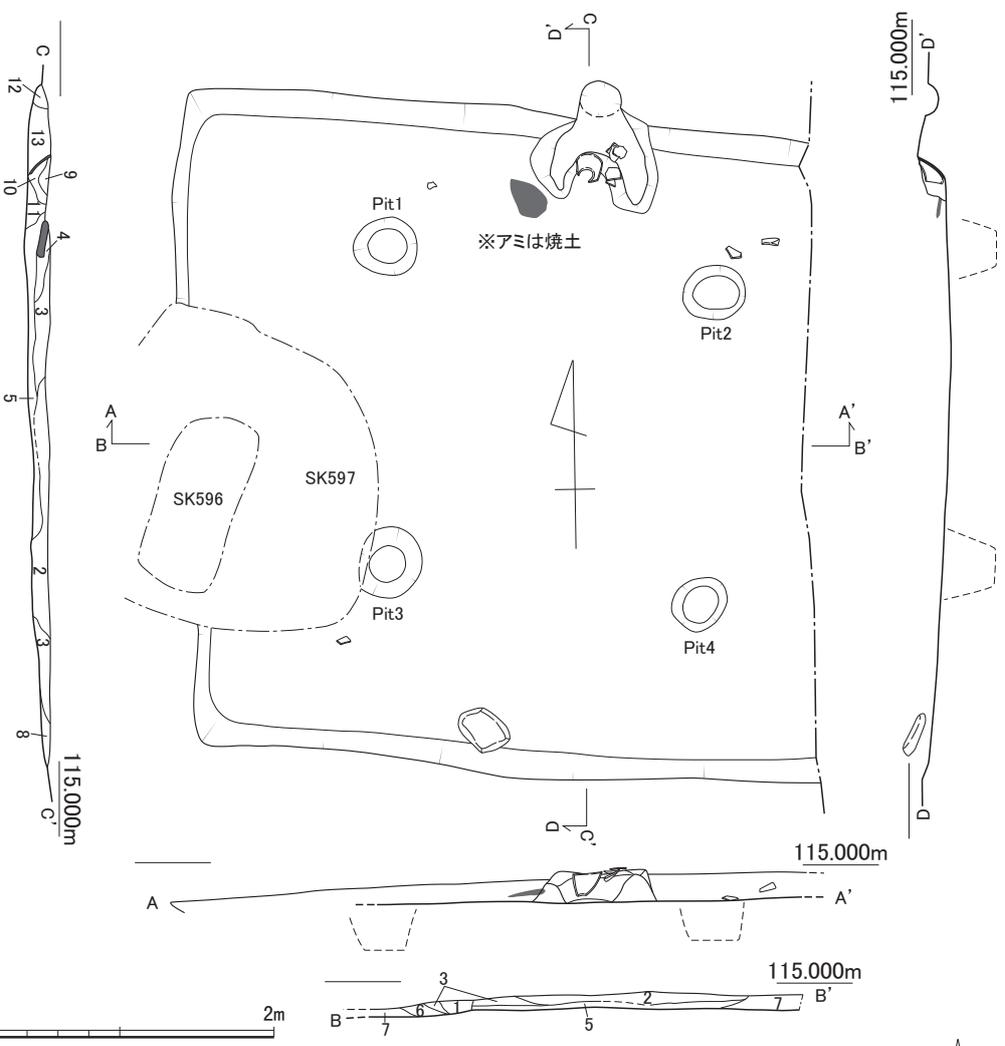
第44図 SH535 実測図 (1/50・1/30)



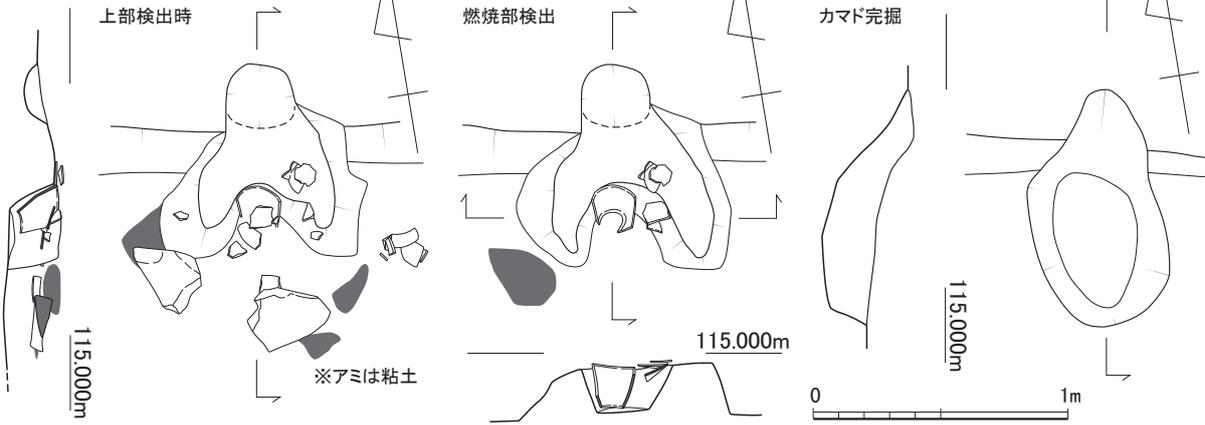
第45図 SH535 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

3.00 m、深さは最大で0.72 mを測る。床面までの埋土は5層に細分され、黒褐色土を主体として各層とも炭を含み、中央に向かってレンズ状の堆積となる。この1~4層中から、多量の土師器を主体とした遺物が出土した。土師器には甕、壺、器台、高坏といった当時の一般的な生活用具からなるが、その中でも器台や高坏の出土が多い印象である。これらの遺物は、竪穴建物廃絶後にまとめて廃棄され埋められたものである。

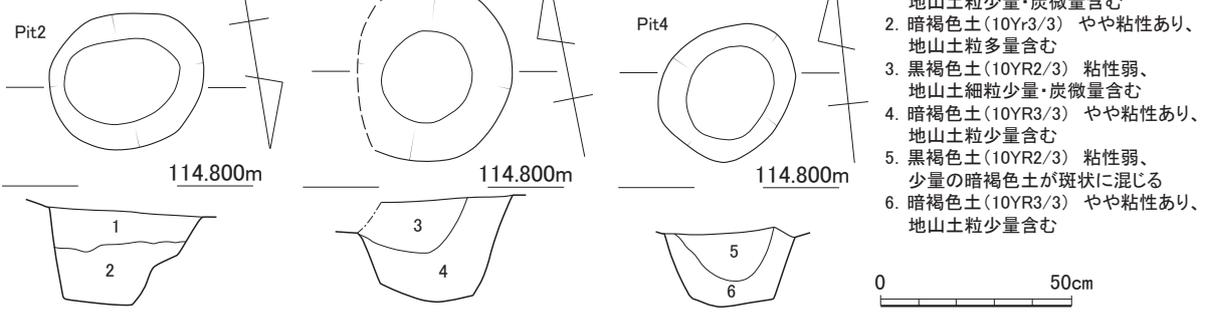
1. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱、地山土ブロック混じる
2. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土塊混じり、炭微量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土細粒少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、にぶい黄褐色粘土混じる
5. 黒褐色土(10YR2/2) やや粘性あり、地山土少量含む
6. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土が斑状に混じる
7. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱、地山土・暗褐色土が斑状に混じる
8. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土微細粒微量含む
9. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、焼土細粒含む
10. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、焼土ブロック・炭少量含む
11. 赤褐色土(5YR4/6) 粘性弱、焼土に黒褐色土が混じる
12. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、焼土細粒微量含む
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性あり硬く締まる(袖部構築材)



カマド詳細図

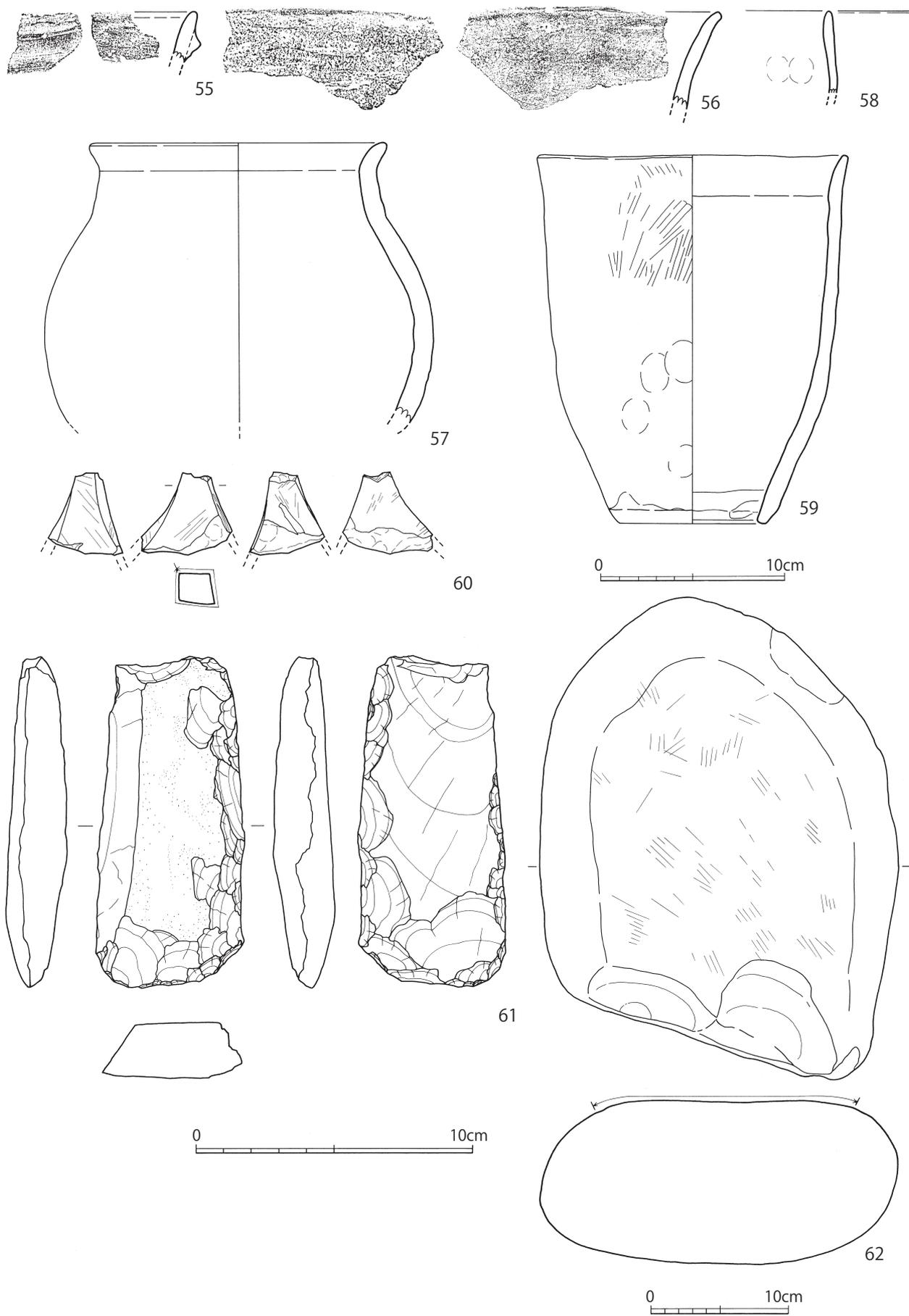


Pit個別図



1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土粒少量・炭微量含む
2. 暗褐色土(10Yr3/3) やや粘性あり、地山土粒多量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土細粒少量・炭微量含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) やや粘性あり、地山土粒少量含む
5. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、少量の暗褐色土が斑状に混じる
6. 暗褐色土(10YR3/3) やや粘性あり、地山土粒少量含む

第46図 SH536実測図 (1/50・1/30・1/20)



第 47 图 SH536 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2 · 1/4)

さて、検出した遺物群は出土状況を記録しながら掘り下げ、床面の検出を行ったところ、北東隅部では黄褐色ローム質土の地山層があらわれたが、中央から南西側にかけては黒褐色土ブロックや黄褐色土ブロックの混じった暗褐色粘土の貼床層が面的に確認され、さらに南壁沿いには貼床面上で薄いながらも焼土の広がり認められた。貼床面上の遺構は、中央部に炉跡とみられる土坑があり、北及び西側の壁際には細長い溝状遺構が検出された。また、5基のピットを検出したが、いずれも掘り込みは浅く、支柱穴は明確ではない。この貼床面を除去して黄褐色ローム質土の地山面を全体に検出したところ、貼床面下でさらに遺構を検出できた。この面では、北側と東側中央の壁際にそれぞれ土坑があり、中央の南北には深さ0.35～0.45 mの規模を持つ2基の支柱穴を検出した。その他4基の小ピットが見られたが、その性格は不明である。この面が最初の遺構で、ある段階で何らかの理由で貼り床整地を施して立て直したものとみられる。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器といった土器類の他、土製品、磨製石鏃、石皿、鉄刀子等が出土している。出土した土器から、本竪穴の帰属時期は古墳時代前期後半に位置付けられる。

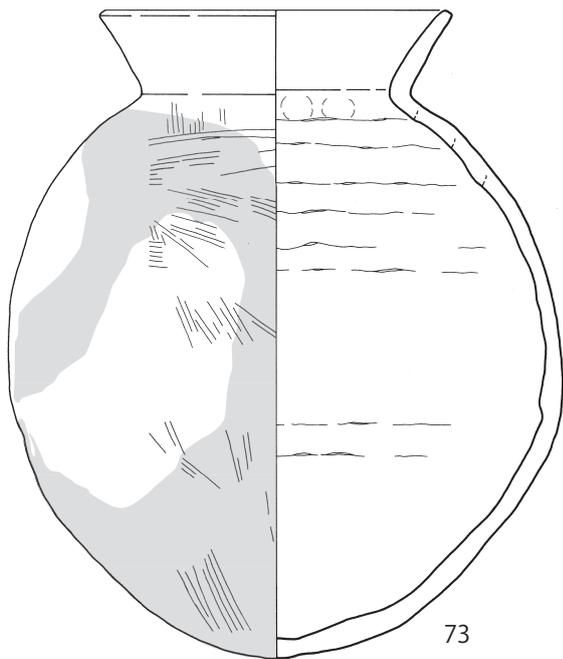
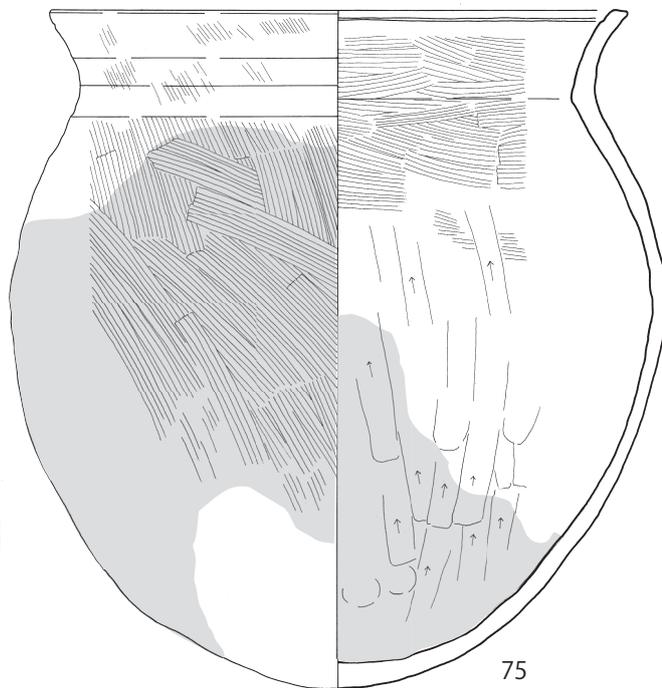
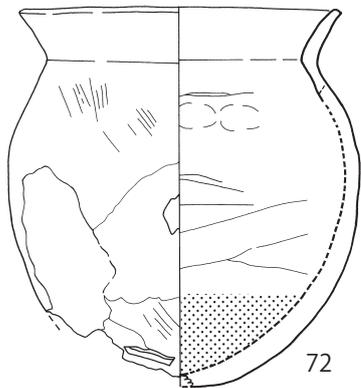
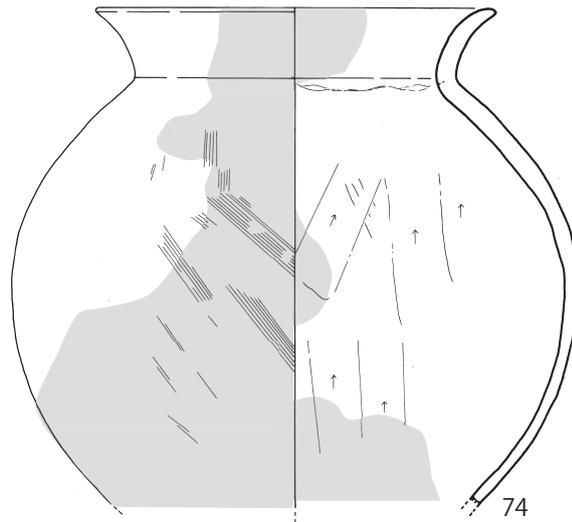
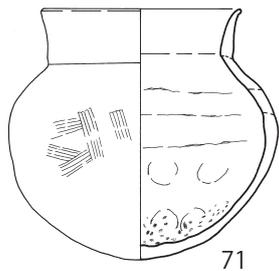
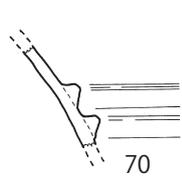
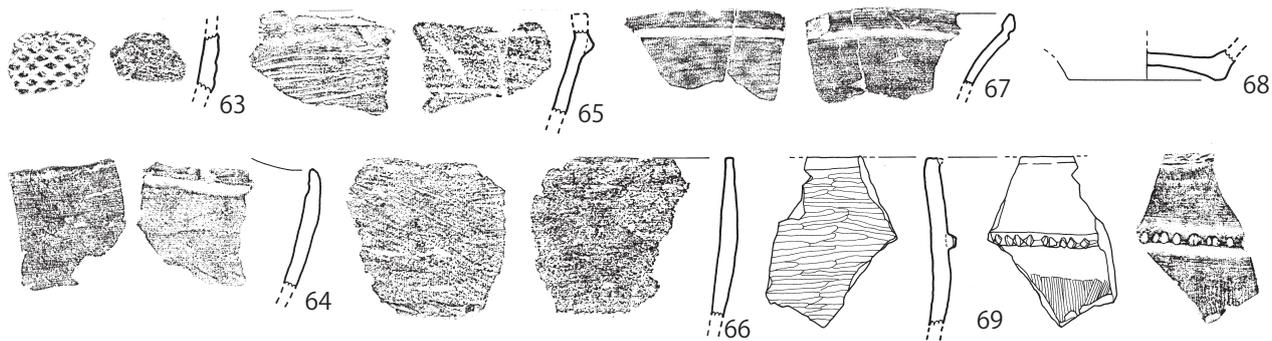
SH620出土遺物（第56～58図）

100～104は縄文土器である。100は波状口縁を呈する無文の深鉢で、内面口縁部下に1条の沈線を施す。101は頸部に2条の横位沈線を施す。これらは後期後葉に位置付けられる。102は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、凸帯の位置はやや下に下がっている。103・104は浅鉢で、103は口縁部に鱗状の突起が付く。104は鍵状口縁を呈し、壁面には補修孔を穿つ。これらは晩期後葉に比定される。105～109は弥生土器である、105は外面口縁下に1条の刻目凸帯を貼り付ける甕で、中期の下城式土器に比定される。106は甕で、外面に1条の凸帯を貼り付け、器面には粗いミガキを施す。107・108は壺で、外反する口縁の端部を上方に拡張し、外面に鋸歯状の刻みを、上面に円形浮文を施す。これらは後期初頭頃に位置付けられる。109は高坏の脚部で、両端がカットされていることから透かし部の破片である。

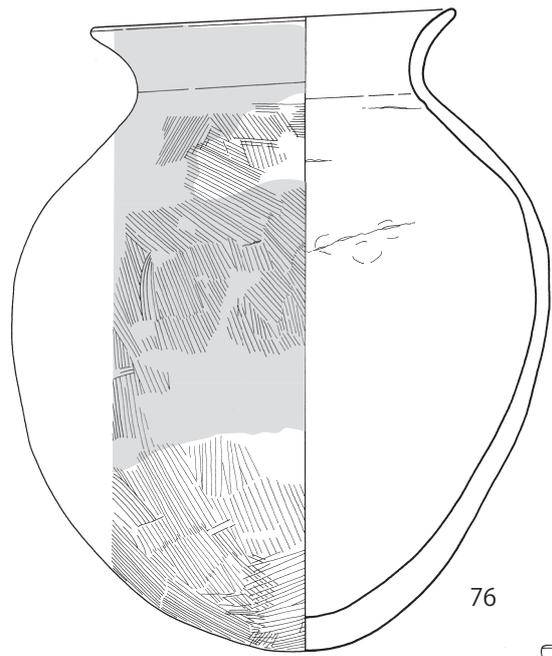
110～124は土師器で、このうち110～114は甕である。110・111は口縁部が外反し、頸部で屈曲して胴部が球状に膨らむ。110は外面に煤の付着が顕著に認められる。112・113は器壁がやや厚手で、胴部の膨らみは緩く寸胴形に近い形状を呈し、底部は平底気味となる。114は丸底の底部で、底面に1条の線刻が見られる。器形としては前者の形態をとるものであろう。115は口縁部を欠くが小型丸底壺であろう。内面の底部やや上に何らかの集中した粒状の圧痕が残る。116は鉢で、口縁部は緩い波状を呈する。117は器台で、脚部と受け部で同じような器形のを合わせたような形態をとる。118は厚手の器壁を有し、口縁部は緩く内湾するもので、これも器台であろうか。外面には粗いハケ目調整を施す。119・120は器台の脚部か。119は粗い調整で、118のようなもの、120は117のような器形のものにそれぞれ対応するとみられる。121～124は高坏である。121は坏部が頸部で折れて口縁部が外反し、脚部は下部で強く屈曲し裾部が広がる。坏部と脚部は円盤充填により接合する。122・123は坏部で、121と同様の形態をとる。脚部の接合はやはり円盤充填である。124は脚部で、裾部の広がりはない。坏部との接合部は中空であるが、ラッパ状に広がっており、これも円盤充填によるとみられる。125は土器片を転用し、半円形状に加工した土製品である。126は鉄刀子で、茎部あたりに一部木質が残存する。127は磨製石鏃で、基部は浅く凹み、先端部を欠失する。石材は粘板岩である。128は安山岩製の石皿で、上下両方の平坦面を使用面とする。長さ31.2 cm、幅36.5 cm、重さ1200 gを測る。西辺壁際の中央付近の上層から出土した。

SK604（第59図）

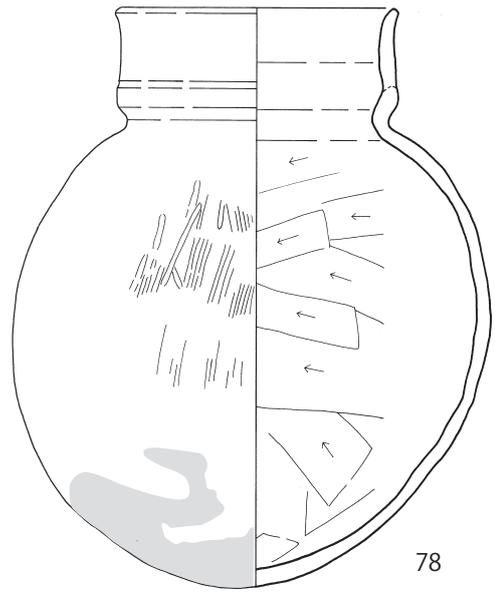
1区の南西隅部近く、D-4グリッドで検出した土坑である。弥生時代の竪穴建物SH667埋没後に穿たれたもので、平面形状は略円形を呈し、長径0.90 m、短径0.76 m、深さ0.17 mを測る。土坑中央部の検出面から土師器甕の底部片が出土している。埋土は3層に分層され、第2・3層により土坑埋没後に第1層が掘り込まれ、この層の上部に先述の土師器甕が乗っていることから、第1層はこの甕を埋置するために掘られたものであることが分かる。遺物は他に弥生土器の小片が出土している。出土土器から遺構の年代は古墳時代前期後半に比定される。



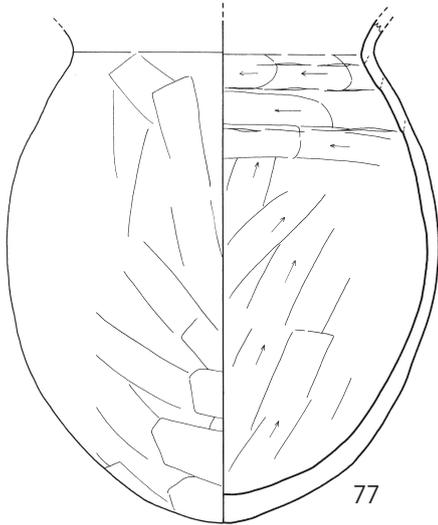
第 49 图 SH537 出土遺物実測図① (1/3)



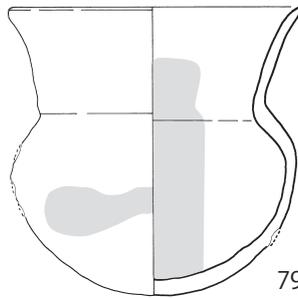
76



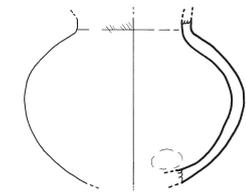
78



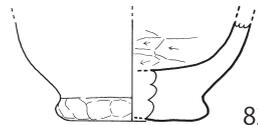
77



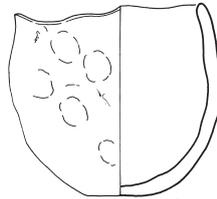
79



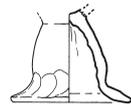
80



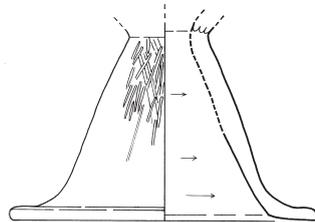
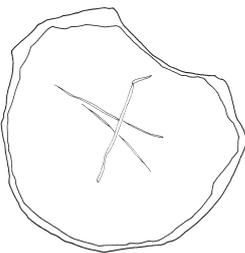
82



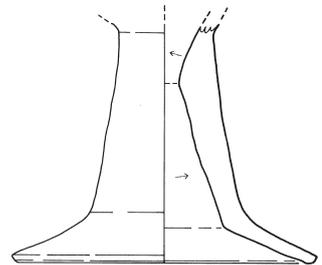
81



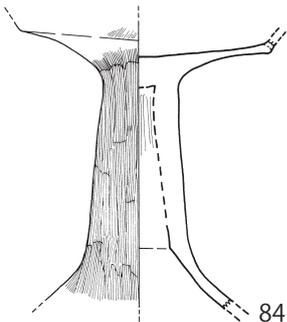
83



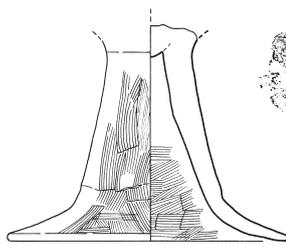
86



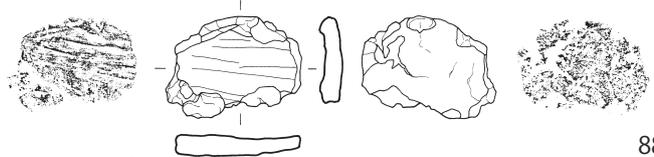
87



84



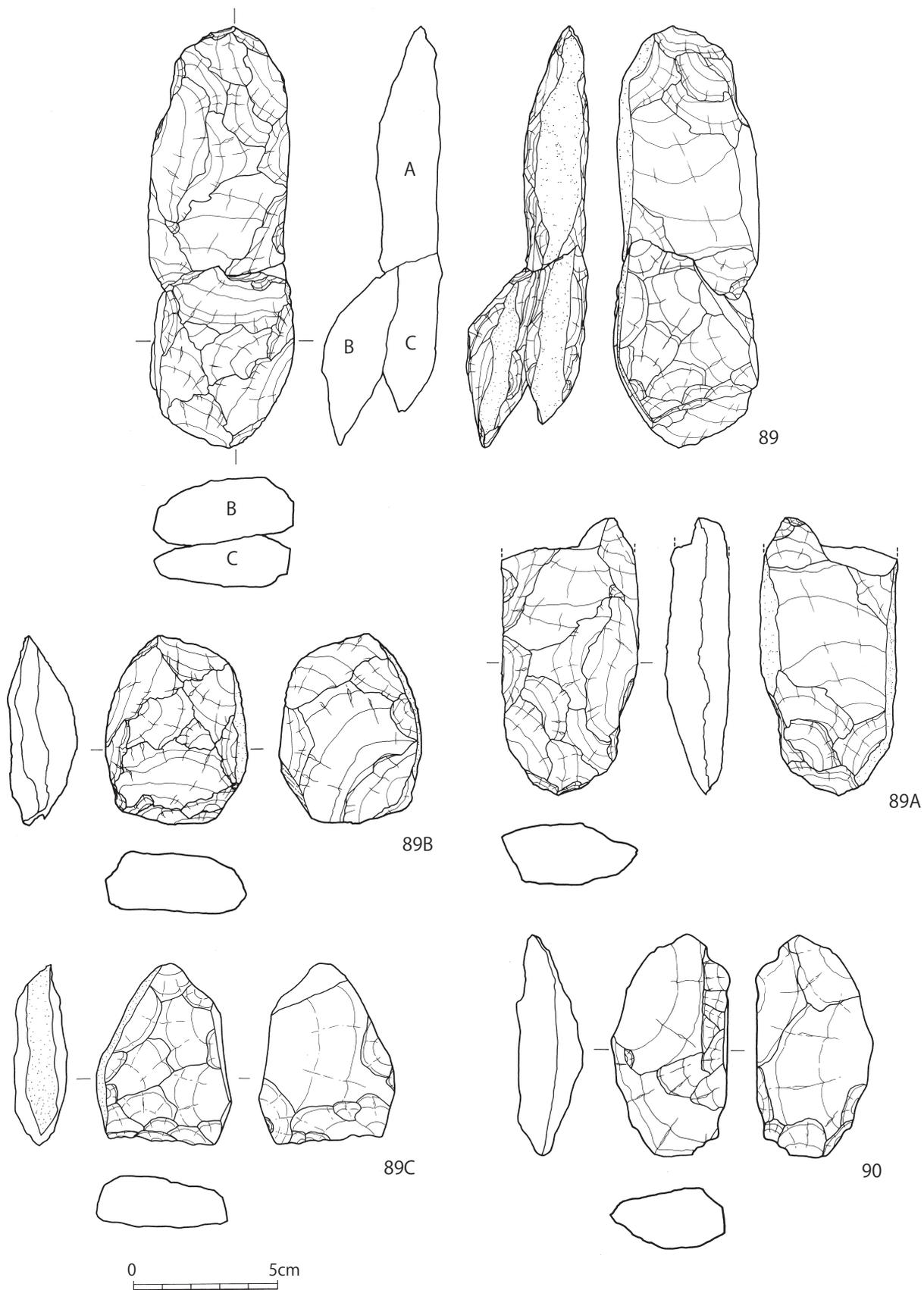
85



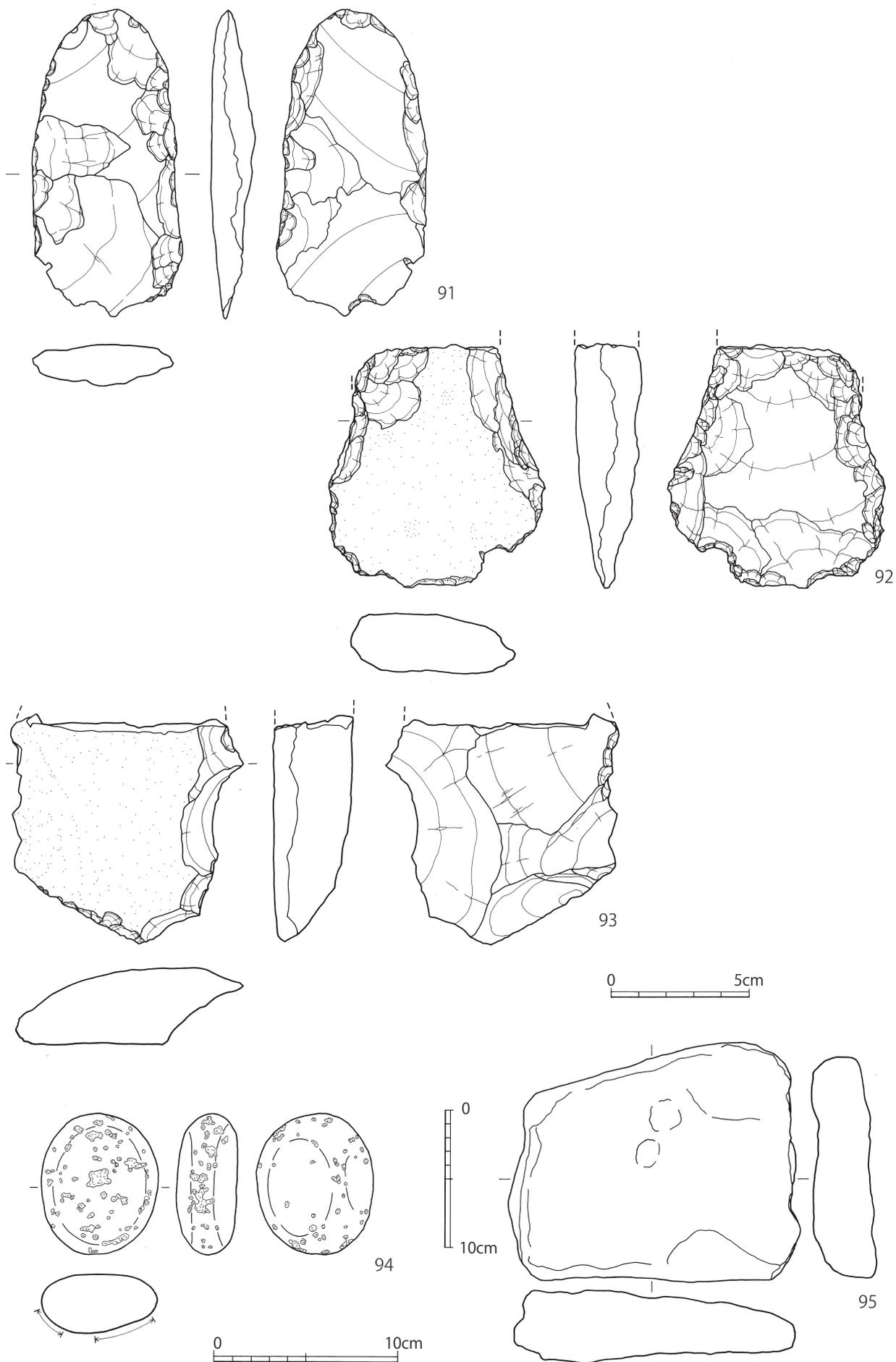
88



第50图 SH537 出土遗物实测图② (1/3)



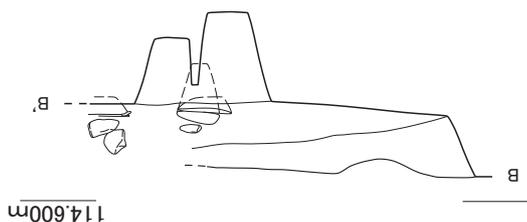
第 51 图 SH537 出土遺物実測図③ (1/2)



第 52 図 SH537 出土遺物実測図④ (1/2・1/3・1/4)

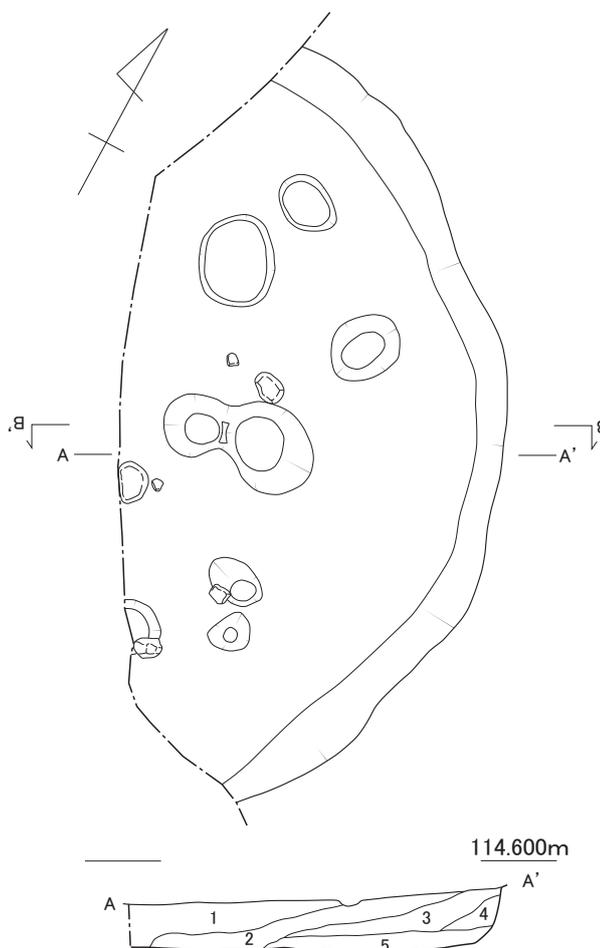
SK604出土遺物（第60図）

129 は弥生土器である。内傾する口縁の外端に刻みを、口縁からやや下がった位置に刻目凸帯を貼り付ける甕で、中期の下城式土器に比定される。130 は土師器の甕で、胴部は球状に膨らみ、底部は平底気味の丸底を呈する。先述のとおりSK604の中央部検出面から出土したもので、土層から何らかの目的で埋置されたものとみられる。



SK612（第61図）

1 区の南端部中央、E-5 グリッドで検出した土坑である。南半部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形状を呈し、検出した範囲で長辺 2.06 m、短辺 1.16 m 以上、深さ 0.29 m を測る。内部は逆台形状の掘り込みを呈し、掘り込み角度は緩く、底面はほぼ平坦である。遺物は縄文土器の他、土器片を加工した土製品が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、埋土の色相や遺物から弥生時代以降に位置づける。



1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、炭・黄色地山土粒微量含む
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、炭・黄色地山土粒微量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黄色地山土微細粒少量、炭微量含む
4. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黄色地山土ブロック少量含む
5. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黄色地山土粒多量含む



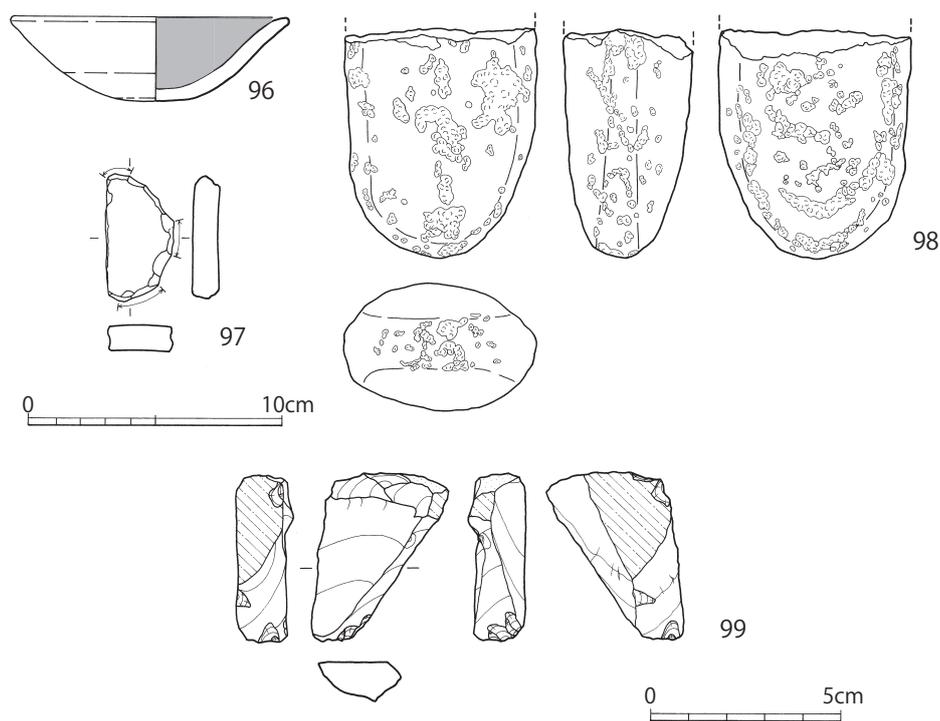
第 53 図 SH610 実測図 (1/50)

SK612出土遺物（第62図）

131 は縄文土器深鉢の底部である。底面周縁部が接地し、底面は凹む上げ底形態となる。132 は土器片を転用し半円形状に加工した土製品である。

SK674（第63図）

1 区の西部中央、C-4 グリッドで検出した土坑である。西端部は中世の落ち込み状遺構SX556Bに、南辺の一部はピットSP650に切られている。平面形状は東西に長い楕円形状を呈すると見られ、長径 1.56 m 以上、短径 1.11 m、深さ 0.18 m を測る。内部は皿状の浅い掘り込みで、床面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器、土師器が出土しているが、その量は少なく小片が多い。土師器の出土から、古墳時代の遺構と推定する。



第 54 図 SH610 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SK674出土遺物 (第64図)

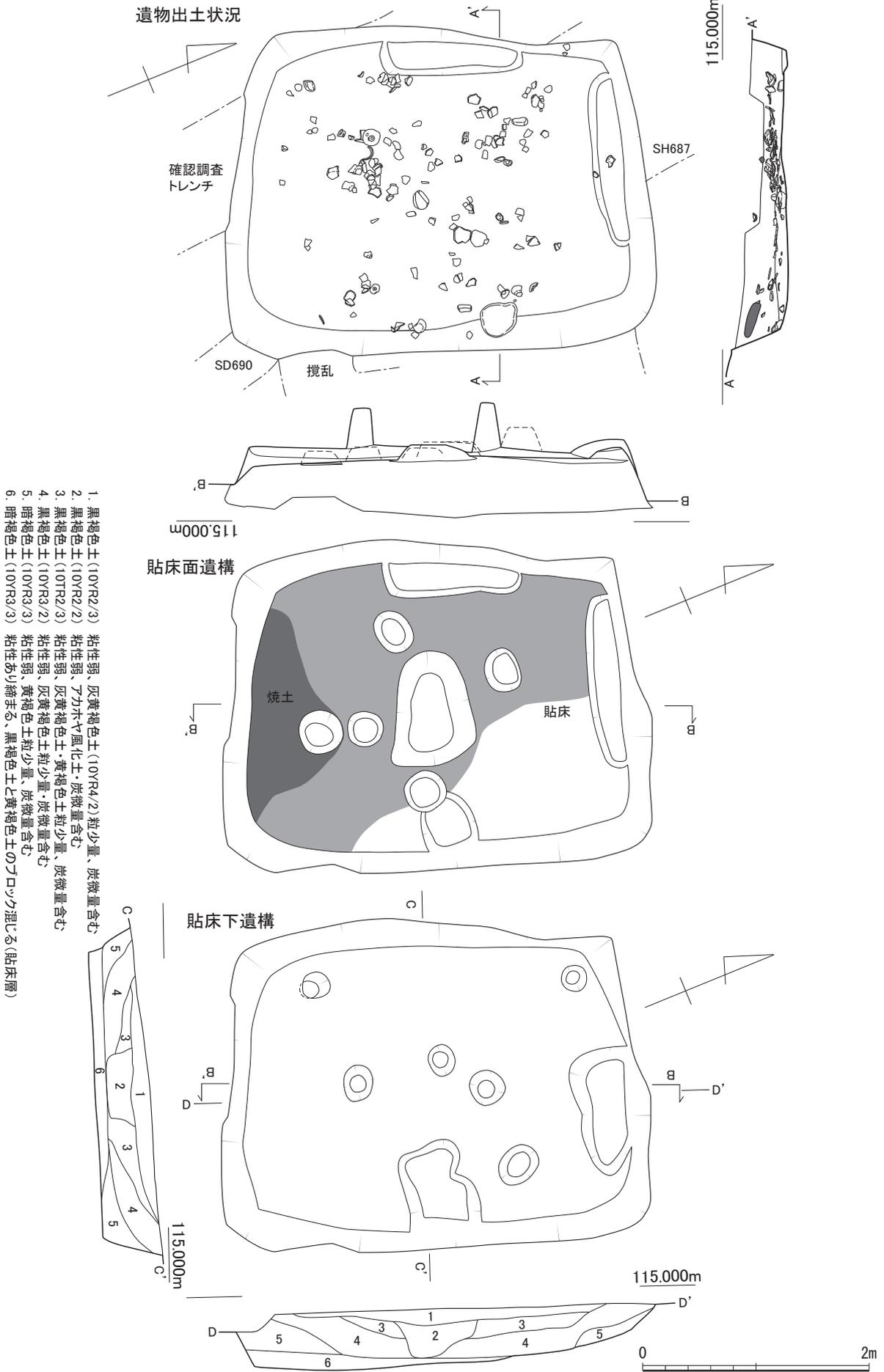
133 は弥生土器の壺か。肩部に断面台形状の横位凸帯を巡らせる。

SD558 (第65図)

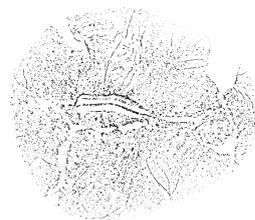
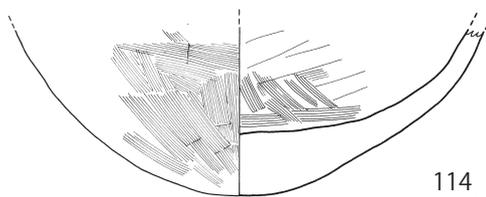
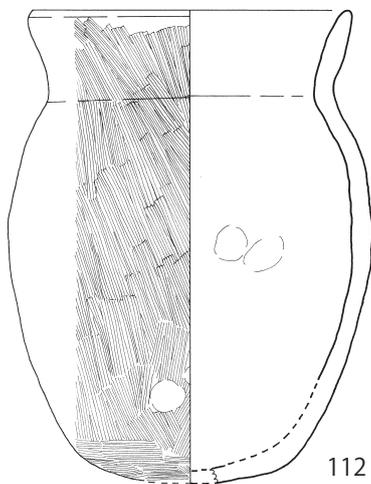
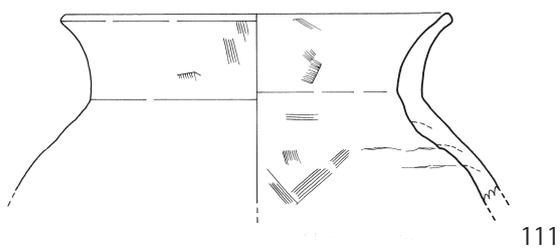
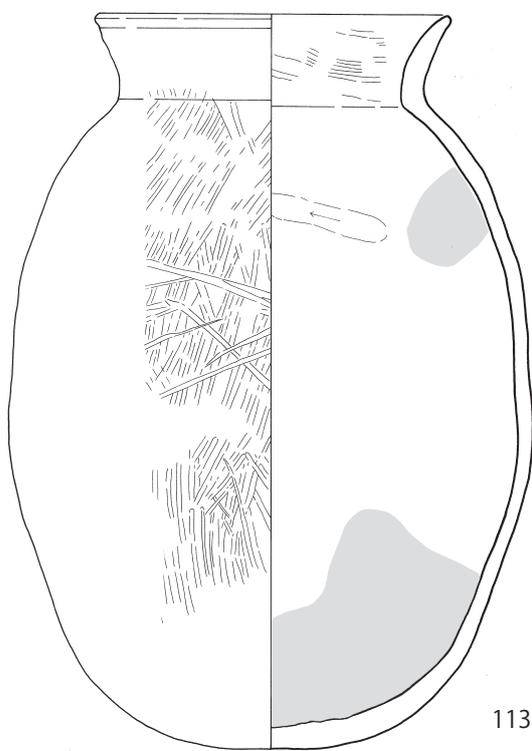
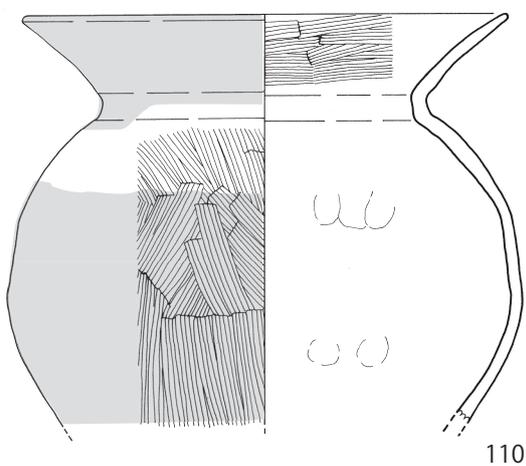
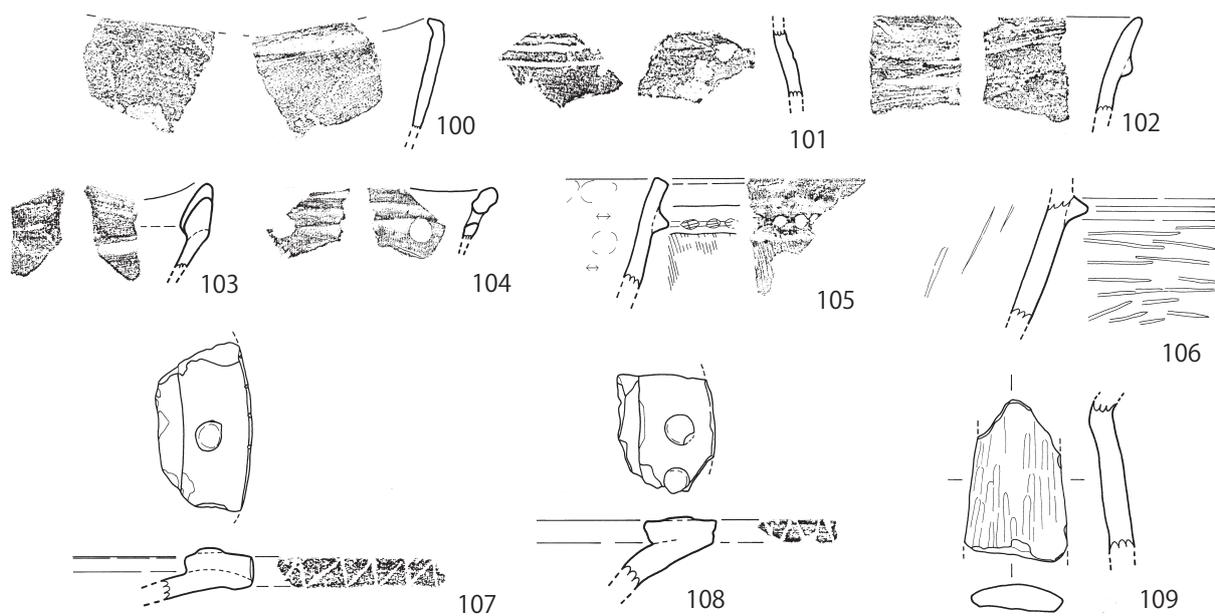
1 区の北西部、B-5・C-4・C-5 グリッドで検出した溝状遺構である。西半部は調査区外に続くため全容は明らかにできないが、隅丸方形状に何かを圍繞するように掘られている。検出した範囲で、溝で区画される範囲の長辺は 5.46 m、短辺 3.15 m 以上、溝の幅は 0.53~0.99 m を測る。周溝墓や、何らかの施設の区画の可能性を考えたが、区画の内側には 3 基の土坑 SK823・SK824・SK575 を検出したものの、これら土坑と溝との関係は明らかではなく、また年代的に同時共存するものかも判断がつかなかった。従って遺構の性格は不明ながら、何らかの区画のために掘られたものと考えたい。遺物は縄文土器、石器の他に土師器の小片が出土している。縄文土器は早期の押型土器を含む。全体として押型土器の出土は少ないが、その中でも SK651 を含めこの周辺で押型土器が比較的出土している傾向があり、このエリアが早期の活動の場であった可能性を示す。遺物は縄文時代のものが目立つが、図示していないものの土師器の小片が出土していること、色相が縄文時代の遺構とは異なる点を勘案し、古墳時代の遺構と判断する。

SD558出土遺物 (第66図)

134・135 は縄文時代早期の押型土器である。134 は外面及び内面の口縁部に接して横位の楕円文を回転施文する。135 は外面に楕円文を施し、内面は無文である。136 は縄文土器の胴部片で、器壁が厚手のナゲ調整無文土器であり、早期の無文土器の可能性はある。137 は後期後葉~晩期の無文土器深鉢で、胴部中位の屈曲部から内傾しながら立ち上がる肩部の破片である。138 はチャートを素材とする二次加工剥片で、側辺下方及び下辺に微細な剥離痕が残る。

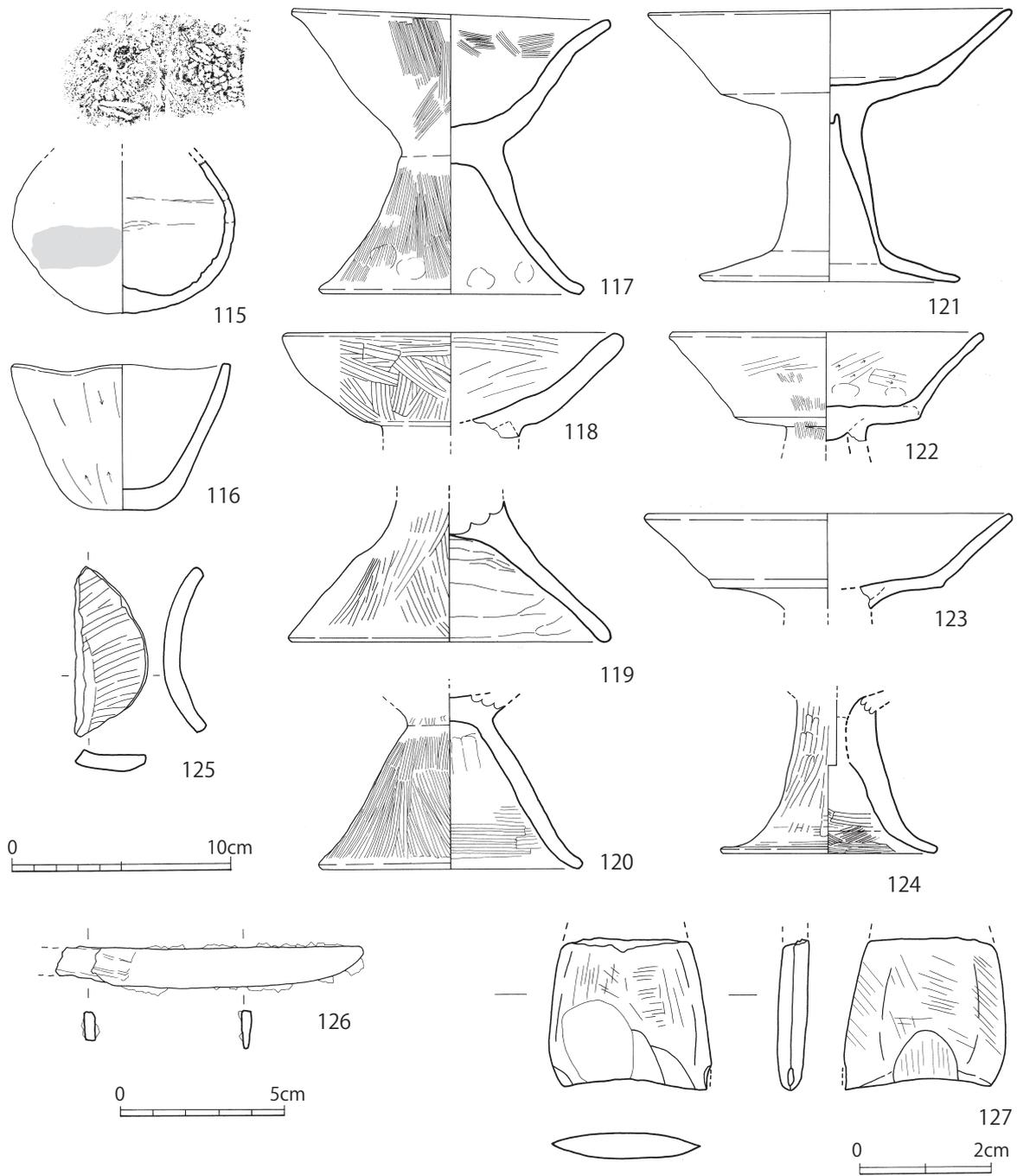


第 55 図 SH620 実測図 (1/50)



0 10cm

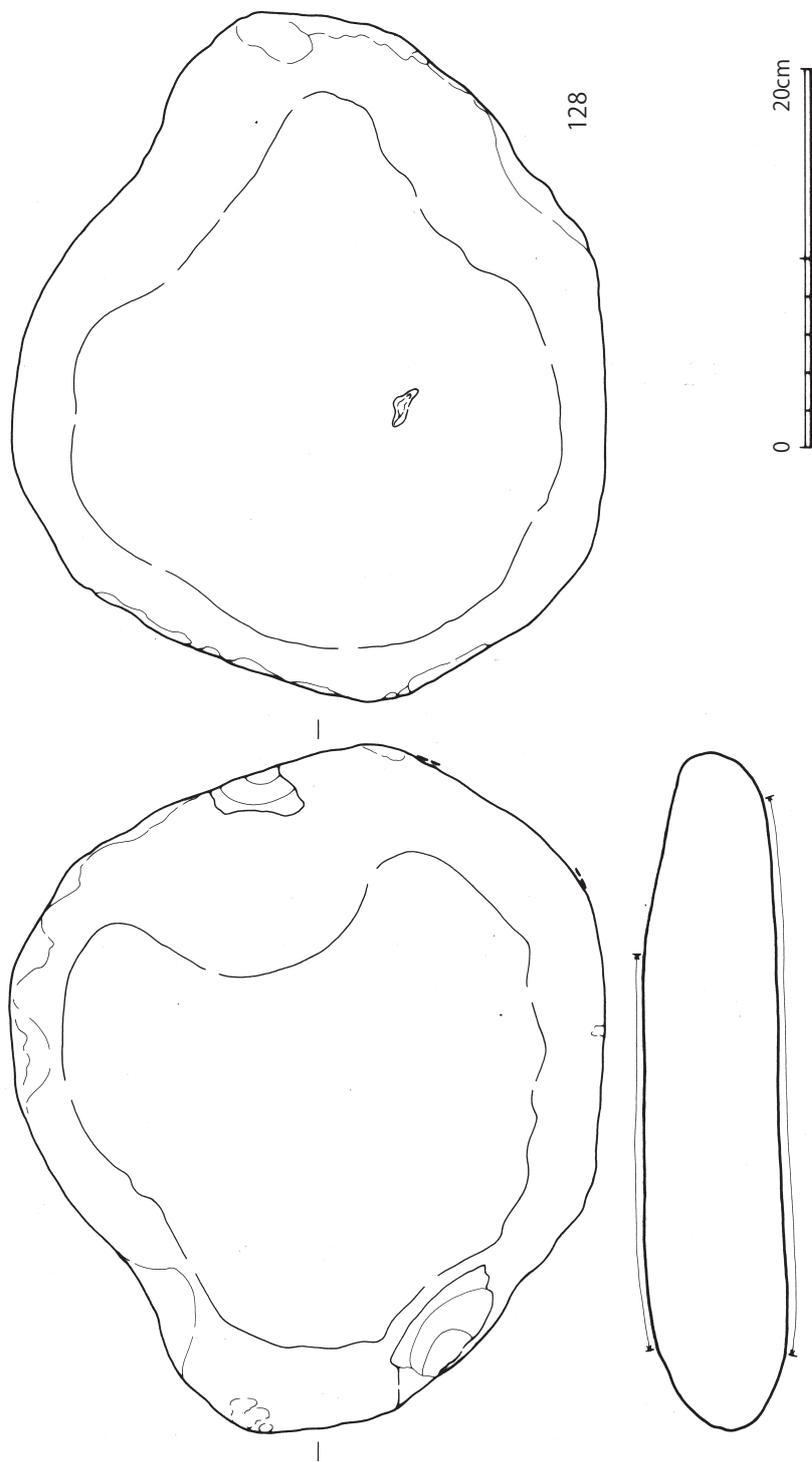
第56图 SH620出土遺物実測図①(1/3)



第57図 SH620 出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)

第5節 古代・中世の遺構と遺物

古代・中世の遺構は全体的に少ない。古代の遺構は竪穴建物1棟、中世の遺構は溝状遺構SD556A及びそれに続いて調査区の南西方向へ地形に沿って続く落ち込み状遺構SX556B、落ち込み状遺構SX619がある。また柵列としたSA1も、年代は不明ながらここに含めて報告する。



第 58 图 SH620 出土遺物実測図③ (1/4)

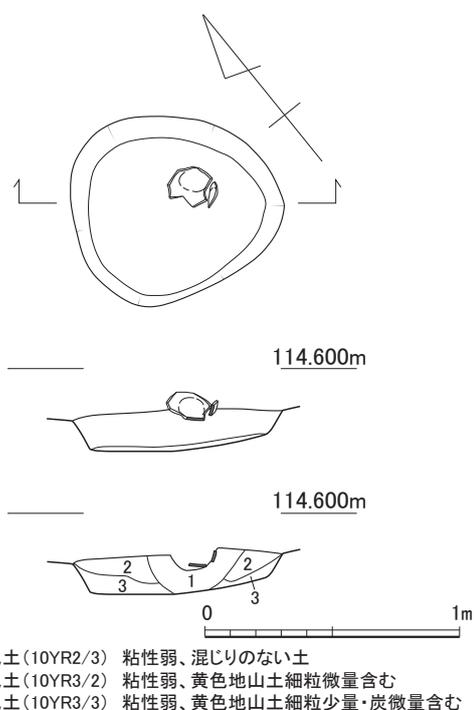
SH570 (第67図)

1区の西壁際中央、C-4・D-4グリッドで検出した竪穴建物である。検出できたのは東側の一部で大部分は調査区外に続く。平面形状は方形を呈し、長辺4.68m、短辺1.82m以上、深さ0.65mを測る。東辺の中央には竈が付属する。上田原東遺跡では竈の付属する竪穴建物を7棟確認しており、その多くは北側に竈が付されるが、東側に付くのはこのSH570だけである。

この竈については、SH570の上位に堆積していた中世の落ち込み状遺構SX556Bの深さを確認する目的でトレンチを設定し、地山まで掘り下げる過程で、安山岩の扁平な板石と、その下で完形に近い土師器甕と焼土のまとまりを確認した。土師器のそばには、方柱状の凝灰岩と、その両端に石材が立てられていた。さらにその周囲には黄白色の粘土が混じった層が認められたため、火を焚き、土器を用いた祭祀を行った後に何かを封じた祭祀行為、あるいは火葬墓の可能性を考え、まだ竪穴建物のプランを検出していなかったため竈とは認識せずに不用意に掘り下げてしまった。掘り下げを進める中で、床面で耳環1点が出土したことから、火葬墓とするには土器と年代が合わない点は気になりつつも墓の副葬品の可能性を考えてさらに掘り進めてしまい、竈であるとの認識に至ったのはほぼ完掘に近い状態になってからであった。従って竈の構造を正確に記録できなかったのは悔やまれる点である。

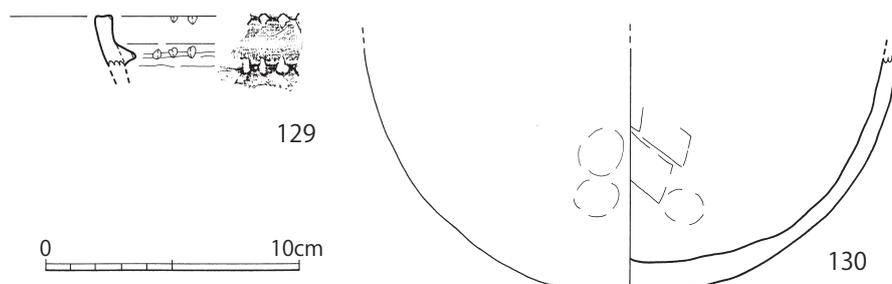
竈の構造と、廃絶寺の状況は次のように復元される。東壁の中央に逆U字状に黄白色粘土を積み上げて袖部を構築し、その稜線端に袖石となる立石を配している。その上に角柱状の凝灰岩を乗せて天井部とし、袖部との隙間に土器を置いて下から火を焚いて使用したものとみられる。袖部に囲まれた部分は焚口で、焼土層の堆積が認められた。竈廃絶後には、凝灰岩の天井材を床面に下ろし、焚口に土師器甕1点を据えた後に袖部を崩して埋めた後、安山岩の板石を乗せて封じたものとみられる。耳環は竈と関係するものかどうかは明らかではないが、位置的には袖部の下にあたる。竈を構築する際に意図的に置かれたか、あるいは混入したものであるのかは決し難い。

竪穴部は床面が北はやや高く南側へ緩やかに傾

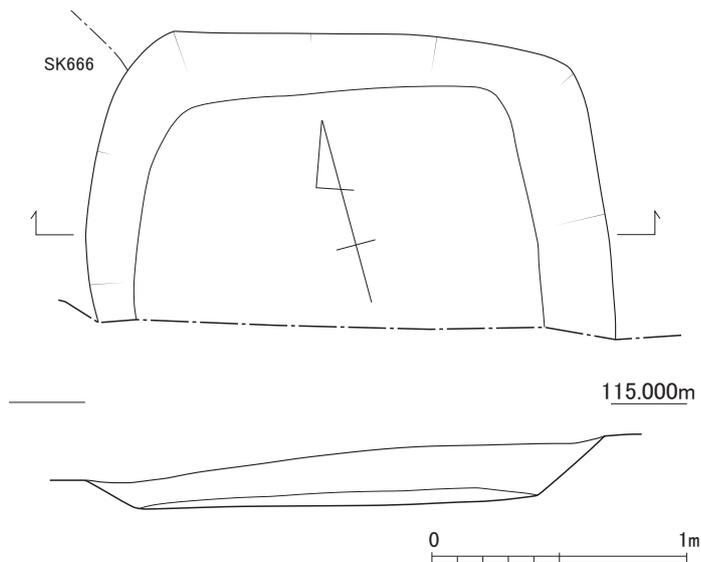


- 1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、混じりのない土
- 2. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、黄色地山土細粒微量含む
- 3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黄色地山土細粒少量・炭微量含む

第59図 SK604 実測図 (1/30)



第60図 SK604 出土遺物実測図 (1/3)

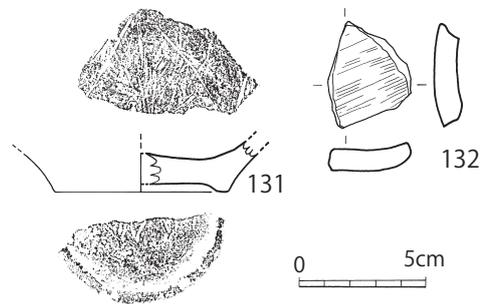


第61図 SK612 実測図 (1/30)

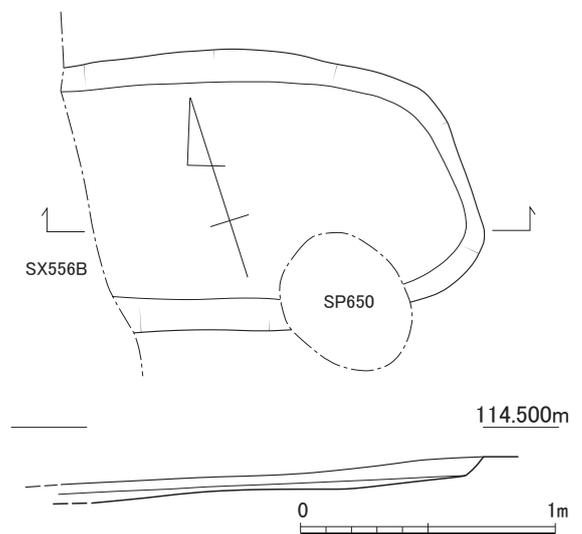
斜しており、南壁際にはテラス状の段が付く。竈と南東隅部の間で、完形の土師器や須恵器坏蓋等が置かれたような状態で出土している。床面では浅い掘り込みをいくつか検出しているが、いずれも主柱穴ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、叩石、耳環が出土している。出土した須恵器坏蓋の形状から、遺構の時期は7世紀前半に比定される。

SH570出土遺物 (第68図)

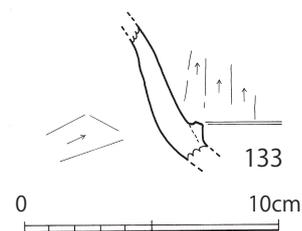
139~141は弥生土器である。139は甕で、口縁の外端部が凸帯状になり、刻みを施す。140は外面口縁部下に1条の刻目凸帯を巡らせる、下城式の甕である。141は壺形土器で、頸部~肩部に横位の凸帯を数条巡らせる。142~144は須恵器の坏蓋である。142・143は天井部が低く、口縁部は内側に短い嘴状の返しが付く。天井頂部には欠失した摘みの痕跡が残る。144は口縁部に返しがなく、天井部は丸く高さがあるもので、古墳時代後期のものである。145・146は土師器の甕である。145は口縁部が短く外反し、一端が小さな片口状となる。底部は平底気味の丸底である。146は口縁部が短く外反し、胴部が長く伸び胴の膨らみは弱い。外面には煤の付着が顕著に認められる。竈の廃絶時に焚口に据えられていたものである。147は安山岩の円礫を素材とした叩石で、上面及び下面、側面に顕著な敲打痕が残る。148は銅を芯材として表面に鍍金を施した耳環である。直径2.7cm、厚さ0.8cm、重量14.3gを測る。



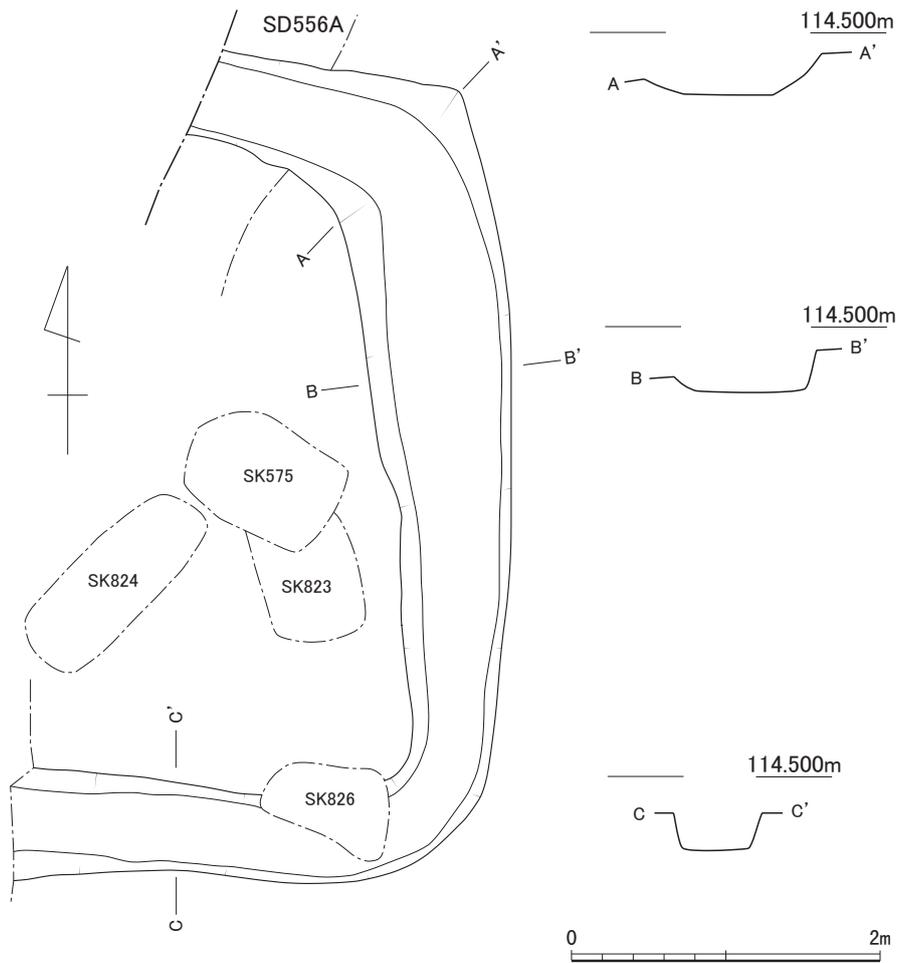
第62図 SK612 出土遺物実測図 (1/3)



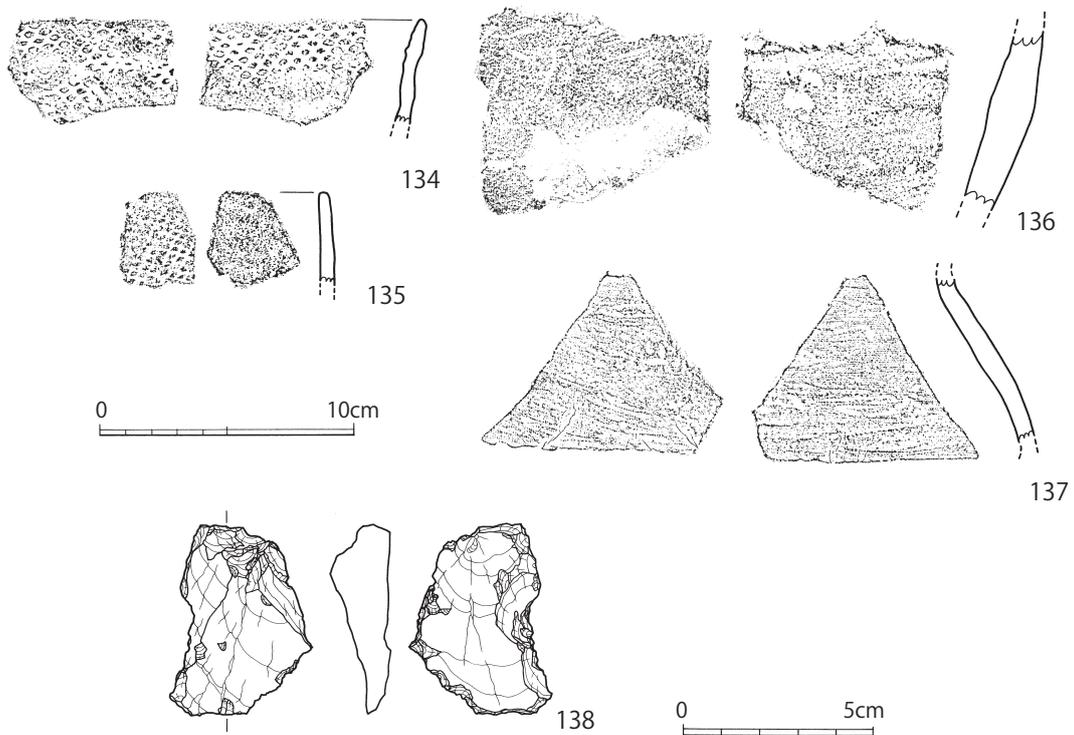
第63図 SK674 実測図 (1/30)



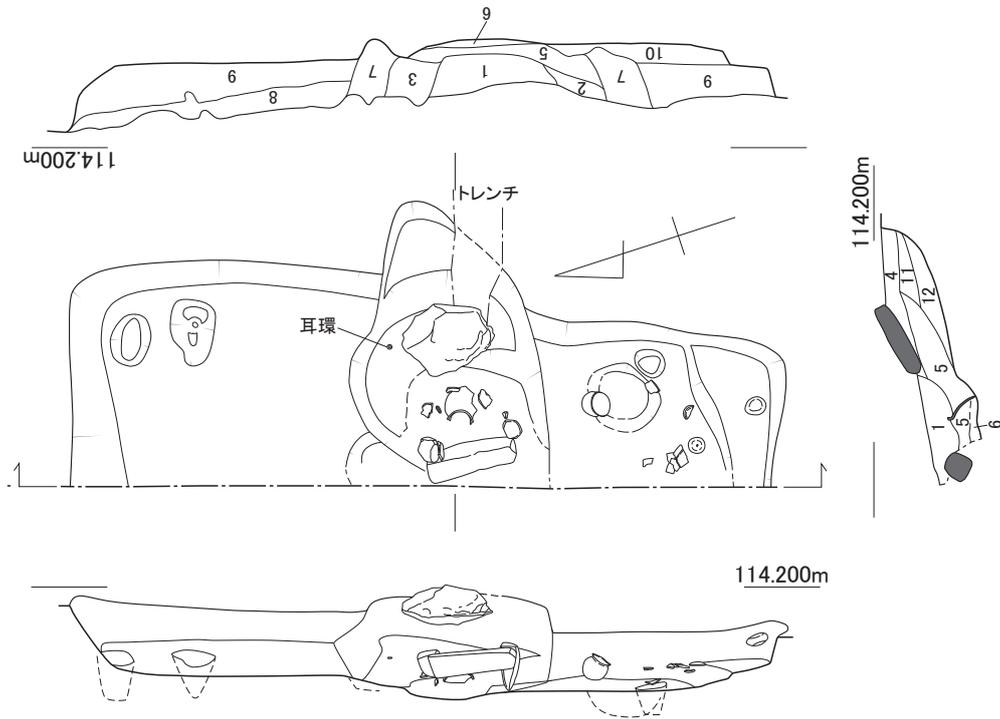
第64図 SK674 出土遺物実測図 (1/3)



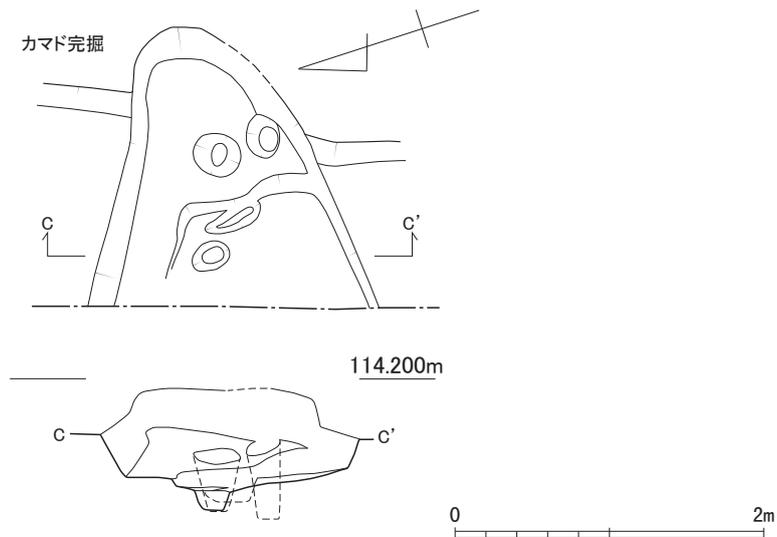
第 65 図 SD558 実測図 (1/50)



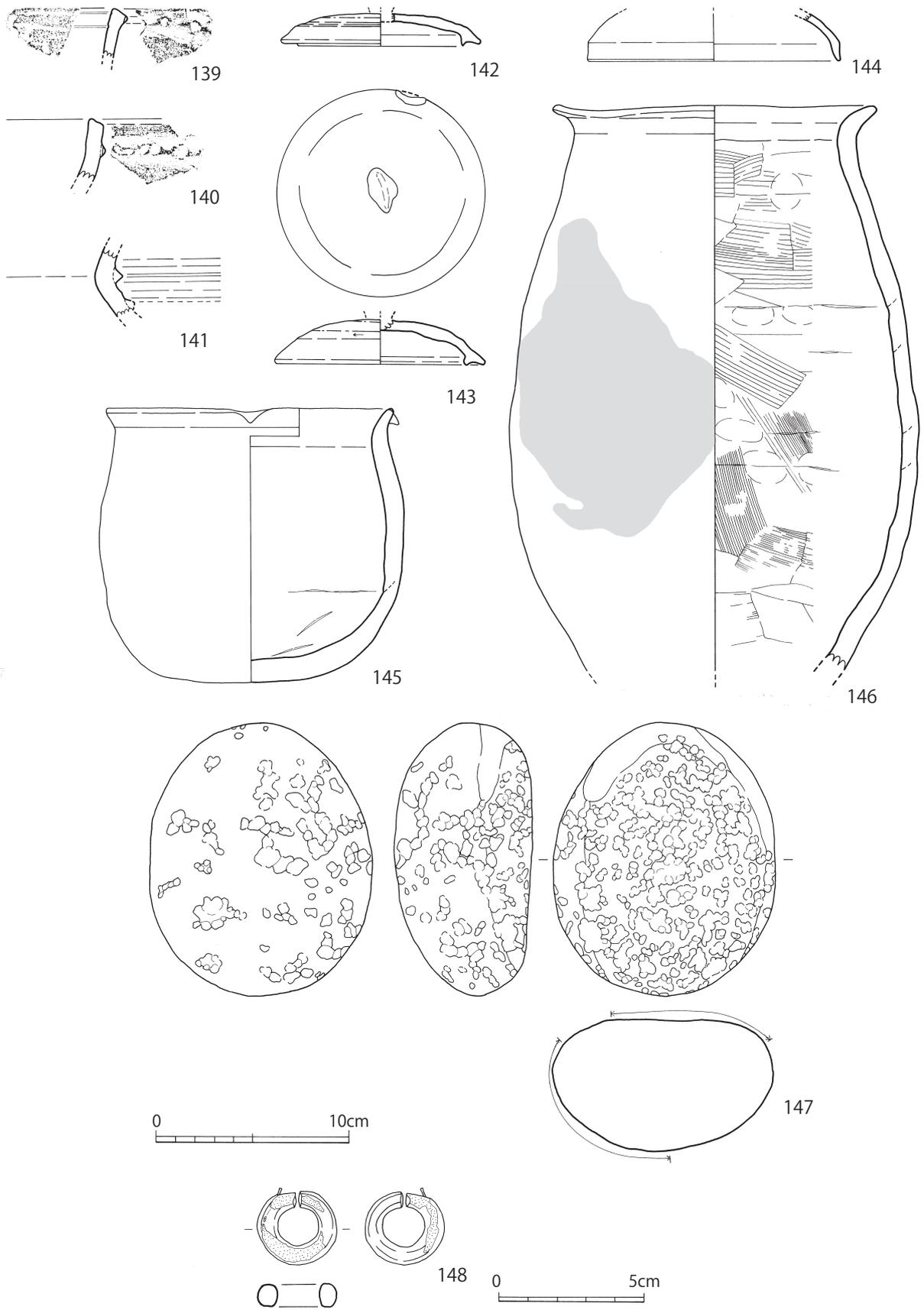
第 66 図 SD558 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



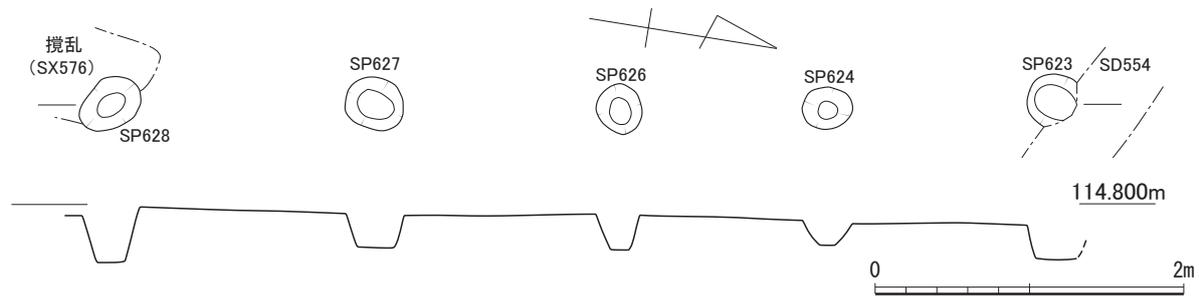
1. 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性あり締まる、黒褐色土が斑状に混じり、アカホヤ・焼土細粒を含む
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、暗褐色土塊・焼土小粒・アカホヤ細粒少量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/4) やや粘性あり、黒褐色土塊混じり、黄褐色土・アカホヤ粒少量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり締まる、にぶい黄褐色土 (10YR5/4) の粘土混じり、焼土・炭少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土ブロック・炭・黄褐色土小粒少量
6. 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土層、全体に被熱し硬化
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、暗褐色土塊・アカホヤ・黄褐色土小粒混じり、黄白色粘土小塊少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・黄褐色土小粒少量含む
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土・黄褐色土小粒混じる
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土ブロック混じる
11. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む
12. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄褐色土細粒混じる



第 67 図 SH570 実測図 (1/50)



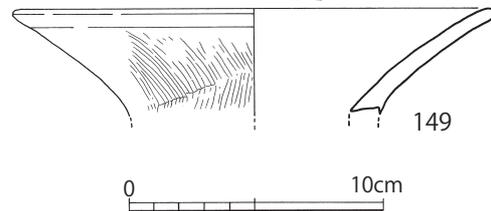
第 68 图 SH570 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



第 69 図 SA1 実測図 (1/50)

SA1 (第69図)

1 区の中央北寄り、B-5・C-5 グリッドで検出した柱穴 (柵列) である。ピット 5 基の直線的な配列を確認したため、掘立柱建物の可能性を考え周囲を慎重に精査したが、これに対応するような柱穴の展開はみられなかった。北側のピットは近世以降の溝 SD554 に切られており、これから北への展開は見られない。全長で 6.56 m、ピット間の距離は 1.35~1.75 m、ピットの深さは 0.16~0.25 m を測る。軸線は長軸方向が N-9.5°-W とやや西に振れる。出土遺物は殆どなく、南端の SP628 から土師器 1 点が出土したに過ぎない。古墳時代前期の高坏であるが、これが遺構の年代を示すものかどうかは判断が難しい。



第 70 図 SA1 出土遺物実測図 (1/3)

SA1出土遺物 (第70図)

149 は土師器高坏の坏部片である。口縁部は外に開き、中位の屈曲部から下は欠損する。器形から古墳時代前期後半に位置付けられよう。

SD556A・SX556B (第71・72図)

1 区の北端部近く、B-5・B-6 グリッドで検出した、東西方向に延びる溝 SD556A と、調査区北西壁際から調査区に沿うように南西方向へ続く、SX556B からなる。SX556B は、西端部を検出できておらず、これが SD556A のような溝状を呈するのか、あるいは地形に沿って落ち込み状となるのか不明であり、SX の遺構略号とした。

SD556A は古墳時代後期の竪穴建物 SH535 の北辺部を切っており、SH535 の北西端部辺りで鉤手状にクランクし、西壁際で南西側へ続く。溝は幅 0.80~1.74 m、深さは 0.1 m 前後と浅い。出土遺物は少ないが、土師器や石皿が出土している。

SX556B は SD556A が調査区西壁に達した所から調査区の壁沿いに南西に続き、中世の落ち込み状遺構 SX619、古代の竪穴建物 SH570、縄文時代の竪穴建物 SH662 を切り、SH662 の南西部で終端に至る。南端部付近では、東西約 0.5 m 以上、南北約 2.0 m の範囲に、10~30 cm 大の礫約 20 点がまとまった状況が認められたが、これが人為的なものか自然堆積によるものかは判断としない。調査区の西側は切り立った崖となって市道に続いており、SX556B の西側は落ちていく地形になると見られるが、この傾斜部を埋めて平地を造成するために礫や土砂を入れた可能性もある。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。土師器には古代、中世の遺物も含まれ

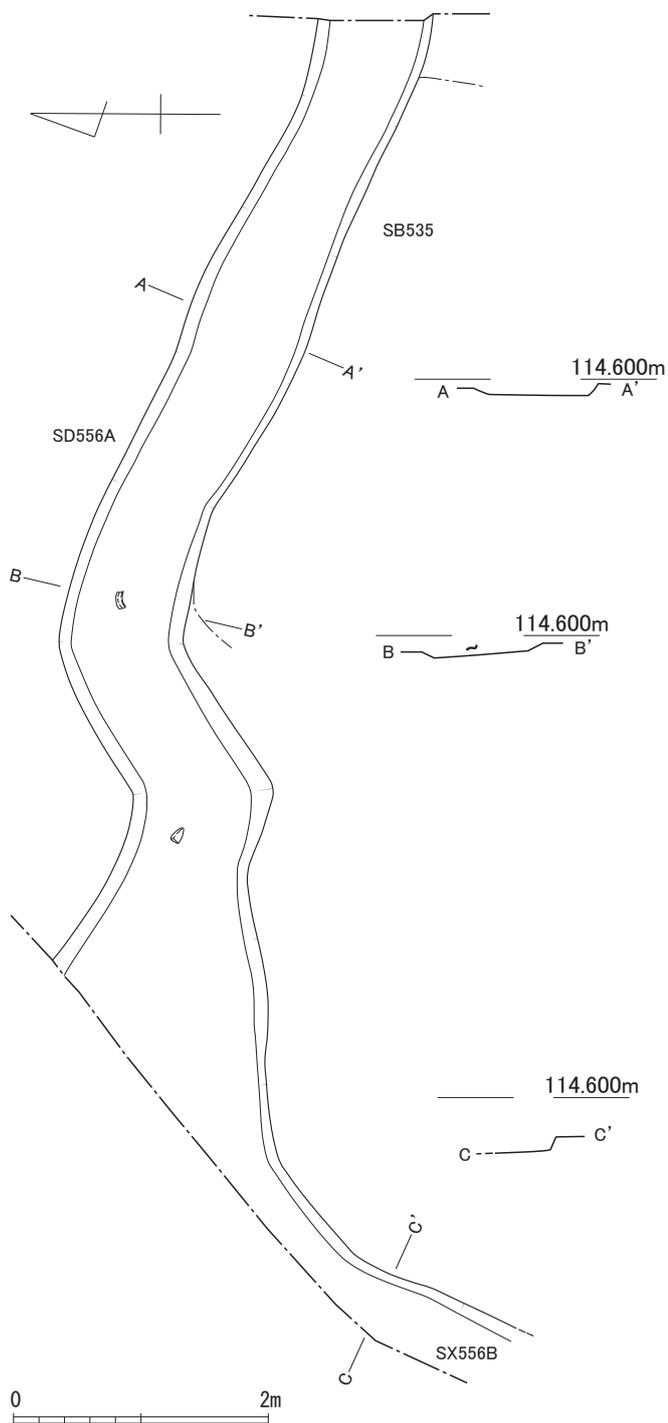
る。埋土はSD556A・SX556Bともに共通するため、両遺構は同時期に存在したものである可能性は高い。中世土器の出土や、中世のSX619を切ることから、SD556A・SX556Bともに中世の遺構と判断される。

SD556A・SX556B出土遺物（第73図）

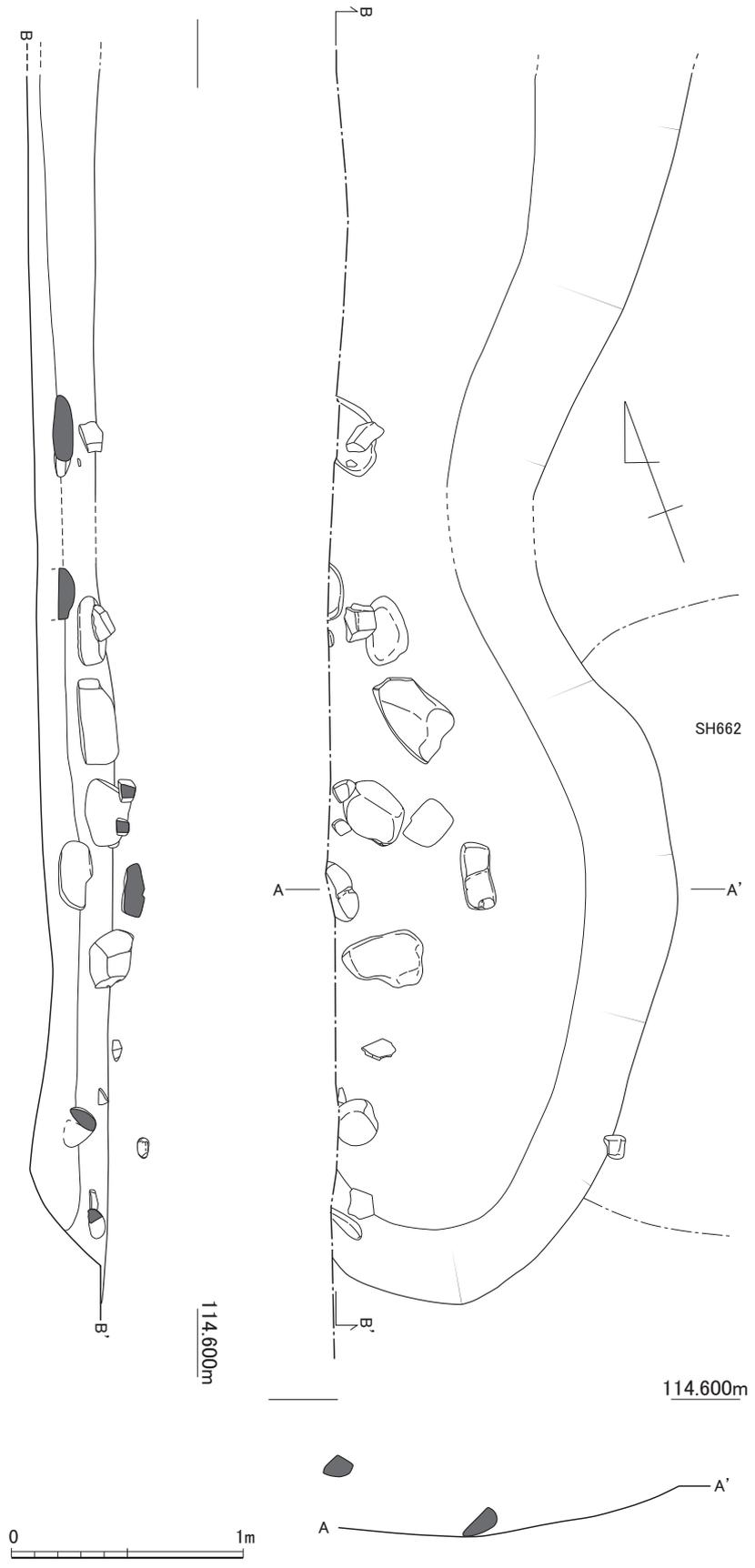
150・151は縄文土器であるどちらも外面口縁部下に1条の無刻み目凸帯を貼り付けるもので、150は凸帯の断面形状が台形状を呈する。晩期後葉の上菅生B式土器に比定される。152は弥生土器の甕で、外面口縁下に1条の刻み目帯を配し、口縁部外端部に刻みを施す。中期の下城式土器に比定される。153は土師器の甕で、口縁部の外反は弱く直口状となり、頸部の屈曲も弱い。古墳時代後期の所産である。154は土師器の高台付き椀で、底部に断面逆台形状の高台を貼り付け、外面には粗いミガキを施す特徴から古代に位置付けられる。155は土器片を転用し、周縁を加工して半円形状に整形した土製品である。156は円礫を用いた投弾か。157は磨石で、石材は安山岩である。158・159は石皿ないしは台石で、いずれも上面を使用面とし粗い擦痕が認められる。

SX619（第74図）

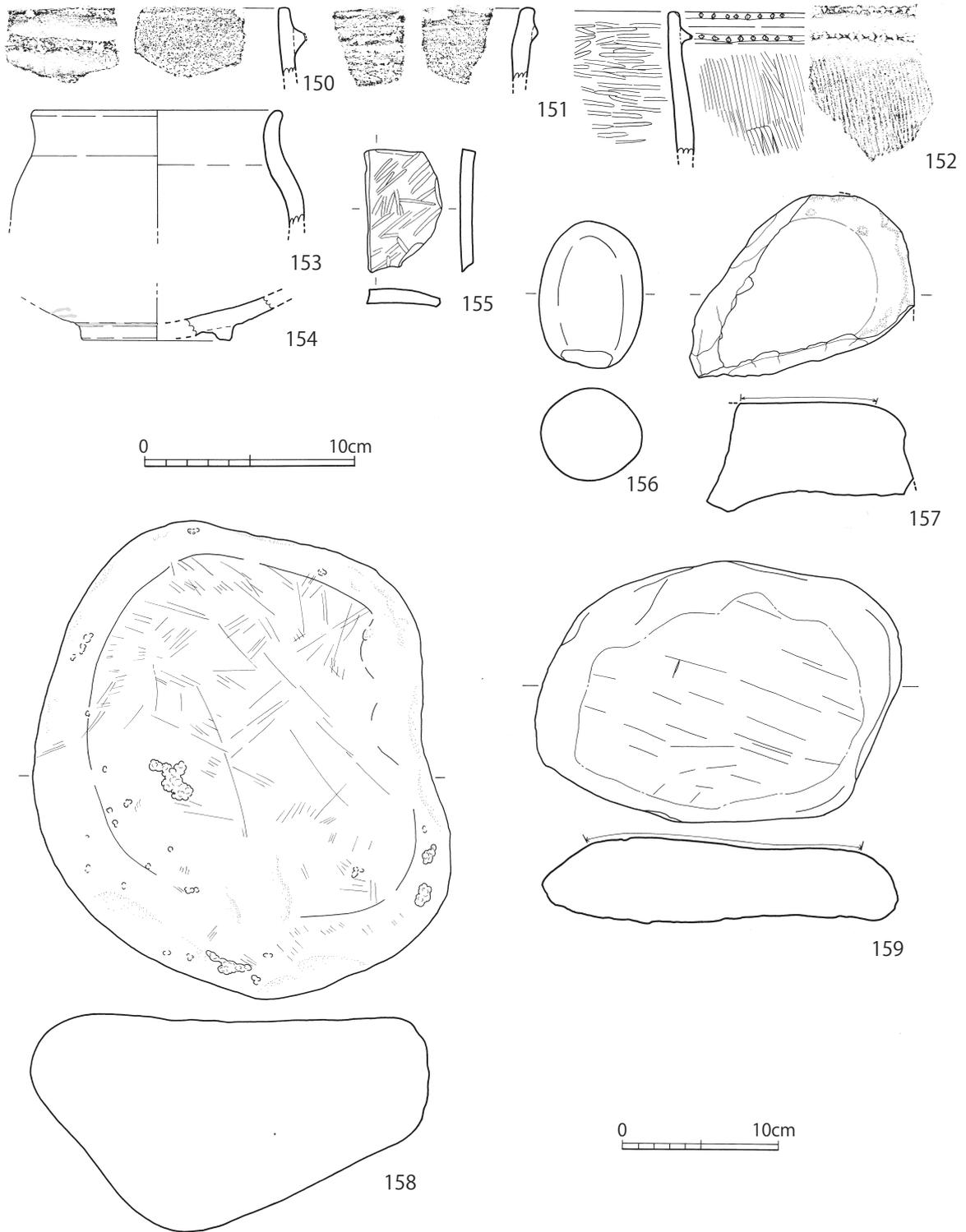
1区の中央西壁際から南西隅部にかけて、D-4・E-4グリッドで検出した落ち込み状遺構である。北は攪乱SX560に、北西端から中央壁際にかけてはSX556Bにそれぞれ切られている。検出範囲は長さ11.04m以上、幅4.20m以上、深さ0.30m前後を測る。埋土は4層に細分され、西側の傾斜部に向かうように順に堆積する。いずれの層も黄褐色土や暗褐色土、灰黄褐色土のブロックが混じることから、自然堆積



第71図 SD556A (SX556) 実測図 (1/60)



第 72 図 SX556B 実測図 (1/50)



第73图 SD556 (SX556) 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

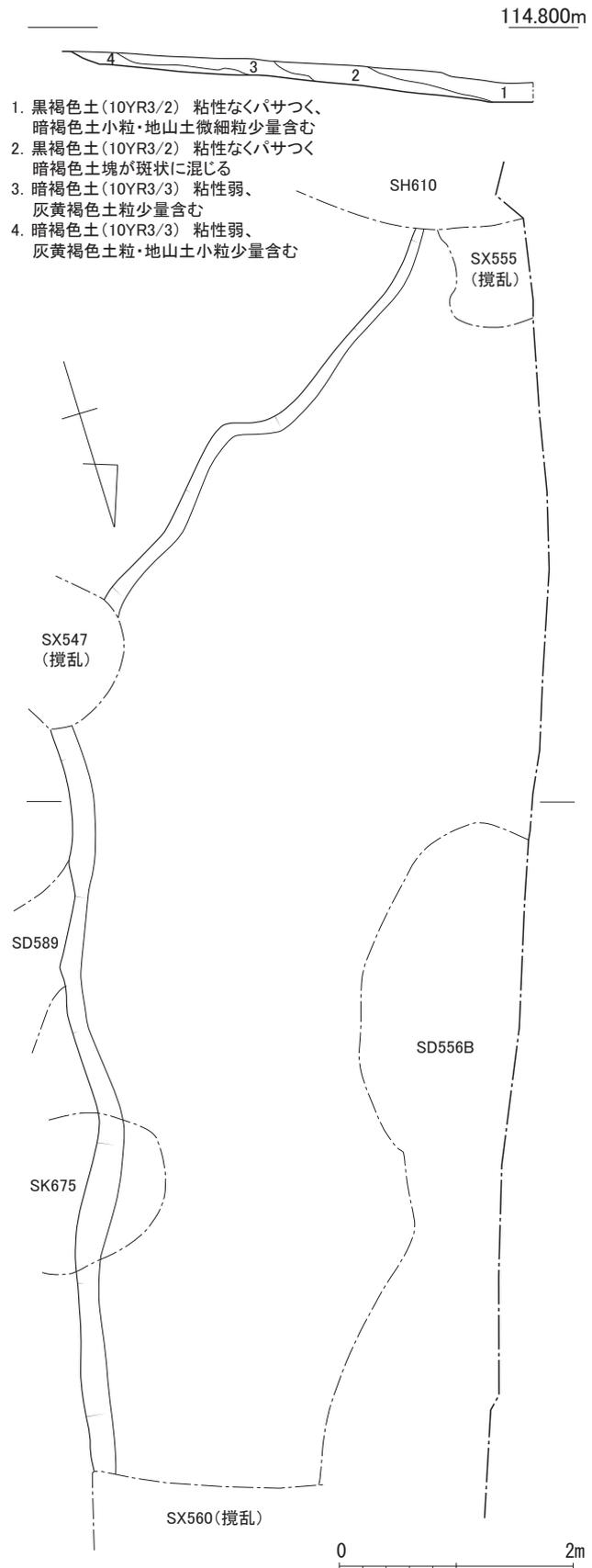
ではなく意図的に埋めた土層である。人為的な構造物というよりは、調査区の西側が崖となって落ちている自然地形を埋めて平地を造成する目的で土をいれたものであろう。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、石錘が出土している。中世土器の出土から、中世に埋没したものとみられる。

SX619出土遺物（第75図）

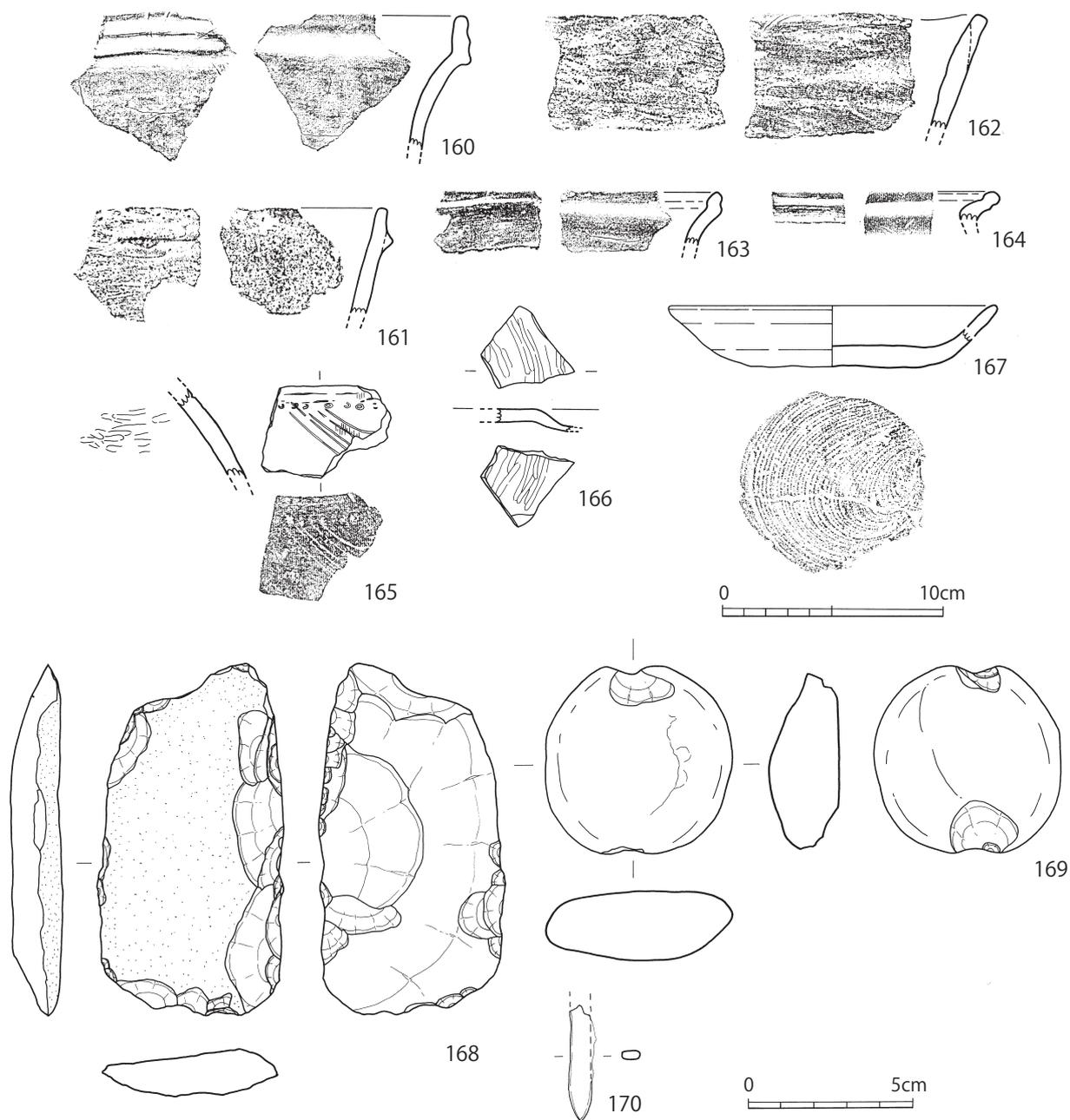
160～164は縄文土器である。160は外反する頸部から口縁部が上方に折れ、外面に2条の平行凹線を施す。後期後葉三万田式の深鉢である。161は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施す深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。162は無文の深鉢で、外面に粗い条痕を施す。163・164は黒色磨研土器の浅鉢で、口縁部は外反し端部は短く上方に折れ、外面に沈線を施し、内面には段が付く。後期末葉に位置付けられる。165は弥生土器の壺で、肩部上方に横位の多条沈線の痕跡がわずかに認められ、その下に半截竹管状工具による列点刺突文と、弧状の多重沈線文を施す。166は古代の土師器の坏蓋で、内外面ともに粗いヘラミガキを施す。167は土師器の坏で、底面に回転糸切り痕が残る。14世紀代のものであろう。168は打製石斧である。玢岩の横長剥片を素材とし、周縁に粗い調整剥離を施すが、剥離が十分ではなく未製品と思われる。169は安山岩の円礫を素材とした打欠石錘で、上下両端を打欠いて縄掛け部を作り出す。

第6節 近世以降の遺構と遺物

近世以降の確実な遺構としては、溝状遺構SD554が挙げられる。落ち込み状遺構SX534は自然地形に由来するものとみられるが、SD554とともに第2層の耕作面に関連する遺構の可能性が高い。また、1区では他の調査区に比べ攪乱が数多く確認され、縄文時代以降の遺物が混入している。それらについても本節で報告する。



第74図 SX619実測図 (1/60)



第75図 SX619 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SD554 (第76図)

1区の北部、B-5・B-6・C-5・C-6グリッドで検出した溝状遺構である。東側は調査区外に続くが、検出した範囲で長さ8.93m以上、幅0.36~0.55m、深さは最大で0.35mを測る。溝の東壁際と、西端部はそれぞれ土坑状やピット状に1段深く掘り込んでいる。埋土は黒褐色土ブロックが少量混じるにぶい黄褐色土で、標準土層の第Ⅲ層上面から掘り込み、上部を標準土層の第Ⅱ層が被覆する。第Ⅱ層は旧耕作土であることから、SD554も近現代の耕作に伴う、畑地の境界溝のような施設である可能性が高い。遺物は土師器、磁器が出土している。

SX534 (第6・7図)

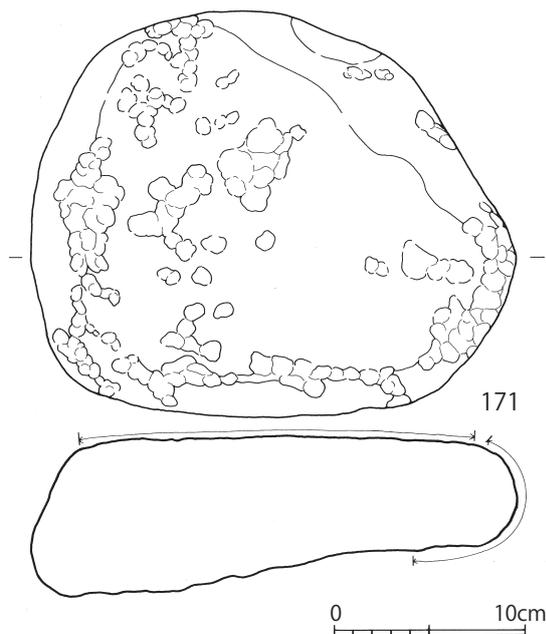
1区の北端部、B-5・B-6グリッドで検出した落ち込み状遺構である。第7図の堆積土層でも触れたが、北端部は標準の堆積土層とはやや異なった状況を示しており、おそらくは調査区の北側が崖面となって落ちていく地形であることから、北に向かって傾斜する低地を埋めて整地し平地を造成したものであろう。埋土が粘性を欠きパサついた黒褐色土であり、その上をクロボクに由来する第Ⅲ層を掘り返したとみられる第3'層が被覆していることから、標準土層第Ⅱ層の農地を作るために造成した痕跡であると考えたい。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器の小片や石皿が出土しているが、造成時期を明らかにできるものはない。

SX534出土遺物 (第77図)

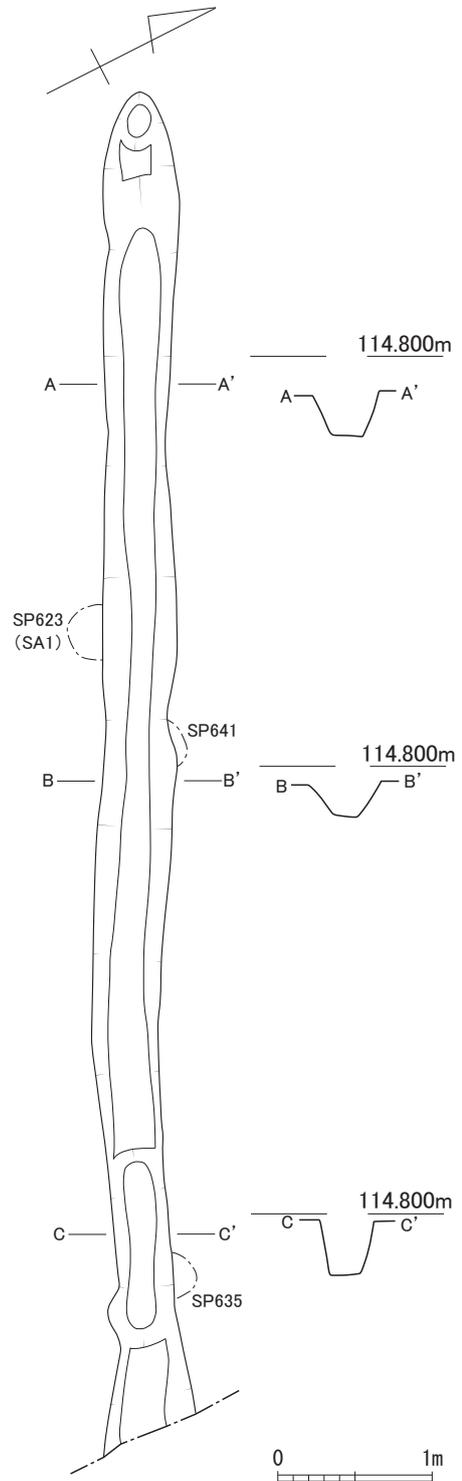
171は石皿で、上面を使用面として表面に敲打痕が顕著に認められる。

攪乱出土遺物 (第78・79図)

1区では多くの攪乱が認められたが、その多くは耕作土に似た埋土で占められており、農耕に関連して構築された廃棄土坑等の穴である。第78図は攪乱分布で、図中アミかけをした部分が攪乱で、文字ポイントの大きい攪乱は第79図に示した遺物の出土した攪乱を表す。172は縄文土器の深鉢で、外面に粗い条痕を施す。173は土器片を転用し、周縁を加工して半円形状にした土製品である。174は土師質焼成の管状土錘の完形品。175は砥石で、表面に刃物を研いだ鋭い使用痕



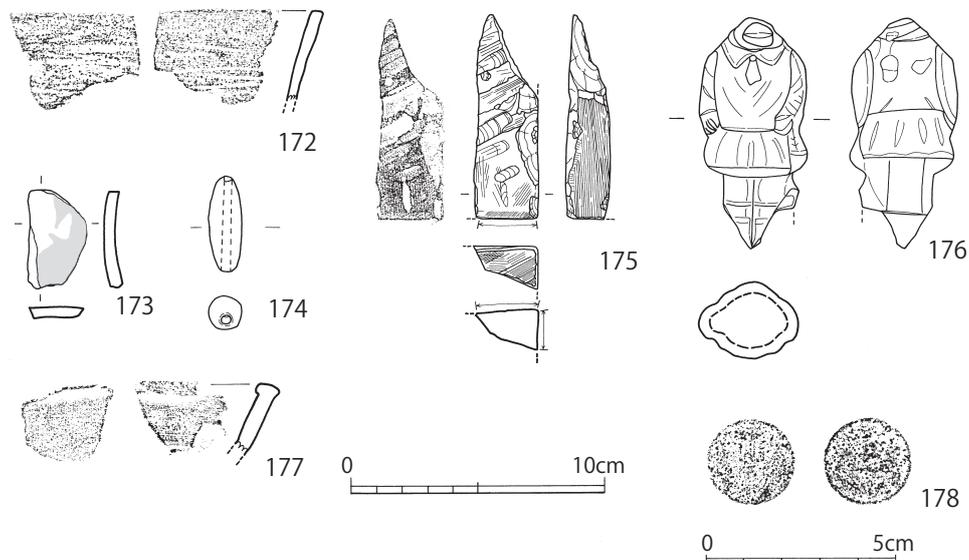
第77図 SX534 出土遺物実測図 (1/4)



第76図 SD554 実測図 (1/50)



第 78 图 1 区搅乱分布图 (1/200)



第79図 1区攪乱出土遺物実測図(1/3・1/2)

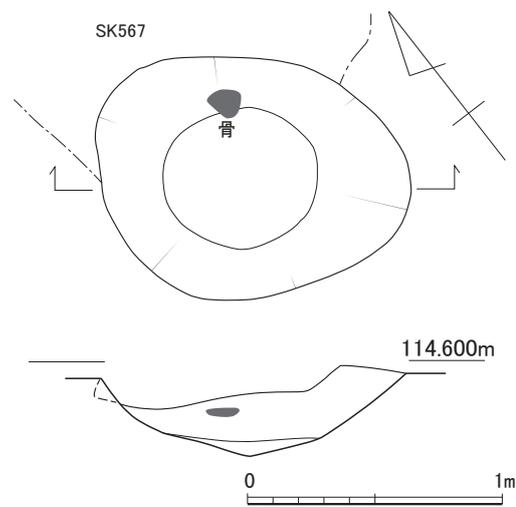
が残る。176はビニール製の人形で、制服を身に付けた女兒を象っている。177は縄文土器。178は銅銭で、拓影では判然としないが一銭の銭文がかすかに判読できる。

第7節 その他の遺構・遺物

本節では、前節までに報告した以外の遺構で、帰属時期を決め難いものを扱う。

SK568 (第80図)

1区の中央北寄り、C-5グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状を呈し、長径1.27m、短径0.97m、深さ0.36mを測る。内部の掘り込みは緩やかで、底面は平坦ではなく丸みを持つ。土坑の北端中央部の検出面近くから骨が出土しているが、状態が悪くほぼ形状を留めておらず、分析できるような状態ではなかった。この骨の他に遺物の出土は皆無であり、従って遺構の時期は明らかにできない。

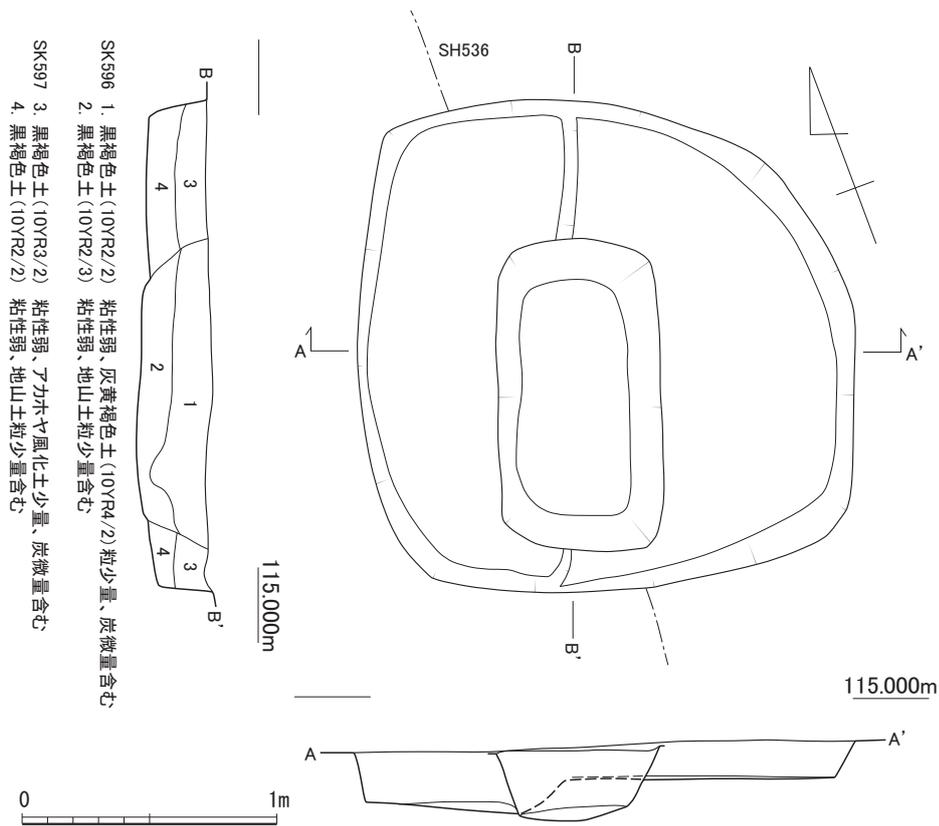


第80図 SK568実測図(1/30)

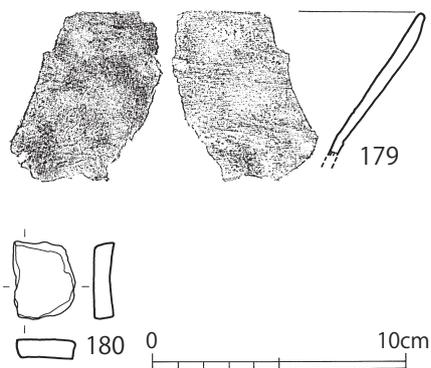
SK596・SK597 (第81図)

1区の中央東寄り、D-5グリッドで検出した土坑である。古墳時代後期の堅穴建物SH536の西辺の中央部辺りを切って構築しており、SK597を切ってSK596が掘り込んでいる。

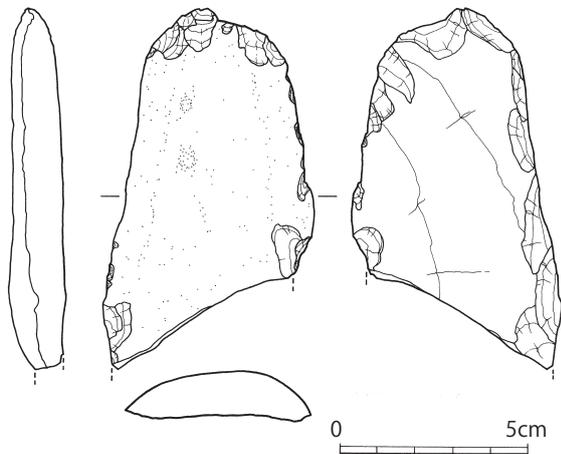
SK596はSK597のほぼ中央部に穿たれた土坑で、隅丸長方形の平面形状を呈し、長辺1.23m、短辺0.65m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色土で、混入物の差から上下2層に分層される。上層には灰黄褐色土粒や炭を含み、下層には少量ながら地山黄褐色土の粒が混じる。土坑の形状から墓の可能性を考えたが、それを裏付けるよ



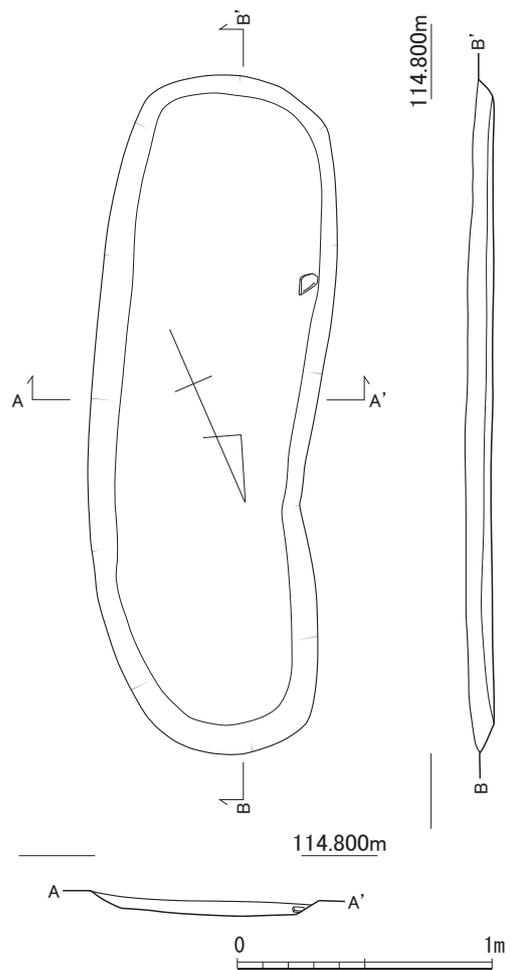
第81図 SK596・SK597 実測図 (1/30)



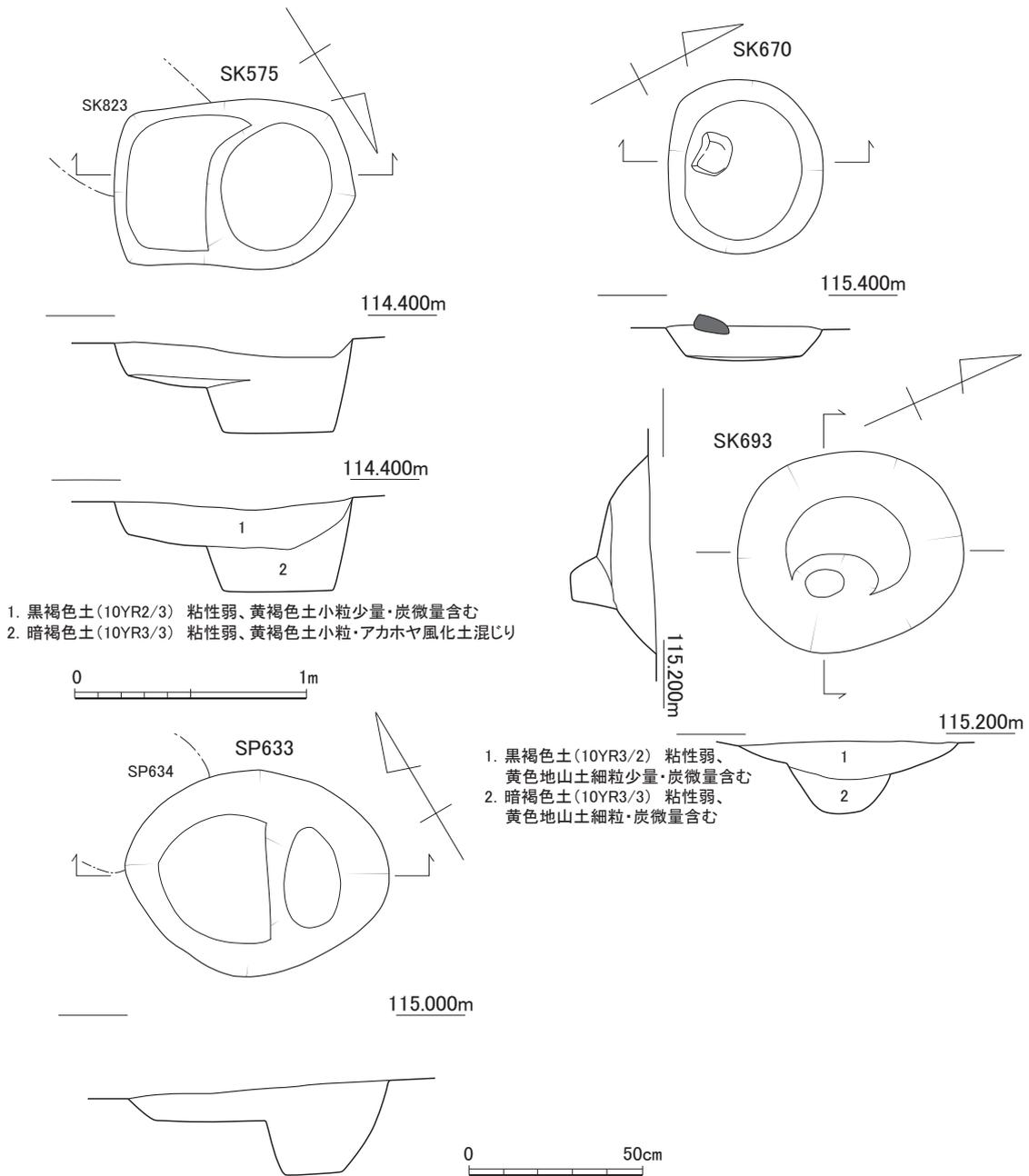
第82図 SK596・597 出土遺物実測図 (1/3)



第84図 SK616 出土遺物実測図 (1/2)



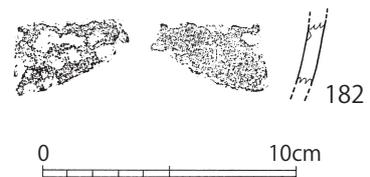
第83図 SK616 実測図 (1/30)



第 85 図 1 区遺構実測図 (1/30・1/20)

うな遺物の出土や埋葬施設の痕跡は確認できなかった。遺物は少量ながら縄文土器、土師器片が出土しており、内 1 点を図示した。SH536 との切り合い関係から、古墳時代後期以降の遺構であることは確実であるが、詳細な時期比定は困難である。

SK597 は SK596 に切られる土坑で、平面形状は北東隅部が丸みをもった隅丸形状を呈し、長辺 1.97 m、短辺 1.96 m、深さ 0.31 m を測る。埋土は SK596 と同じ黒褐色土で、それがためにプランの確認は困難を極めた。上層はアカホヤ風化土混じりで微量ながら炭を含み、下層は地山黄褐色土の粒が少量混じる。遺物は少量ながら、土師器の他、土器片を半円形状に加工した土製品が出土している。



第 86 図 1 区遺構出土遺物実測図 (1/3)

SK596と同様に、古墳時代後期以降に比定される遺構であるが、時期否定出来る遺物に乏しく詳細な帰属時期判定の決め手を欠く。

SK596・SK597出土遺物（第82図）

179はSK596から出土した縄文土器で、口縁部が外に開く無文の深鉢である。180はSK597の出土品で、土器片を転用し、周縁を加工して半円形状に仕上げた土製品である。

SK616（第83図）

1区のはほぼ中央部、D-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径2.68m、短径0.92m、深さ0.10mを測る。内部は皿状を呈した緩やかな掘り込みで、床面は起伏がなくほぼ平坦である。遺物は打製石斧1点が出土しているが、他に土器等の出土は見られなかった。遺物の帰属時期を判定できる遺物がなく、遺構の時期は不明とせざるを得ない。

SK616出土遺物（第84図）

181は背面に自然面を残す珩岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、下半部を欠失する。周縁部に粗い調整剥離を施すが、剥離は密ではなく未製品の可能性もある。

SK575（第85図）

1区の北部西側、C-5グリッドで検出した土坑である。SD558に囲繞された中に位置するが、SD558との関係は明らかではない。SK823を切る土坑で、平面形状は長方形を呈するが、北西部が丸くカーブしている。長辺1.05m、短辺0.75m、深さ0.39mを測る。内部は二段掘りになっており、西側が円形に一段深く掘り込まれる。埋土は上下2層に分層され、第1層が一段浅いテラス部分、第2層が一段深い土坑部分の埋土となる。遺物は弥生土器と時期不明の土器小片が出土しているが、図示できるものはない。弥生時代以降の遺構であることは間違いないが、詳細な時期は不明である。

SK670（第85図）

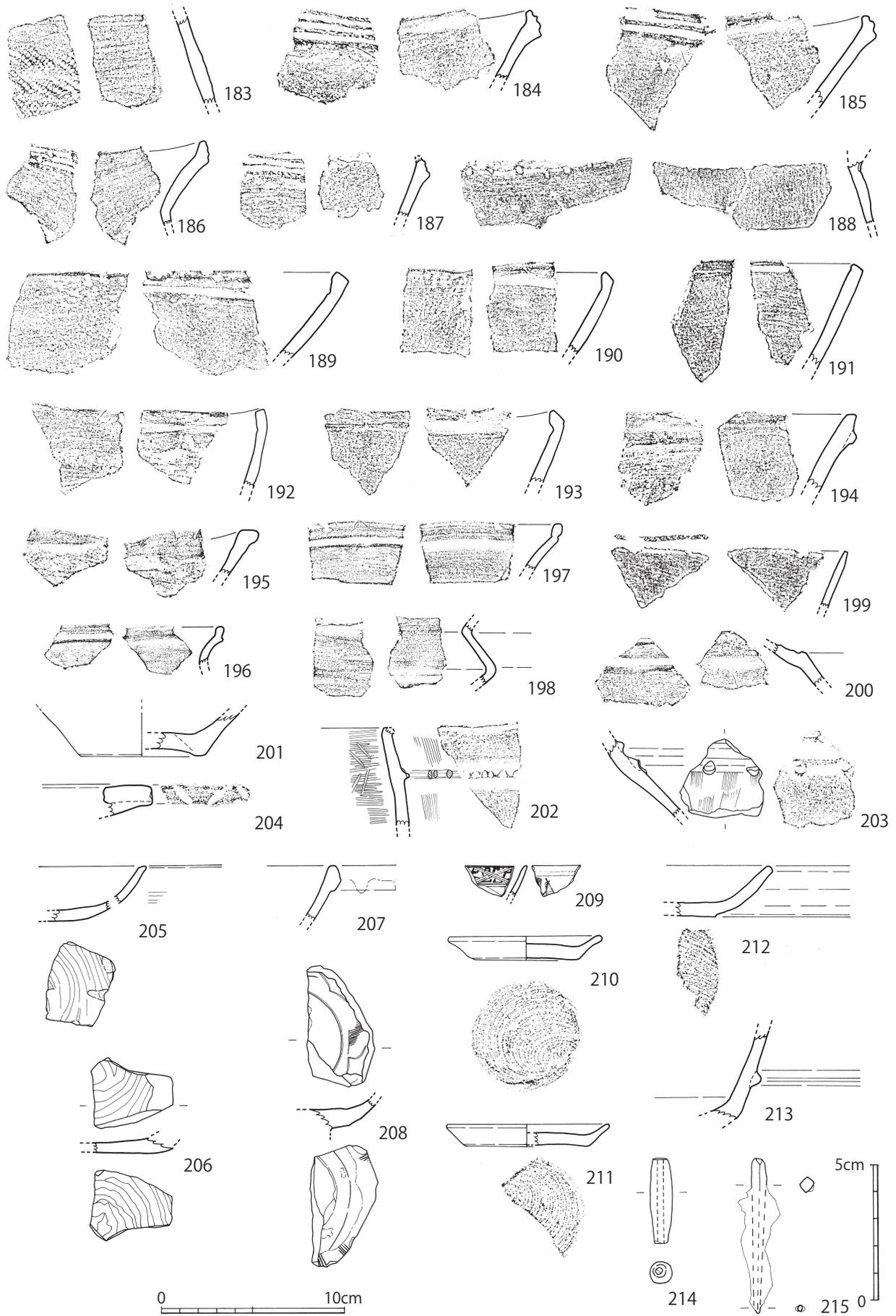
1区の南東隅部、E-6グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.77m、短径0.67m、深さ0.15mを測る。検出面付近から20cm弱の大きさの礫の出土がみられた。遺物は弥生土器とみられる小片が出土している程度である。時期比定できる遺物に乏しく、遺構の年代は明かにできない。

SK693（第85図）

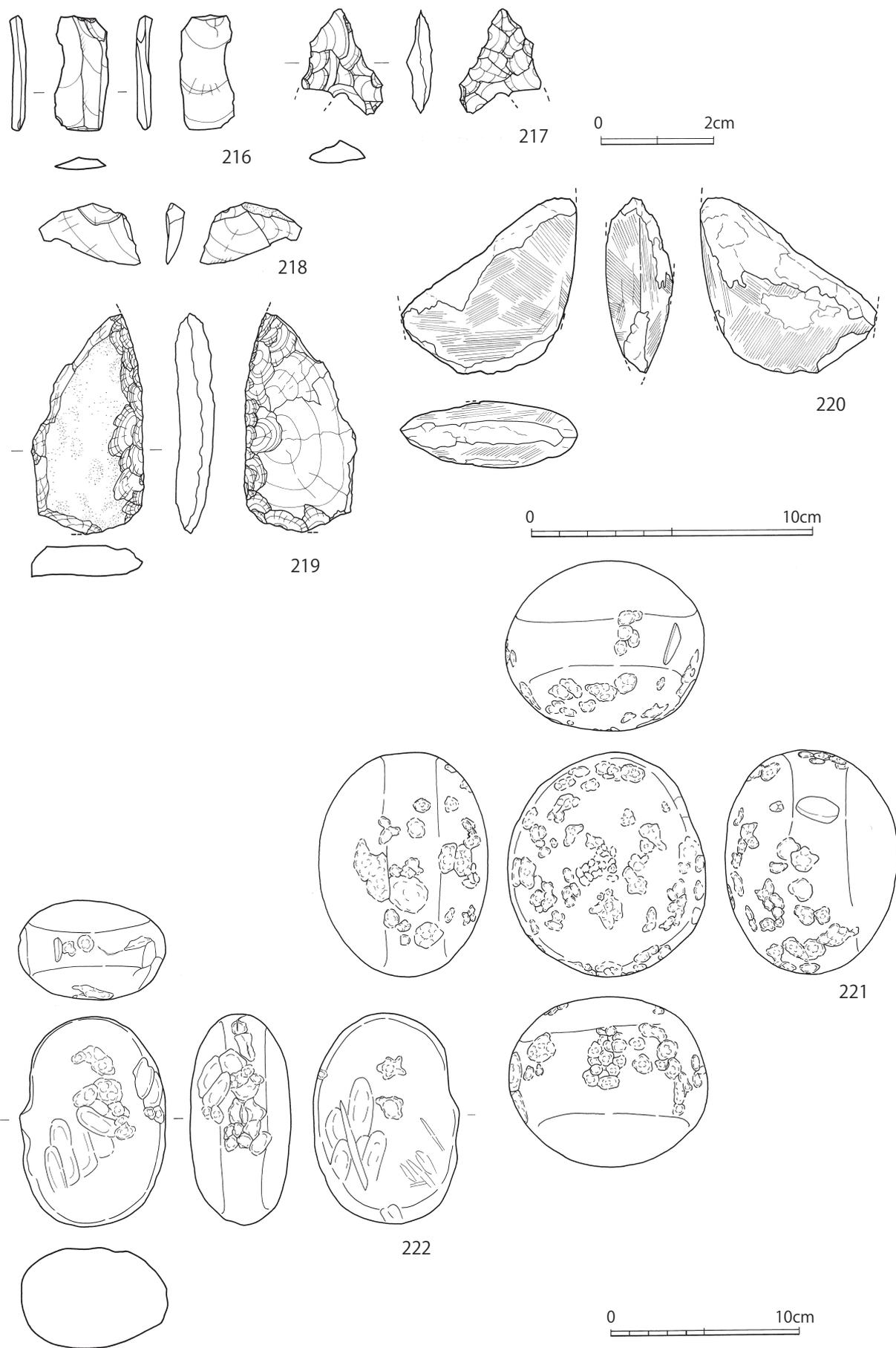
1区の南東部、E-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形状を呈し、長径0.97m、短径0.82m、深さ0.37mを測る。内部は二段掘りになっており、東端部はピット状に一段深く掘り込まれ、西側はテラス状の段が付く。埋土は上下2層を確認しており、第1層がテラス部を覆い、第2層は一段深い部分の埋土となる。遺物の出土がなく、遺構の時期は明かにできない。

SP633（第85図）

1区の中央北寄り、C-5・C-6グリッドで検出したピット状遺構で、北東部でSP634を切っている。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.77m、短径0.51m、深さ0.51mを測る。内部は二段掘りになっており、北側が一段深く掘り込まれ、南側はテラス状の段となる。遺物は縄文土器、時期不明の土器小片が出土しているが、時期比定できる遺物がなく、詳細な時期は明かにできない。



第 87 图 1 区出土遗物实测图① (1/3 · 1/2)



第 88 图 1 区出土遗物实测图② (1/1 · 1/2 · 1/3)



第 89 図 1 区旧石器時代確認調査トレンチ配置 (1/200)

SP633出土遺物（第86図）

182は縄文土器である。外面表面の剥落が著しいが無文の胴部片で、内面上部隅に種子状の表出圧痕が認められた。この圧痕については分析を行ったものの、何に由来するものかを明らかにすることはできなかった。

第8節 1区出土遺物

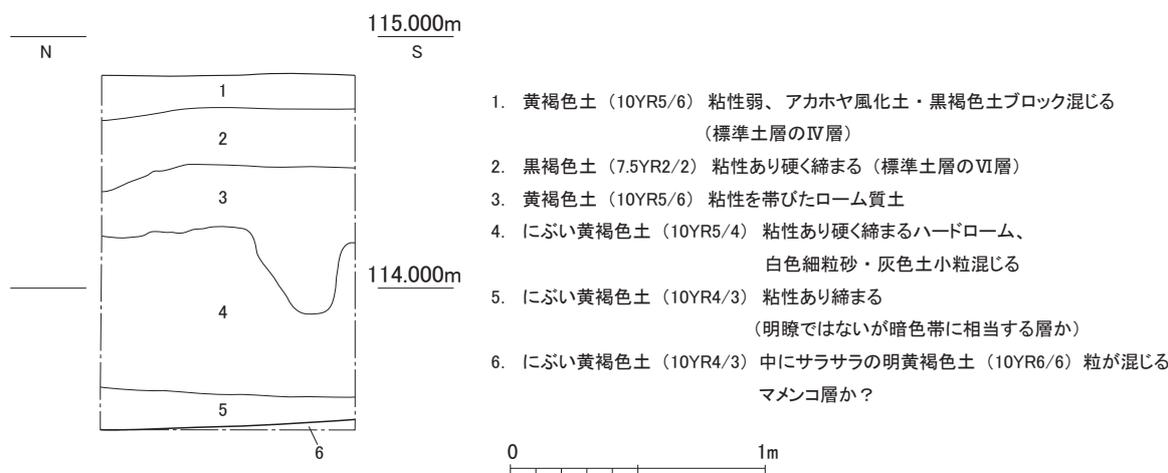
1区の表土や遺構検出時等に出土した遺物のうち、特徴的なものを第87図に示す。

216は流紋岩製の細石刃である。上部を打面とし、腹面上部に打点を残し、背面には3面の剥離痕が残る。217は流紋岩の剥片で、自然面を残す上端を打面とする。これらは旧石器時代の遺物である。218は打製石鏃で、基部の一端を欠失する。石材は姫島産黒曜石である。219は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、側縁に顕著な調整剥離を施す。220は磨製石斧で、全体に研磨整形の擦痕が顕著に残る。石材は蛇紋岩である。221・222は叩石で、いずれも上下両面及び側面部に顕著な敲打痕が残る。石材は221は安山岩、222はデイサイトである。

第9節 旧石器時代の確認調査

標準土層の第IV層上面の遺構の調査後に、下位層における遺構・遺物の有無を確認する目的で、1区の一部に確認調査グリッドを設定した。調査区は記録作成作業が必要な堅穴建物等の主要遺構の分布する場所を避け、C-5・C-6グリッドの中に、東西5.2m、南北5.0mの範囲で設定した（第89図）。掘削には重機を使用し、堆積層を薄く慎重に剥ぎ取りながら掘り下げ、遺構や遺物の有無を確認する方法をとった。最終的にグリッド全体を1.5m程掘り下げ、底面でいわゆるマメンコ層と呼ばれる、サラサラの明黄褐色土粒が混じった層に達したため、これ以上の掘り下げを行わなかった。結果として、確認調査グリッドから遺構・遺物は全く確認されなかった。

確認調査グリッドの土層を第90図に示す。1はアカホヤ風化土や黒褐色土の混じった黄褐色土で、この層上面が縄文時代～古墳時代を主とする遺構面となる。標準土層の第IV層である。2は粘性を帯び硬く締まった黒褐色土で、縄文時代早期に相当する堆積層である。標準土層のVI層にあたる。3は粘性を帯びた黄褐色のローム質土で、古墳時代前期の堅穴建物はこの層上面を床面とするものが多い。4は粘性を帯び硬く締まったにぶい黄褐色土のハードローム層で、白色細粒砂や灰色土の小粒が混じる。5はにぶい黄褐色を呈するローム層で、4よりも色相が暗い。このグリッドでは明瞭な暗色帯を確認していないが、この5層が暗色帯に該当する可能性がある。6はマメンコとみられるサラサラの明黄褐色土粒が混じるにぶい黄褐色土である。



第90図 1区旧石器時代確認調査トレンチ土層断面（1/30）

第4章 2区の発掘調査成果

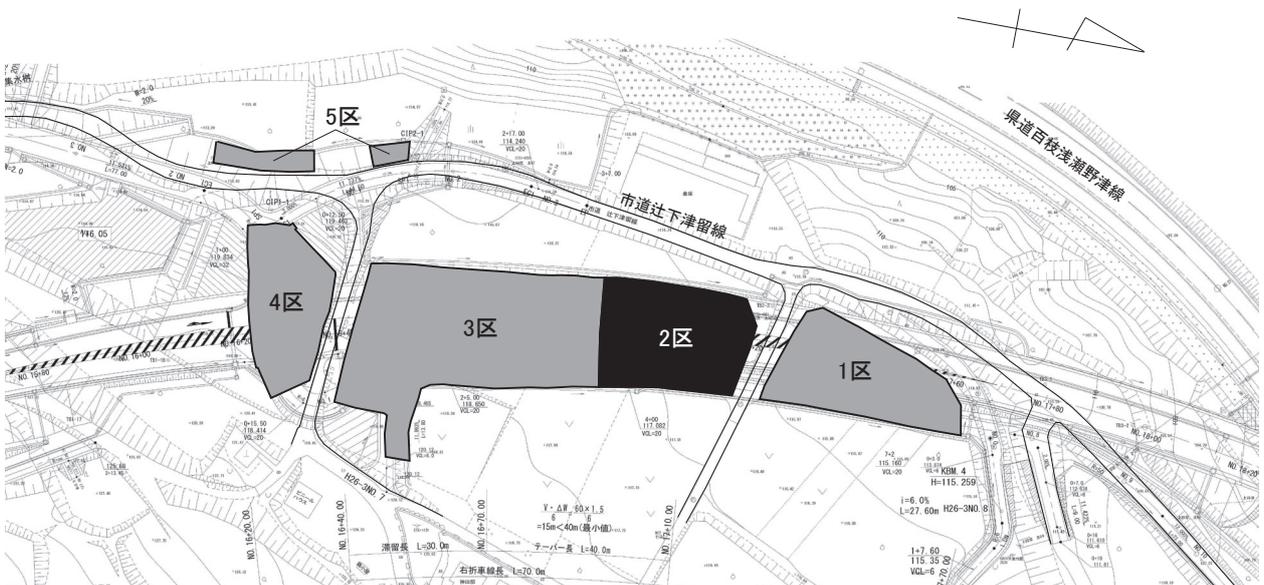
第1節 調査区の設定と基本層序

県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う上田原東遺跡の発掘調査は、調査前の土地形状に応じて1～5区の調査区を設定して実施した。2区は3区に北接し、里道を挟んで北に1区が位置する（第91図）。調査地の地番は豊後大野市三重町大字上田原字辻 1695・3・1696・3の一部、1697・2の一部、1698・2で、調査前の標高は約116.0～117.1mを測る。南東側から北西側にかけて緩やかに傾斜する。

発掘調査区は計画路線形状に合わせて設定し、2区はほぼ長方形を呈している。発掘調査面積は約680㎡である。発掘調査では縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の遺構を確認したが、2区では縄文時代・古墳時代前期・古墳時代後期の遺構・遺物が多く、弥生時代や古代・中世のものは少ない。また、遺構の分布はほぼ調査区の全体に認められ、特に空白域のような空間は存在しない。1・3・4区と同様に全体的に遺構の重複が激しく、また遺構埋土と基盤となる土層が酷似しており遺構プランや切り合い関係の把握は困難を極めた。そのため、ある遺構の発掘中に本来はそれを切る遺構を新たに把握するなど、切り合い関係を十分に押さえられなかったものも少なからず存在する。従って遺物の混在は完全には排除できなかった。

2区の土層断面を第93図に示す。基本となる土層は1区と共通する。第Ⅰ層は褐色を呈する、畑作による現代の耕作土で、層厚は約10～20cmを測る。全体に耕起されて締まりがなく脆い。第Ⅱ層は暗褐色を呈する旧耕作土で、層厚は約40～50cmを測る。2区の北側から中央部にかけて、第Ⅲ層との層界面に一定間隔で凹凸が認められるが、1区と同様に畑作に伴う畝の痕跡であると考えられる。第Ⅲ層は黒褐色を呈する土層で、クロボクと通称される土層である。層の厚さは約15～50cmで、縄文時代～古代を中心とした時期の遺物を多く包含する。第Ⅳ層はアカホヤ風化土や黒褐色土のブロックが混じった暗褐色土で、下部では黄色みが強くなる。この層の上面が遺構検出面となるが、遺構埋土と酷似するため遺構輪郭の把握は困難を極め、いくらか上部を下げた段階で検出したものもある。第Ⅴ層は約7,300年前の鬼界カルデラの噴火により飛来したK-Ah層、いわゆるアカホヤ火山灰である。粘性がなくサラサラとした明黄褐色土で、堆積は部分的に認められる。特に3区の南東部では面的にも広がり認められた。第Ⅵ層は粘性を帯びる黒褐色土で、縄文時代早期に相当する。

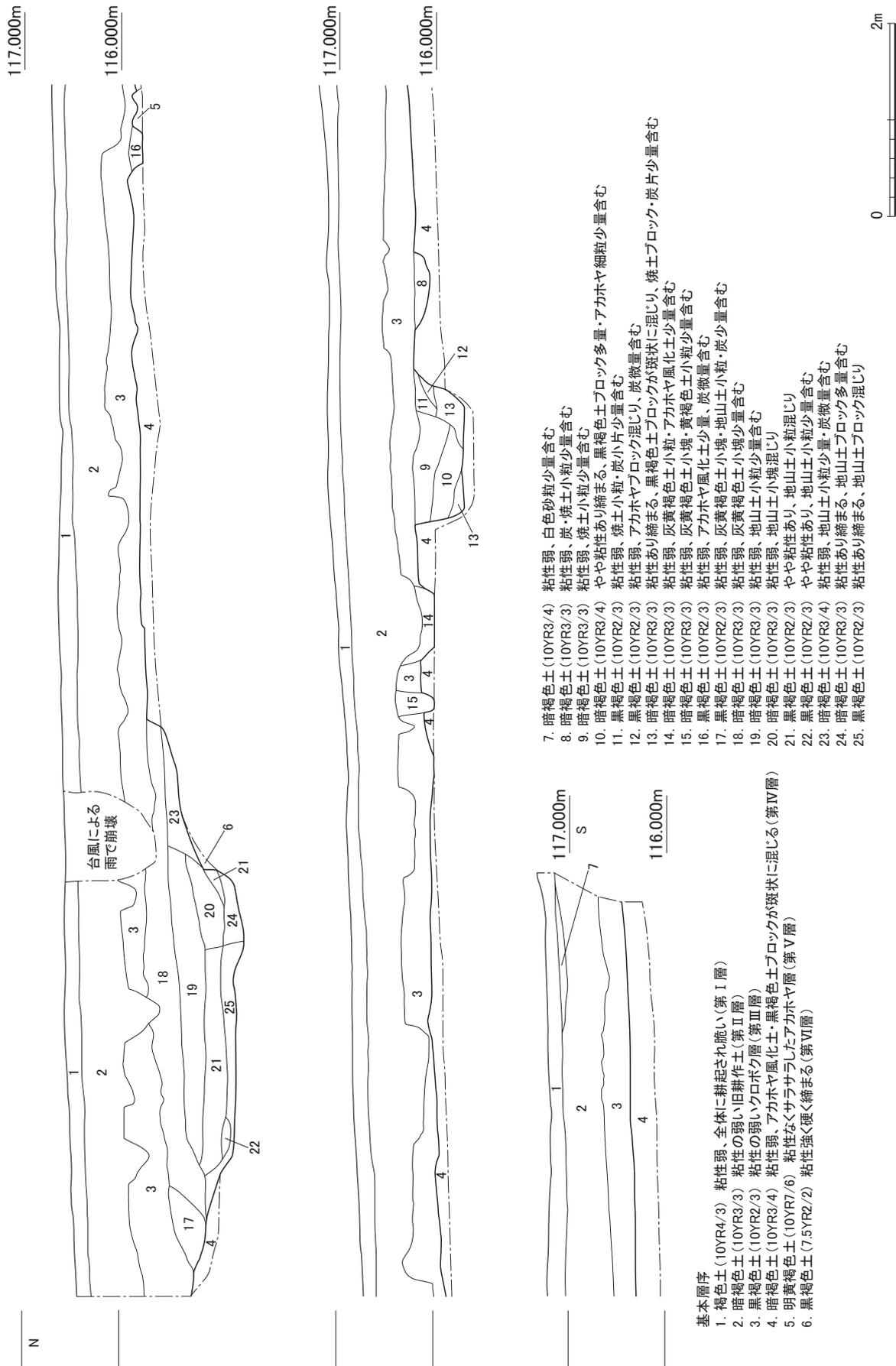
発掘調査では遺構検出面である第Ⅳ層の上面までを重機を使用して慎重に除去し、第Ⅳ層上面で人力により遺構検出作業を行った。その結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期、中世の遺構・遺物を検出した。このうち2区で中心となるのは縄文時代・古墳時代前期・古墳時代後期である。なお、旧石器時代については、2区では確



第91図 上田原東遺跡の調査区配置と2区の調査位置 (1/1500)



第92図 2区遺構配置図 (1/150)



第93図 2区土層断面 (1/60)

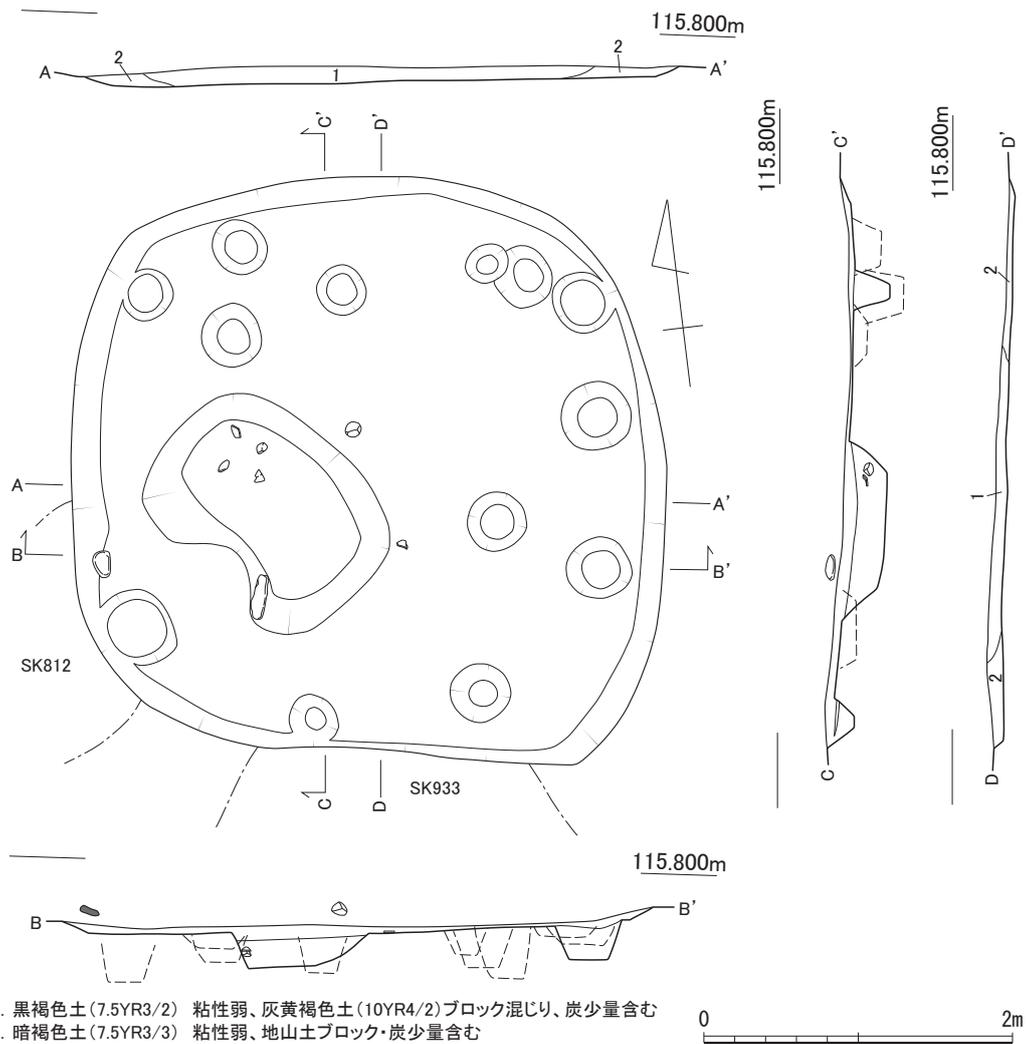
認調査の際に一部で下部ローム層まで深く掘り下げたものの遺構・遺物が確認されなかったこと、ローム層を掘り込む遺構がいくらかあるものの旧石器時代の遺物の出土がほとんど認められないことから、工期の都合もありこれ以上の調査は行わないこととした。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

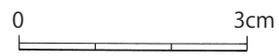
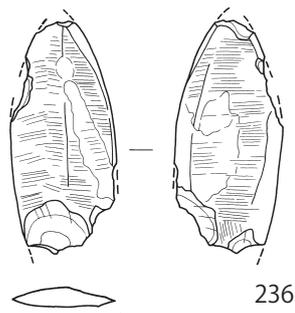
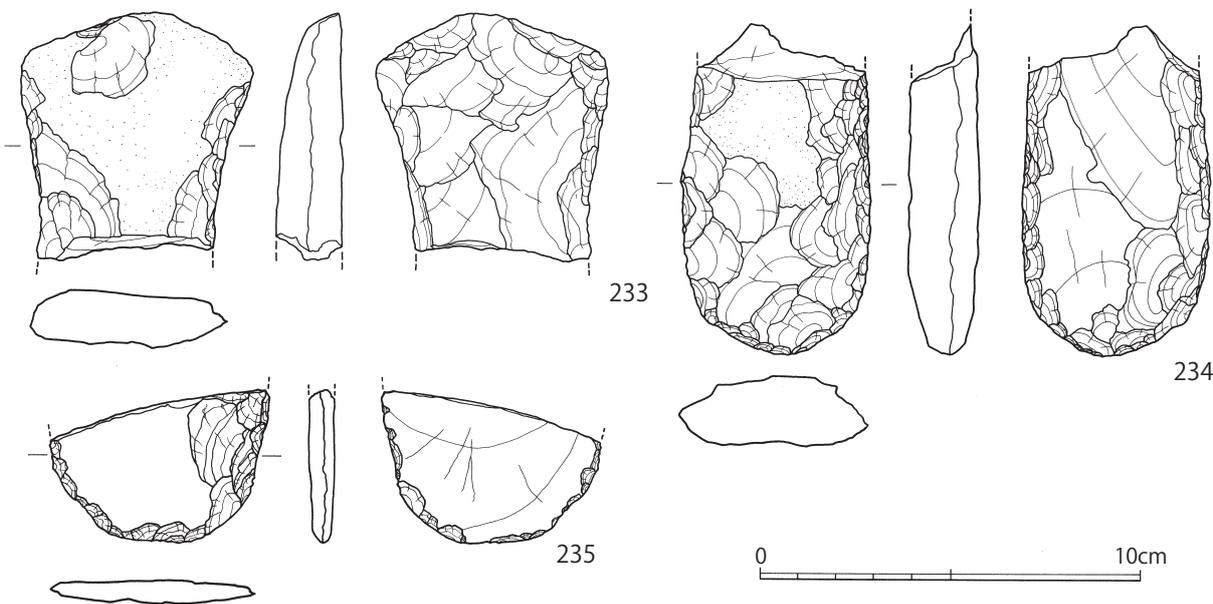
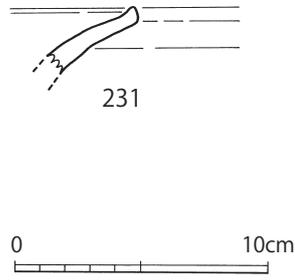
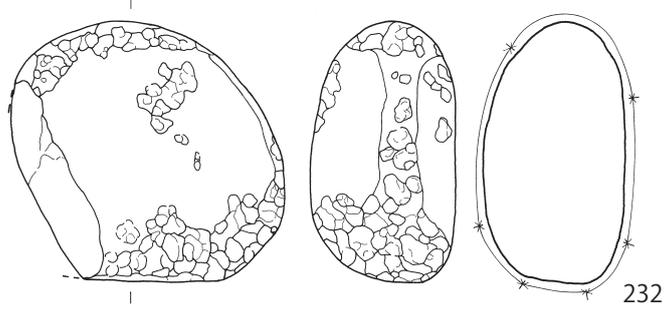
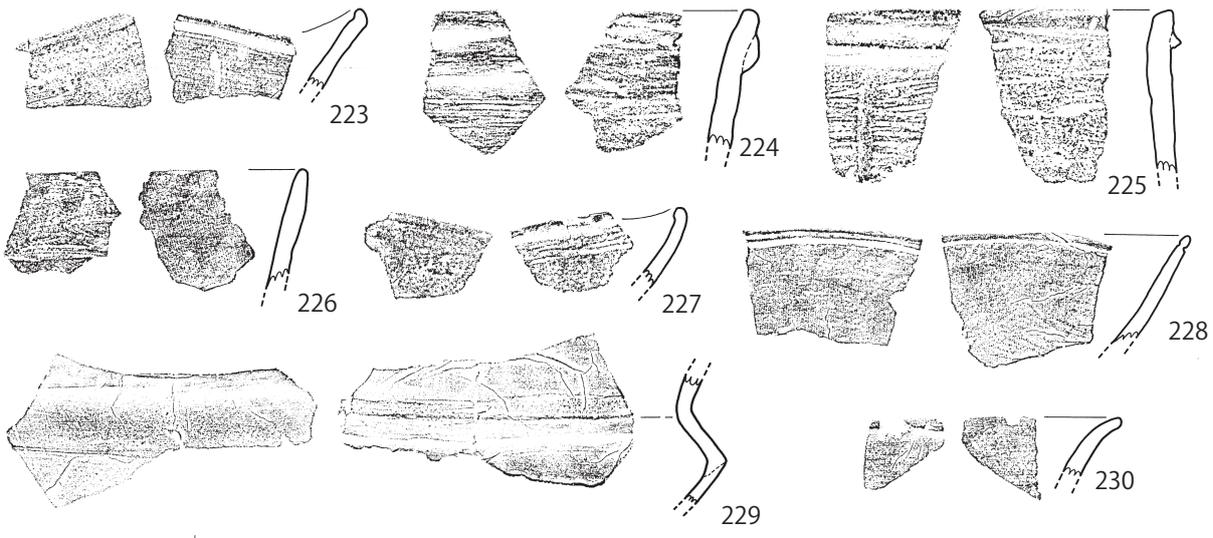
縄文時代の遺構としては、竪穴建物8棟、貯蔵穴を含む土坑7基、溝状遺構1条を検出している。全体的に遺構の重複が激しく、遺物が混在しているものも少なからず存在するため、遺構の数はこれより前後する可能性もある。縄文時代の遺構の特徴として、他の調査区と同様に、埋土が他の時代の遺構と比べ赤みがかっている点が挙げられる。具体的には弥生時代以降の遺構埋土の色相が10YRとなるものがほとんどであるのに対し、縄文時代の遺構埋土の色相はマンセル表色系の7.5YRとなるものがほとんどである。従って、遺物の出土がない場合であっても、この色相の違いを基に年代を判定している場合がある。

SH770 (第94図)

2区のほぼ中央、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。南西隅部あたりを縄文時代の土坑SK812と、南辺の中央あたりを古墳時代の土坑SK933と重複している。しかし、これら重複する遺構はSH770の掘り下げ時にそのプランを確認しており、前後関係を明確に把握できたわけではない。特にSK933は出土遺物から本来はSH770を

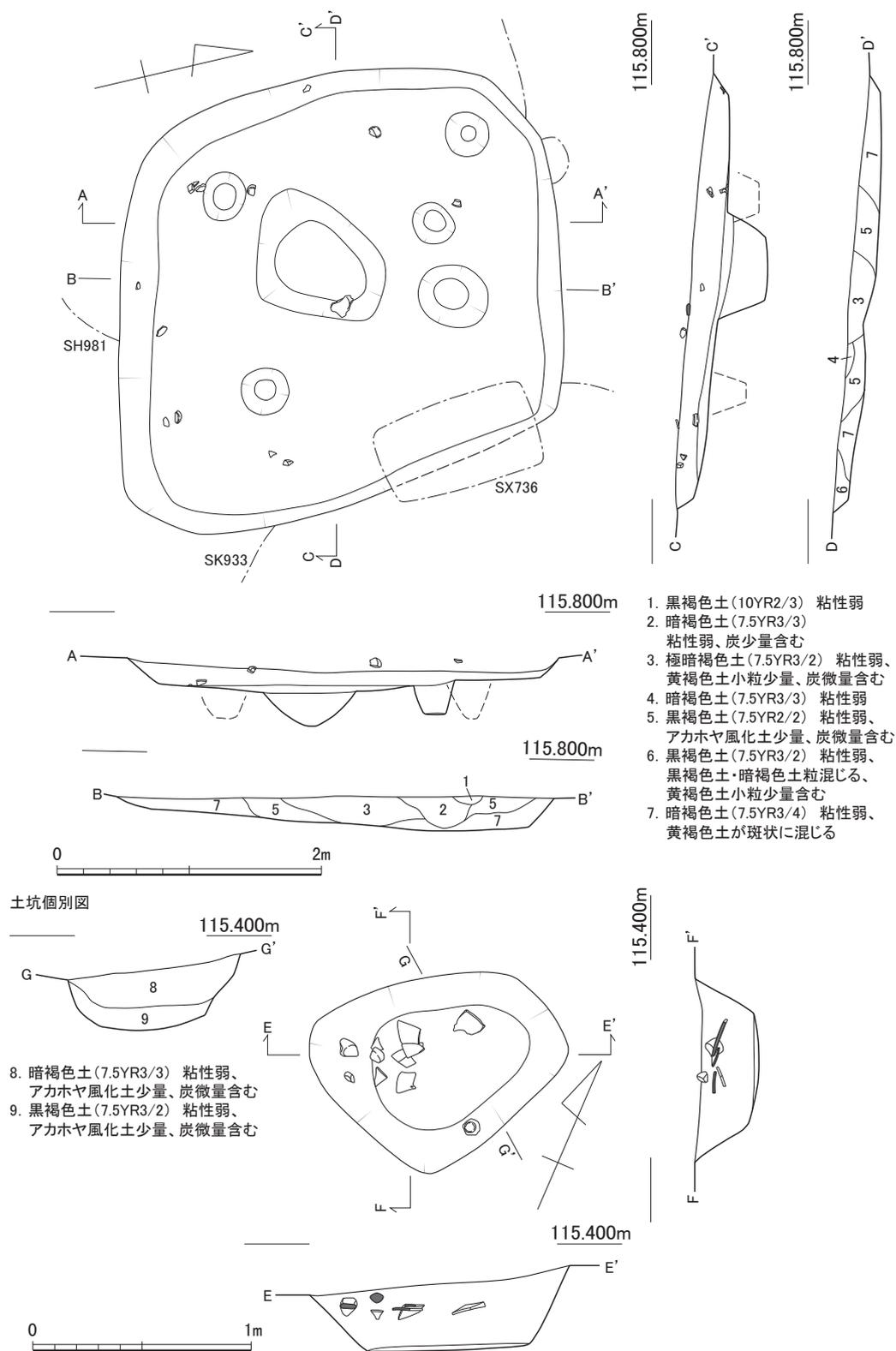


第94図 SH770 実測図 (1/50)

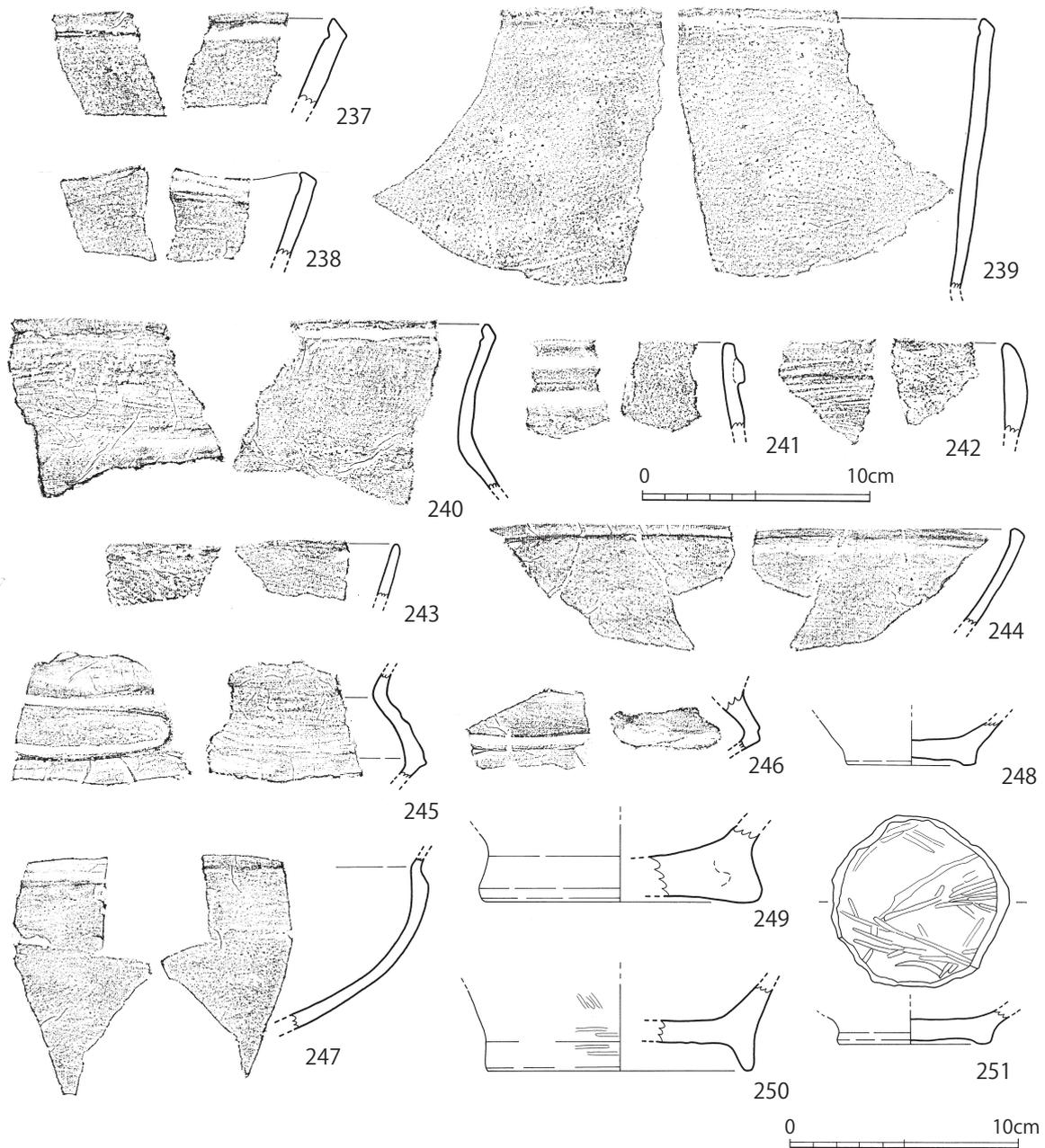


第95图 SH770 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2 · 1/1)

切る土坑であるはずだが、平面でその前後関係を押さえられず、一部遺物が混在する結果になっている。SH770の平面形状は隅丸方形状を呈し、長辺3.82m、短辺3.80m、深さは比高で0.39mを測るが、地形の傾斜によるもので実際には10cm前後しかない。埋土は2層に分層され、中央部に堆積する1層は黒褐色土、周縁部に堆積する2層は暗褐色土である。床面では、中央やや西寄り不定形の土坑1基と、13基のピット状遺構を検出している



第96図 SH785実測図(1/50・1/30)

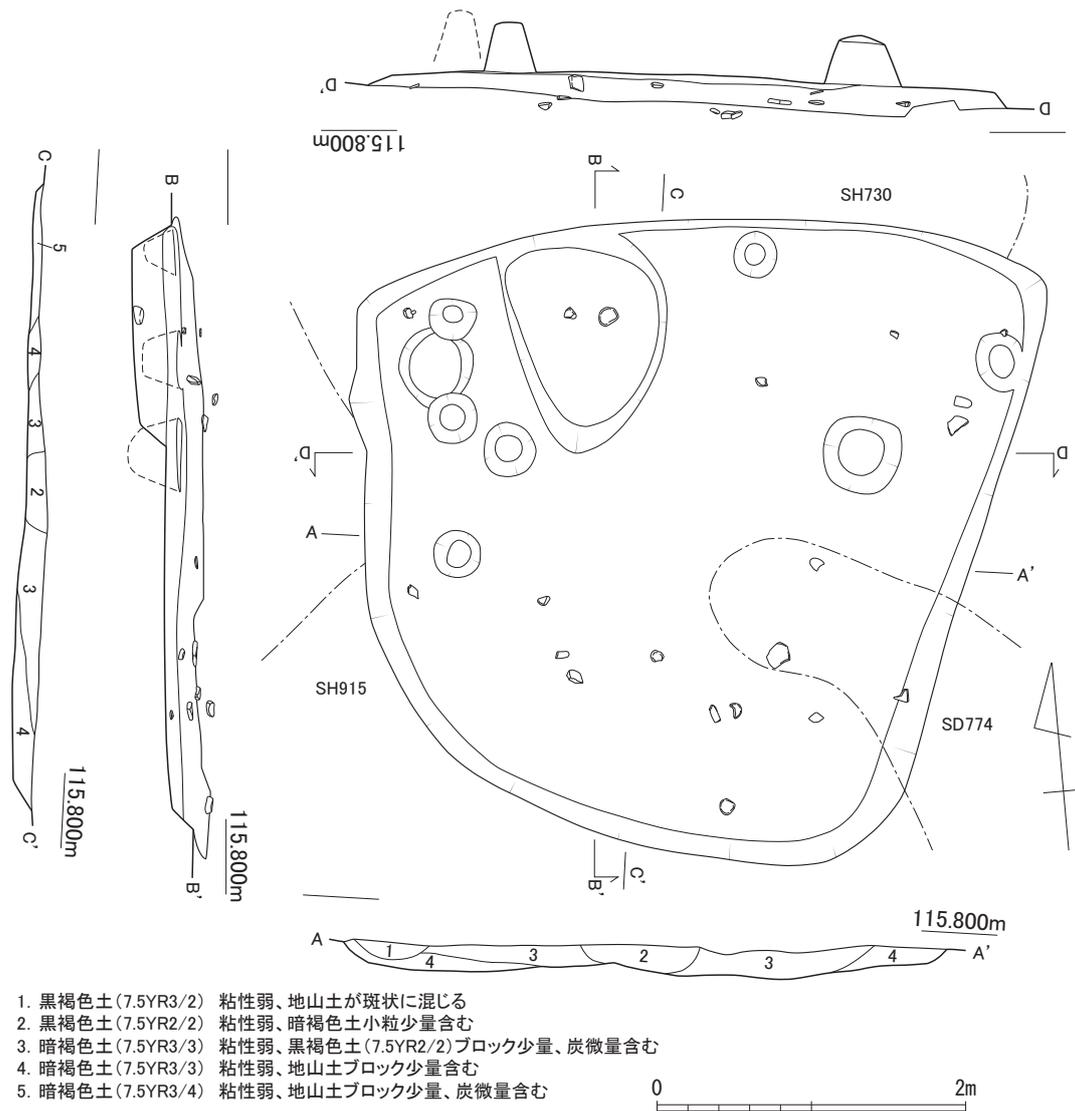


第97図 SH785 出土遺物実測図 (1/3)

る。ピットは壁際に沿って穿たれたものがあり、これが支柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器の他、弥生土器、土師器、須恵器、磨石・叩石、打製石斧、磨製石鏃が出土している。先述のとおり重複遺構の前後関係把握のミスがあり、弥生土器や土師器、須恵器、磨製石鏃といったものは混入したものである可能性が高い。遺構の時期は晩期後葉（上菅生B式期）に位置付ける。

SH770出土遺物（第95図）

223～230は縄文土器である。223は波状口縁を呈する深鉢で、口縁は外反し、内面口縁下に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。224・225は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。224の凸帯は幅広で丸みを持つ。226は無文の深鉢である。227は波状口縁を呈する後期末葉

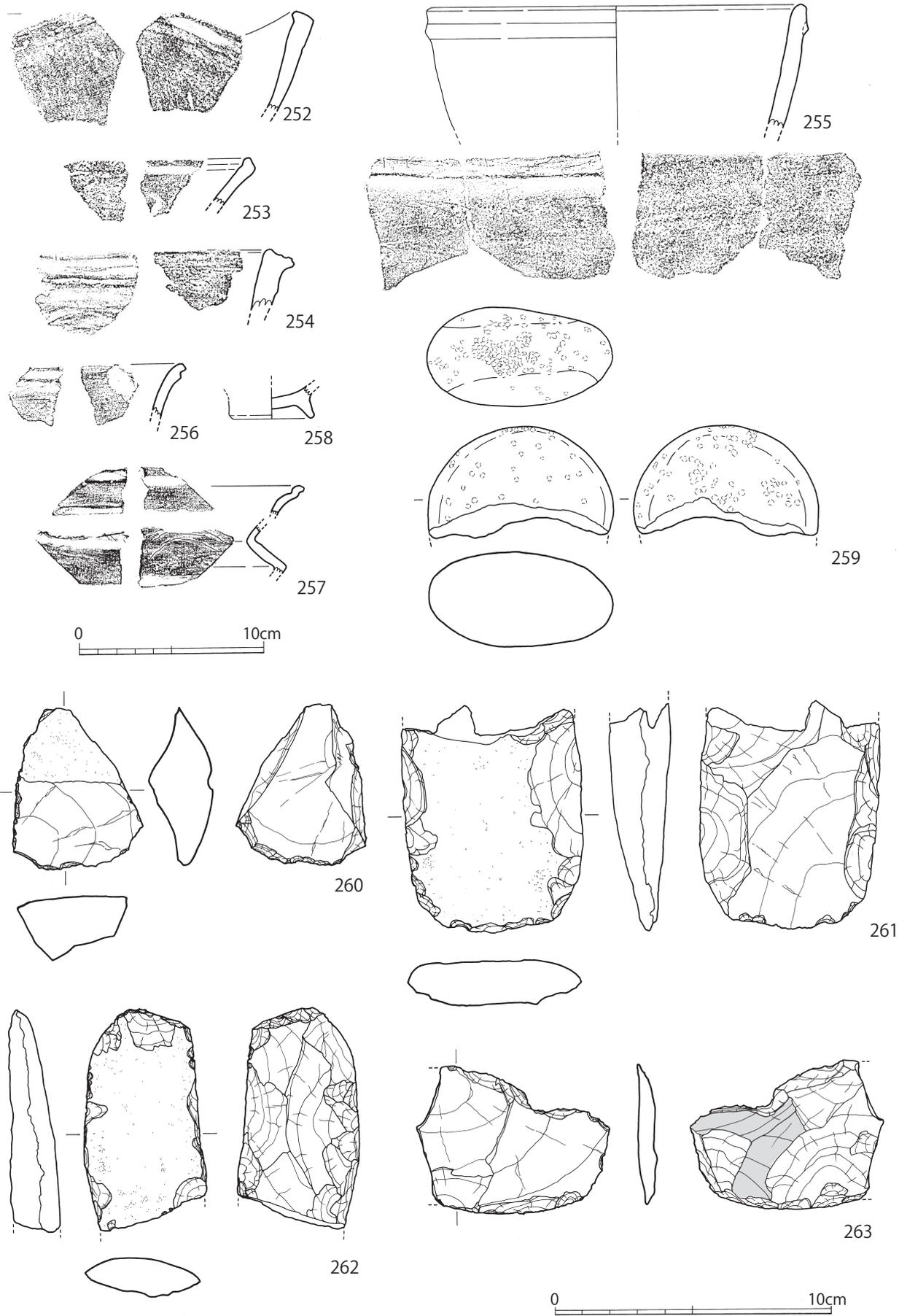


第 98 図 SH871 実測図 (1/50)

の浅鉢で、形態は 223 と共通する。228 は口縁部が外反する浅鉢で、口縁部の内外面にそれぞれ沈線を施す。229 は浅鉢の胴部で、胴部中位で強く屈曲する。晩期後葉に属する。230 の浅鉢は口縁が強く外反する。231 は須恵器の甕である。重複する古墳時代の土坑SK933 からは須恵器が出土しており、231 も本来はSK933 に帰属するものである可能性が高い。232～236 は石器である。232 は安山岩の円礫を素材とする叩石・磨石で、上下両面を磨面とし、側面部には顕著な敲打痕が残る。233～235 は打製石斧で、石材はいずれも安山岩である。236 は黒色粘板岩を素材とする磨製石鏃で、先端部及び基部を欠失する。混入したものである可能性が高い。

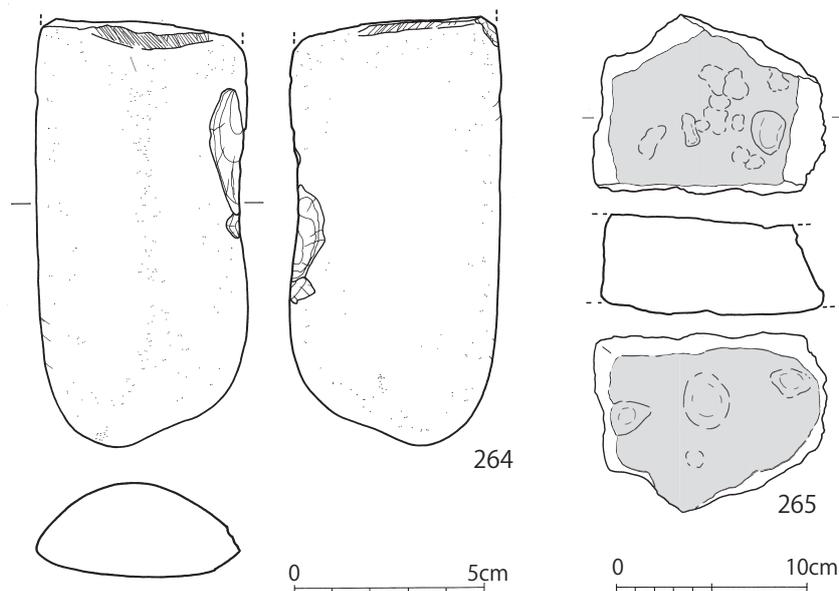
SH785 (第96図)

2区のはほぼ中央、先述のSH770のすぐ南西そばで検出した竪穴建物である。竪穴のちょうど中央あたりがグリッド交点で、G-4・G-5・H-4・H-5グリッドに位置する。南西側は縄文時代の竪穴建物SH981と、東側は古墳時代の土坑SK933と重複しており、SH981を切っている。SK933は本来SH785を切る土坑であるが、SH770と同様に検出がSH785の掘り下げ後であったために平面的には前後関係を押さえられていない。SH785の平面形状は隅丸方形形状であるが、やや形が歪で平行四辺形に近い形状となる。長辺3.41m、短辺3.28m、深さ0.48mを測る。埋土は7層認められ、1・2層は埋没後の掘り込みであるが、3～7層はレンズ状の堆積を示す。床面では中央部で台



第99图 SH871 出土遺物実測図① (1/3 · 1/2)

形状を呈する土坑1基と、5基のピットを検出した。土坑は丸みのある台形状の平面形状で、長径1.10m、短径0.89m、深さ0.39mを測る。埋土は上下2層に分かれ、いずれも微量ながら炭を含む。土坑の上位から検出面からは土器がまとまって出土している。主柱穴の配置はやや不揃いであるが、土坑の傍にある3基のピットと、北西隅部のピット1基の計4基が主柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器の他に土師器の細片が出土しているが、先述のとおり重複遺構を把握できないまま掘り下げており、土師器は重複遺構等からの混入の可能性が高い。遺構の時期は、晩期後葉（上菅生B式）に位置付ける。



第100図 SH871 出土遺物実測図② (1/2・1/4)

SH785出土遺物（第97図）

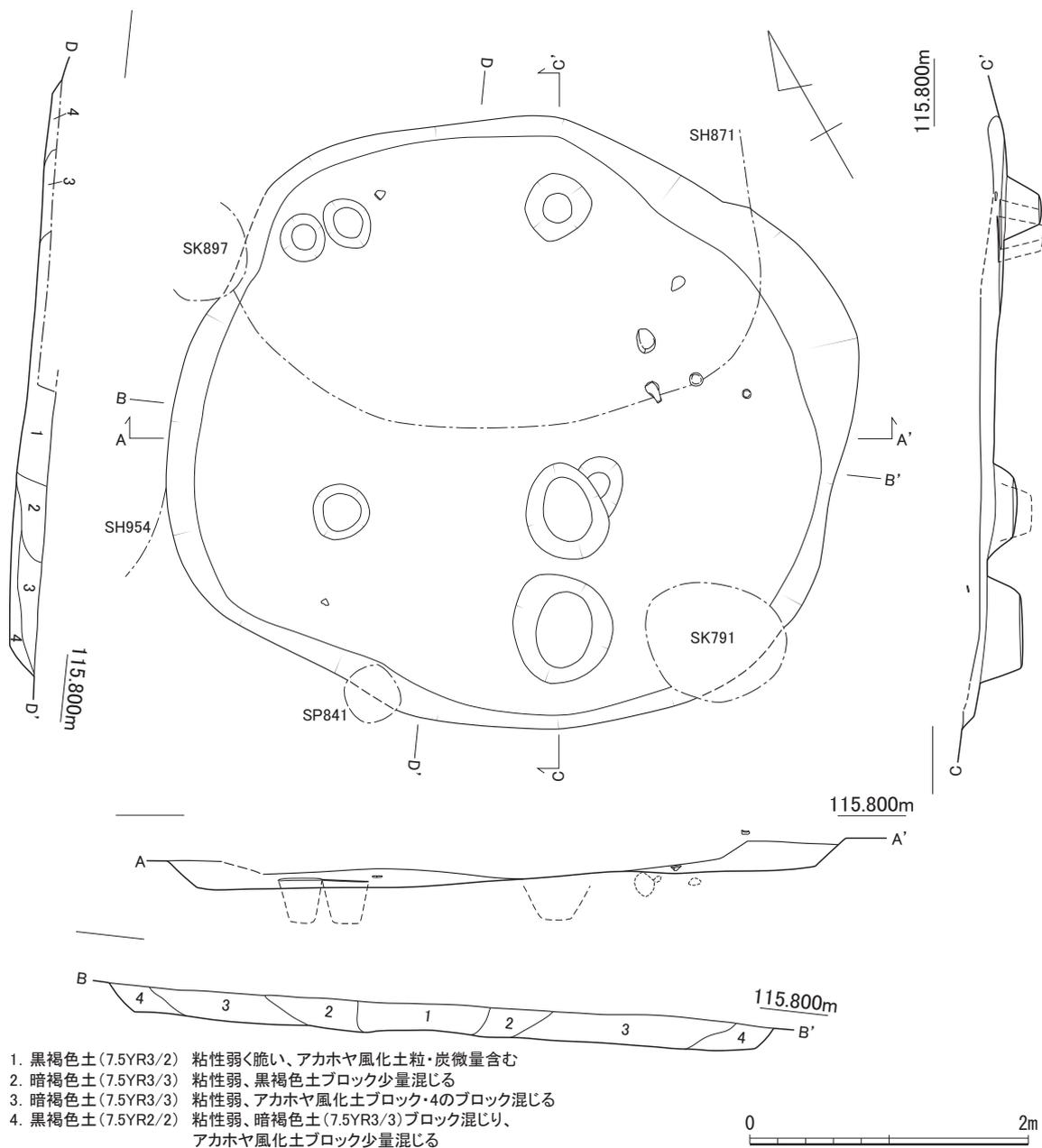
237～251は縄文土器である。237～240は無文を基調とする深鉢で、外反する口縁部の内側に1条の沈線を施す。238は口縁部が波状を呈する。これらは後期末葉に比定される。241は内傾する口縁部の外側に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、凸帯は丸みのある粘土紐状である。晩期後葉の上菅生B式に比定される。242・243は無文の深鉢である。244～247は浅鉢で、244は237～240と同様の特徴を持つことから後期末葉に属する。245・246は胴部中位で逆「く」字状に屈曲するもので、245は屈曲部上位に楕円形状の沈線文を施す。247はボウル形を呈する底部を有し、頸部で屈曲し外反する口縁へと続く。245～247は晩期後葉に比定される。248～251は底部で、いずれも周縁部が接地し、中央は浮く上げ底状となる。

SH871（第98図）

2区の北部、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。北半部は古墳時代後期の竪穴建物SH730に大きく切られ、南半部は縄文時代の竪穴建物SH915を切っている、また、南東隅部あたりは縄文時代の溝状遺構SD774に切られている。平面形状は隅丸方形を基調とするが、台形状に近い形状となる。長辺4.56m、短辺4.31m、深さは最大で0.38mを測る。埋土は5層確認され、うち1層は埋没後の掘り込みで、2～5層は中央に向かってレンズ状の堆積を示す。遺構は北壁際のやや西寄り土坑1基を、その他8基のピットを検出した。土坑は長径1.48m、短径1.05mの鶏卵形を呈し、深さ0.24mを測る。遺物は縄文土器。打製石斧、横刃型石器等の縄文時代の遺物の他に土師器の細片が出土しているが、土師器は重複するSH730からの混入の可能性が高い。遺構の時期は、晩期後葉（上菅生B式）に比定される。

SH871出土遺物（第99・100図）

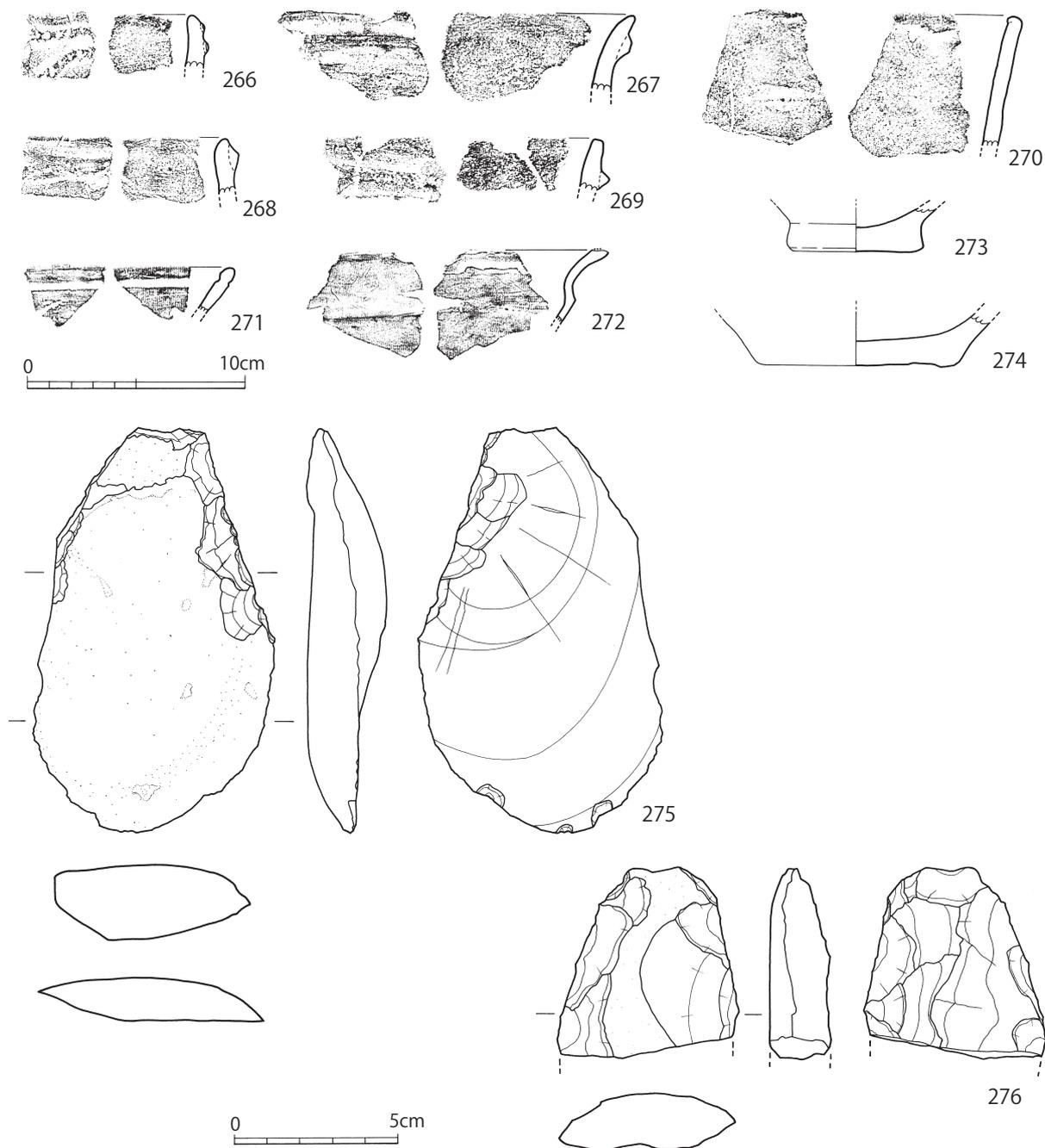
252～258は縄文土器である。252・253は無文を基調とする深鉢で、外反する口縁部の内側に1条の沈線を施



第 101 図 SH915 実測図 (1/50)

す。252 は波状口縁、253 は平縁である。これらは後期末葉に比定される。254 は厚手の器壁をもつ深鉢で、口縁部を外側に拡張するように引き延ばして凸帯状としている。無刻目凸帯文土器の上菅生 B 式に比定されるが、やや異質な感じを受ける土器で、古相を示すものか。255 は外面口縁下に 1 条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、復元口径 19.6 cm を測る。256 は浅鉢で、外反する口縁部に小さな無刻目凸帯を巡らせる。257 は口縁部と胴～頸部が接合しないが同一個体で、胴部中位で屈曲・内傾し、頸部から口縁部が強く外反する浅鉢である。口縁端部は上方に折れ、外面に 1 条の沈線と、内面には沈線状の段が付く。258 は浅鉢の底部であろう。

259～265 は石器である。259 は安山岩の円礫を素材とする叩石で、上下両面及び側縁部に敲打痕が残る。260 は安山岩を素材とし、下辺に連続する微細な剥離痕を有するスクレイパーである。261・262 は打製石斧で、いずれも背面に自然面を残し、周縁部に調整剥離を施す。石材はいずれも安山岩である。263 は下辺に刃部調整の剥

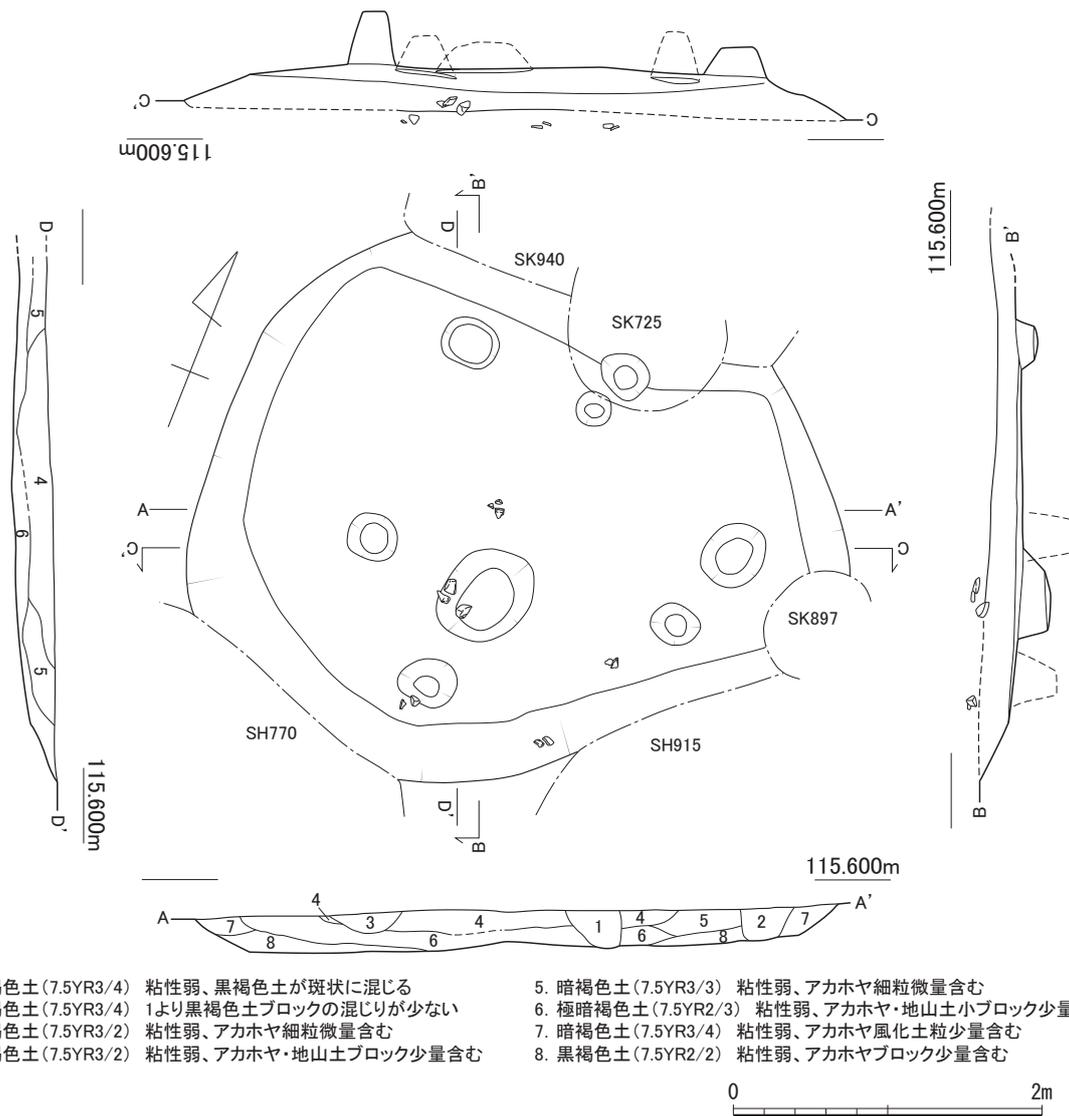


第102図 SH915 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

離を施すもので、横刃型石器であろう。石材は頁岩である。264は蒲鉾形を呈する素材礫にわずかに打欠きを施すもので、打製石斧の未製品であろう。石材は砂岩か。265は石皿の破片で、上下両面に被熱の痕跡が認められる。石材は礫質安山岩である。

SH915 (第101図)

2区の中央北東寄り、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。北半部は縄文時代の竪穴建物SH871に切られ、西側では縄文時代の竪穴建物SH954を切り、南隅部では古墳時代の土坑SK791に切られている。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺4.86m、短辺4.52m、深さ0.43mを測る。埋土は4層に分層され、中央に向かってレンズ状

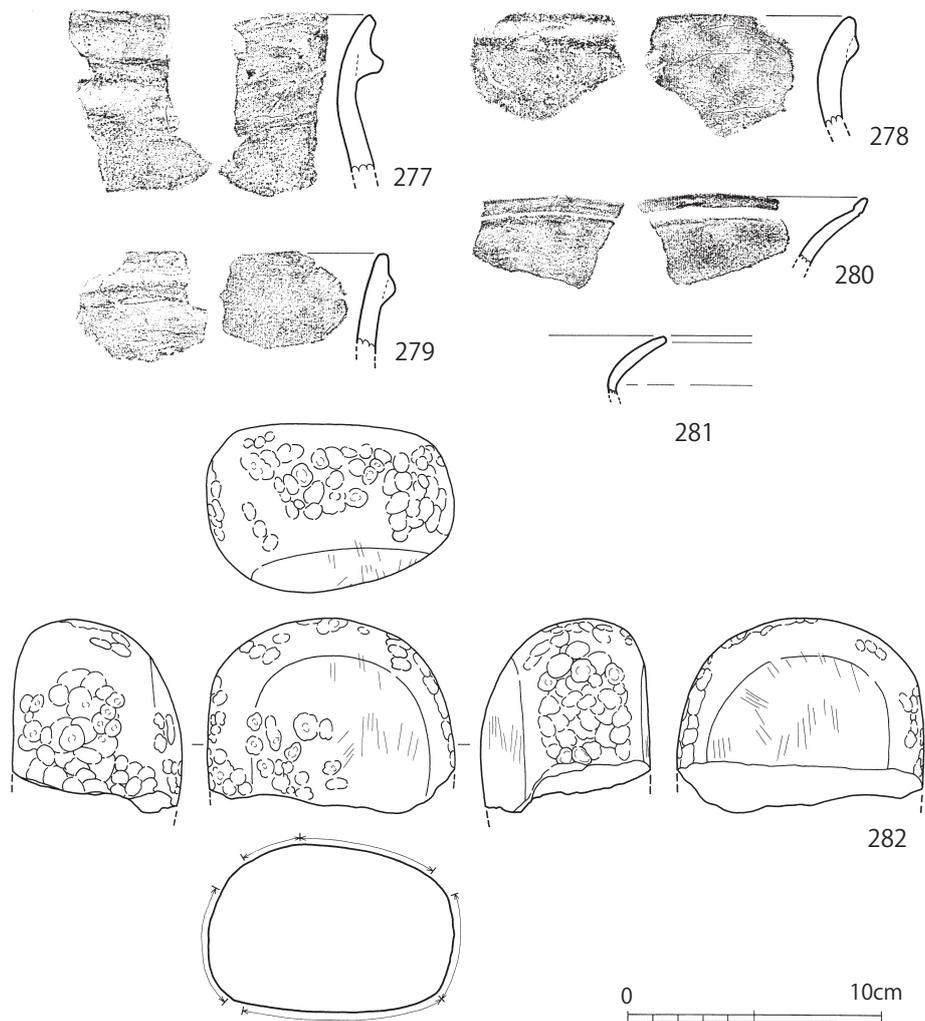


第103図 SH954 実測図 (1/50)

の堆積状況を示す。床面では、南部で2基の小土坑が横並びで検出され、また5基のピットを確認できた。内4基のピットが方形に並ぶので、これが主柱穴となる可能性が高い。遺物は縄文土器、が主体で、石器では打製石斧が出土している。他に土師器の小片が少量みられるが、これは混入したものである。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉（上菅生B式）期に比定される。

SH915出土遺物（第102図）

266～274は縄文土器である。266は内湾する口縁部をもち、外面に2条の刻みを施す隆帯が見られる。中期の船元式であろうか。267～269は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせる深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。267は凸帯の断面形状が台形状を呈する。270は無文の深鉢である。271・272は浅鉢で、271は外反する口縁の内外面にそれぞれ1条の沈線を施す。272は頸部で屈曲し口縁部が大きく外反するもので、口縁端部は肥厚する。273・274は深鉢の底部である。275は安山岩の縦長剥片を素材とし、上部に調整剥離を施す。打製石斧の未製品であろう。276は打製石斧で、下半部が欠失する。石材は砂岩である。



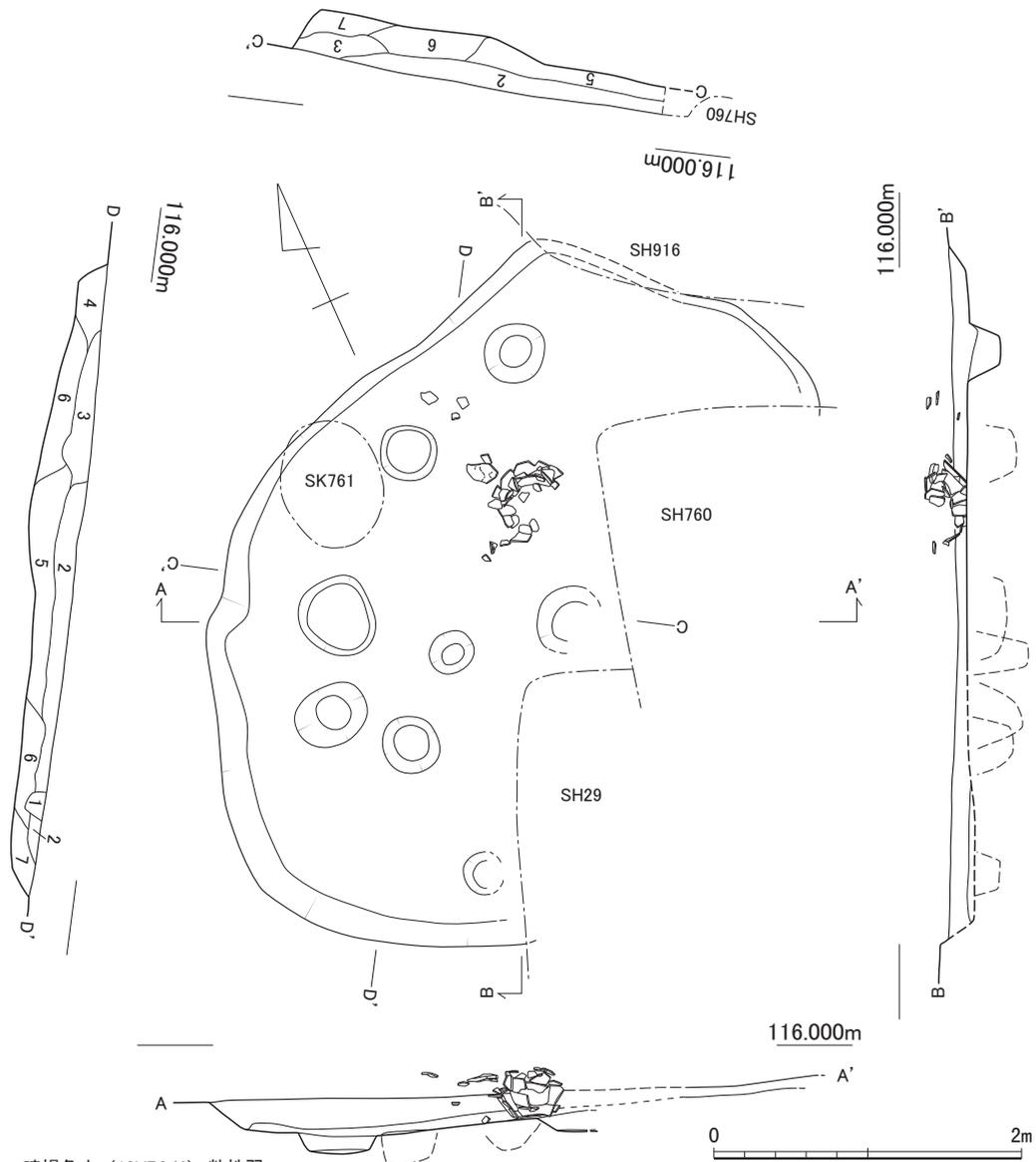
第104図 SH954出土遺物実測図(1/3)

SH954 (第103図)

2区の中央北寄り、G-5グリッドで検出した竪穴建物である。全体に重複が激しく、南は縄文時代の竪穴建物SH770に、南東は縄文時代の竪穴建物SH915及び時期不明のピットSP897に、北は古代の竪穴状遺構SK940と土坑SK725にそれぞれ切られている。そのため平面形状は明確ではないがやや歪な方形を基調とするとみられ、長辺4.36m、短辺3.65m以上、深さ0.38mを測る。埋土は8層に分層されるが、うち1~3層は竪穴埋没後の掘り込みで直接の関係はない。4・5層の上層と、下層の6~8層に大別される。床面では小土坑1基とピット7基を検出した。ピットは配置が不規則で、支柱穴を特定できない。遺物は縄文土器、叩石、土師器の小片が出土している。遺構の切り合いが激しいことから、土師器は重複遺構からの混入であろう。遺構の年代は晩期後葉(上菅生B式)期で、その中でも古手である可能性がある。

SH954出土遺物(第104図)

277~280は縄文土器である。277~279は深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける特徴から、晩期後葉の上菅生B式に比定される。277は凸帯が高く、断面形状は台形状を呈する。上菅生B式の中でも古相を示す可能性が高い。280は浅鉢で、外反する口縁部の端部を上方に曲げ、その屈曲部の内外面に沈線を施す。後期



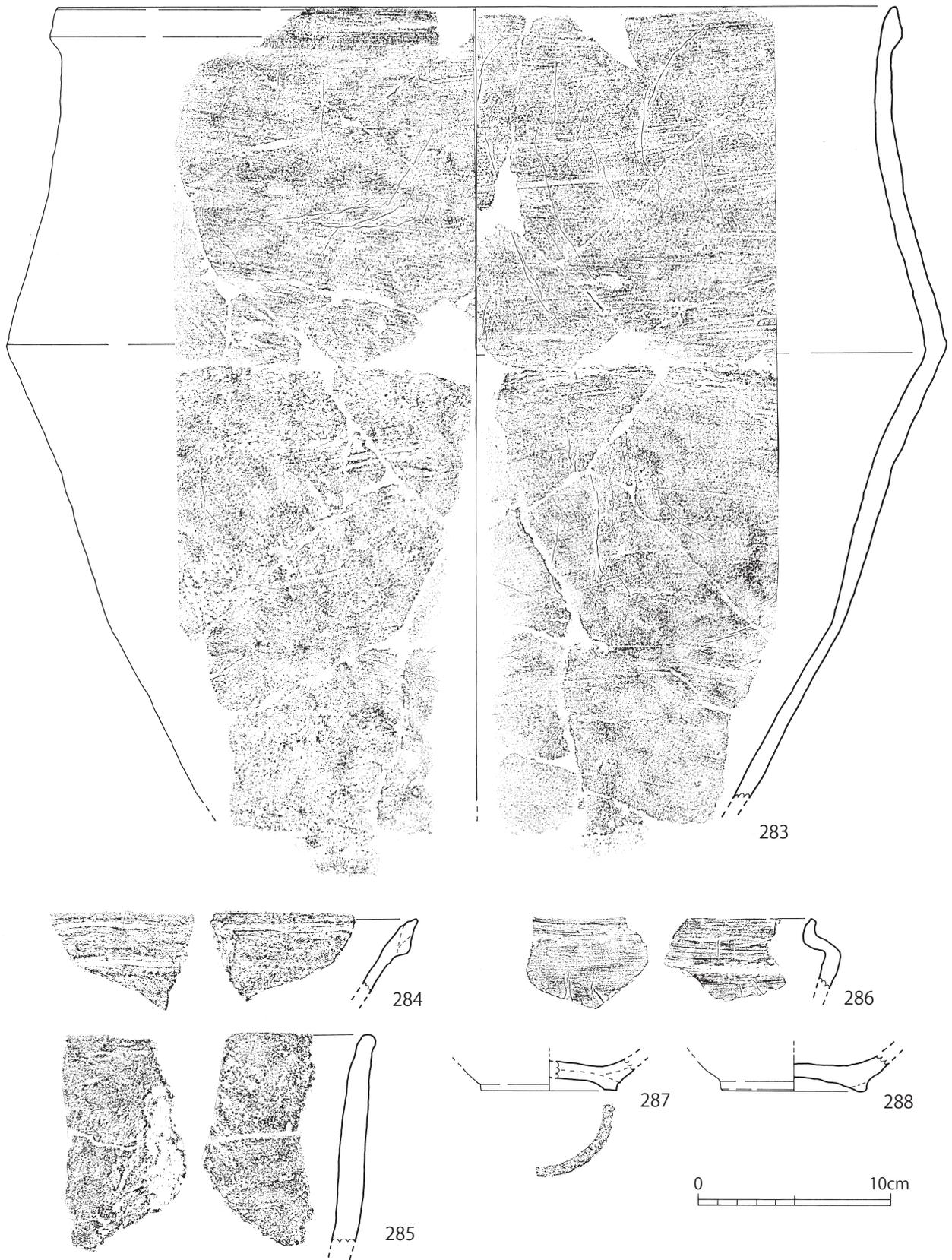
1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黒褐色土ブロック少量含む
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、黒褐色土ブロック少量・アカホヤ風化土微量含む
4. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、アカホヤブロック少量含む
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、暗褐色土ブロック・アカホヤ風化土少量含む
7. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化土少量・炭微量含む

第105図 SH955 実測図 (1/50)

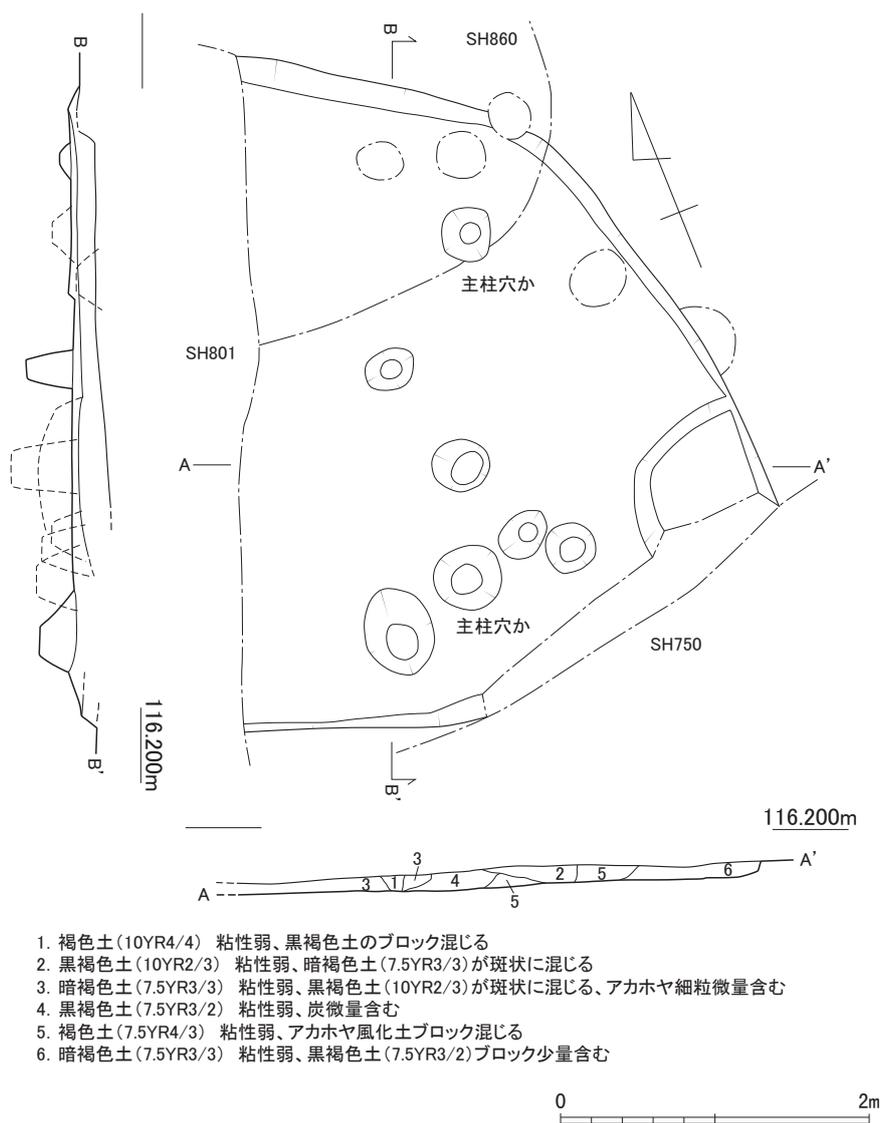
末葉に位置付けられる。281は古墳時代前期の土師器の甕で、混入したものであろう。282は砂岩の円礫を素材とした叩石・磨石で、上下両面の広い面を磨面として、側縁部を叩石としている。磨面には無数の擦痕が、側縁には敲打痕が顕著に認められる。

SH955 (第105図)

2区の南部、H-4・H-5・I-5グリッドで検出した竪穴建物である。東側及び南辺の東半部を古墳時代後期の竪穴建物SH29・SH760に、北は古墳時代後期の竪穴建物SH916に、北西の一端を古墳時代の土坑SK761にそれぞれ切られている。平面形状は北西隅部が折れているが方形を基調とするとみられ、長辺4.73m以上、短辺2.75m以上、深さ0.46mを測る。埋土は7層に分層されるが、1層は竪穴埋没後の掘り込みで、2・3層の上層と、4~7層



第 106 图 SH955 出土遺物実測図 (1/3)

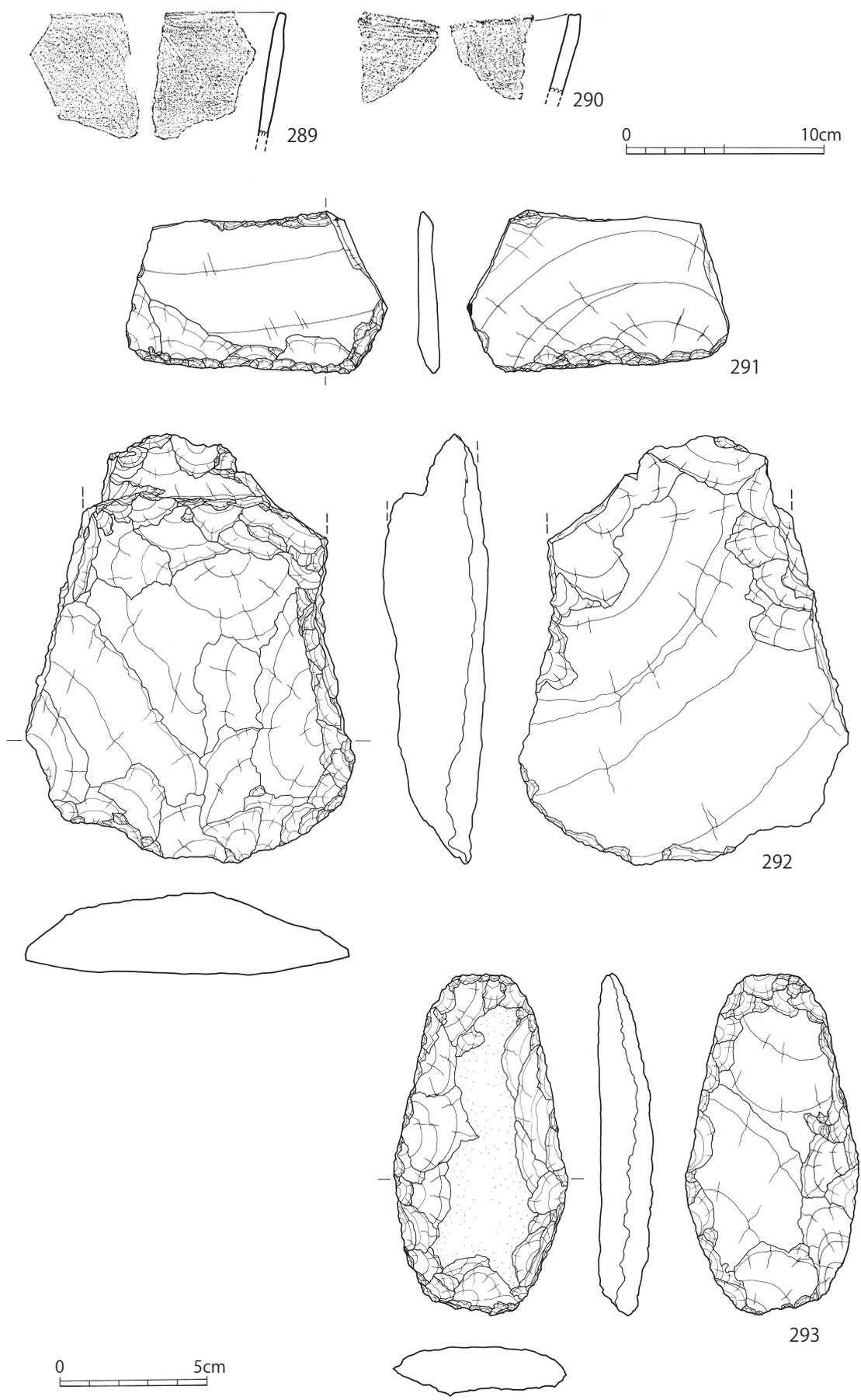


第 107 図 SH956 実測図 (1/50)

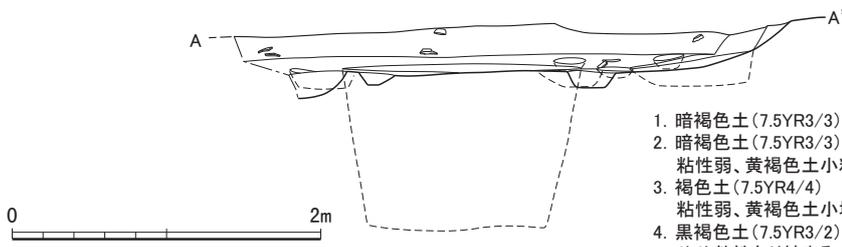
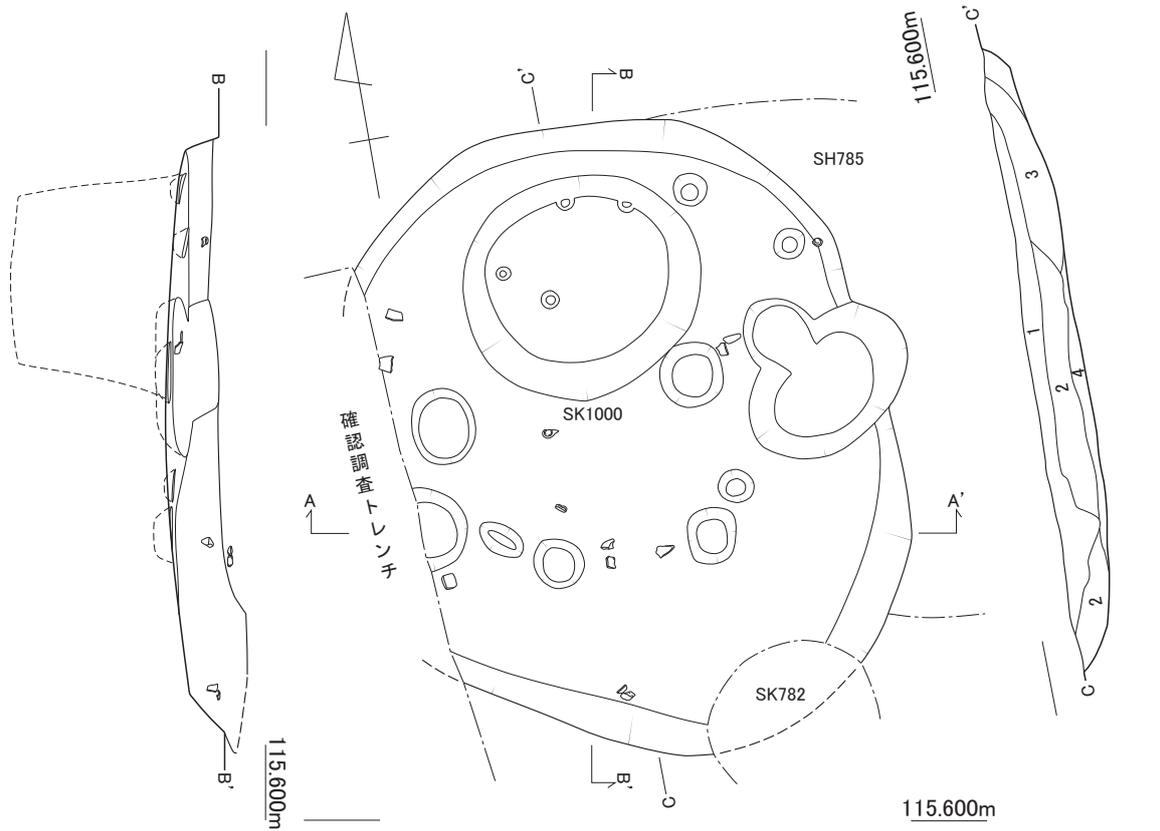
の下層に大別される。床面の中央やや北寄りでは、第 106 図の 283 の深鉢 1 個体がまとまって出土した。底部を欠いているが、底部を意図的に打ち欠いた深鉢を正位に埋設した埋甕の可能性はある。床面では 8 基のピットを検出しているが、主柱穴を特定できない。遺物は縄文土器の他に弥生土器、土師器が少量出土しているが、これらは混入の可能性が高い。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉（上菅生 B 式）に比定される。

SH955 出土遺物（第 106 図）

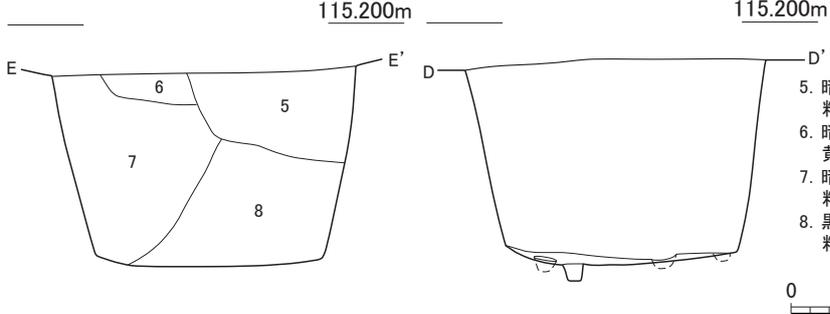
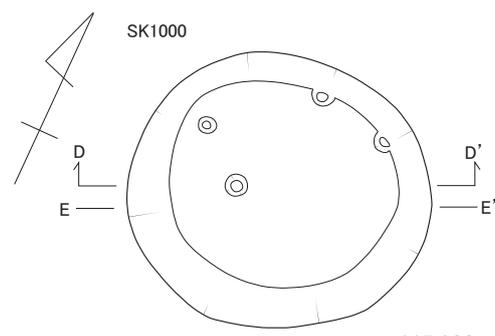
283～288 は縄文土器である。283 は埋甕に用いられた深鉢で、底部を欠く。胴部中位で屈曲し、内傾する頸部から口縁部は軽く外反する。口縁部外面には断面三角形の無刻目凸帯を巡らせる。284 は外反する口縁に無刻目凸帯を貼り付ける。これらは上菅生 B 式に比定される。285 は内外面ナデ調整の無文の深鉢で、器壁が厚く早期前半の無文土器の可能性が高い。286 は浅鉢で、屈曲する肩部から口縁部が外に短く折れる。晩期後葉に位置付けられる。287・288 は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し中央は凹む上げ底となる。



第108図 SH956 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

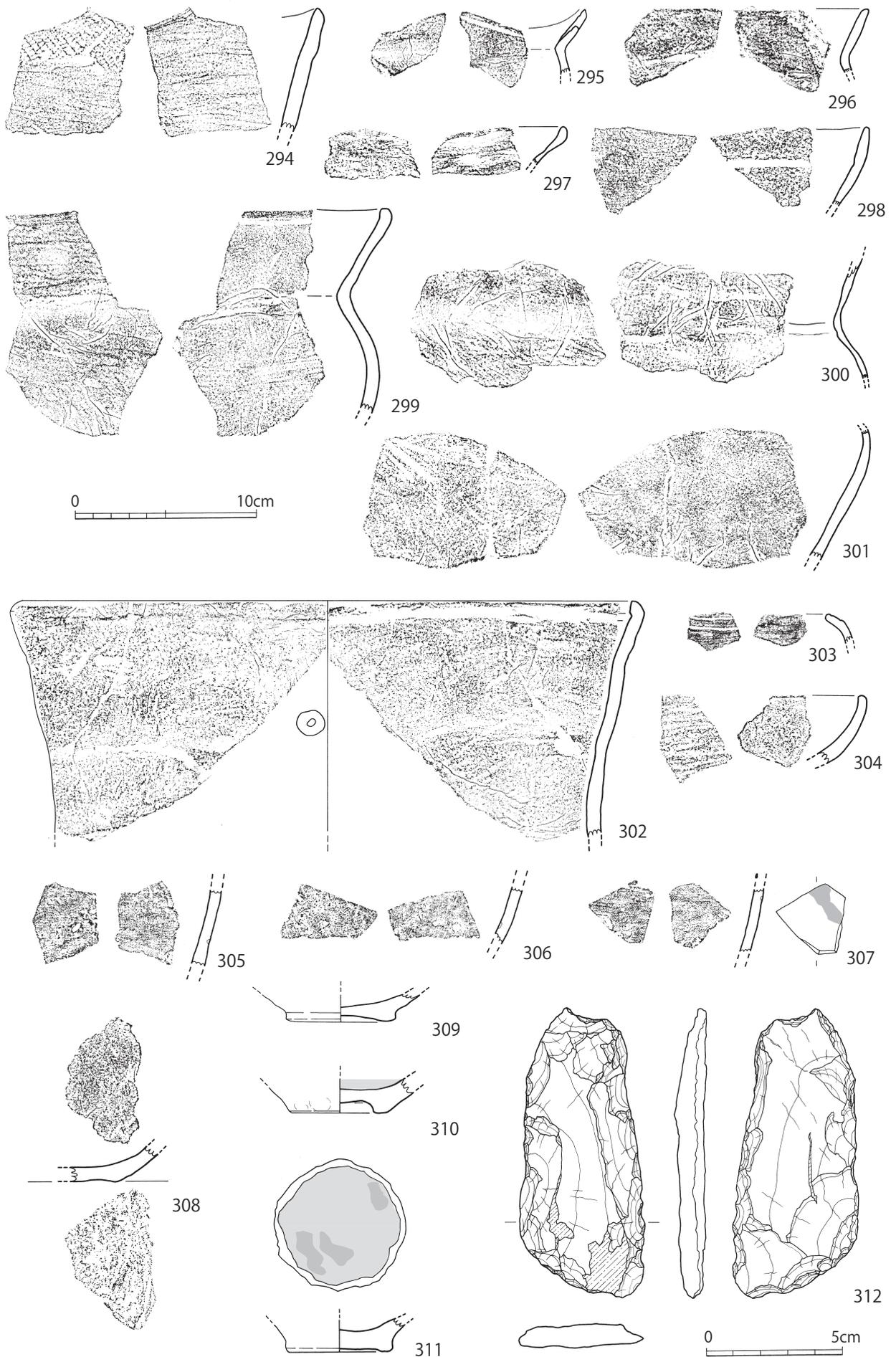


1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3)
粘性弱、黄褐色土小粒少量・炭微量含む
3. 褐色土 (7.5YR4/4)
粘性弱、黄褐色土小塊・小粒少量含む
4. 黒褐色土 (7.5YR3/2)
やや粘性あり締まる、黄褐色土小粒少量含む

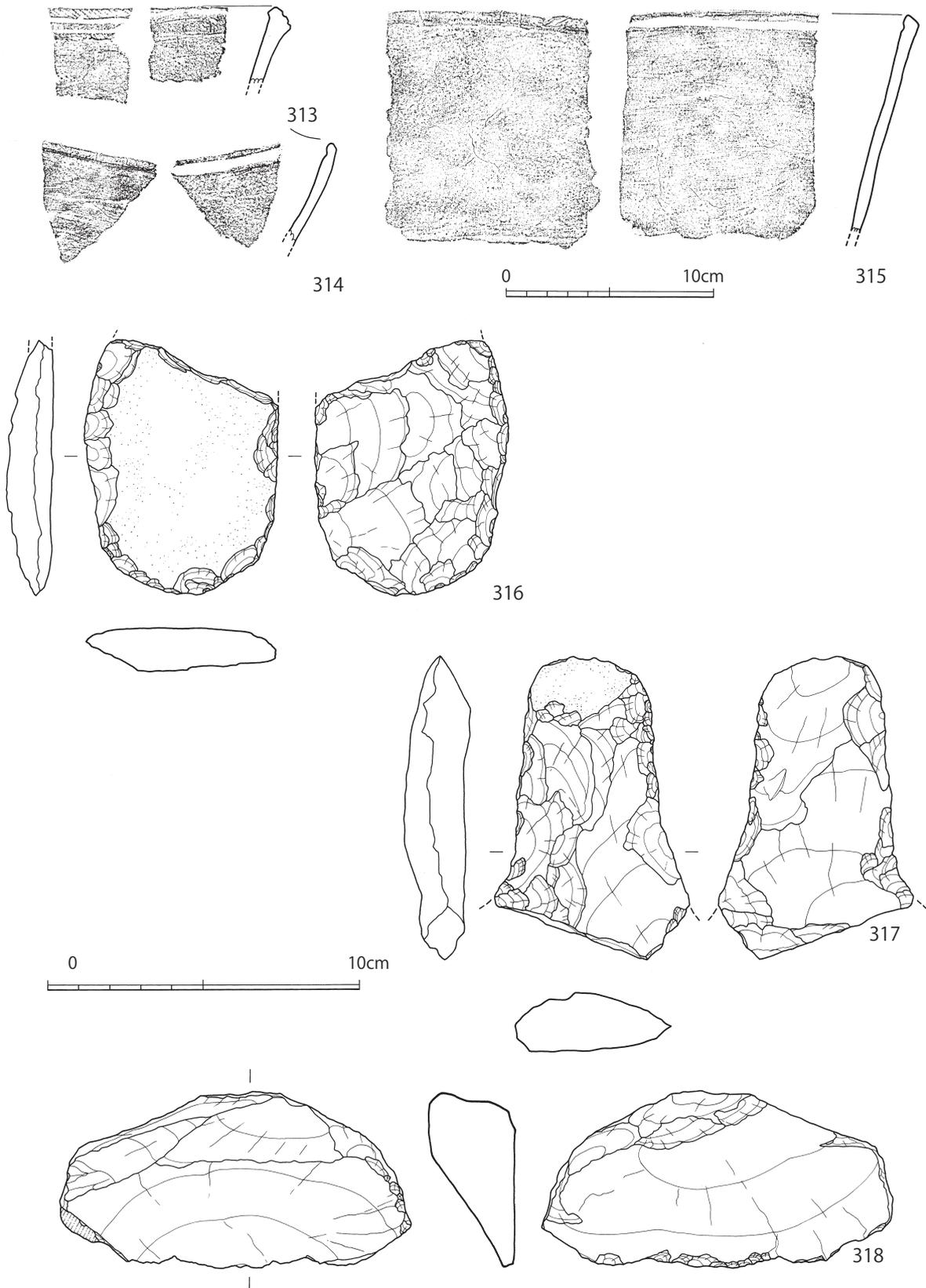


5. 暗褐色土 (7.5YR3/3)
粘性弱、黄褐色土小塊少量含む
6. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、
黄褐色土小塊混じり、黒褐色土微量含む
7. 暗褐色土 (7.5YR3/3)
粘性あり締まる、黄褐色土ブロック多量含む
8. 黒褐色土 (7.5YR2/3)
粘性あり締まる、黄褐色土小塊混じる

第109図 SH981 実測図 (1/50・1/30)



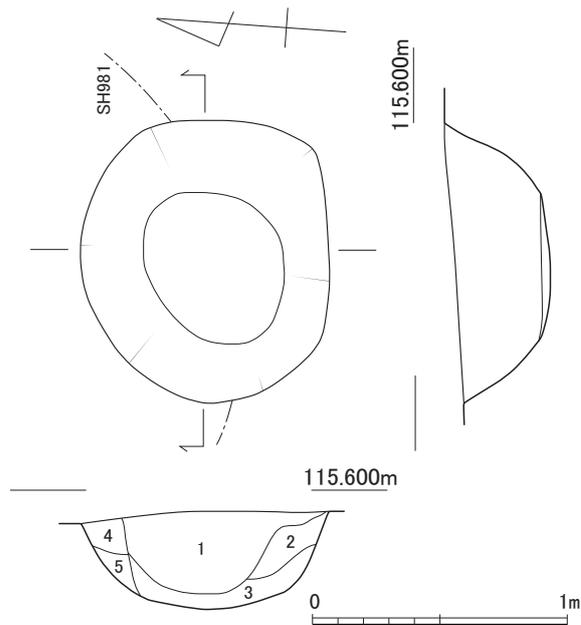
第 110 图 SH981 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



第 111 図 SH981 (SK1000) 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH956 (第107図)

2区の中央南東側、H-5・H-6グリッドで検出した
 竪穴建物である。北は弥生時代の竪穴建物SH860
 に、西側と南東部をそれぞれ古墳時代後期の竪穴
 建物SH801とSH750に切られている。平面形状
 は東側がはみ出した歪な形状をとり、楕円形の可
 能性がある。長辺4.47m、短辺3.56m以上、深さ
 0.26mを測る。埋土は6層に分層されるが、1・2
 層は竪穴埋没後の掘り込みで、3~6層がレンズ状
 に堆積する。床面では南東部で1基の土坑と、10
 基のピットを検出している。主柱穴は決しがたい
 が、全体としては4本柱穴の可能性が高く、位置
 的に2基を推定している。遺物は縄文土器、土師
 器、打製石斧、スクレイパーが出土している。遺
 構の時期は、後期後葉~末葉に比定する。

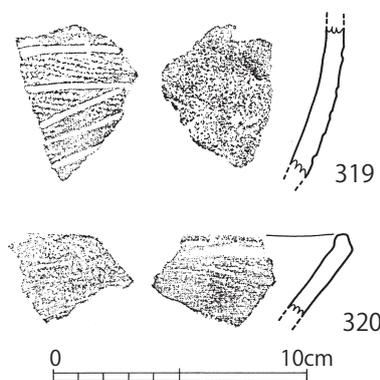


1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小ブロック少量・炭微量含む
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土が斑状に混じる
3. 黒褐色土(7.5YR2/2) やや粘性あり、黄褐色土小粒少量含む
4. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、炭微量含む
5. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒微量・炭微量含む

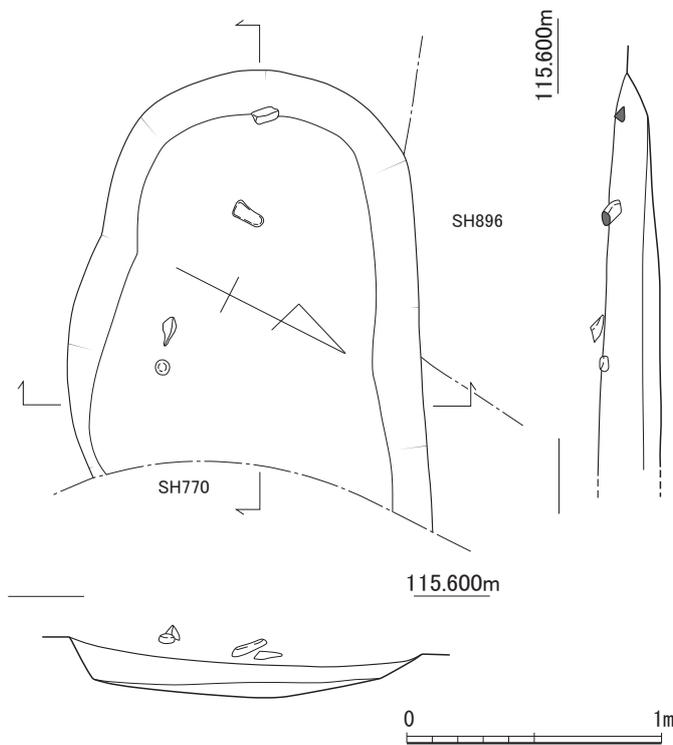
第112図 SK782 実測図 (1/30)

SH956出土遺物 (第108図)

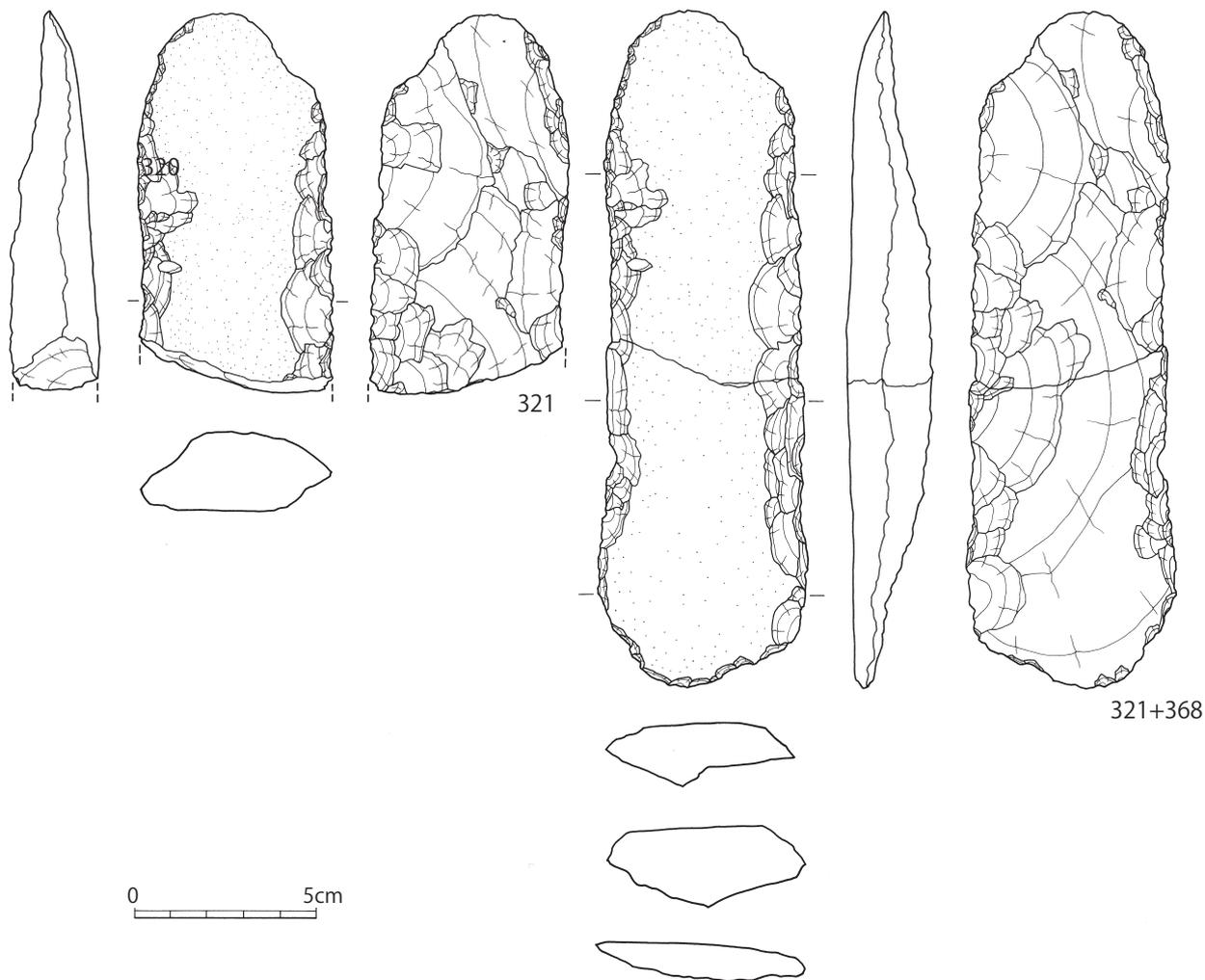
289・290は縄文土器である。いずれも無文の深
 鉢で、290は波状口縁となる。後期後葉~末葉頃に
 比定されようか。291~293は石器である。291は
 サヌカイトの横長剥片を素材としたスクレイパー
 で、打点側を刃部として調整剥離を施す。292・
 293は打製石斧である。292は上部を欠失するが大
 型品とみられる。293は背面に自然面を残す剥片
 を素材とし、周囲に細かい調整剥離を施す。石材
 は292が凝灰岩、293はデイサイトである



第113図 SK782 出土遺物実測図 (1/3)



第114図 SK812 実測図 (1/30)

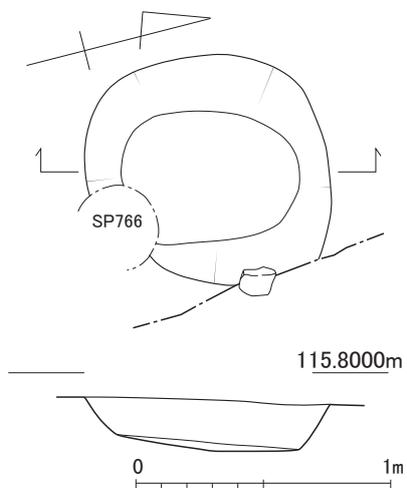


第115図 SK812 出土遺物実測図 (1/2)

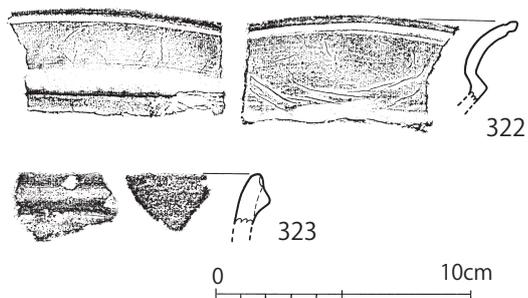
SH981・SK1000 (第109図)

2区の中央西寄り、G-4・H-4グリッドで検出した竪穴建物及び土坑である。

SH981は東半部が縄文時代の竪穴建物SH785に大きく切られ、南の一部は縄文時代の土坑SK782に切られ、西端部は確認調査時のトレンチによって失われている。平面形状は略楕円形



第116図 SK898 実測図 (1/30)



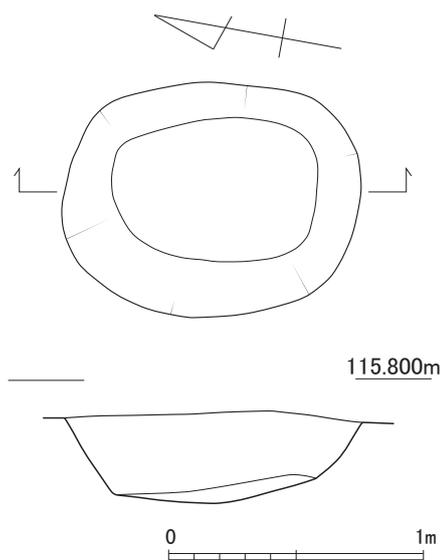
第117図 SK898 出土遺物実測図 (1/3)

を呈し、長径 4.27 m 以上、短径 3.20 m 以上、深さ 0.54 m を測る。埋土は 4 層に分層され、1 層は暗褐色土、2 層は黄褐色土小粒を少量と微量の炭を含む暗褐色土、3 層は黄褐色土の小ブロックと小粒が混じった褐色土、4 層がやや粘性のある黒褐色土である。内部の掘り込みは丸みがあり、壁の立ち上がりも緩い。床面では、北壁際で略円形の土坑 SK1000 と、小土坑やピットを検出している。遺物は多量の縄文土器と打製石斧が出土している。遺構の時期は、後期中～後葉に比定される。

SK1000 は SH981 の床面で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径 1.60 m、短径 1.46 m、深さ 1.10 m を測る。埋土は 4 層に分層され、いずれも地山ローム層に由来する黄褐色土の小ブロックや小粒を含む土で一気に埋められたものとみられる。床面は平坦で、4 基の小ピットを検出している。遺構の機能としては貯蔵穴と判断される。遺物は縄文土器や石器が出土しているが、出土している土器は後期後葉のもので、SH981 と同じ型式で両者に時期差を認め難い。SK1000 の時期は SH981 より後出することはないが、これが SK1000 の埋没後に SH981 が構築されたのか、あるいは SH981 と SK1000 が同時共存したものかは判断が難しい。ただし、竪穴建物の床面に貯蔵穴が穿たれていると、居住スペースが大きく制約を受けることから、両者の同時共存は可能性としては低いと考えるのが自然であろう。上田原東遺跡では竪穴建物と重複した貯蔵穴の例がいくつかあり、3 区の SH280 は竪穴建物 SH280B を切って貯蔵穴 SK280A が穿たれ、また同 3 区の貯蔵穴 SK516 はその埋没後に弥生時代の竪穴建物 SH260 が構築されているように、竪穴建物と貯蔵穴が同時共存している例はない。こうした点を勘案すると、本例も SK1000 の埋没後に SH981 が構築された可能性を考えたい。

SH981 出土遺物 (第110図)

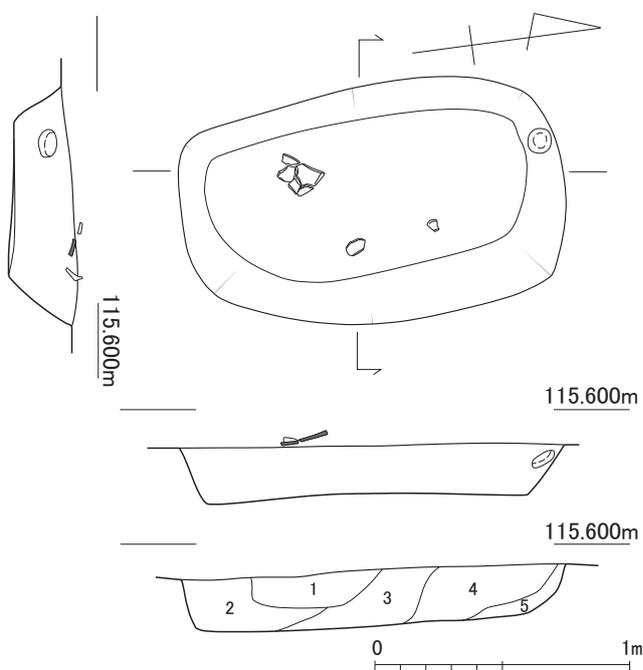
294～311 は縄文土器である。294 は口縁部が小さい波状を呈するもので、口縁部外面に端節縄文 RL を施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものの可能性が高い。295～301 は外に開く口縁から頸部で屈曲し、胴部が球状に膨らむ器形と



第 118 図 SK950 実測図 (1/30)

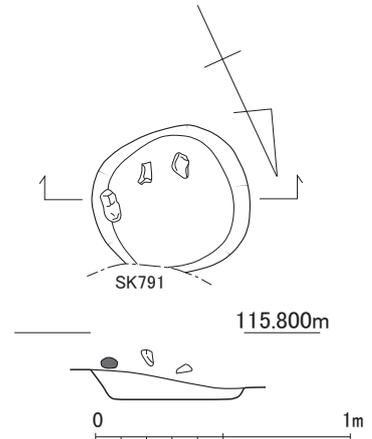


第 119 図 SK950 出土遺物実測図 (1/3)

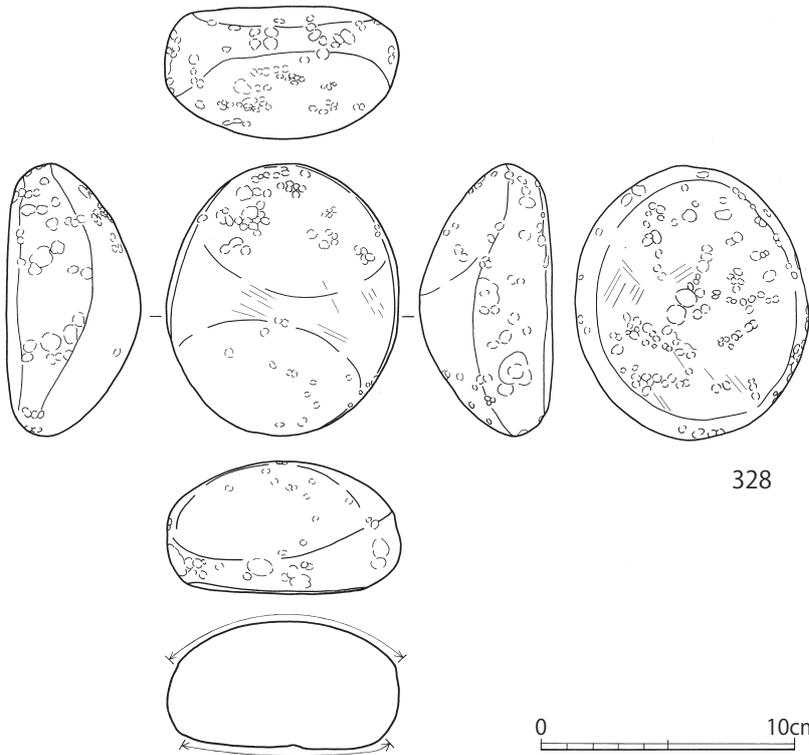
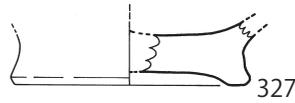
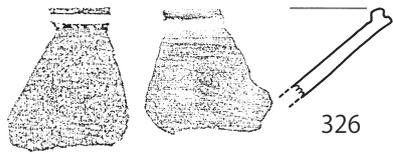


1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
2. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性弱、黄褐色土小粒多量含む
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒微量含む
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり硬く締まる、アカホヤ小粒微量含む

第 120 図 SK970 実測図 (1/30)



第122図 SK1053 実測図 (1/30)

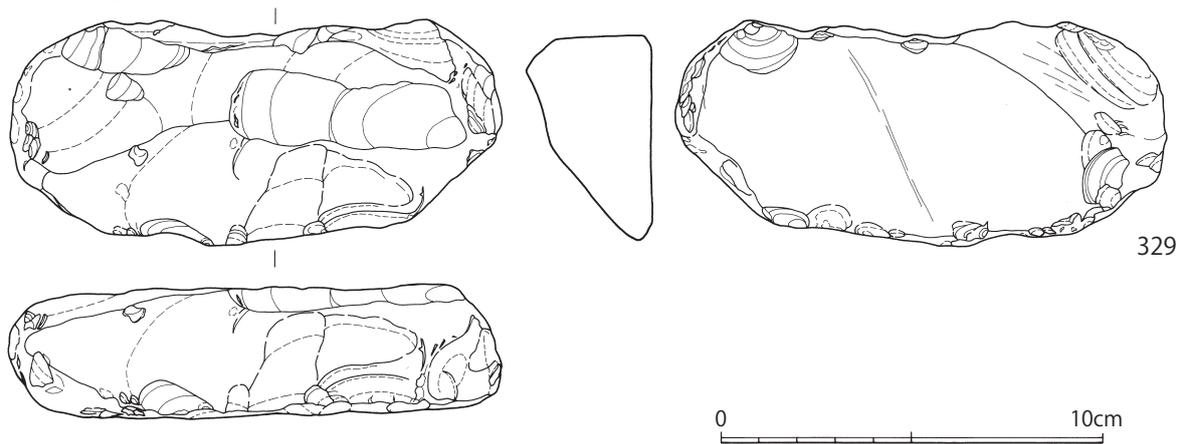


第121図 SK970 出土遺物実測図 (1/3)

なる深鉢で、295・298・299は口縁部内面に1条の沈線を施す。後期中葉の太郎迫式に該当しよう。302は口縁部内面に1条の沈線を施す深鉢で、頸部の屈曲はみられない。後期後葉に比定されよう。303は内湾する口縁部で、外面に2条の細沈線を施す。注口土器であろう。304はボウル形の浅鉢である。305・306は深鉢、307は浅鉢の胴部破片で、それぞれ種子状の圧痕が認められる。いずれも分析を行ったが、圧痕については不明であった。308～311は底部で、底面周縁が接地し中央は凹む上げ底となる。312は打製石斧で、周縁部に調整剥離を密に施す。石材は千枚岩である。

SK1000出土遺物 (第111図)

313～315は縄文土器である。313は口縁部が断面三角形状に肥厚し、外面に2条の平行沈線と、端節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。314は波状口縁の深鉢で、内面口縁直下に1条の沈線を施す。315は平口縁の深鉢で、内面口縁直下に1条の沈線を施す。これらは後期中葉～後葉に位置付けられる。316～318は石器である。316は打製石斧で、背面に自然面を残す剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。石材はデイサイトである。317は打製石斧に似るが、下部が開く形状をとることから十字形石器の可能性もある。石材は砂岩である。318は二次加工剥片で、デイサイトの横長剥片の下部に連続した微細な剥離が残る。



第 123 図 SK1053 出土遺物実測図 (1/2)

SK782 (第112図)

2区の中央南西寄り、H-4グリッドで検出した土坑である。土坑の中ほどから北側は縄文時代の竪穴建物SH981を切っている。平面形状は略円形を呈し、長径1.12m、短径0.98m、深さ0.47mを測る。掘り込みは丸みを持ち、床面中央は緩く凹む。埋土は5層を確認しており、4・5層を1～3層が掘り込んで切っている状況が窺える。遺物は縄文土器の他に、少量ながら土師器の細片が出土している。出土遺物及びSH981との切り合い関係から、後期中葉～後葉の遺構と判断する。

SK782出土遺物 (第113図)

319・320は縄文土器である。319は胴部下半の文様帯部で、区画沈線内に縄文を施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものであろう。320は外に開口口縁部で内面に1条の沈線を施す。口縁は波状口縁である。後期中葉の太郎迫式に比定されよう。

SK812

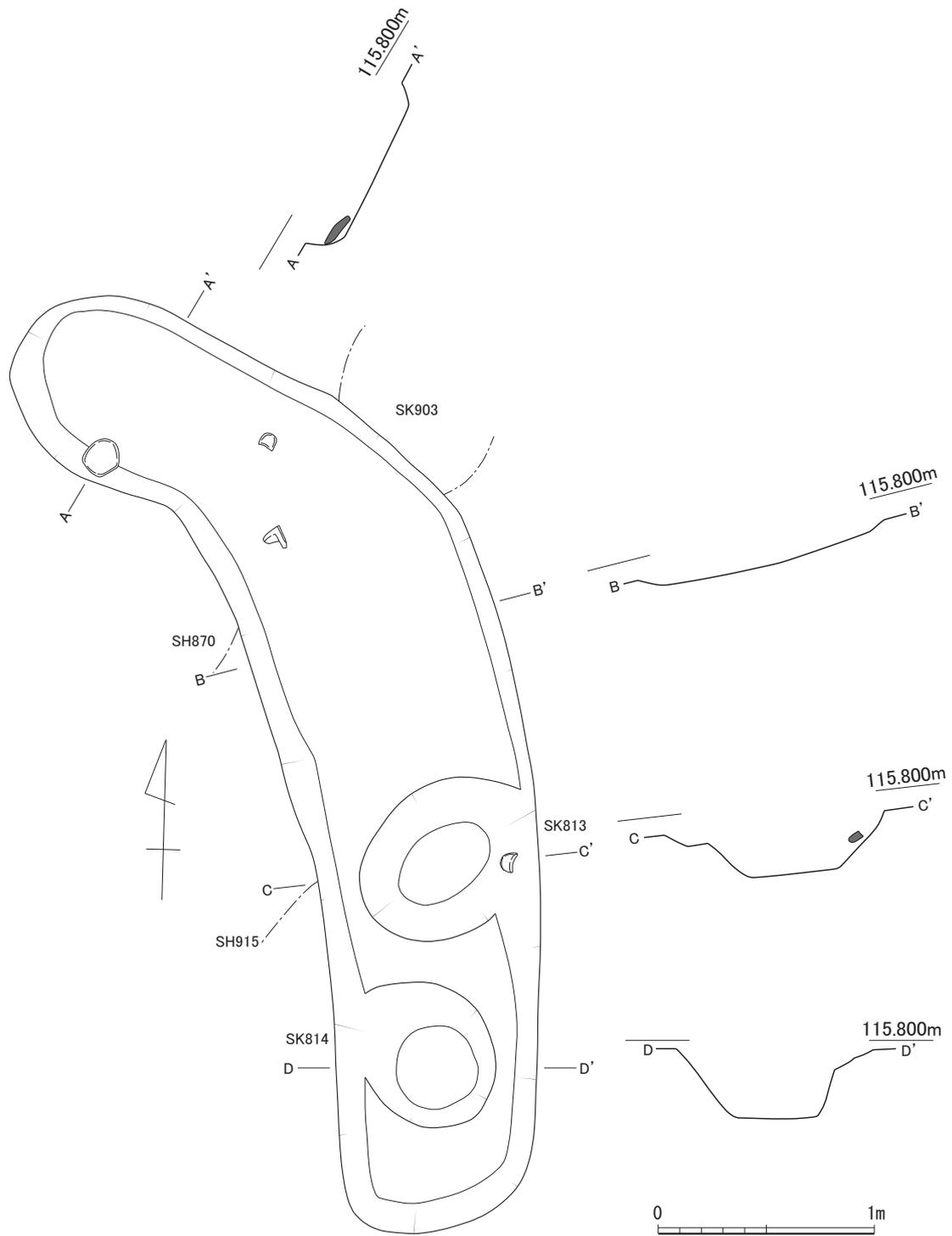
2区の中央西寄り、G-4・G-5グリッドで検出した土坑である。東側は縄文時代の竪穴建物SH770に切られているため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は楕円形を呈すると見られ、長径1.60m以上、短径1.38m、深さ0.26mを測る。遺物は縄文土器、打製石斧、土師器の小片が出土している。特筆されるのは打製石斧で、SK812から出土した破片と、古墳時代後期の竪穴建物SH29から出土した破片が接合している(第115図)。SH29はSK812とは12～13mほど離れた位置関係にある。遺構の時期は縄文時代であるが、年代比定出来る遺物に乏しく詳細な時期までは明らかにできない。

SK812出土遺物 (第115図)

321は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、側縁に調整剥離を施す。上述のとおりSH29から出土した破片と接合関係が認められ、接合図を横に示した。接合した状態で完形となり、長さ18.5cm、幅5.7cm、厚さ2.3cm、重量264.0gを測る。

SK898 (第116図)

2区の中央東側、G-6グリッドの調査区東壁際で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、一端をピットSP766に切られている。遺構の規模は長径0.99m、短径0.91m、深さ0.24mを測る。遺物は縄文土器が出土している。出土遺物から、遺構の時期は晩期後葉(上菅生B式)に比定される。



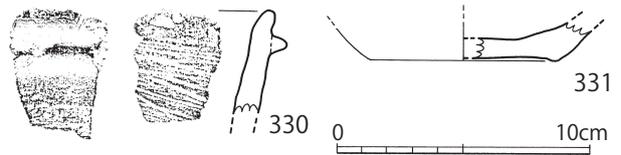
第124図 SD774 実測図 (1/30)

SK898出土遺物 (第117図)

322・323は縄文土器である。322は浅鉢で、胴部で屈曲した後、口縁部が外反し、口縁の内外面に1条の沈線を施す。後期後葉に比定される。323は深鉢で、口縁に接して外面に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。晩期後葉の上菅生B式に比定される。なお、口縁部に種子状の圧痕が認められたためその分析を行ったが、圧痕については不明であった。

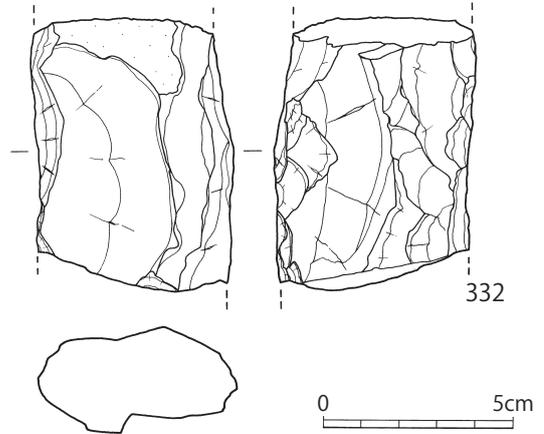
SK950 (第118図)

2区の南部中央寄り、H-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径 1.20 m、短径 0.93 m、深さ 0.36 m を測る。遺物は少量ながら縄文土器が出土していることから、縄文時代の土坑とみられ、その時期は晩期後葉（上菅生B式）に比定されよう。

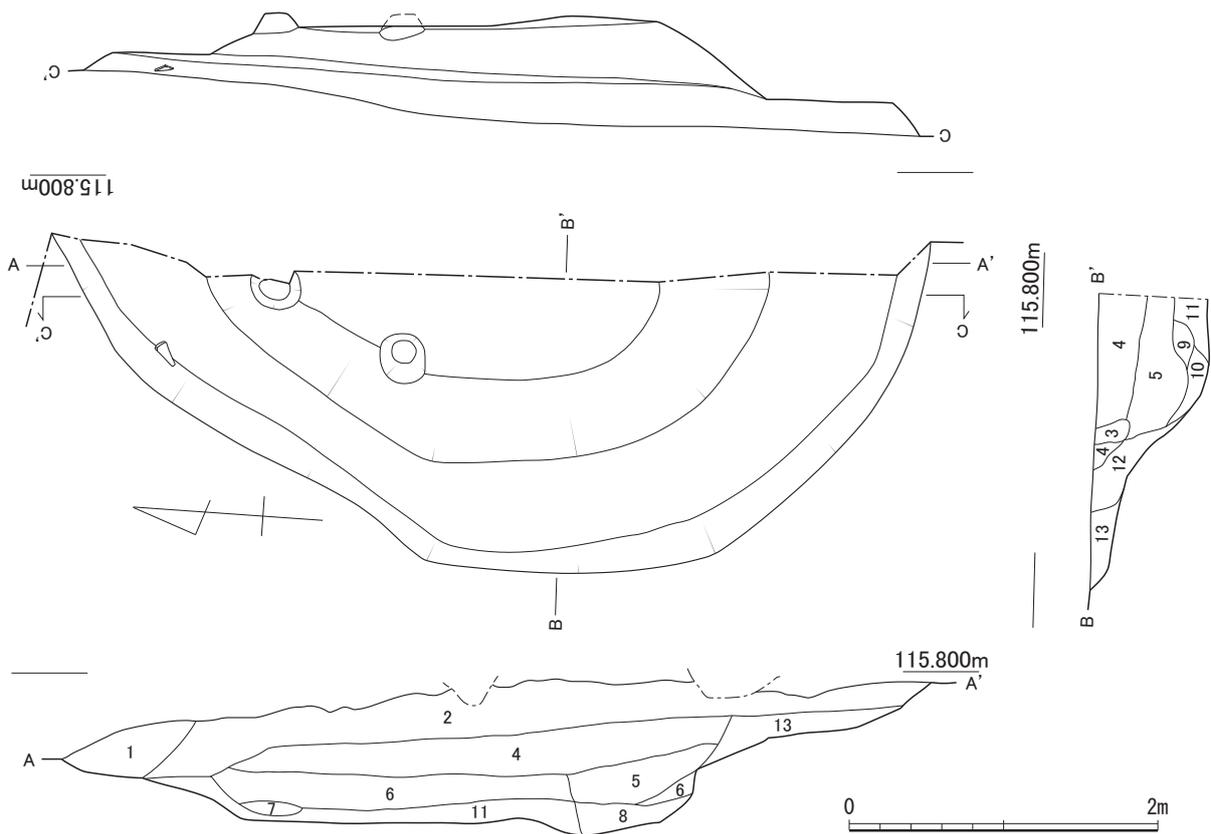


SK950出土遺物 (第119図)

324 は縄文土器である。外反する口縁部の外面に、断面三角形の無刻目凸帯を 1 条貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。



第 125 図 SD774 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

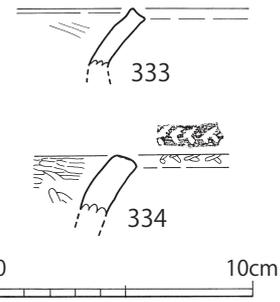


- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小塊・地山土小粒・炭少量含む | 8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、地山土ブロック多量含む |
| 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、灰黄褐色土小塊少量含む | 9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土ブロック少量含む |
| 3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土細粒微量含む | 10. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、地山土小粒多量含む |
| 4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む | 11. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、地山土ブロック混じり |
| 5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小塊混じり | 12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、暗褐色土混じり、炭微量含む |
| 6. 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり、地山土小粒混じり | 13. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒少量・炭微量含む |
| 7. 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり、地山土小粒少量含む | |

第 126 図 SH815 実測図 (1/50)

SK970 (第120図)

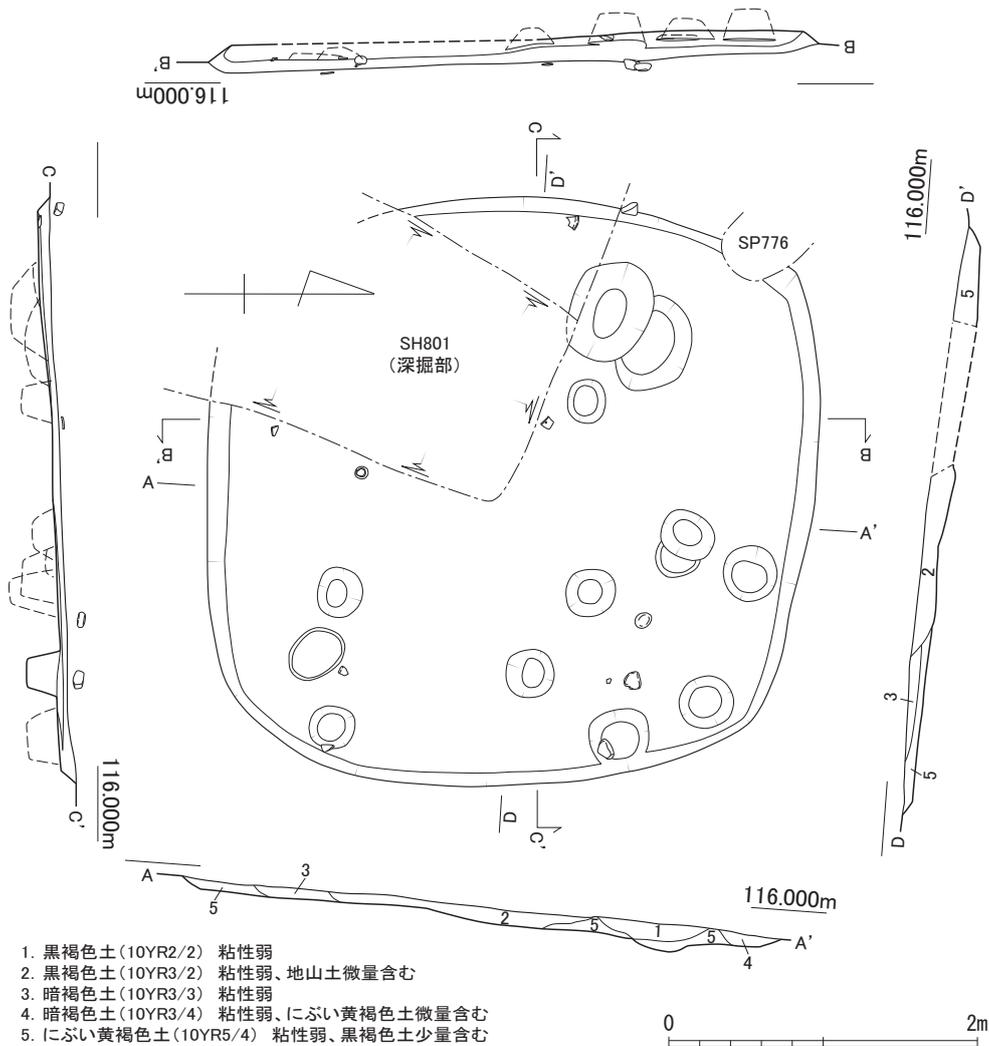
2区の南西隅部、I4グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に長い楕円形状を呈し、長径 1.52 m、短径 0.95 m、深さ 0.30 m を測る。埋土は5層に分層され、いずれも縄文時代の遺構埋土の色相を示す。5～2層にかけて順に埋没した状況が見て取れ、埋没後に1層が掘り込んでいる。遺物は検出面から土坑中位にかけて、縄文土器や石器がややまとまって出土している。出土遺物から、遺構の時期は縄文時代後期末葉頃に位置付けられる。



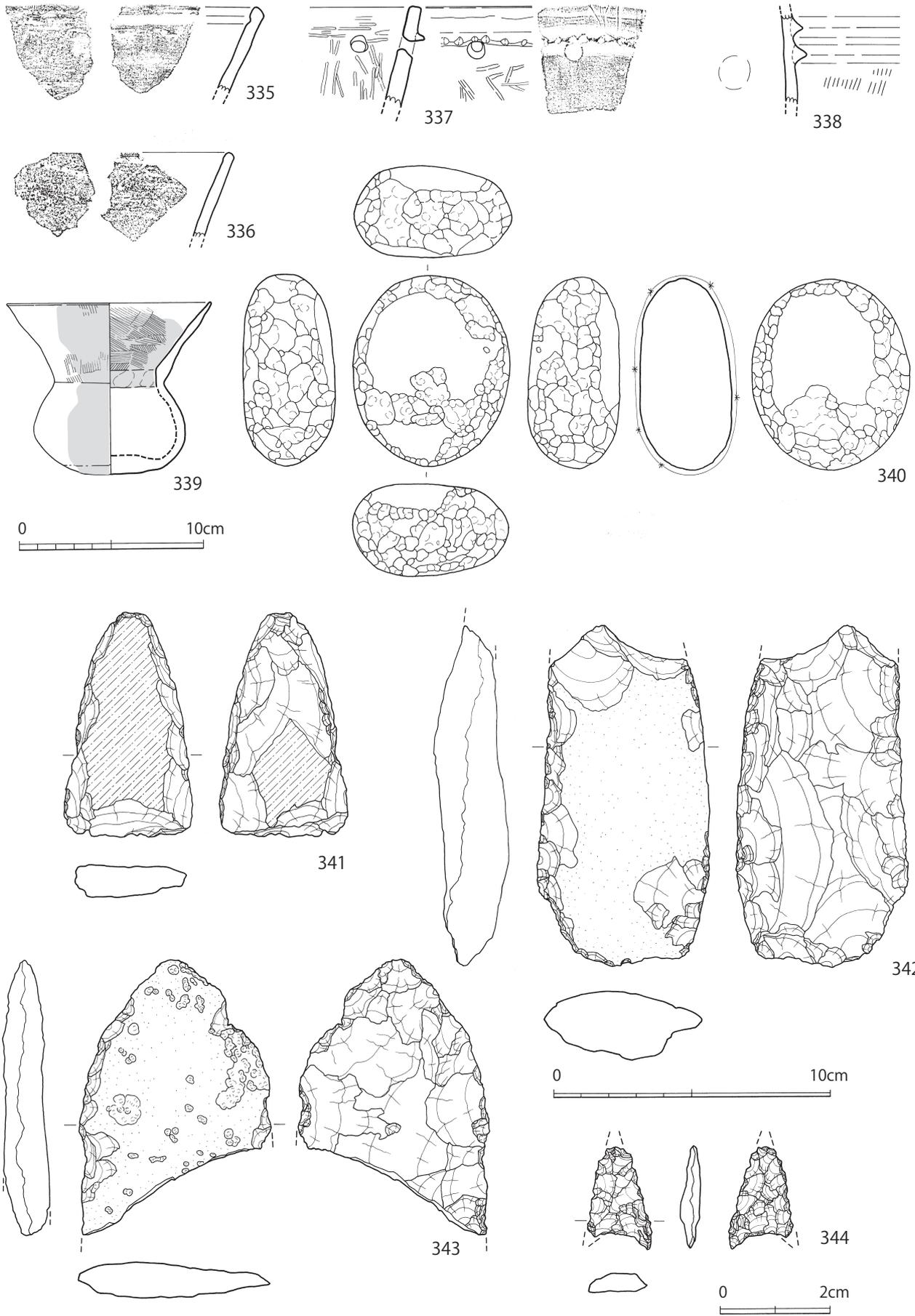
第 127 図 SH815 出土遺物実測図 (1/3)

SK970出土遺物 (第121図)

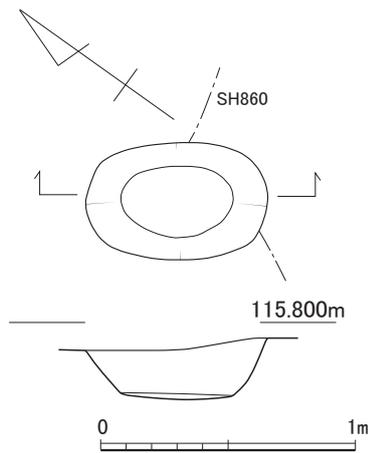
325～327は縄文土器である。325はボウル形を呈する無文の鉢で、外面に粗い条痕を施す。326は浅鉢で、口縁は外に開き、口縁部の外面に1条の沈線を施し、内面には沈線状の段が付く。後期後葉～末葉に位置付けられよう。327は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し、中央は凹む上げ底となる。328は砂岩の円礫を素材とした叩石・磨石である。下面是磨面として平坦になっており、上下両面及び側縁に敲打痕が認められる。



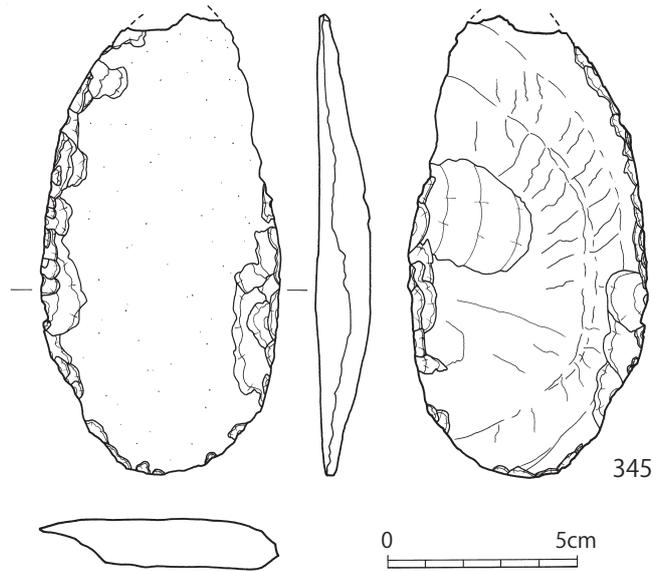
第 128 図 SH860 実測図 (1/50)



第129图 SH860 出土遗物实测图 (1/3 · 1/2 · 1/1)



第130図 SK776 実測図 (1/30)



第131図 SK776 出土遺物実測図 (1/2)

SK1053 (第122図)

2区の中央部、G-5グリッドで検出した小土坑である。北側の一端を古墳時代の土坑SK791に切られるが、平面形状は略円形を呈し、長径0.62m、短径0.58m、深さ0.13mを測る。埋土はアカホヤや黒褐色土ブロックの混じる褐色土で、微量の炭を含む。遺物は少量ながら土器片と流紋岩の原石が出土している。埋土の色相から縄文時代の遺構と判断されるが、時期比定できる遺物に乏しく詳細な帰属時期は明らかにできない。

SK1053出土遺物 (第123図)

329は流紋岩の原石である。長さ6.0cm、幅13.0cm、厚さ3.6cm、重量387.6gを測るサイズで、全体に摩滅している。上面には風化した剥離の痕跡が認められる。流紋岩は大野川流域で産出し、旧石器時代から縄文時代草創期頃にかけて石器石材として用いられているが、これが使用を意図して持ち込まれたものであるのか、あるいは旧石器時代の遺物が混入したものであるのかは判然としない。

SD774 (第124図)

2区の中央東寄り、G-5・G-6グリッドで検出した溝状遺構である。南北方向にやや湾曲しながら延びるもので、長辺4.69m、幅0.95～1.16m、深さ0.23mを測る。縄文時代の竪穴建物SH871とSH915、土坑SK903を切っており、底面ではSK813・SK814の縄文時代の土坑2基を検出している。遺物は縄文土器、打製石斧が出土している。後期中葉の土器も含まれるが、SH871やSH915の切り合い関係から、遺構の時期は晩期後葉(上菅生B式)に比定される。

SD774出土遺物 (第125図) z

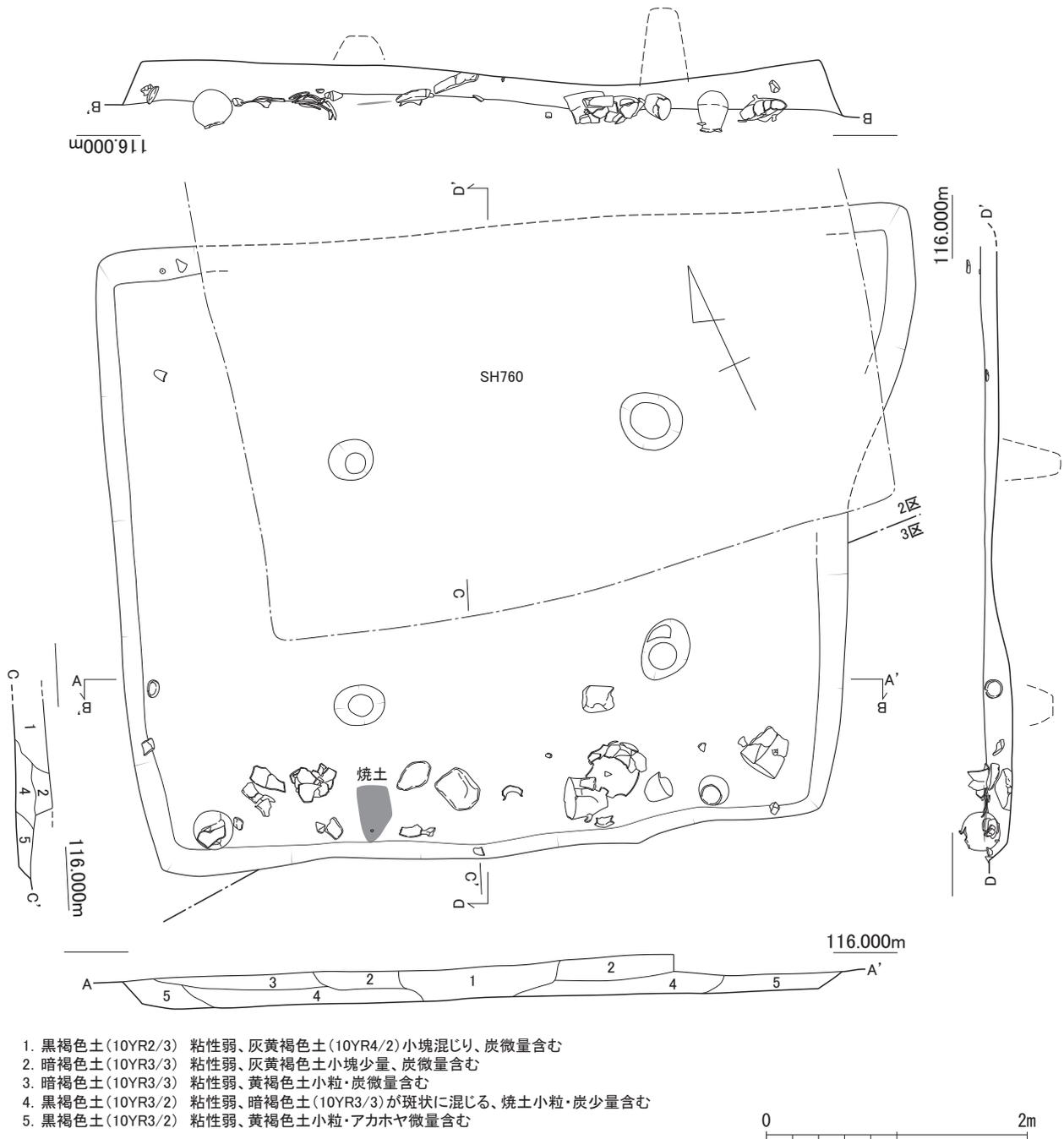
330・331は縄文土器である。330は深鉢で、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける。凸帯はシャープで高さがある。晩期後葉の上菅生B式に比定される。331は深鉢の底部で、底面の周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。332は安山岩製の打製石斧で、上下両端を欠失する。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

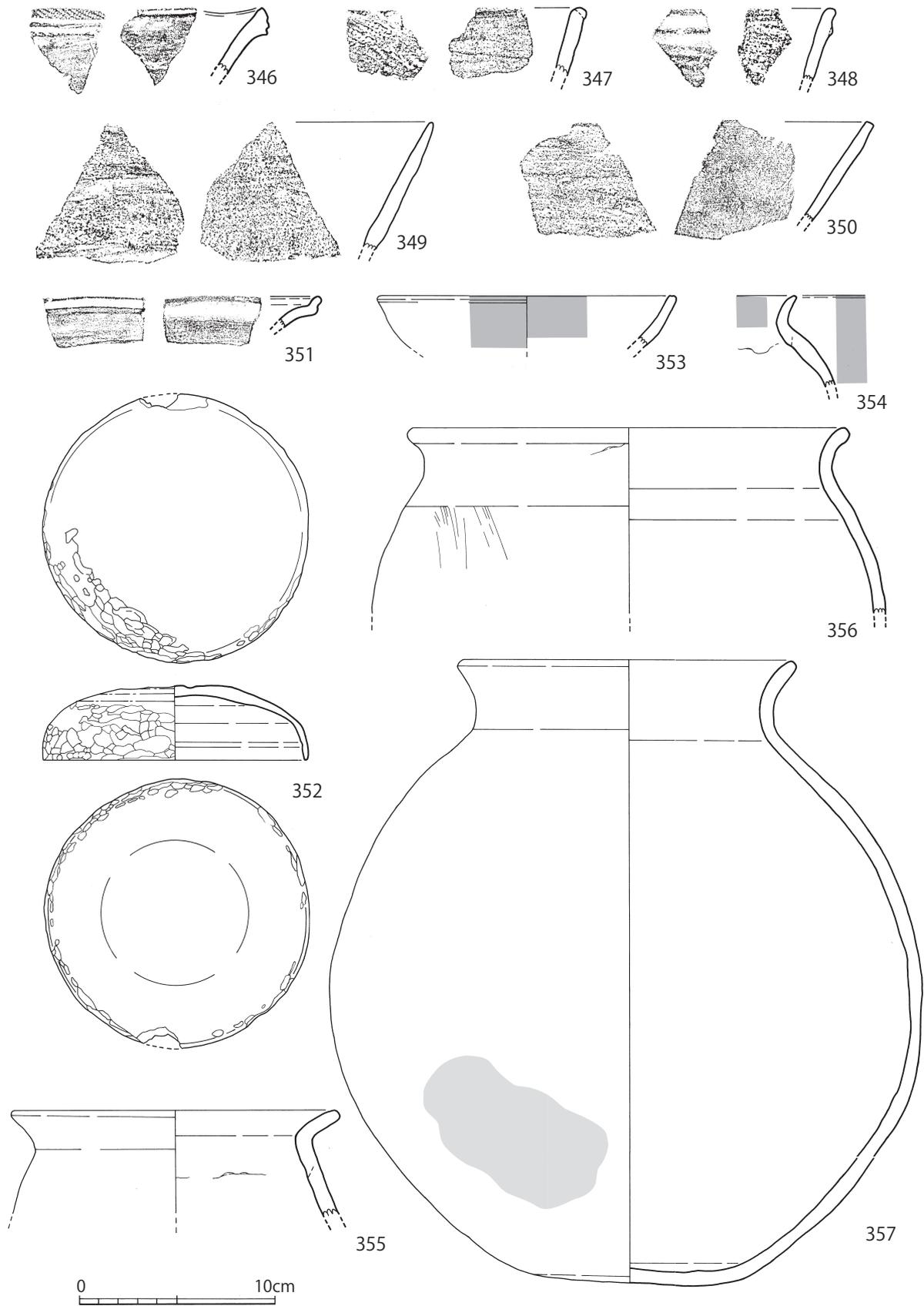
2区における弥生時代の遺構としては、竪穴建物2棟、土坑1基がある。土坑等は遺物の出土がなく帰属時期が不明なものが多々あり、その中に弥生時代の遺構が含まれる可能性はあるものの、その数は限定的であろう。3区・4区に比べ、当該期の遺構の少なさが際立っている。

SH815 (第126図)

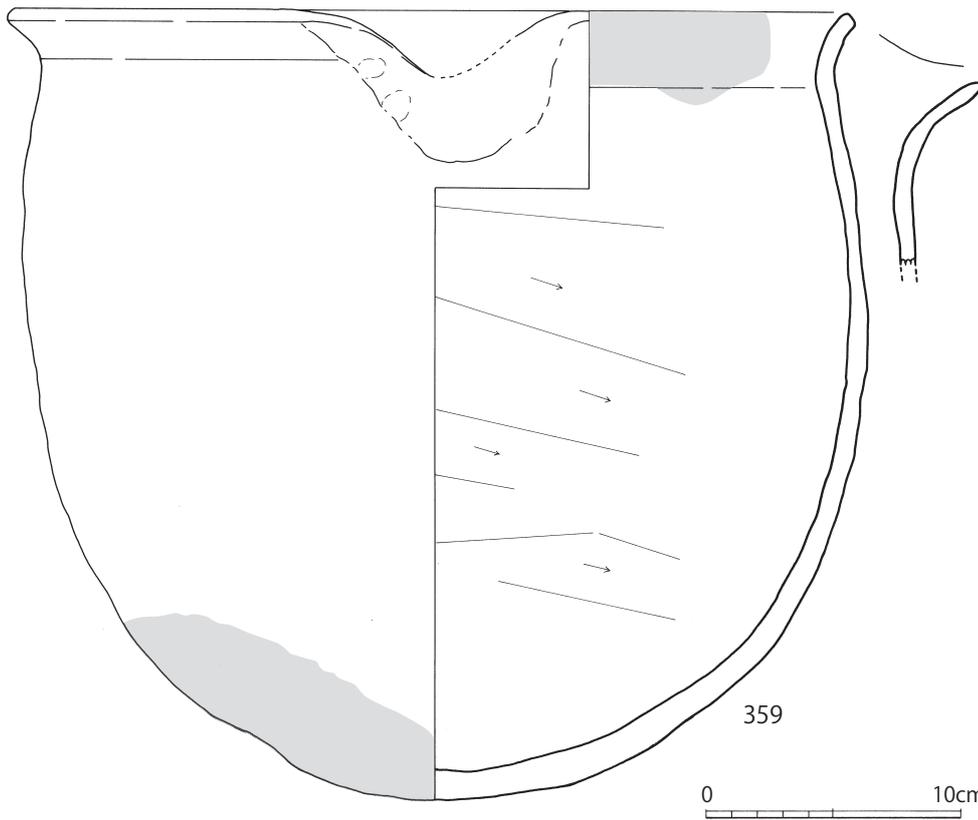
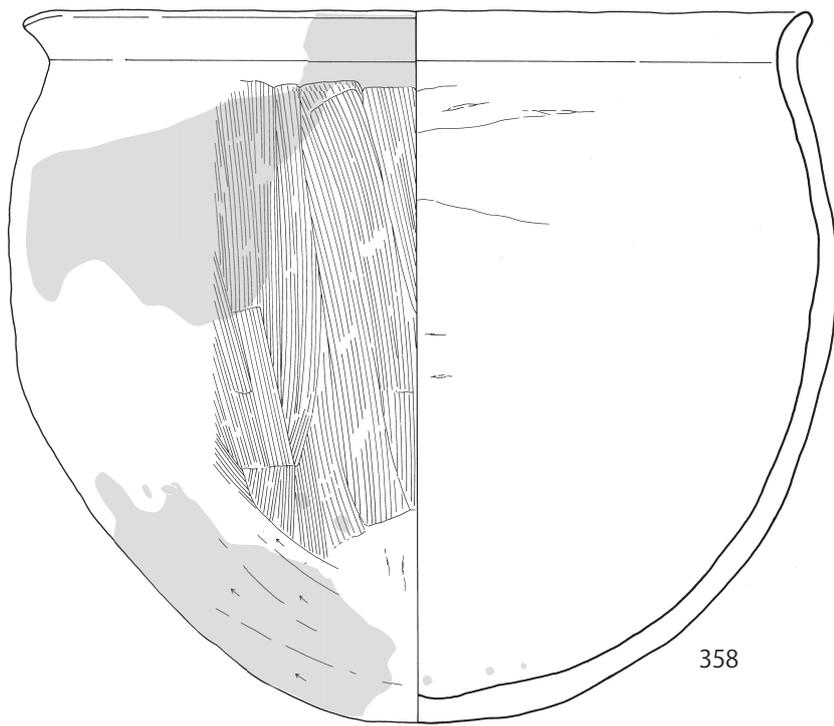
2区の北東隅部、F-6・G-6グリッドで検出した竪穴建物である。北西部の一端は古墳時代の竪穴建物SH724に切られている。東側の大半が調査区外に続いたため全体の形状や規模は明らかにできないが、検出した範囲で平面形状は円形を呈するとみられ、長径5.78m以上、短径1.95m以上、深さ0.84mを測る。内部は二段掘りとなつて



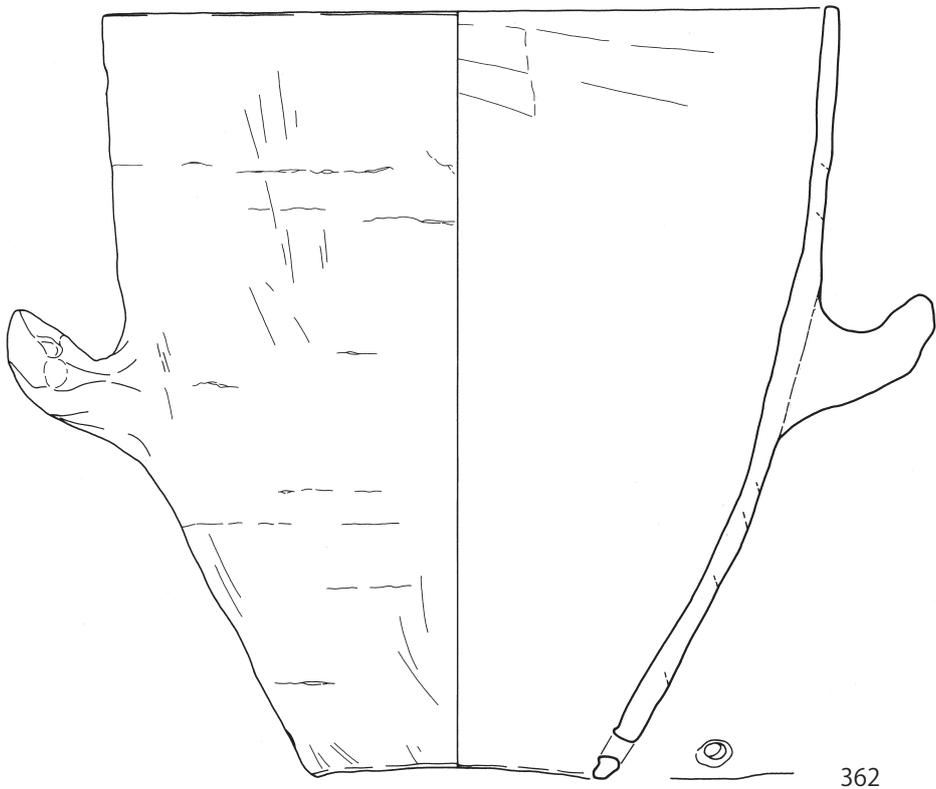
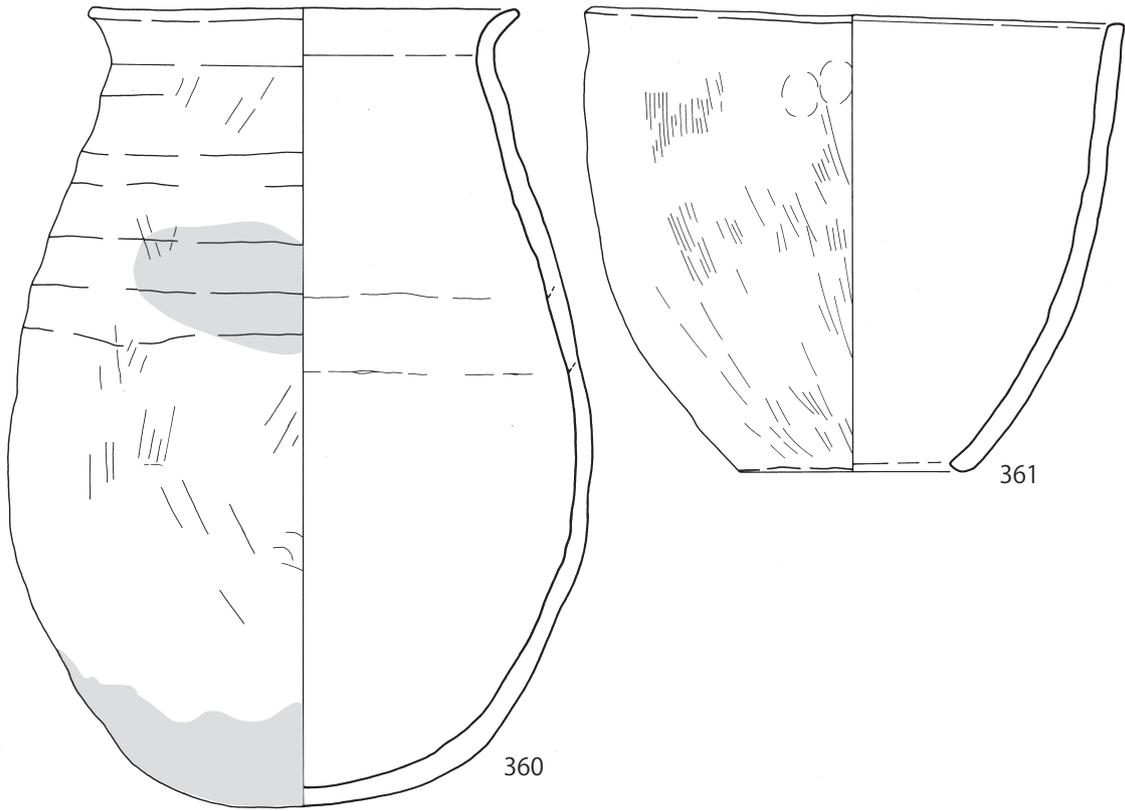
第132図 SH29 実測図 (1/50)



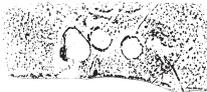
第 133 图 SH29 出土遺物実測図① (1/3)



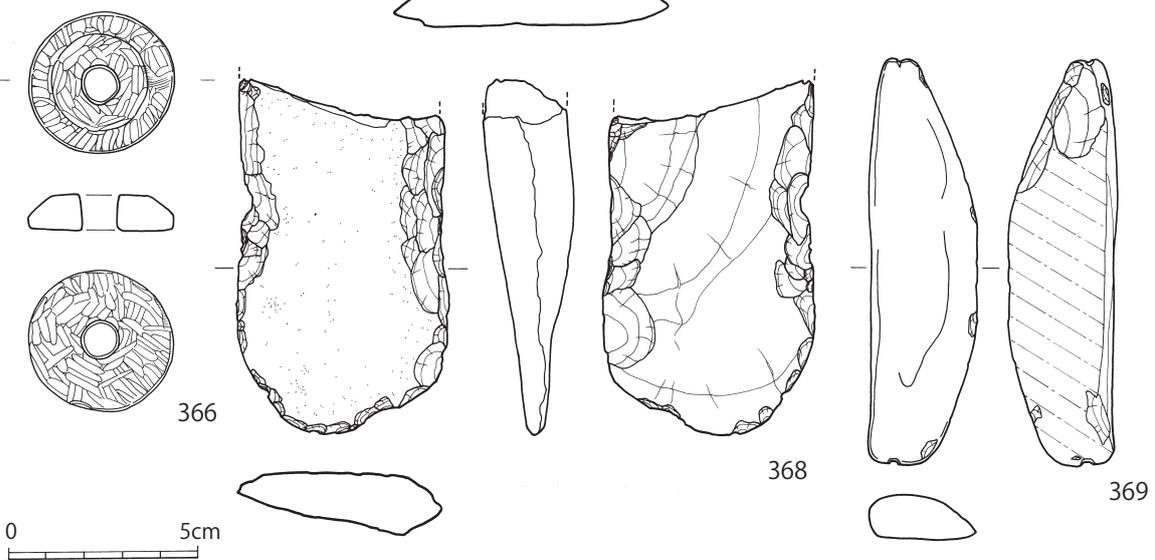
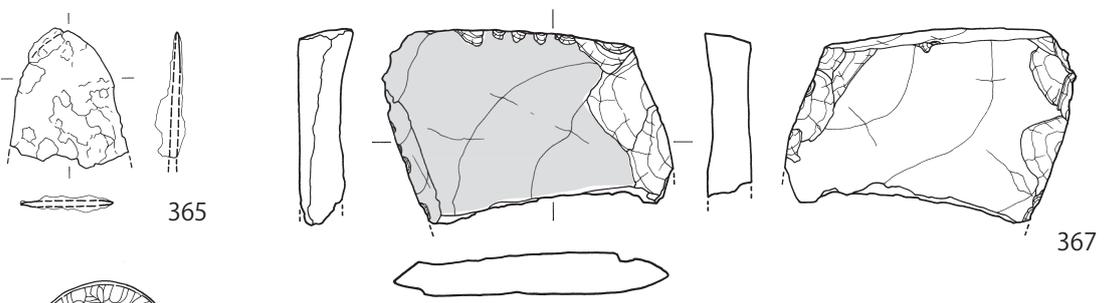
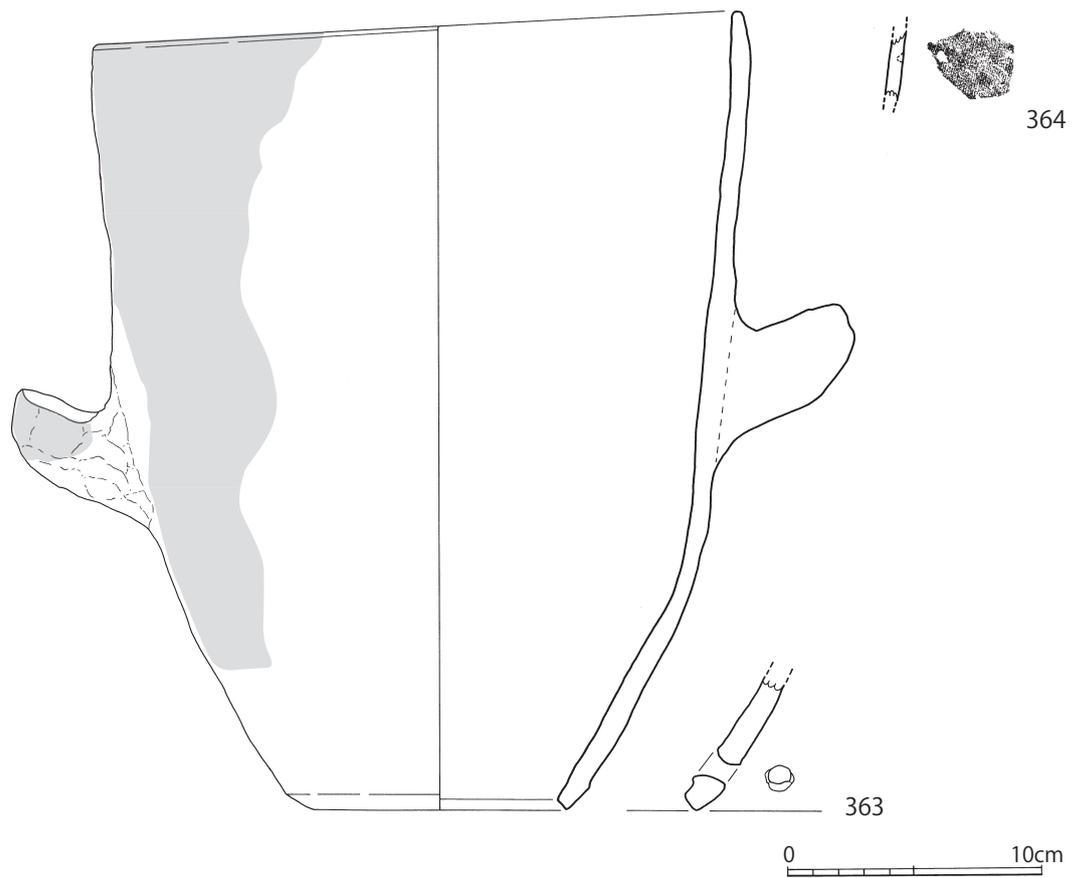
第 134 図 SH29 出土遺物実測図② (1/3)



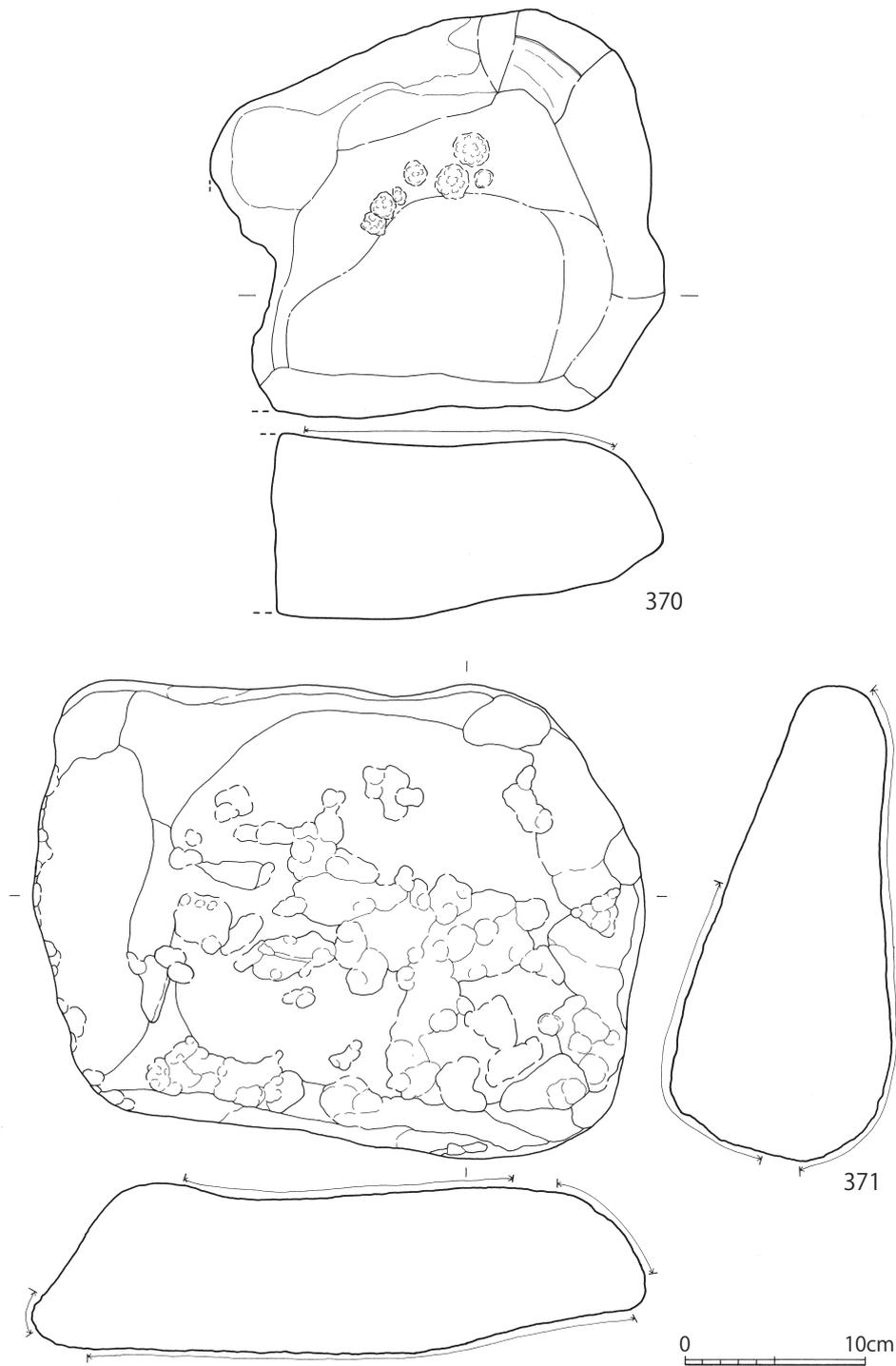
0 10cm



第 135 图 SH29 出土遺物実測図③ (1/3)

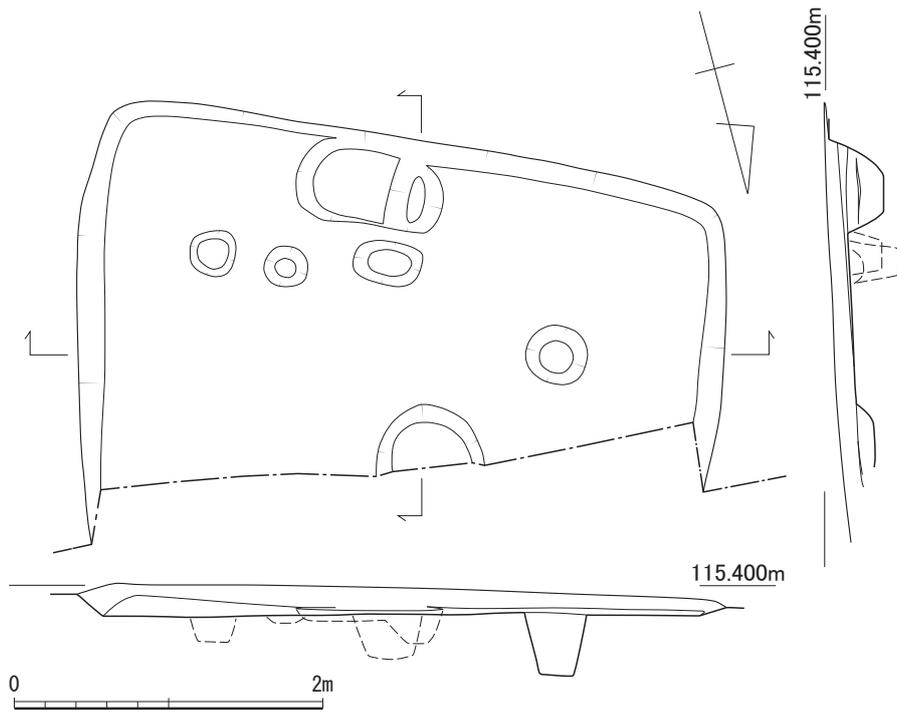


第136图 SH29 出土遺物実測図④ (1/3 · 1/2)

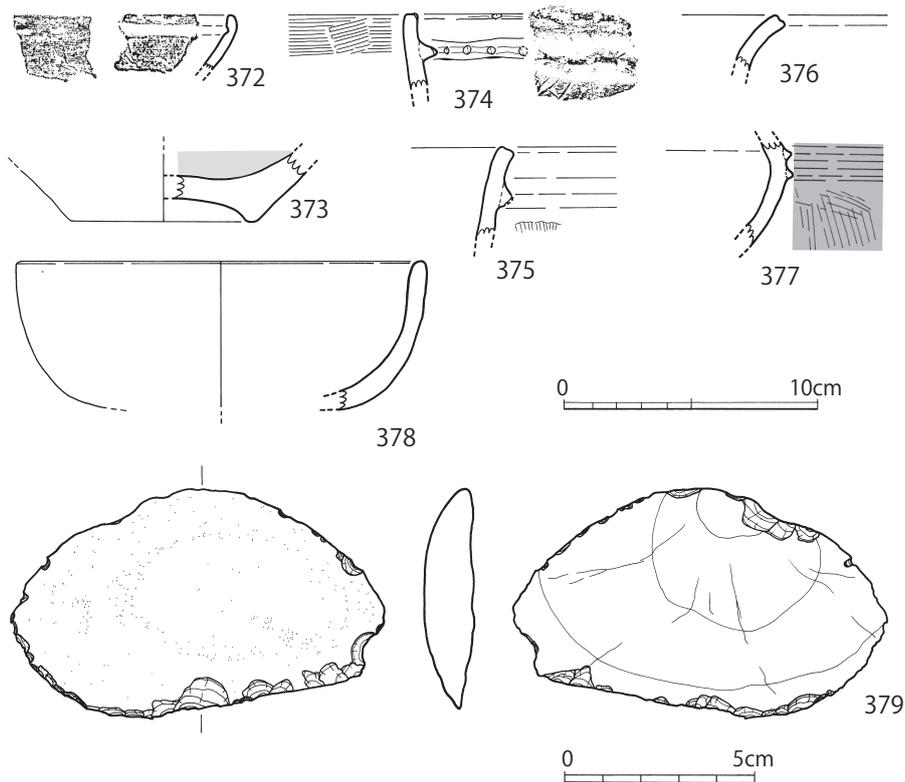


第 137 図 SH29 出土遺物実測図⑤ (1/4)

おり、壁に沿ってテラス状の段が付き、中心部が円形に 0.2~0.5 m ほど深く掘り込んでいる。遺構は二段掘りの深い部分でピット 2 基を検出しているが、主柱穴の配列は明確ではない。埋土は 13 層を確認しており、中心の二段掘り部分は複雑な堆積状況を示す。これを埋めた後、上層の 1・2 層が大きく全体を被覆している。遺構の検出が一部分にとどまるためか、遺物の出土量は極めて少ない。縄文土器、弥生土器が出土しており、また混入したものとして中世の白磁の細片が見られた。遺構の時期は、弥生時代後期初頭頃と推定する。



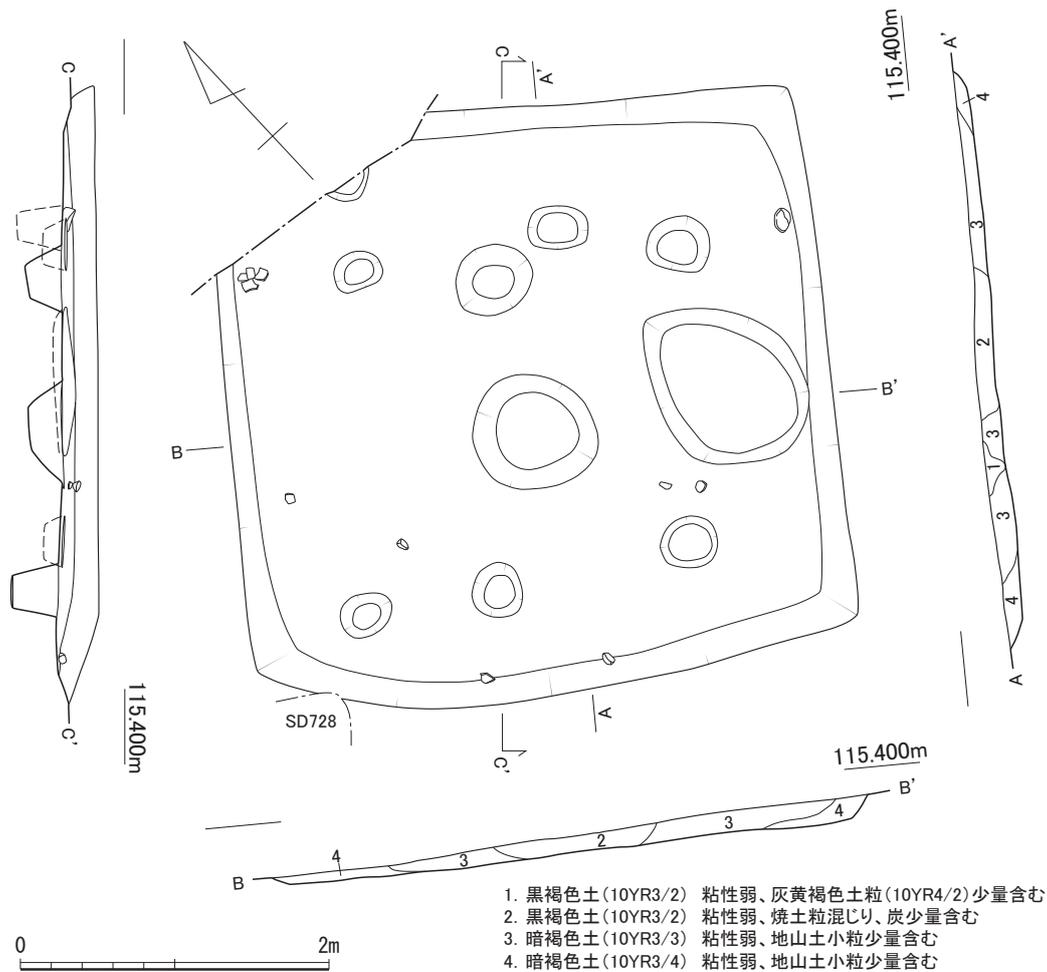
第 138 図 SH724 実測図 (1/50)



第 139 図 SH724 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SH815出土遺物 (第127図)

333・334は弥生土器である。333は甕の口縁部で端部を上方に摘み上げる。中期の北部九州形の甕である。334は壺の口縁部か。口縁部上端に矢羽根状の刻みを施す。

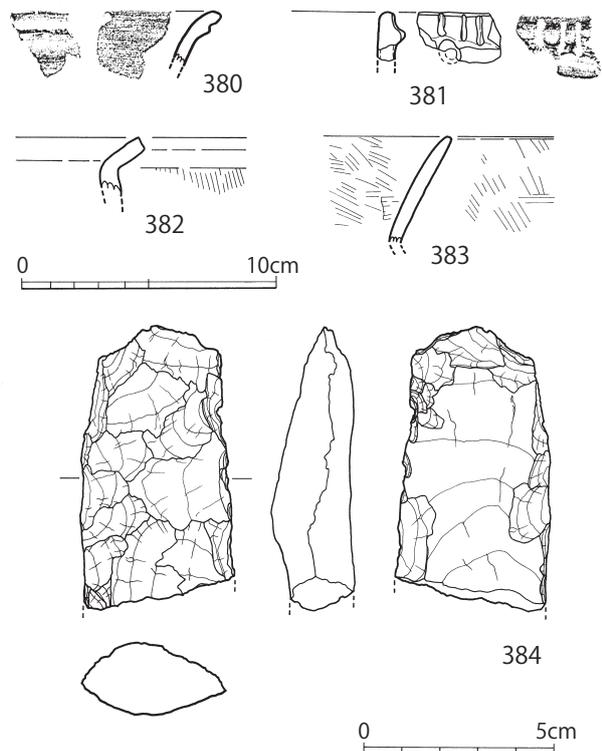


1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、灰黄褐色土粒(10YR4/2)少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、焼土粒混じり、炭少量含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒少量含む

第140図 SH726実測図 (1/50)

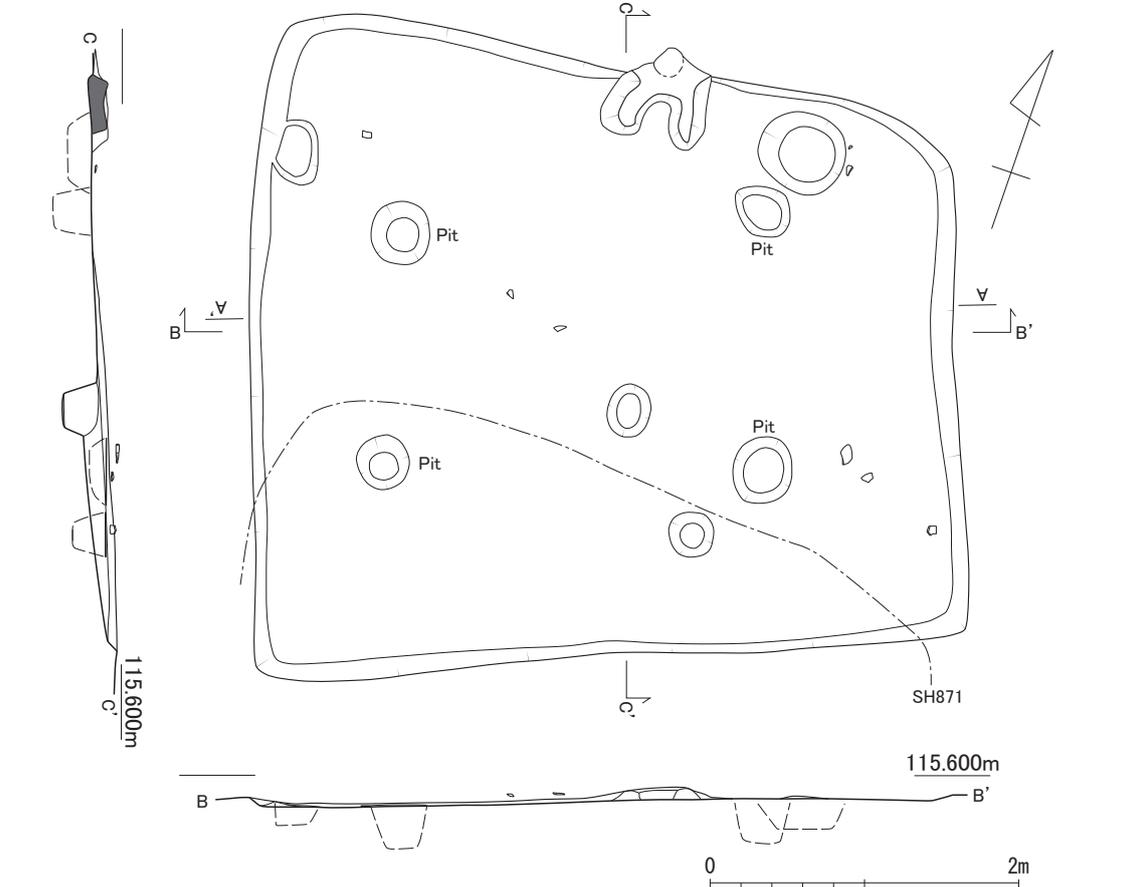
SH860 (第128図)

2区の中央東寄り、G-5・G-6・H-5・H-6グリッドで検出した竪穴建物である。全体に遺構の重複が激しく、南東部は縄文時代の竪穴建物SH956を切り、北西端部は弥生時代の土坑SK776に、南西部は古墳時代後期の竪穴建物SH801にそれぞれ切られている。ただ、当初はSH801との切り合いははっきりと確認できず、SH860を一段下げた段階で、SH801との前後関係を把握した状態であった。そのためいくらか遺物が混在した状態になっている。遺構は隅丸方形の平面形を呈し、長辺4.02m、短辺3.92m、深さは比高で0.35mを測るが、標準的な深さは0.1~0.15m前後である。埋土は5層に分層され、中心に向かってレンズ状の堆積を示す。床面では多数のピットを検出しているが、支柱穴は明確ではなく特定できていない。また、炉

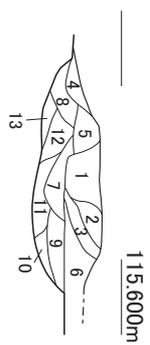


第141図 SH726出土遺物実測図 (1/3・1/2)

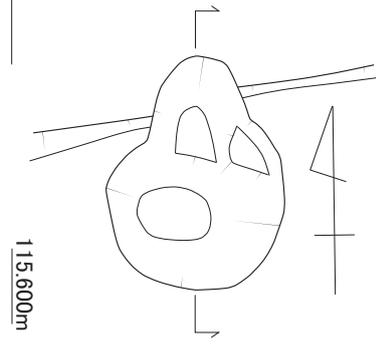
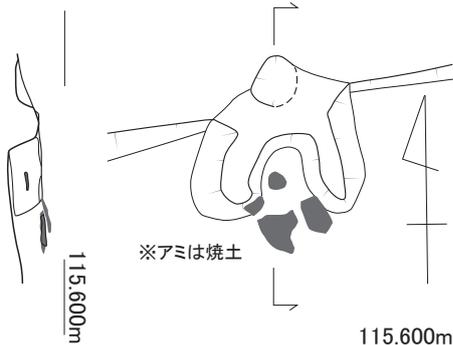
1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、地山土細粒少量含む
 2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)と地山土コロクが斑状に混じる
 3. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)が斑状に混じる



カマド実測図

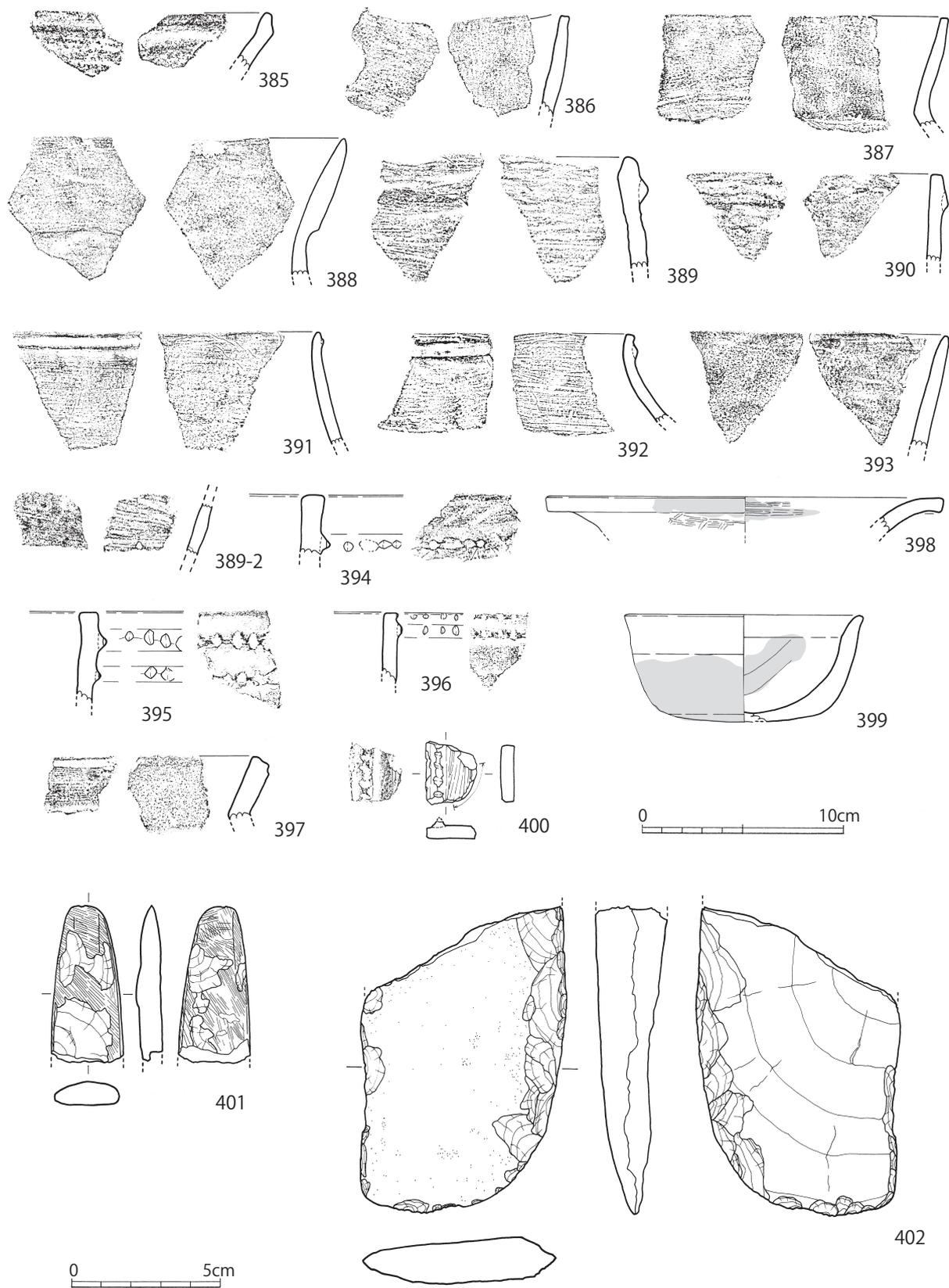


カマド完掘

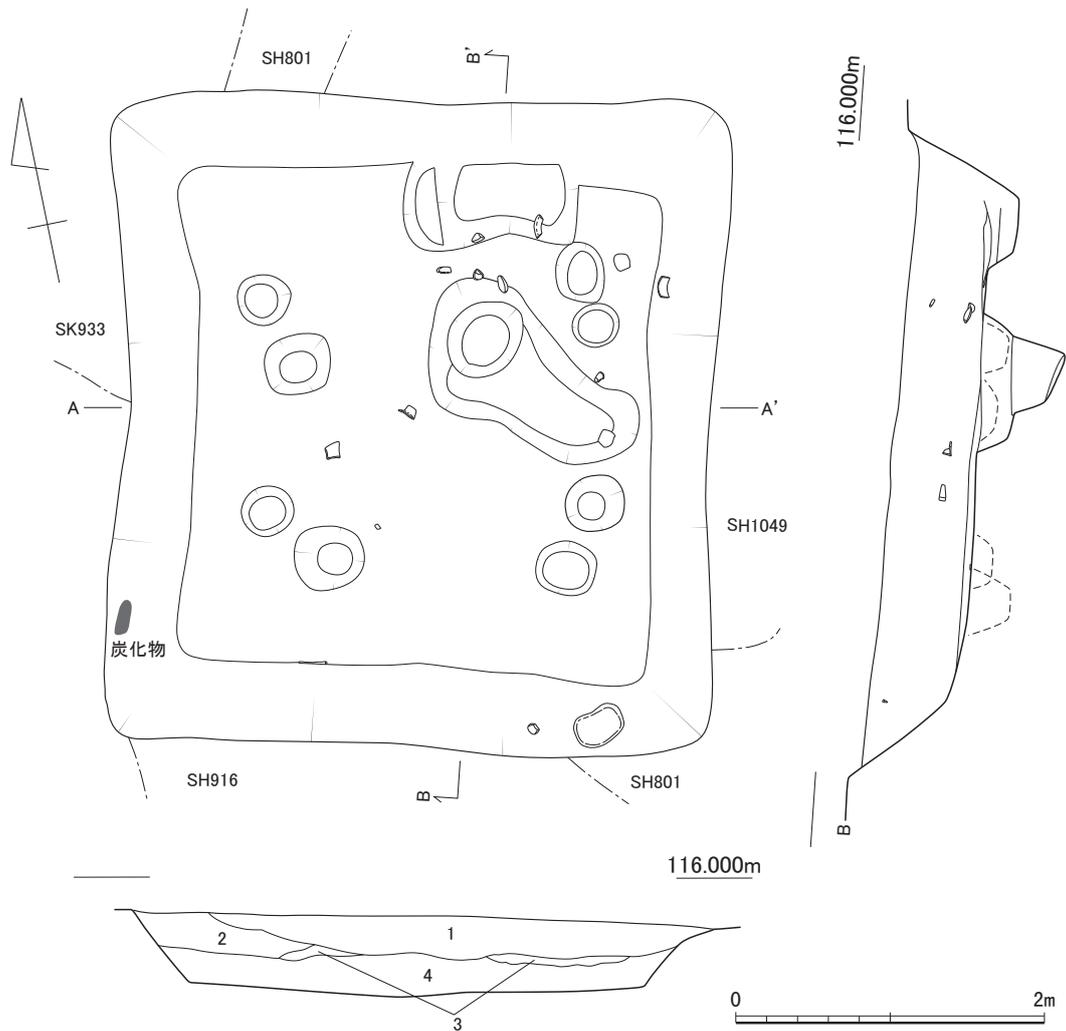


- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、焼土粒少量含む | 7. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小粒含む |
| 2. 赤褐色土(5YR4/6) 粘性弱(焼土層) | 8. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、焼土小粒少量含む |
| 3. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱 | 9. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、焼土粒微量、アカホヤ少量含む |
| 4. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、焼土細粒・炭微量含む | 10. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小粒少量含む |
| 5. 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり硬く締まる(袖部構築材) | 11. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、焼土小粒含む |
| 6. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)が斑状に混じる | 12. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、地山土小粒微量含む |
| | 13. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ小粒少量含む |

第142図 SH730 実測図 (1/50・1/30)



第143图 SH730 出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)



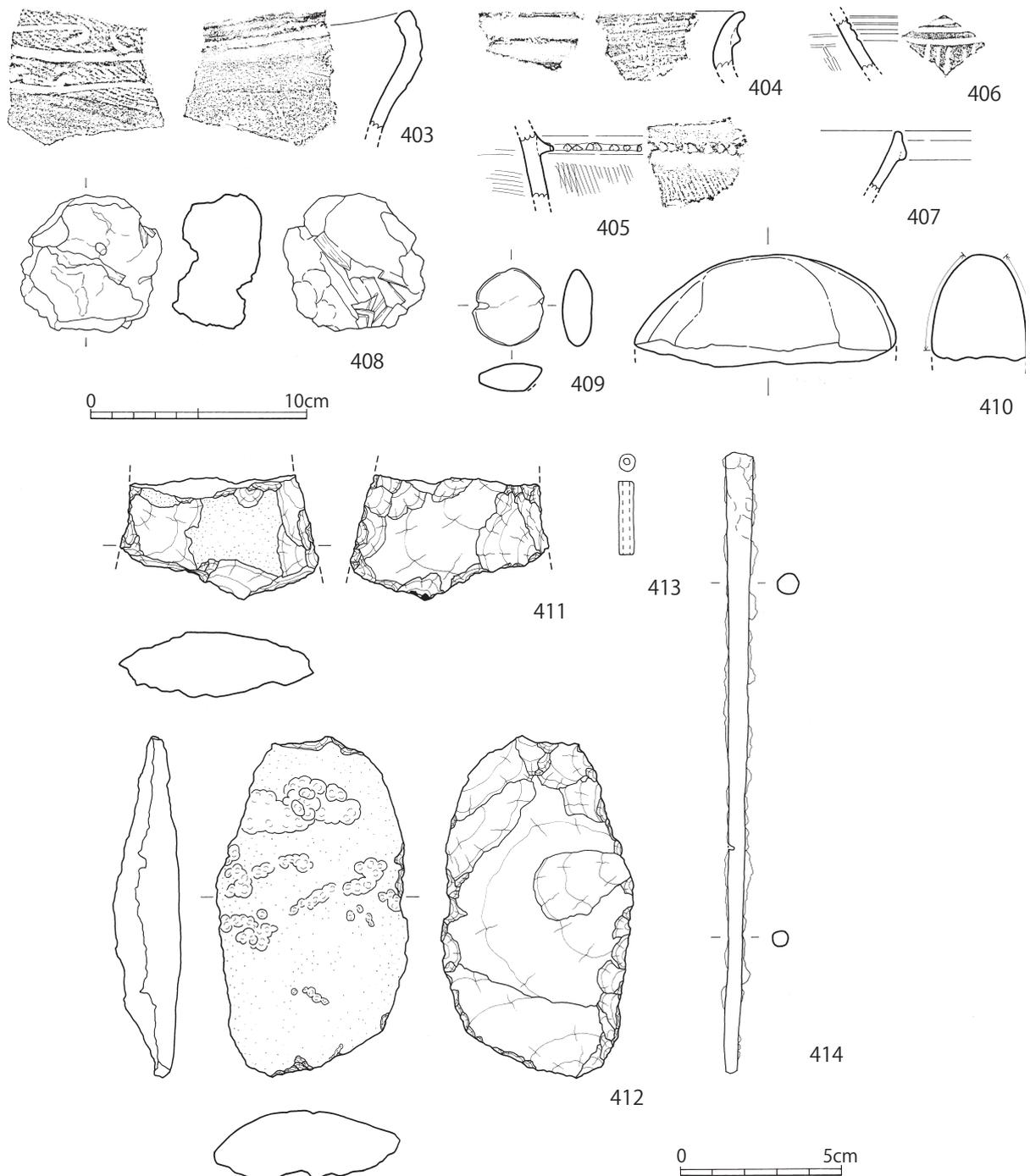
1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土小粒・炭微量含む(本来はSH801の埋土)
2. 黒褐色土(10TR2/3) 粘性弱、炭少量・焼土細粒微量含む(本来はSH801の埋土)
3. 黒褐色土(10YR2/3) アカホヤ風化土のブロック混じり
4. 黒褐色土(10YR2/2) やや粘性あり締まる、アカホヤ風化土・炭少量含む

第 144 図 SH731 実測図 (1/50)

跡もみられなかった。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、磁器、打製石鏃、打製石斧、叩石が出土している。先述のとおり遺構の切り合いをうまく押さえられなかったため、遺物が混在している。遺構の時期は、弥生時代中期と推定する。

SH860出土遺物 (第129図)

335・336は縄文土器である。335は深鉢で、内面口縁下に1状の沈線を施す。336は無文の深鉢で、内面口縁下がわずかに沈線状に凹む。これらは後期末葉に比定される。337・338は弥生土器である。337は甕で、外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせる。凸帯下には補修孔を穿つ。中期の下城式に比定される。338は壺の胴部で、外面に横位の多条凸帯を巡らせる。339は土師器の小型丸底壺である。SH801との境目から出土しており、混在したものの可能性が高い。340～344は石器である。340は砂岩の円礫を素材とする叩石・磨石で、上下両面の広い面を磨面とし、周縁部を中心に敲打痕が顕著に認められる。341は泥岩製の打製石斧で、上下両面に節理面を残す。342・343は打製石斧で、上面に自然面のある剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。石材は342が安山



第 145 図 SH731 出土遺物実測図① (1/3・1/2)

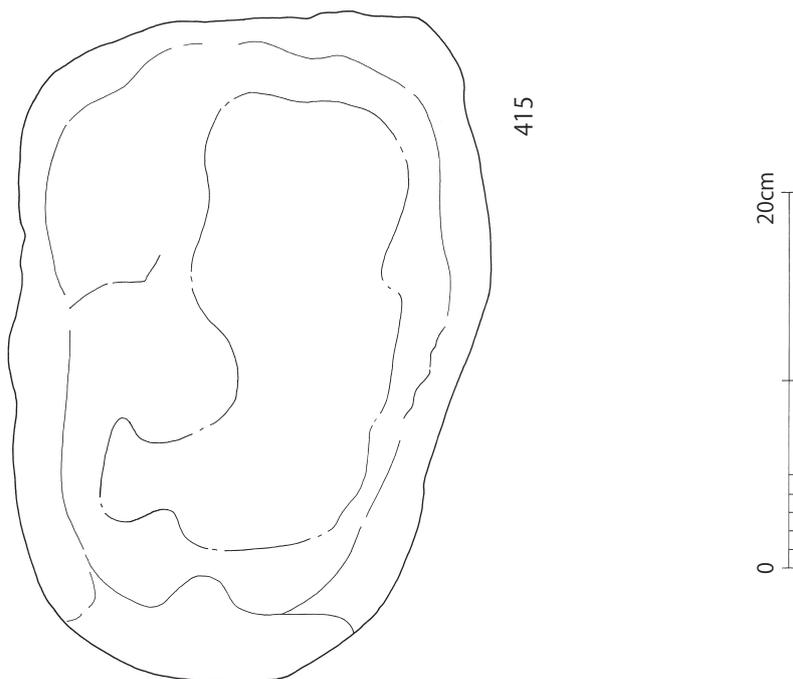
岩、343は石材不詳である。344は凹基無茎式の打製石鏃で、先端部及び基部の一端を欠失する。石材は姫島産黒曜石である。

SK776 (第130図)

2区の中央東寄り、G-5グリッドで検出した土坑である。弥生時代の竪穴建物SH860の北西隅部に位置し、SH860を切っている。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.71m、短径0.46m、深さ0.24mを測る。遺物は土器の細片とともに打製石斧が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しく、遺構の詳細な時期は明らかにできない。SH860との切り合い関係から、弥生時代中期以降の遺構である。

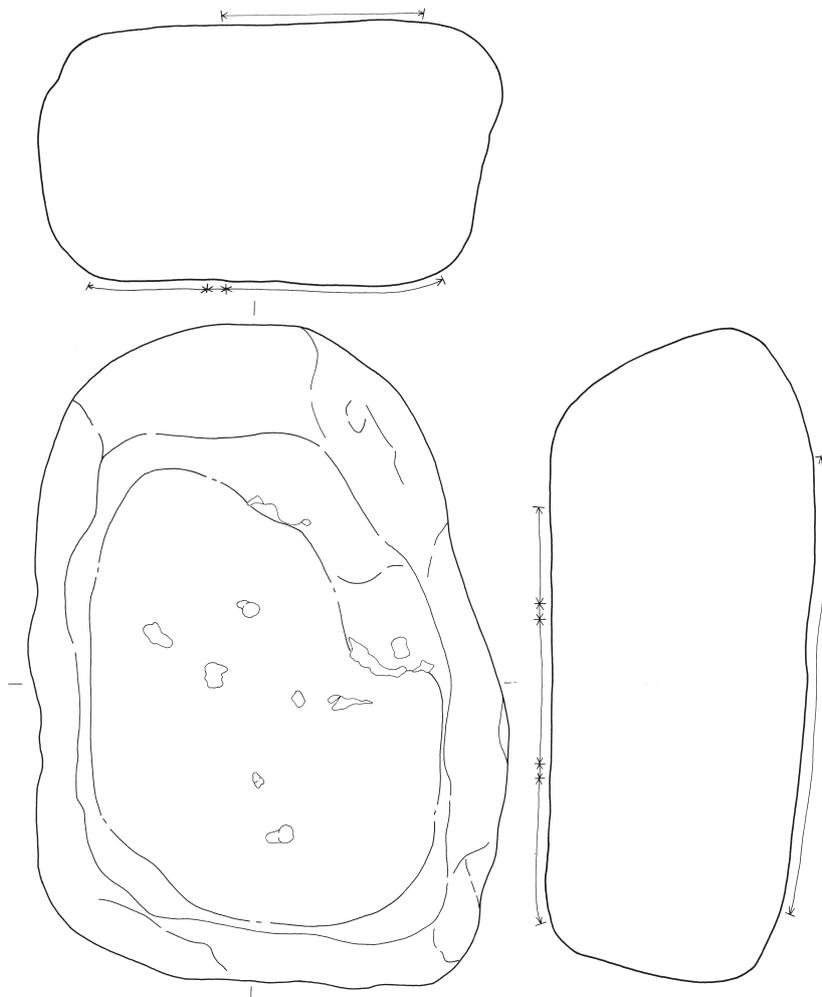
SK776出土遺物（第131図）

345 は打製石斧である。表面に自然面のある横長剥片を素材とし、周縁部に細かい調整剥離を施す。打点と反対側の刃部調整が顕著であることから横刃型石器の可能性も考えたが、打点側にも剥離を加えており打製石斧とした。ただし下端部や打点側の剥離は十分ではなく、未成品の可能性もある。石材は安山岩である。



第4節 古墳時代の遺構と遺物

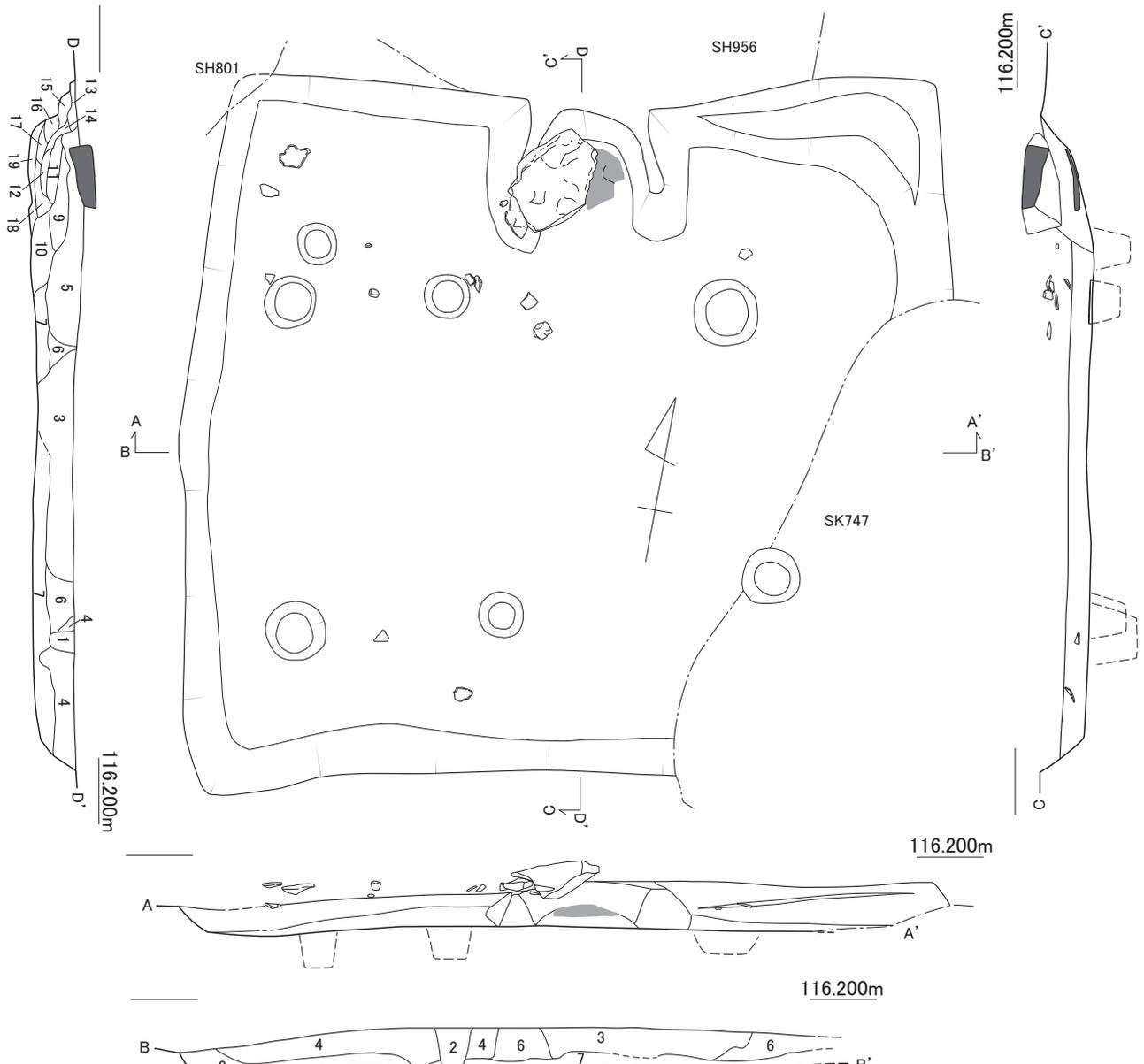
2区における古墳時代の遺構としては、竪穴建物13棟、土坑10基がある。遺構の時期は、古墳時代前期後半と、後期後半の2時期に大別される。前者は1区の南半部から区くにかけてほぼ全体に広がるが、後者はほぼ1区と2区に分布が限られ、その中でも2区が中心になる。古墳時代前期の竪穴建物の特徴として、他の時期のものより床面を深く掘り込む点が挙げられる。他の時期の竪穴建物は標準層序の第Ⅵ層を床面とするのが一般的であるが、古墳時代前期のものは第Ⅶ層を掘り抜き、黄褐色ローム質土に達している。古墳時代後期の竪穴建物には竈が付設されるものが多く、2区では遺存状態の良い竈もいくつか認められた。



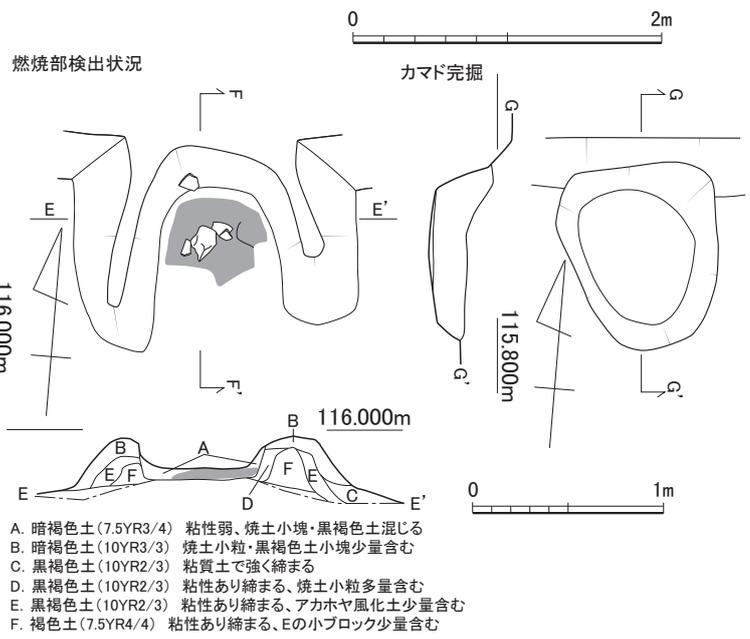
SH29（第132図）

2区の南端部、2区と3区にまたがって検出した竪穴建物である。3区の調査時に、南東隅部を検出しており、多量の遺物

第146図 SH731 出土遺物実測図②（1/4）

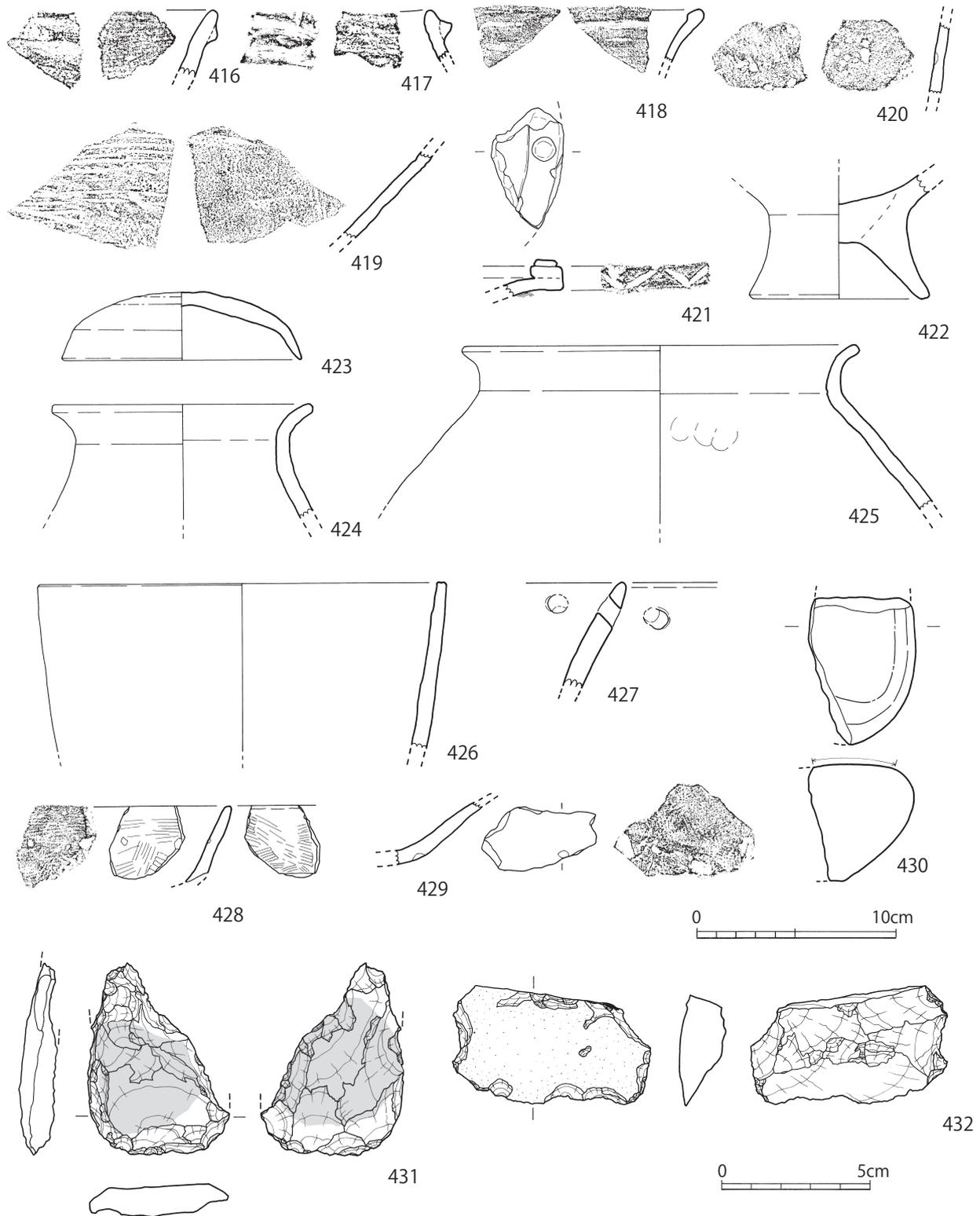


1. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土(10YR4/2)小塊混じる
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、灰黄褐色土(10YR4/2)小塊少量含む
3. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性弱、暗褐色土(10YR3/3)が斑状に混じり、炭・灰黄褐色土小塊少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土が少量斑状に混じる、灰黄褐色土小塊、炭少量含む
5. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性弱、焼土小粒・炭少量含む
6. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、炭・灰黄褐色土小塊少量含む
7. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/3)が少量斑状に混じる、地山土小粒少量含む
8. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性弱、アカホヤ風化土少量含む
9. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒少量、炭微量含む
10. 褐色土(10YR4/4) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒微量、にぶい赤褐色(5YR4/4)粘土塊混じる
11. にぶい赤褐色土(5YR4/4) 粘性弱、焼土ブロックを主体とし暗褐色土・黒褐色土ブロックが混じる
12. 赤褐色土(5YR4/8) 全体的に焼けて硬化
13. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、褐色土(10YR4/4)混じる
14. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、焼土小粒混じる
15. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性強く締まる、褐色粘土小塊・焼土小粒少量含む
16. 褐色土(10YR4/4) 粘性強く締まる、黒褐色土小粒少量含む
17. 褐色土(10YR4/4) 粘性弱、暗褐色土(10YR3/3)・焼土小粒少量含む
18. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性強く締まる、褐色土塊・焼土小粒少量含む
19. 暗褐色土(10YR3/3)を主体とし、褐色土(10YR4/4)・黒褐色土(10YR2/3)・少量の焼土が斑状に混じる。やや粘性あり締まる。



- 燃焼部検出状況
- カマド完掘
- A. 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性弱、焼土小塊・黒褐色土混じる
 - B. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土小粒・黒褐色土小塊少量含む
 - C. 黒褐色土(10YR2/3) 粘質土で強く締まる
 - D. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、焼土小粒多量含む
 - E. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり締まる、アカホヤ風化土少量含む
 - F. 褐色土(7.5YR4/4) 粘性あり締まる、Eの小ブロック少量含む

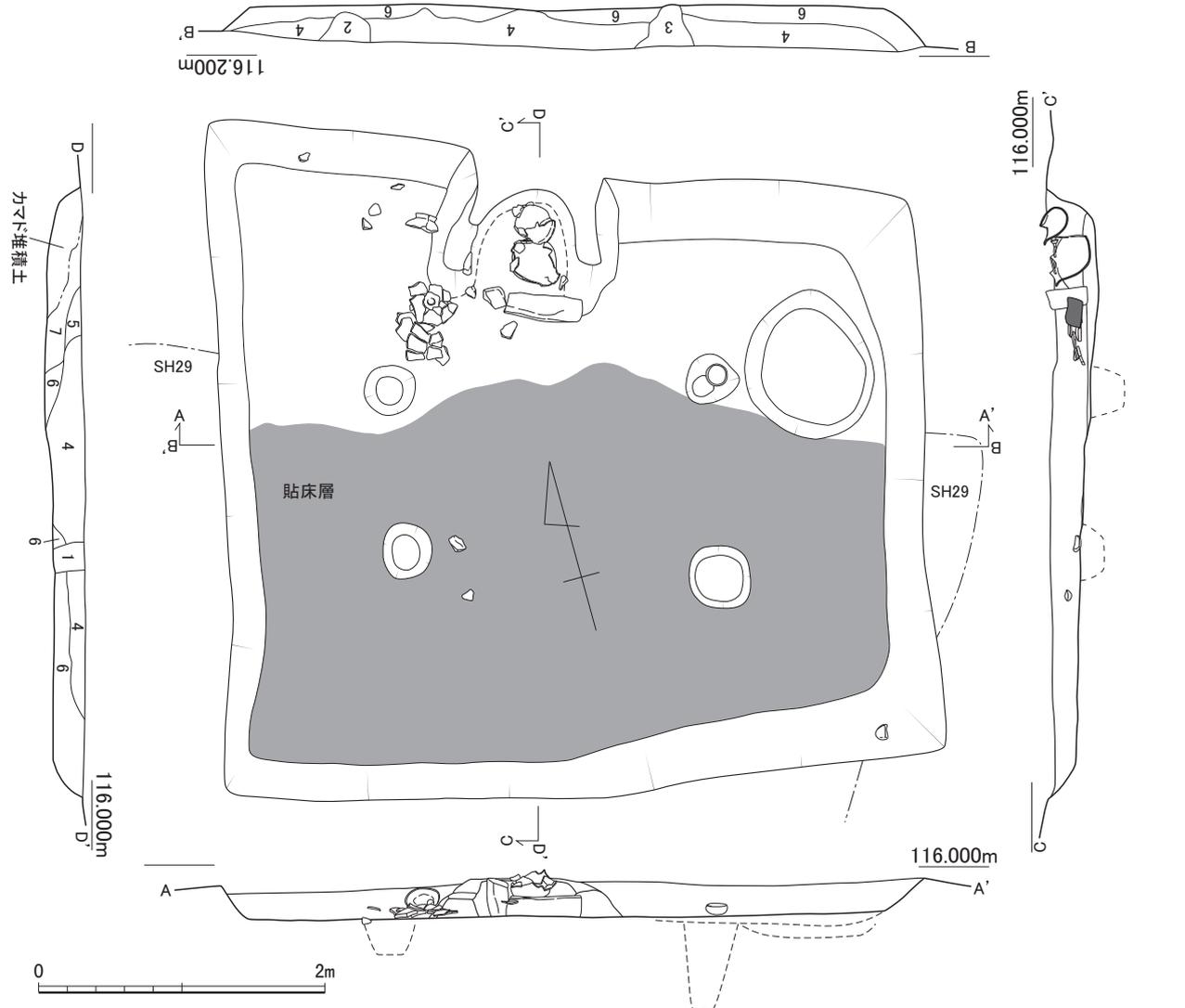
第147図 SH750 実測図 (1/50・1/40)



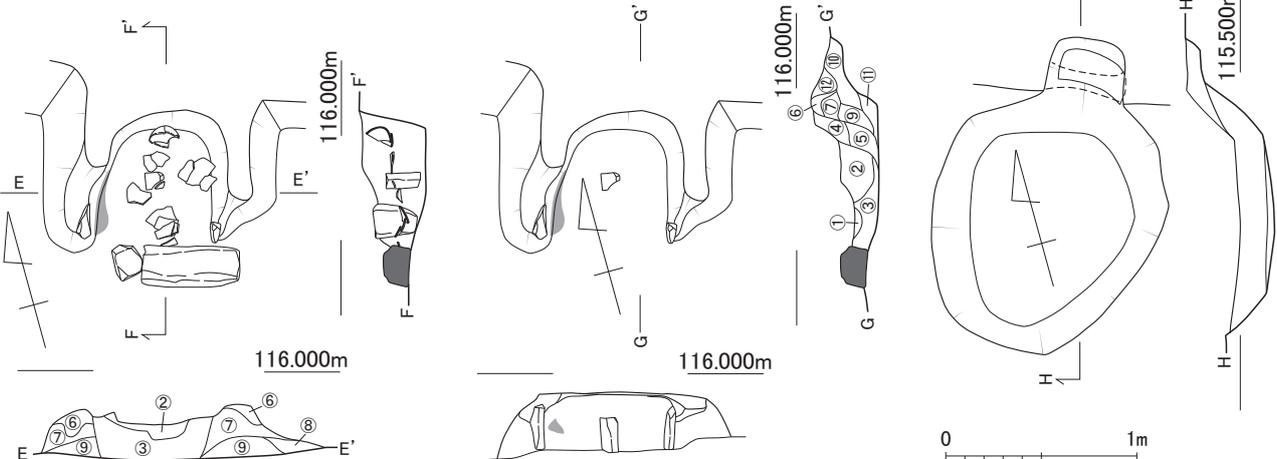
第148図 SH750 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

を確認していたため、3区調査時は検出に止め、2区の調査時に全体を調査することとした。北西端部では縄文時代の竪穴建物SH955を切り、北半部は古墳時代後期の竪穴建物SH760に大きく切られている。平面形状は方形を呈するが、北東隅部がやや東に張り出し、北辺が若干長い。長辺6.38m、短辺4.44m、深さは比高で0.63mを測るが、標準的な深さは0.2m前後である。埋土は5層に分層され、上層の1・2層と下層の3~5層に大別でき

- 1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土細粒微量含む
- 2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小粒・黄褐色土細粒少量含む
- 3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小粒混じり、黄褐色土細粒少量含む
- 4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、灰黄褐色土小塊が斑状に混じり、炭微量含む
- 5. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性弱、黄褐色土小粒混じり、炭微量含む
- 6. 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり締まる、灰黄褐色土小粒・黄褐色土細粒少量、炭微量含む
- 7. 黒褐色土 (7.5YR2/2) やや粘性あり締まる、黄褐色土小粒・炭・焼土小粒少量含む

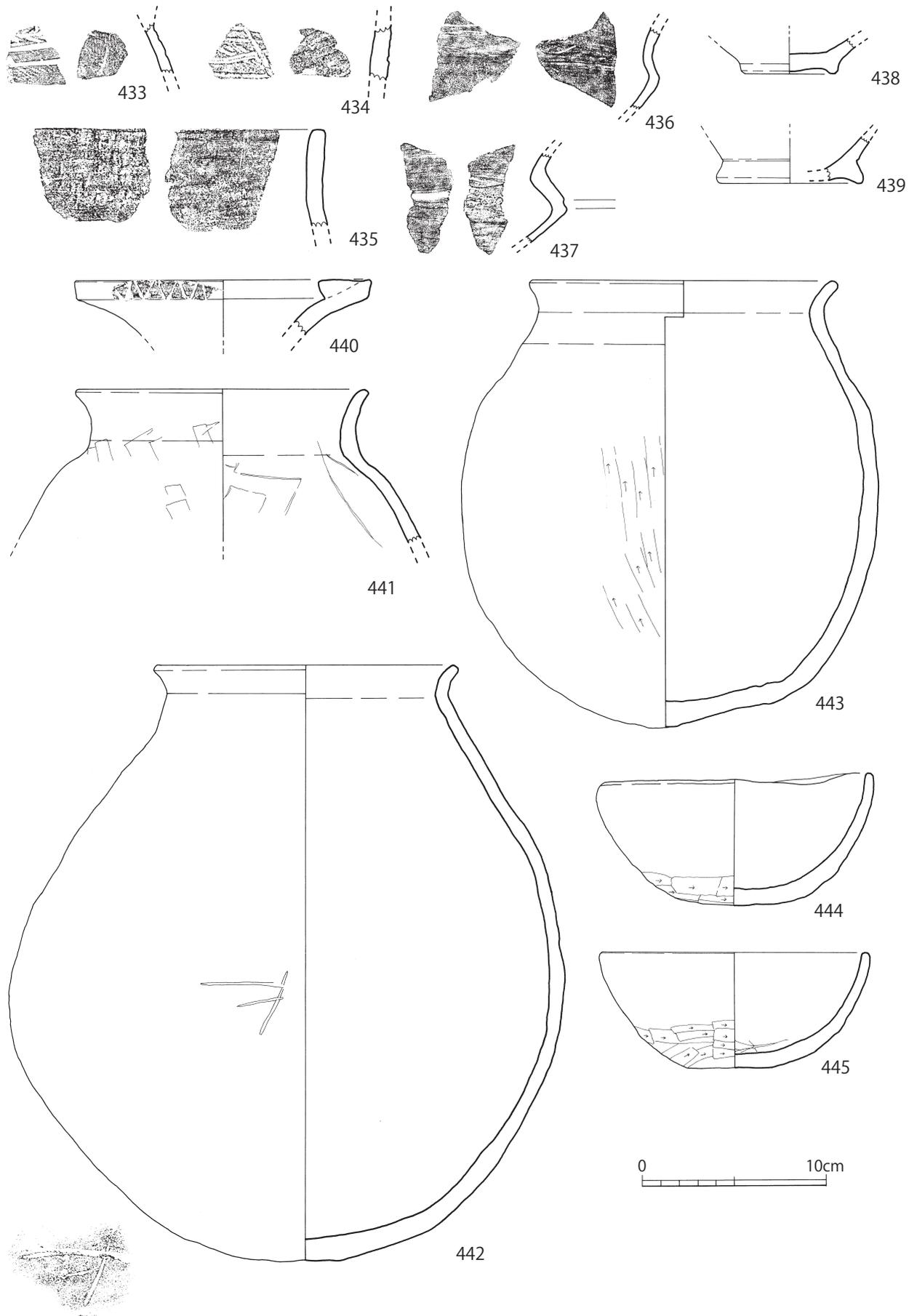


カマド個別図

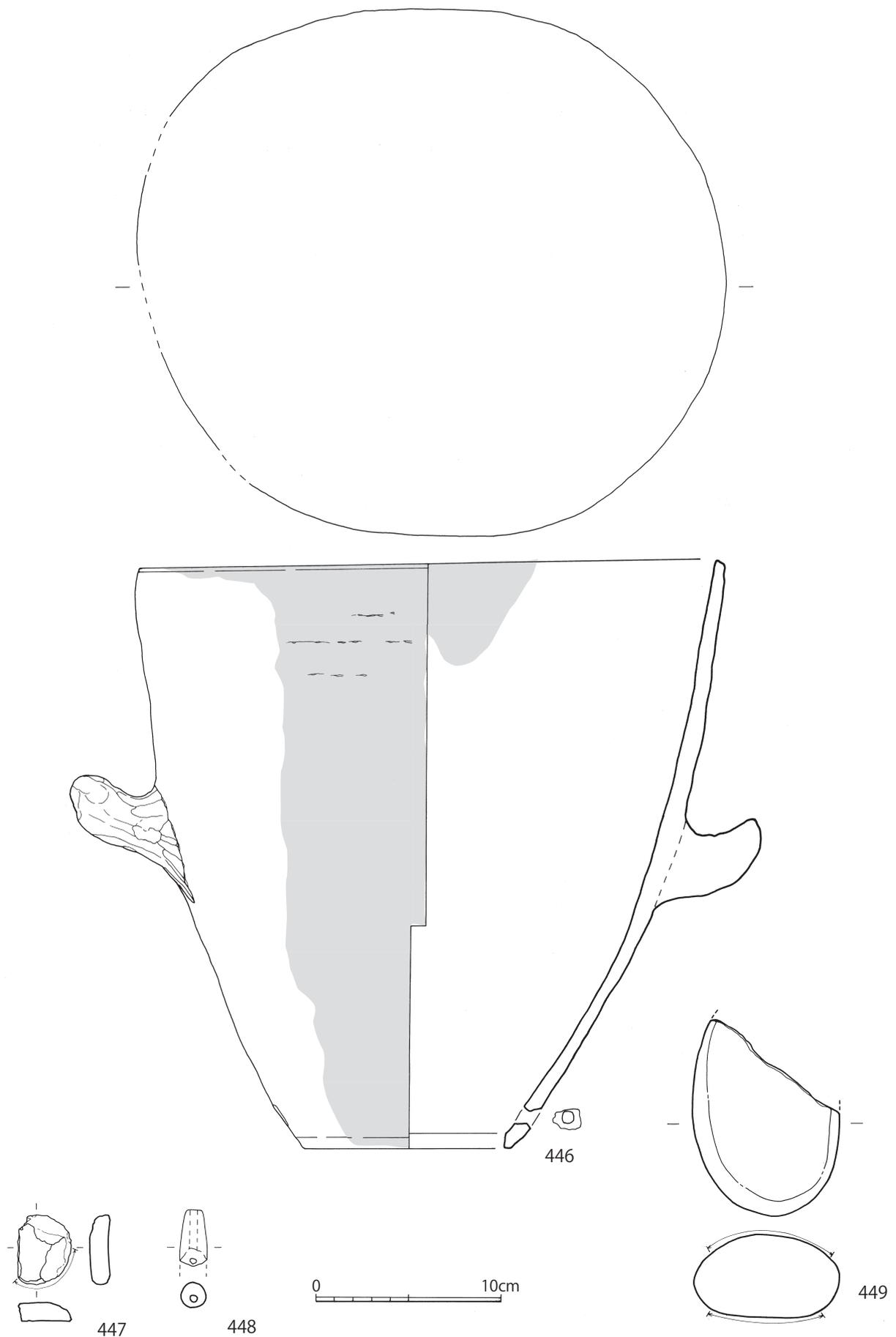


- ① 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土小粒微量含む
- ② 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土塊少量含む
- ③ 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性弱、焼土ブロック・小粒主体
- ④ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、焼土小粒少量・灰黄褐色土小塊少量含む
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、黒褐色土ブロック混じる
- ⑥ 褐色土 (10YR4/4) 粘性強く硬く締まる、焼土小粒少量・炭微量含む
- ⑦ 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性強く硬く締まる、焼土ブロック混じる
- ⑧ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く締まる
- ⑨ 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土小粒微量・炭少量含む
- ⑩ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、焼土小粒・アカホヤ風化土微量含む
- ⑪ 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、焼土小粒・アカホヤ風化土微量含む
- ⑫ 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、黒褐色土・アカホヤ細粒混じる

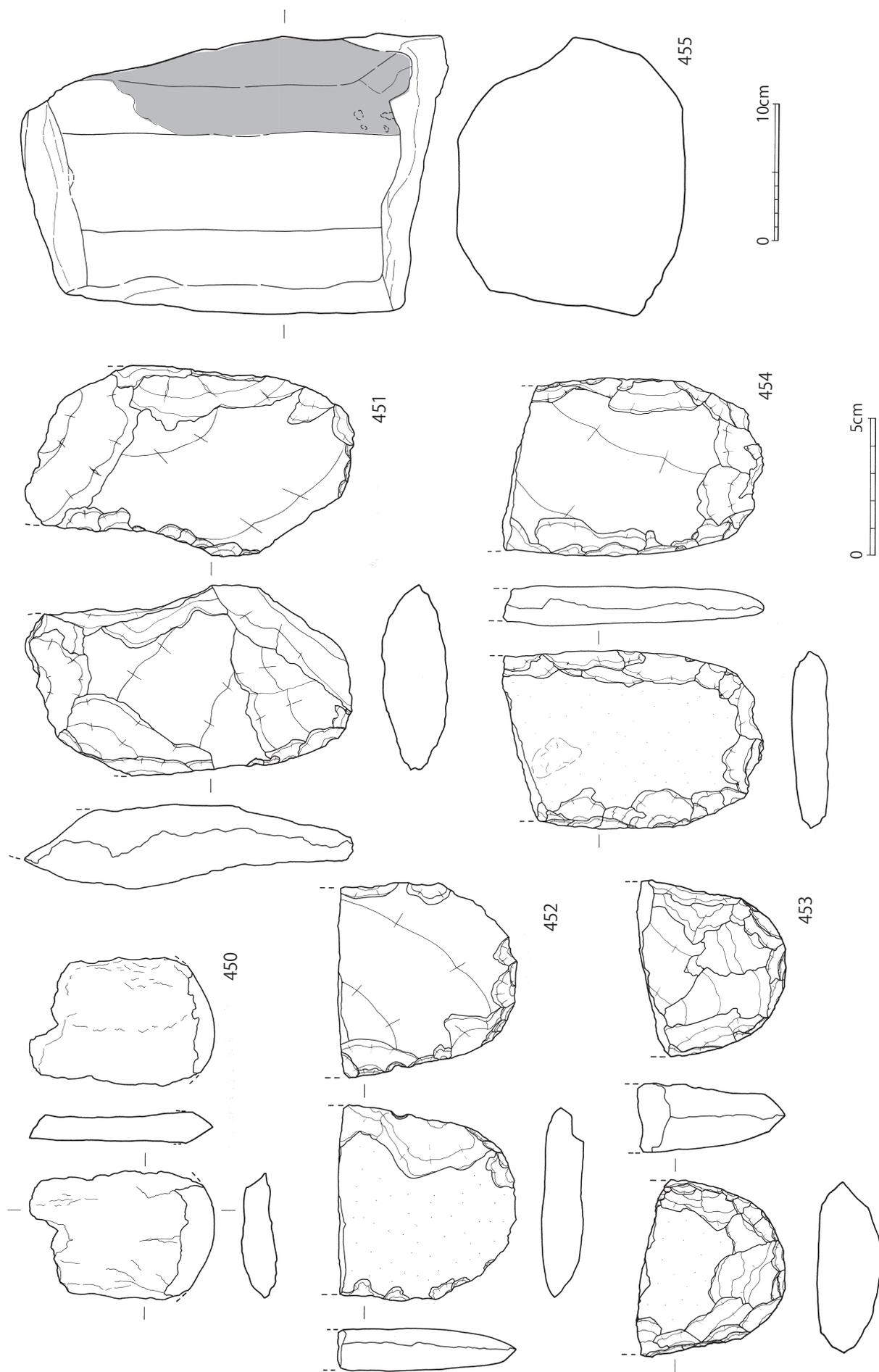
第149図 SH760実測図 (1/50・1/40)



第 150 図 SH760 出土遺物実測図① (1/3)



第151图 SH760 出土遺物実測図② (1/3)

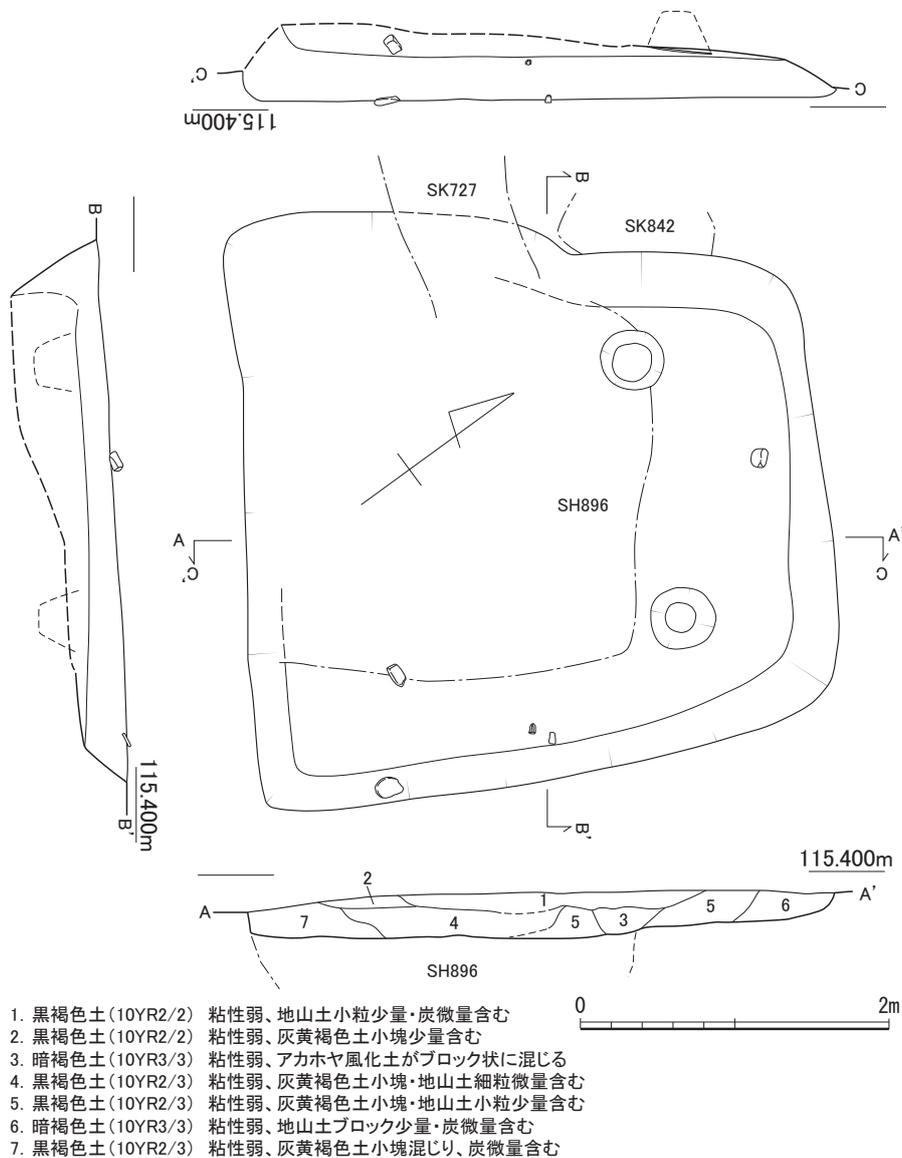


第152图 SH760 出土遺物実測図③ (1/2・1/4)

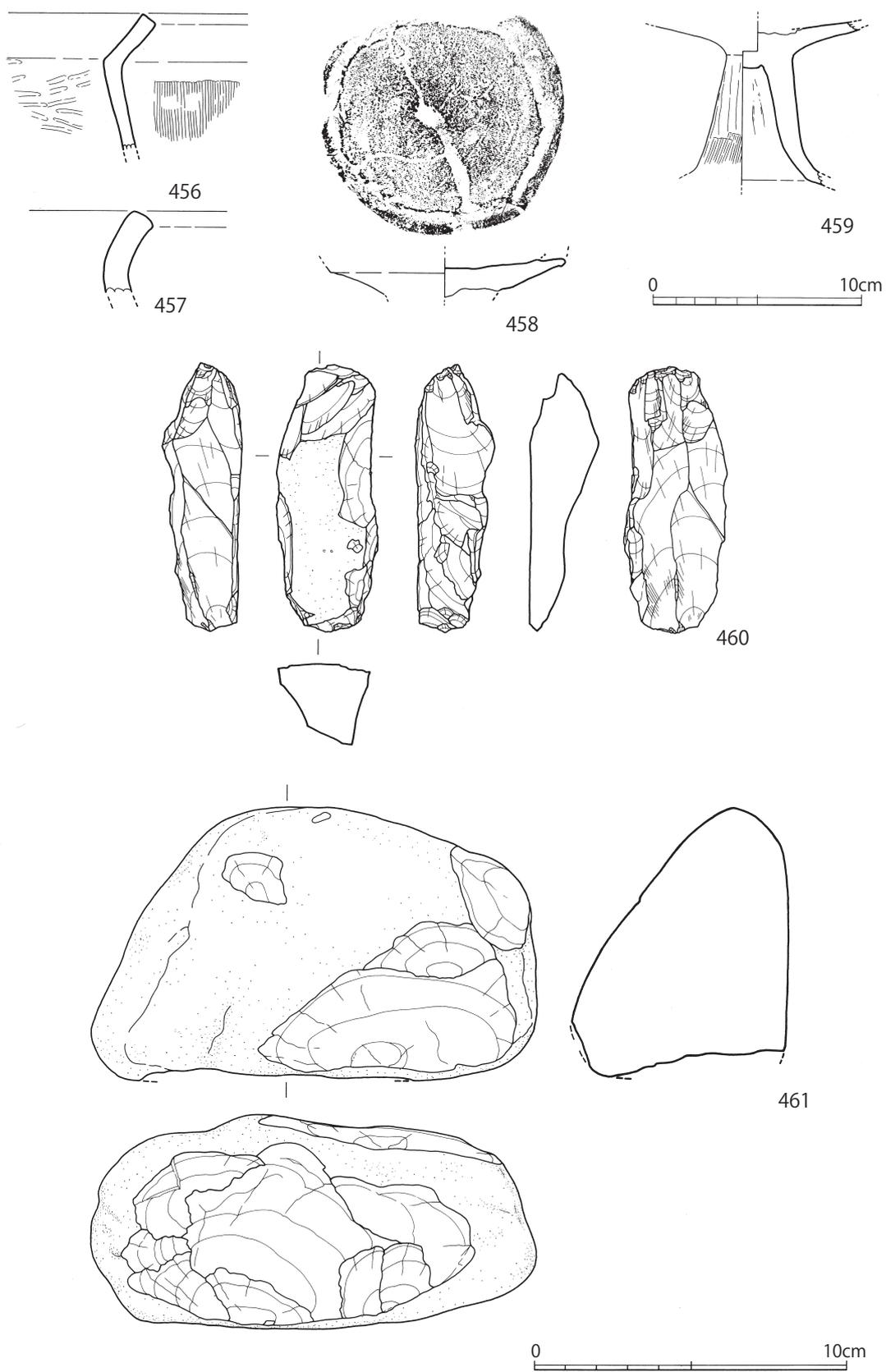
る。SH760 との重複を受けていない南部を中心に、多量の遺物が出土した。特に土師器の甕や甑は完形ないしは関係に近い大破片が多く、竪穴廃絶の際に祭祀行為で埋置されたものである可能性が高い。また、石製紡錘車や鉄製品の出土も認められる。遺物は他に縄文土器や弥生土器、須恵器、打製石斧、石錘、石皿、軽石が出土している。遺構の時期は、古墳時代後期後半に比定される。

SH29出土遺物（第133～137図）

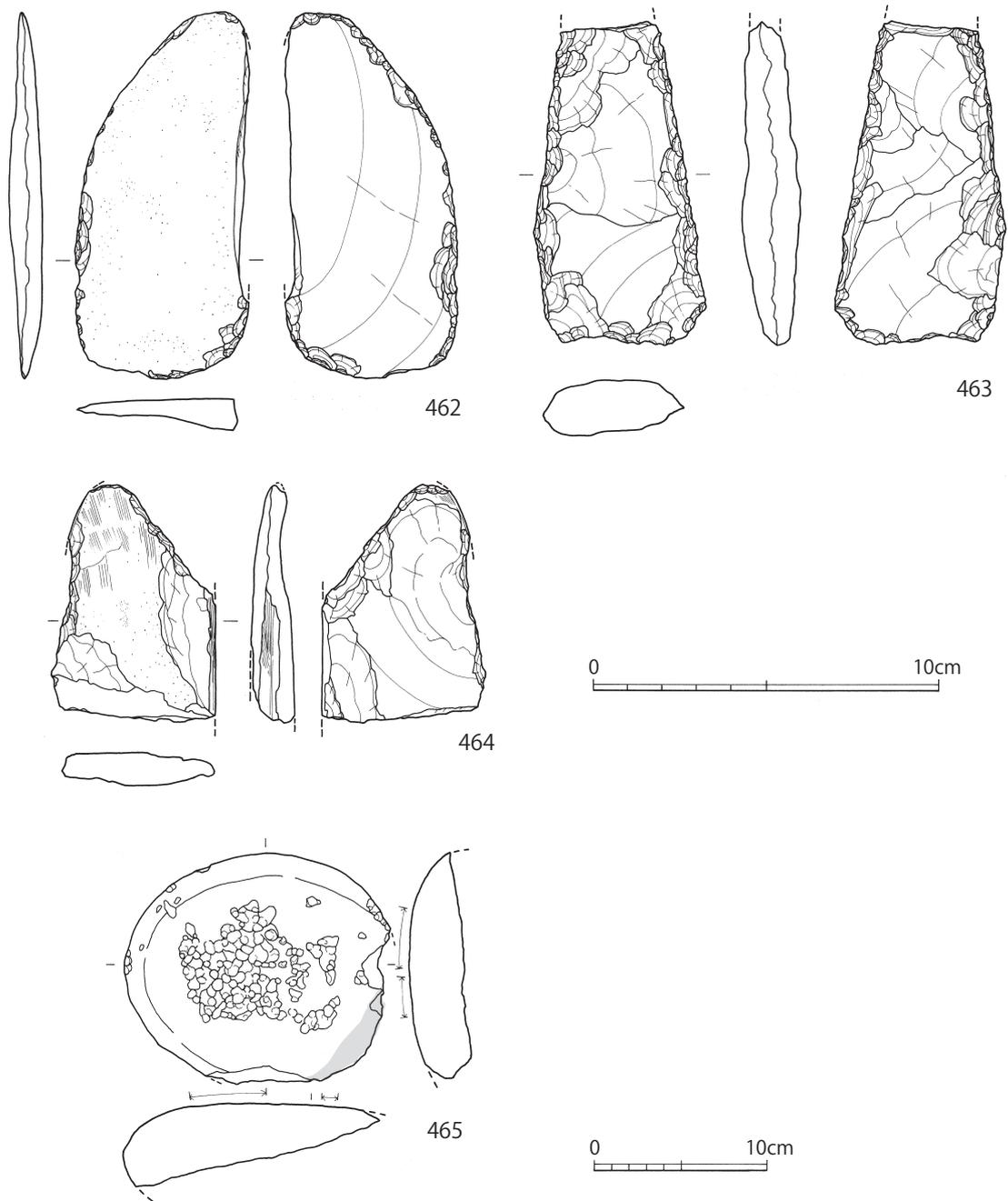
346～351 は縄文土器である。346 は深鉢で、口縁部を断面三角形状に肥厚し、外面に2条の沈線と単節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。347 は外面に単節縄文RLを施す深鉢で、後期中葉の北久根山第二型式に併行するものか。348 は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。349・350 は無文の深鉢である。351 は浅鉢で、外反する口縁の端部が上方に折れ、外面に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。352 は須恵器の坏蓋である。外面及び口縁部に微細な剥離が認められるが、これが意図的に打ち欠いたものか、製作時に剥離したものであるのかは判断が付かない。古墳や横穴墓への副葬品には口縁部等へ打ち欠きを施す事例はあるが、もし人為的なものであるとすれば、竪穴建物の廃絶時の祭祀の際に何らかの理由で打ち欠いたものとみられる。353～364 は土師器である。353 は坏で、内外面に赤色顔料の塗



第153図 SH773 実測図 (1/50)

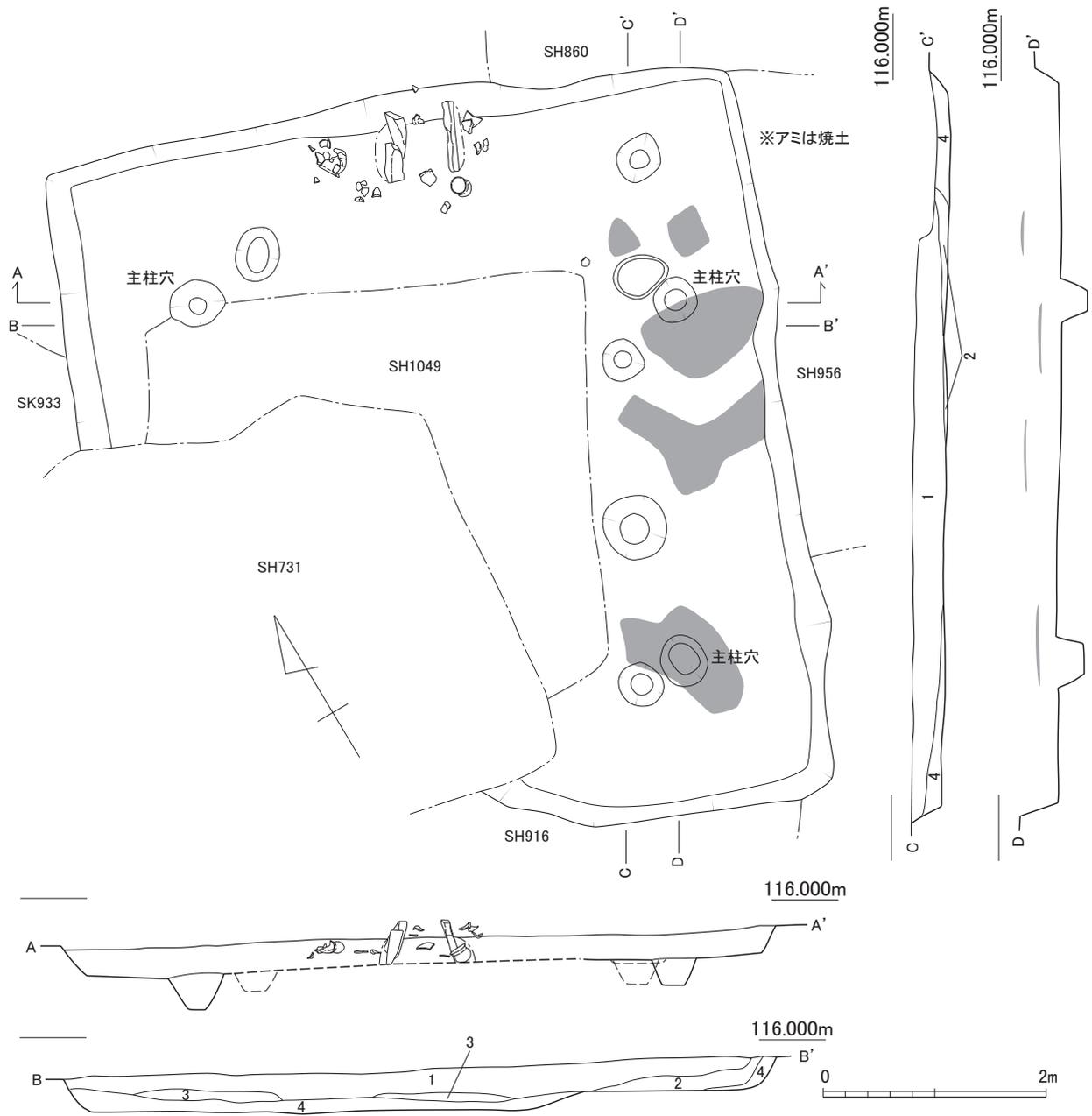


第154図 SH773 出土遺物実測図① (1/3・1/2)

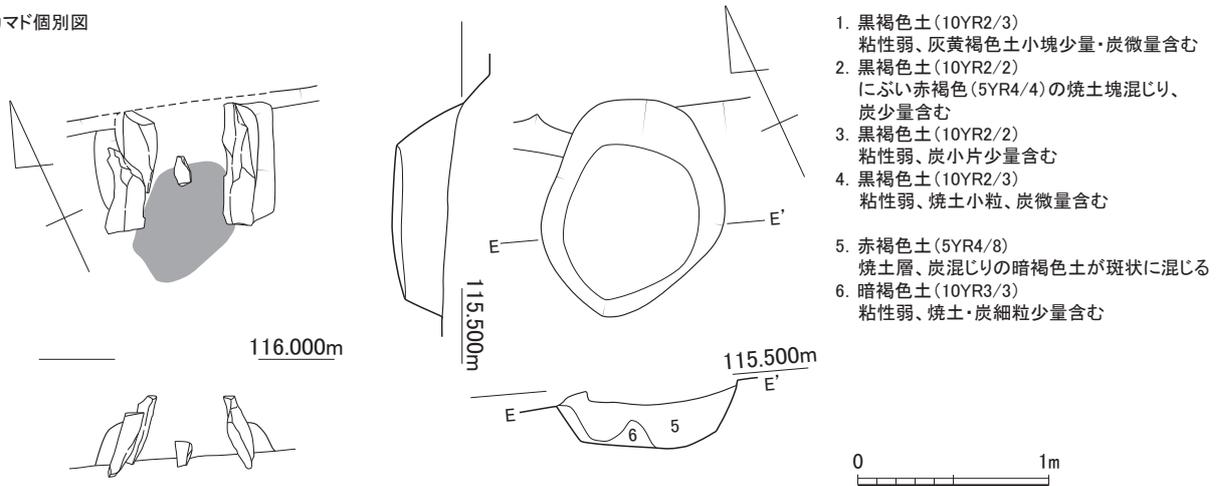


第155図 SH773 出土遺物実測図② (1/2・1/3)

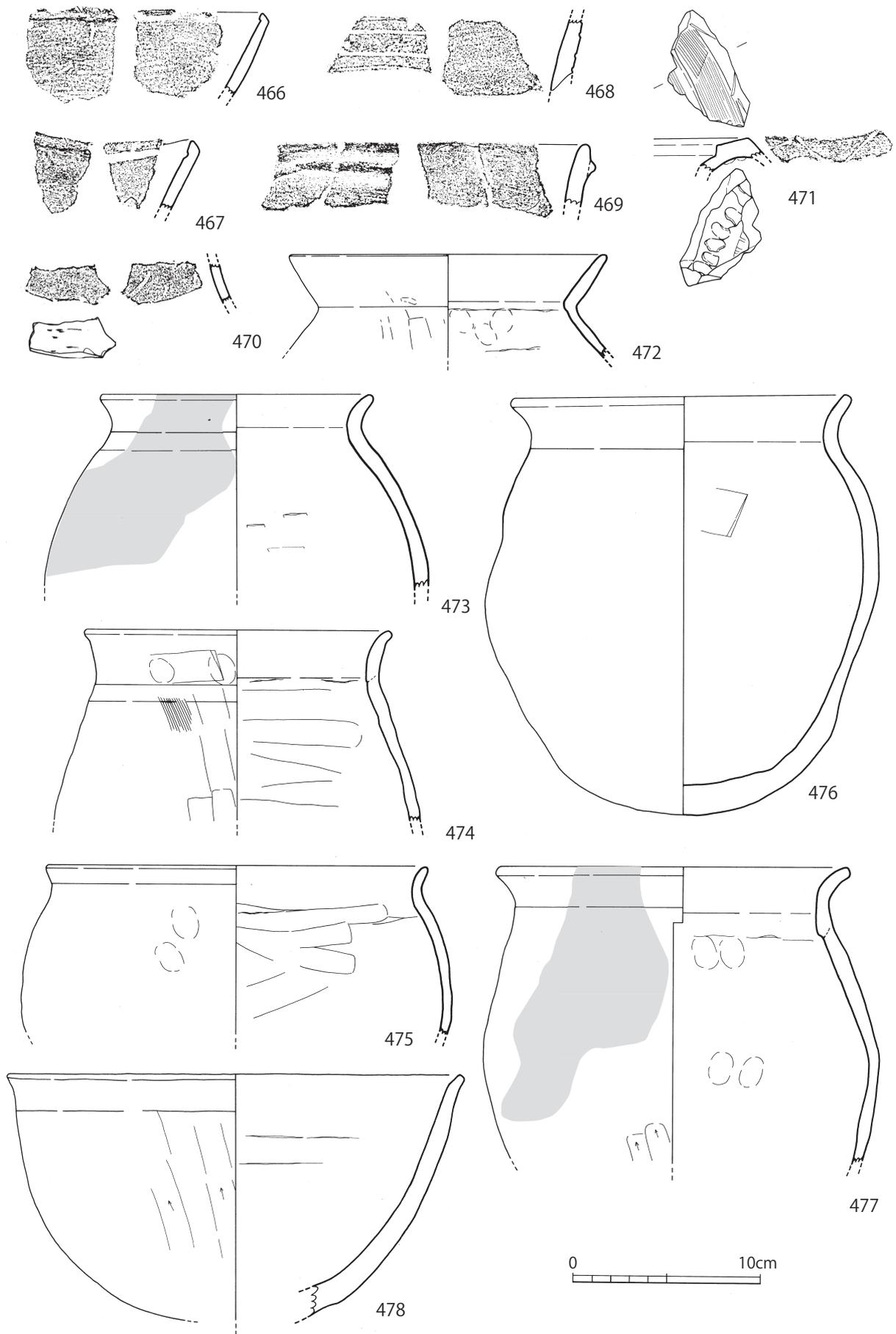
彩が認められる。354～360は甕である。口縁部は外反し、胴部が丸く膨らむ。底部は丸底である。359は口縁部
 の一端が片口となる。360は胴が縦に長く伸びる。358は底面に内容物の痕跡とみられる炭化物が付着する。361
 ～363は甑である。361は小型の甑で、把手は付かない。底部は中空となる。362・363は胴部中位に2箇所の把
 手がつく。底部はいずれも中空であるが、底部のやや上に貫通する穿孔があり、それぞれ対置する位置にあるこ
 とから、この穿孔部に棒を通した可能性がある。穿孔部は内面側に粘土のはみ出しが見られることから、穿孔は
 外面側から行ったことが分かる。362は穿孔の両側に貫通しない凹みがあり、穿孔を2回やり直したものとみら
 れる。364は器種不明の胴部片で、外面に何らかの圧痕が認められたため分析を行った結果、何らかの茎の痕跡
 の可能性が示された(第3分冊の第8章参照)。365は上部が丸みを持つ板状の鉄製品である。366は蛇紋岩製の



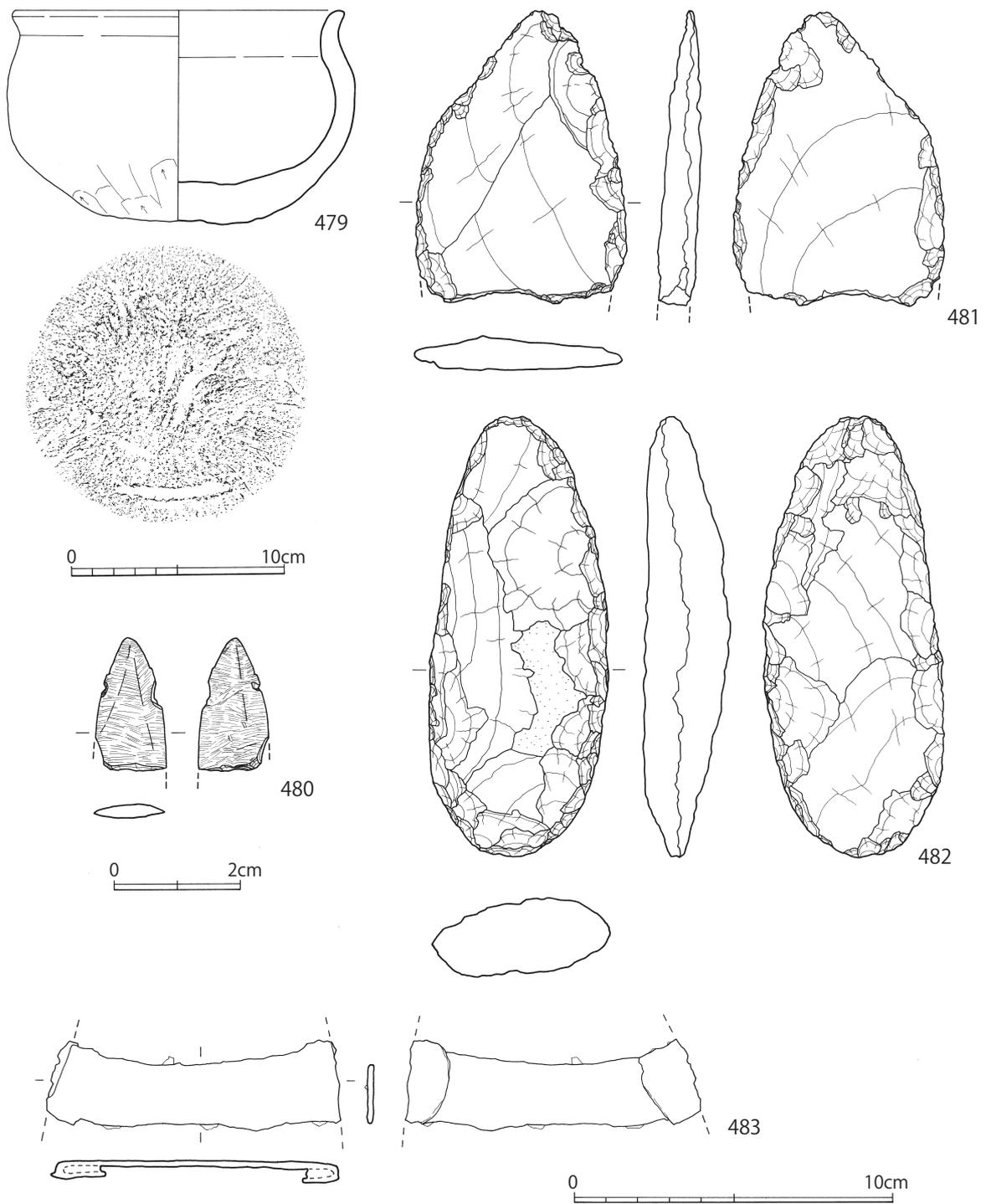
カマド個別図



第156図 SH801実測図 (1/60・1/40)



第 157 图 SH801 出土遺物実測図① (1/3)



第158図 SH801 出土遺物実測図② (1/3・1/1・1/2)

紡錘車で、表面には無数の整形痕（ケズリ痕）が残る。367・368は打製石斧で、367は片面に被熱の痕跡が認められる。石材はいずれも安山岩である。369は切目石錘で、長軸の両端部に小さくスリット状の切れ目を入れて縄掛け部を作り出す。石材は粘板岩である。370・371は石皿で、370は砂岩、371は安山岩を素材とする。

SH724 (第138図)

2区の北東隅部、F-5・F-6グリッドで検出した竪穴建物である。南東隅部は弥生時代の竪穴建物SH815を切っ

ている。北半部が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は隅丸方形を呈し、長辺 4.29 m、短辺 2.55 m 以上、深さ 0.27 m を測る。床面では中央と南壁際の中央部に土坑と、4 基のピットを検出している。最も西にあるピットは支柱穴の可能性が高いが、その他は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土しているが、その量は多くはない。床面が浅いことや出土遺物から、遺構の時期は古墳時代後期に位置付けられる可能性が高い。

SH724 出土遺物 (第139図)

372・373 は縄文土器である。372 は深鉢で、内面口縁下に 1 条の沈線を施す。後期後葉に位置付けられる。373 は底部で、底面の周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。374～377 は弥生土器である。374・375 は甕で、いずれも外面口縁下に 1 状の凸帯が巡る。中期の下城式に比定される。376 は甕で、口縁が外反する。377 は壺の胴部で、横位の多条凸帯を巡らせる。378 は土師器の坏で、ボウル形の器形を呈する。内面に種子状圧痕が認められ、分析の結果イネ (モミ) の圧痕であることが判明した (分析の詳細は第 3 分冊の第 8 章参照)。379 は安山岩の剥片である。表面に自然面を残し、周縁に微細な剥離が認められる。打製石斧の素材剥片の可能性が高い。

SH726 (第140図)

2 区の北端部西寄り、F-4・F-5 グリッドで検出した竪穴建物である。北端部が調査区外に続くが、平面形状は方形を呈し、長辺 3.97 m、短辺 3.90 m、深さは比高で 0.31 m を測るが、標準的な深さは 0.2 m 前後である。埋土は 4 層に分層され、うち 1 層は竪穴建物埋没後の掘り込みであるが、その他は中央に向かってレンズ状の堆積となる。標準土層の第 VI 層を床面とし、中央と東壁際に土坑と、ピット 8 基を検出している。このうちの壁の隅部に近い 4 基のピットが支柱穴になる可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧が出土しているが、量としては少ない。掘り込みが浅いものの、竪穴の構造や出土遺物から遺構の時期は古墳時代前期に位置付けられる可能性が高い。

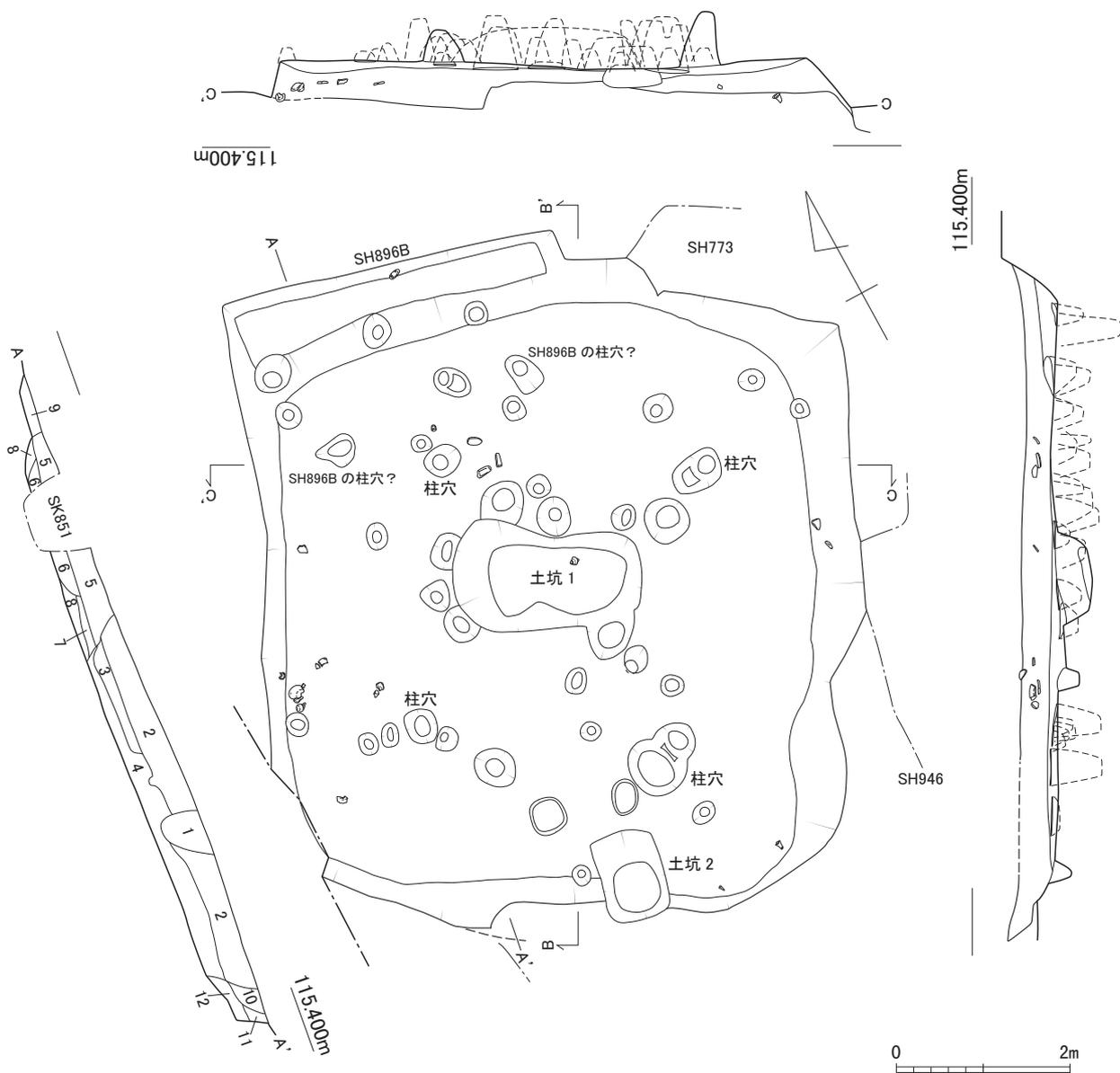
SH726 出土遺物 (第141図)

380 は縄文土器の浅鉢である。口縁部は外反し、外面に 1 条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。381 は弥生土器の甕か。口縁部に接して外面に 1 条の凸帯を貼り付け、凸帯上に丸棒状工具による刻みを施す。凸帯下には補修孔を穿つ。382 は弥生土器の甕で、口縁は外に折れる。383 は土師器の小型丸底壺の口縁部で、古墳時代前期の所産である。384 は安山岩の縦長剥片を素材とする打製石斧で、周縁に調整剥離を施す。

SH730 (第142図)

2 区の北部東寄り、F-5・F-6・G-5・G-6 グリッドで検出した竪穴建物である。南側は縄文時代の竪穴建物 SH871 を切っている。平面形状はやや歪な方形を呈し、長辺 4.69 m、短辺 4.43 m を測る。深さは比高で 0.21 m を測るが、全体に上部が削平を受けており、大部分では 10 cm あるかないかの厚さしかない。埋土は 3 層あるが、1 層は竪穴埋没後の堆積層で、2・3 層はレンズ状の堆積となる。標準土層の第 VI 層を床面とし、この面で 8 基のピットを検出した。このうちの方形に並ぶ 4 本が支柱穴となる。

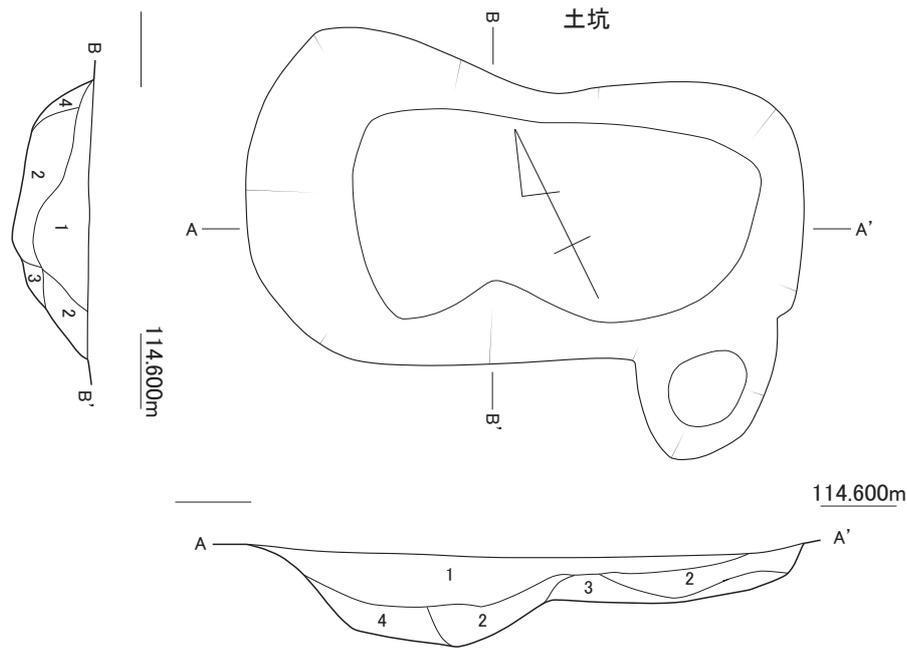
竪穴の北壁際には竈が付設される。竈は逆「U」字状に黒褐色の粘土を盛り上げて袖部を構築し、その中を焚口とする。竈の北側には煙出しとみられる小ピットを穿つ。焚口に土器を埋置するなどの、廃絶時の祭祀の痕跡は認められなかった。竈を完掘した後、その面を精査したところ、竈の下に焼土や炭片を含む土層の広がりが認められ、最終的には土坑となった。土坑は内部が 2 段掘りとなり、北側にテラス状の段が付き、これが煙出しの穴に通じる部分となる。南側はこのテラスから 10 cm ほど丸く掘り込んでいる。この土坑部の埋土は細かく分層され、掘り込みを行った後に丁寧に埋め戻して整地した痕跡であるとみられる。全体に焼土の小粒が混じるため、整地の際に何らかの目的で火を用いた可能性が高い。



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒微量含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、黄褐色土細粒微量含む
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小塊少量含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小塊混じる
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土小粒微量含む
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、黄褐色土小塊少量含む
7. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、黄褐色土小塊混じる
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土塊混じる
9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土細粒少量含む (SH896B 埋土)
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、アカホヤブロック含む (SH946 埋土)
11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、黄褐色土小粒少量含む (SH946 埋土)
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、黄褐色土細粒混じり、アカホヤブロック少量含む (SH946 埋土)

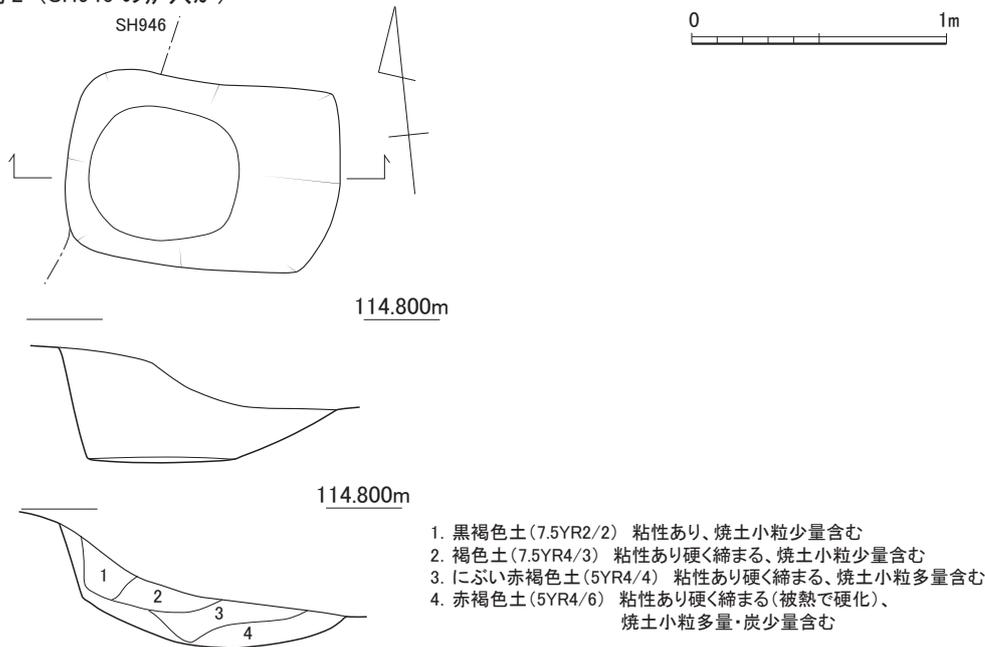
第 159 図 SH896 実測図 (1/80)

SH730 からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、半円形土製品、石ノミ、打製石斧といった遺物が出土している。縄文時代の遺物が一定量出土しているが、これはSH871と重複しておりその遺物が紛れ込んだものであろう。遺構の時期は、古墳時代後期後半に位置付けられる。



1. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒混じり、同小塊少量含む
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小塊・小粒少量含む
3. 明黄褐色土(10YR6/6) 粘性あり締まる、黄褐色ブロック主体で暗褐色土を少量含む
4. 黄褐色土(10YR5/6) 粘性あり締まる、暗褐色土ブロック少量含む

土坑 2 (SH946 の炉穴か)

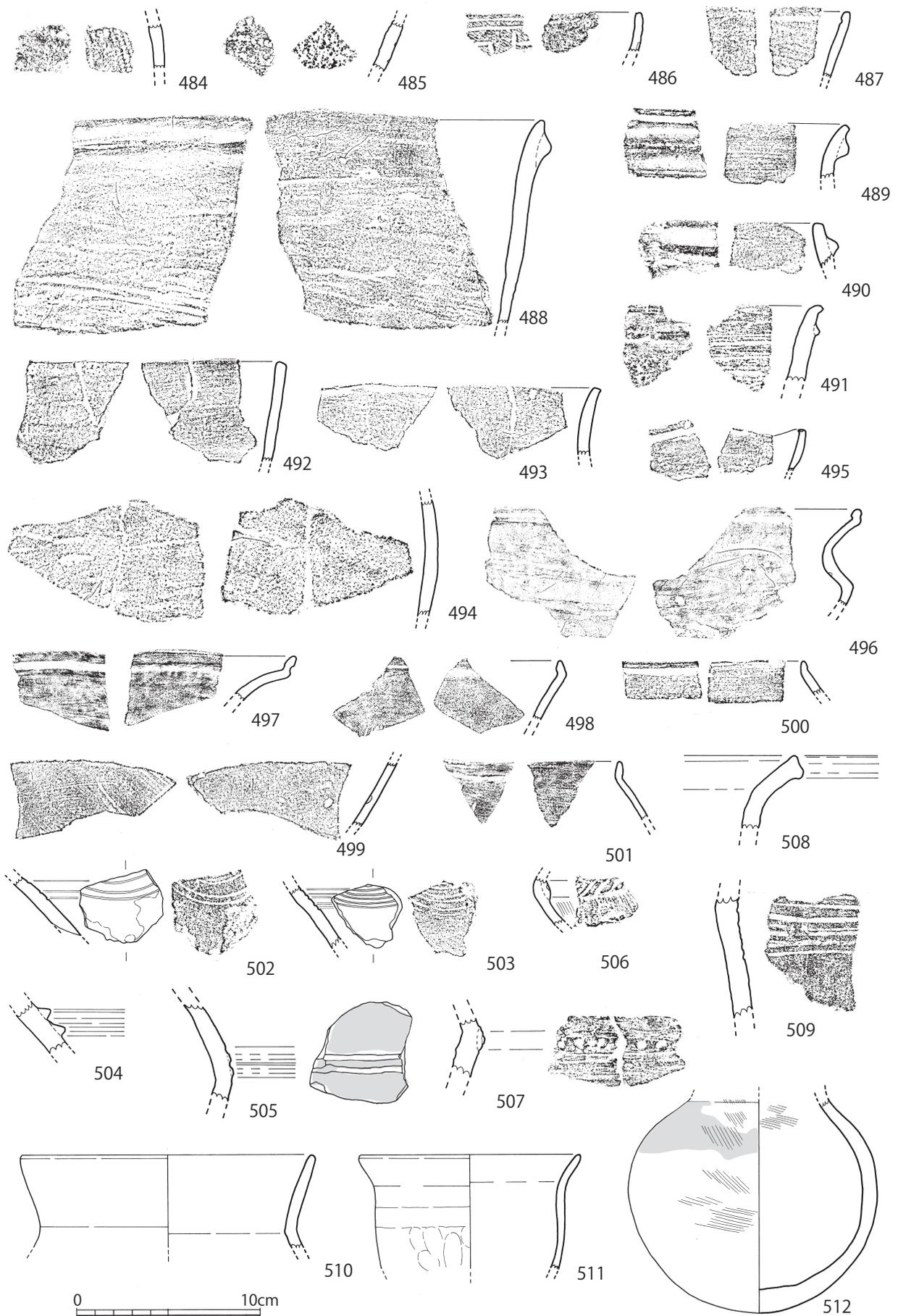


1. 黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性あり、焼土小粒少量含む
2. 褐色土(7.5YR4/3) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒少量含む
3. にぶい赤褐色土(5YR4/4) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒多量含む
4. 赤褐色土(5YR4/6) 粘性あり硬く締まる(被熱で硬化)、
焼土小粒多量・炭少量含む

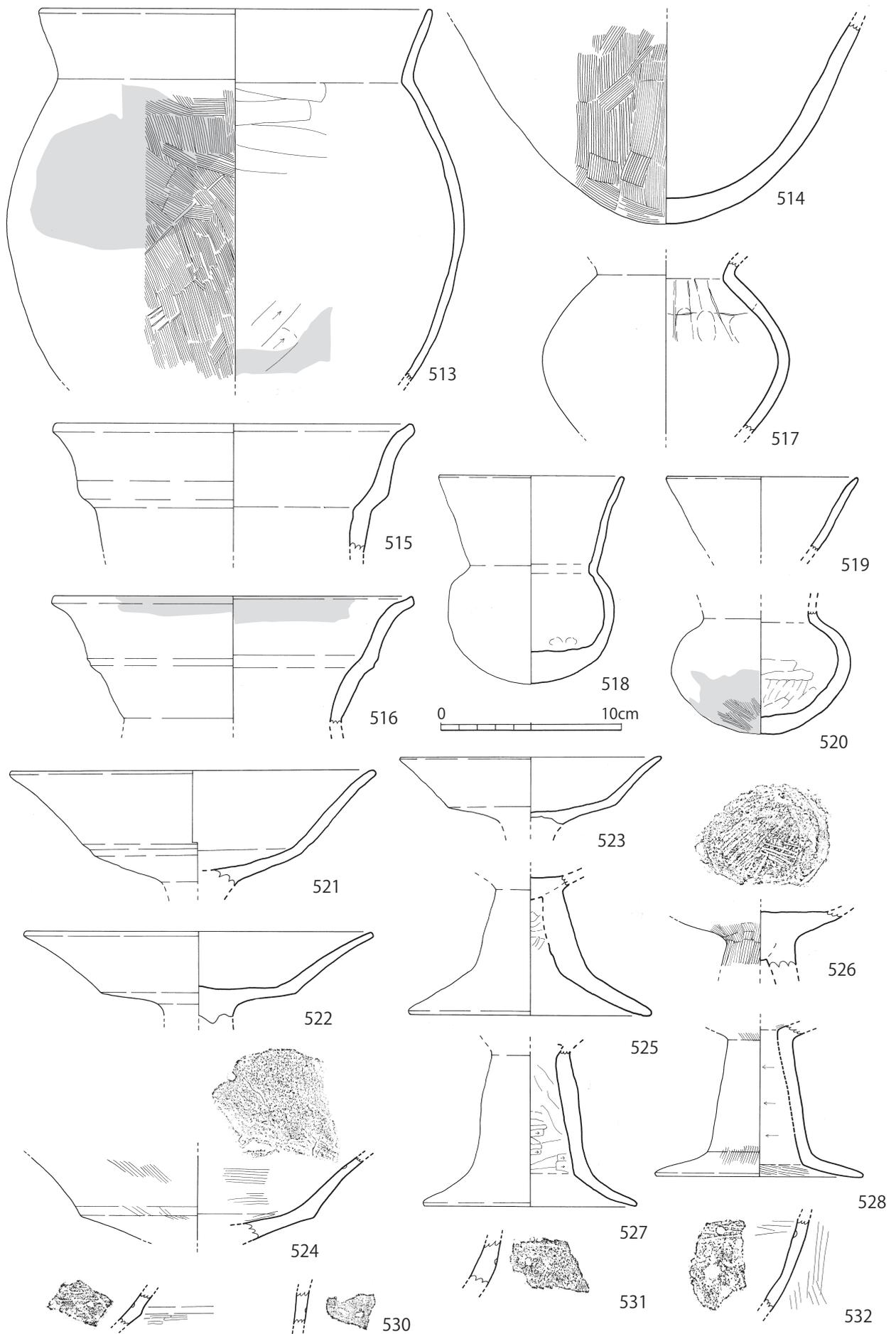
第 160 図 SH896 床面遺構実測図 (1/30)

SH730出土遺物 (第143図)

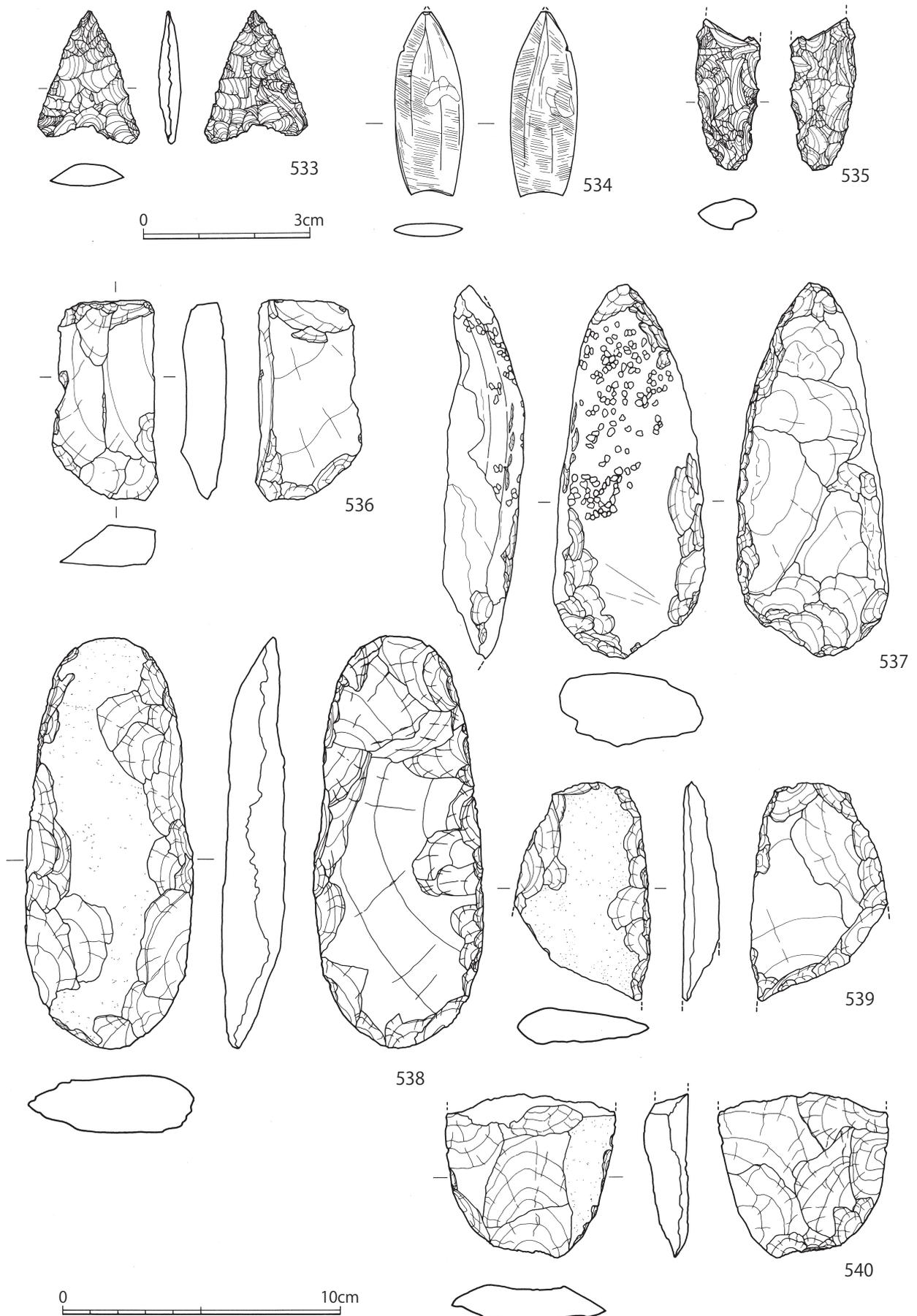
385～394 は縄文土器である。385 は深鉢で、口縁部内面に沈線状の段が付く。386～388 は無文の深鉢で、388 は口縁部を縦に長く肥厚・拡張し、その下端には段が付く。389～392 は外面口縁下に 1 条の無刻目凸帯を施す。391・392 は内傾が明瞭で、壺の可能性もある。393 は無文の深鉢である。398-2 は 389 と同一個体とみられる胴部片で、内面に種子状の圧痕が認められたため分析を行ったが、何に由来するものかは判明しなかった。385 は後期後葉、388 は晩期前半、389～392 は晩期後葉の上菅生B式に比定される。394～398 は弥生土器である。394～



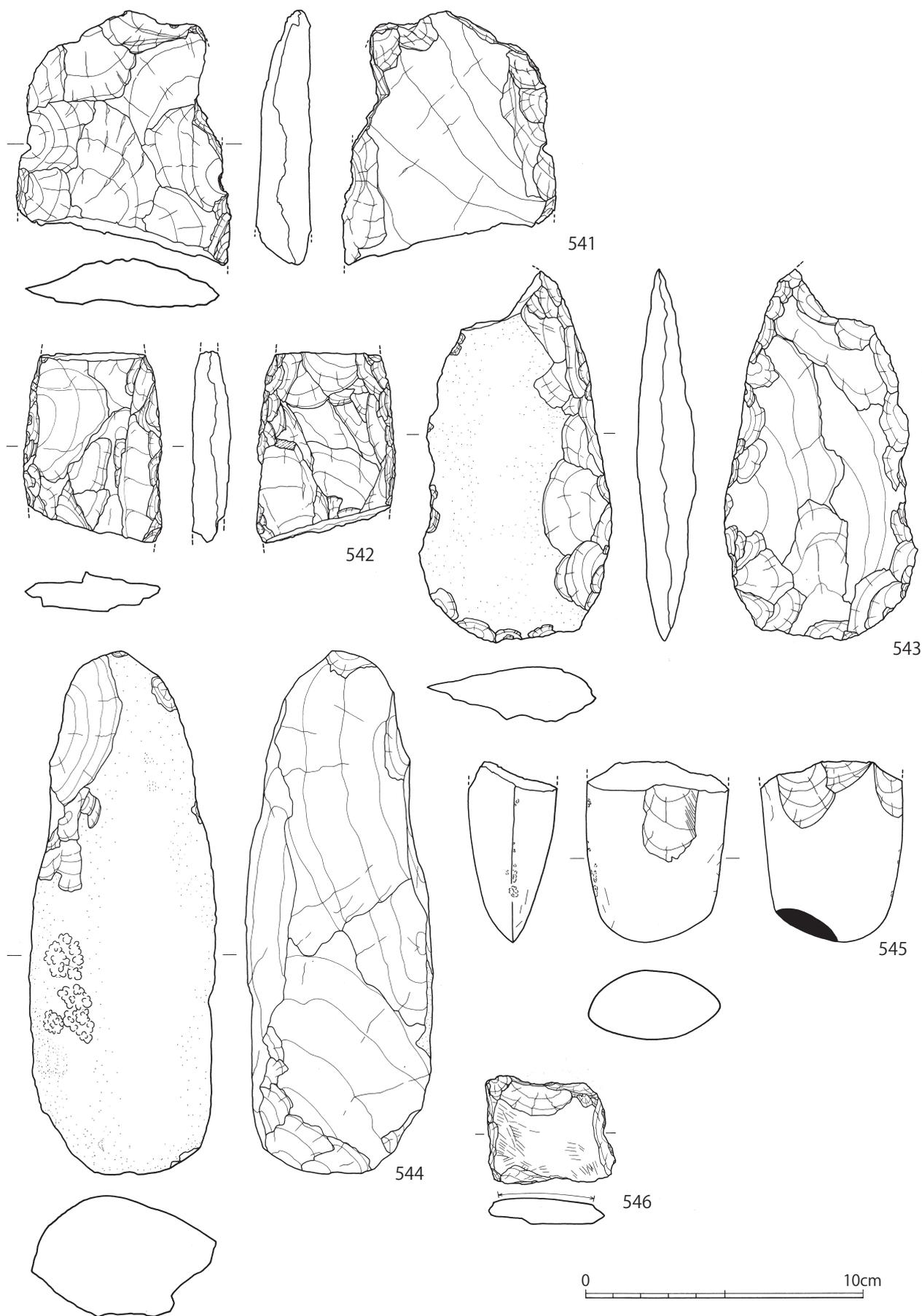
第 161 图 SH896 出土遺物実測図① (1/3)



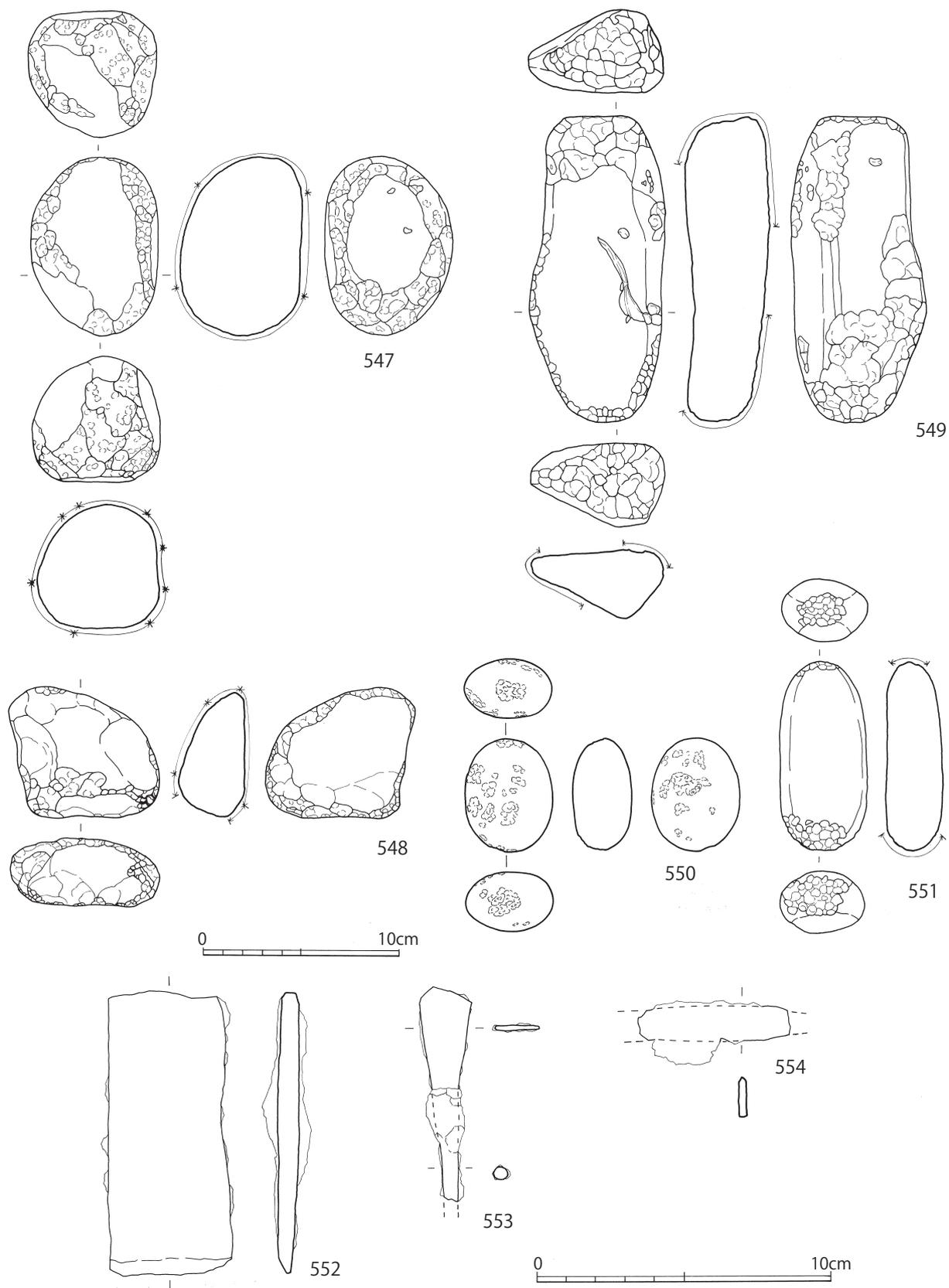
第 162 図 SH896 出土遺物実測図② (1/3)



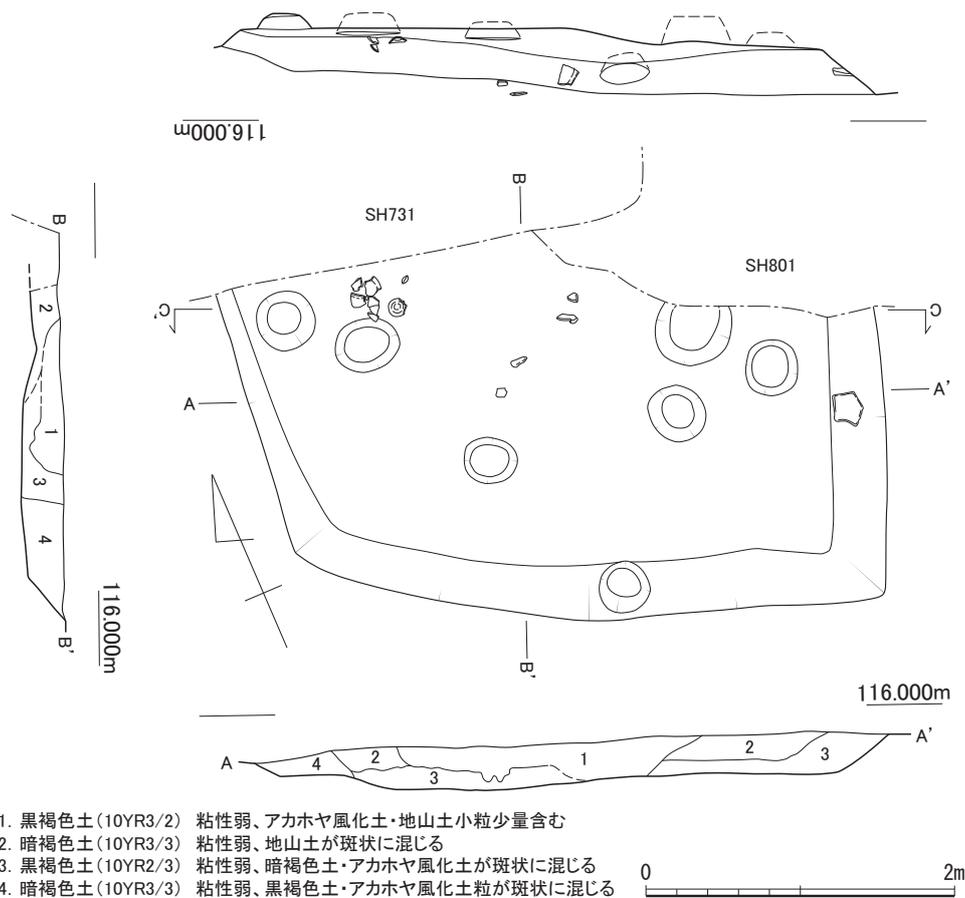
第 163 图 SH896 出土遺物実測図③ (1/1・1/2)



第 164 图 SH896 出土遺物実測図④ (1/2)



第165图 SH896 出土遗物实测图⑤ (1/3 · 1/2)



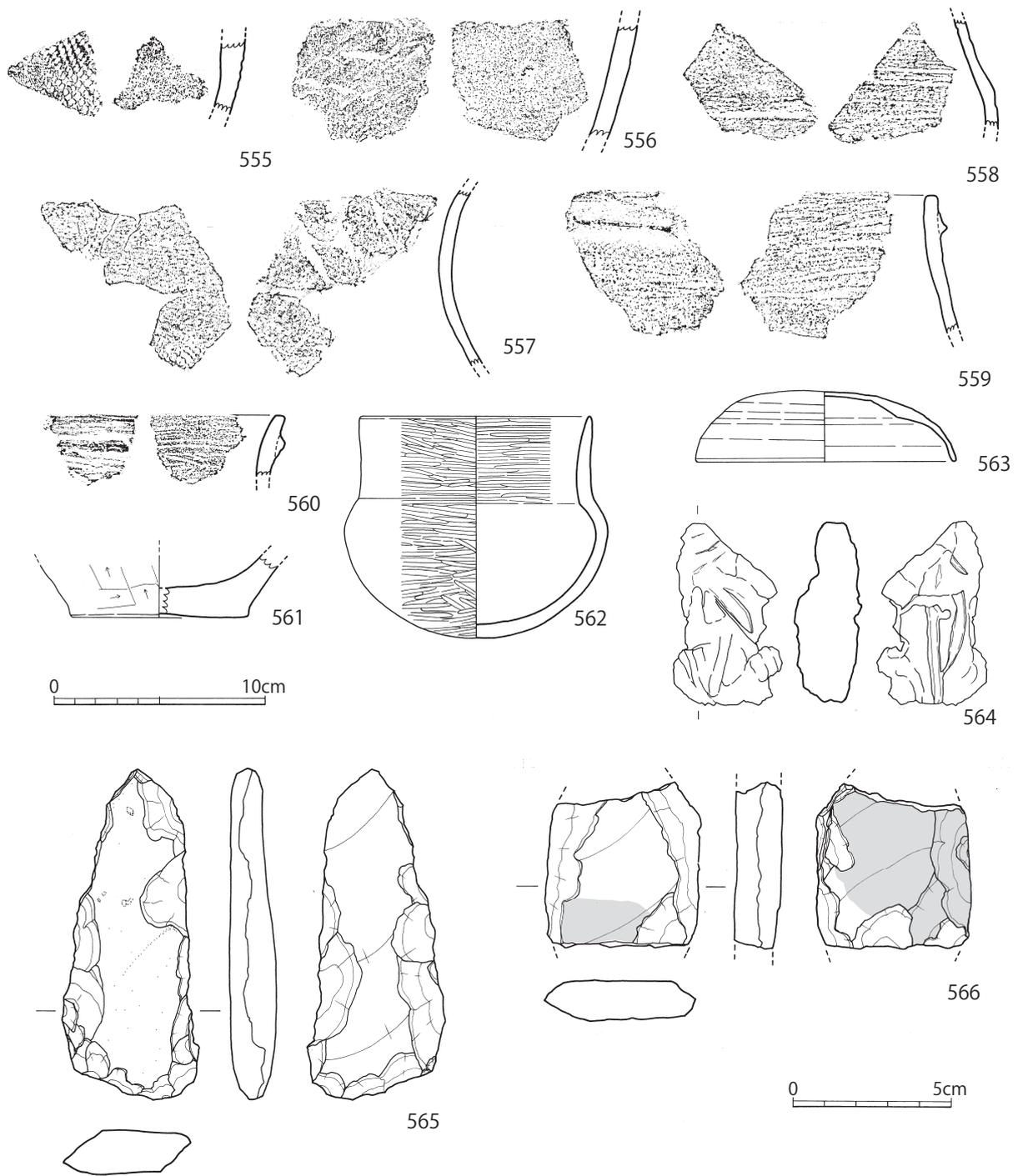
第166図 SH916 実測図 (1/50)

396は甕で、外面口縁下に刻目のある凸帯を巡らせる。397は厚手の粗製甕で、口縁外端部に沈線を施す。398は壺で、口縁部が大きく外反する。399は土師器の坏で、外面に黒斑が、内面には赤色顔料の塗彩が認められる。400は弥生土器下城式甕の口縁部破片を転用し、周縁を打ち欠いて半円形状にした土製品である。401は石ノミで刃部を欠失する。石材は砂岩である。402は安山岩の横長剥片を素材とした打製石斧で、周縁に調整剥離を施す。

SH731 (第144図)

2区の中央部、H-5グリッドで検出した竪穴建物である。遺構の重複が著しく、北半～東半部は古墳時代前期の竪穴建物SH1049と古墳時代後期の竪穴建物SH801、南は古墳時代後期の竪穴建物SH916、北西部は古墳時代後期の土坑SK933と重複している。しかしながら、遺構番号が示すようにSH731はこれら重複遺構よりも早くに検出しており、本来SH731を切るSH801やSH916・SK933の前後関係を押さえないまま掘り下げてしまっている。床面が黄褐色ロームを掘り込むことから、底面での壁の立ち上がりは明瞭で、これによって遺構の範囲が確定している状況である。切り合い関係が正しいのはSH731がSH1049を切ることで、後は全て間違えていることになる。

SH731は方形を呈し、長辺4.34m、短径4.10m、深さ0.76mを測る。埋土は4層に分層され、1～3層の上層と下層の4層に分けられる。壁面は斜めに立ち上がり、逆台形状の断面径を示す。床面では北壁際と中央から東壁際に土坑を、その他9基のピットを検出した。遺構の規模からすると支柱穴は2本の可能性が高いが、明確に対置するものではなく特定できない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、壁土、土製品、打製石斧、石皿、管玉、鉄鏃が出土しているが、先述のとおり遺構の切り合い関係を間違えており、須恵器など、本来は他の

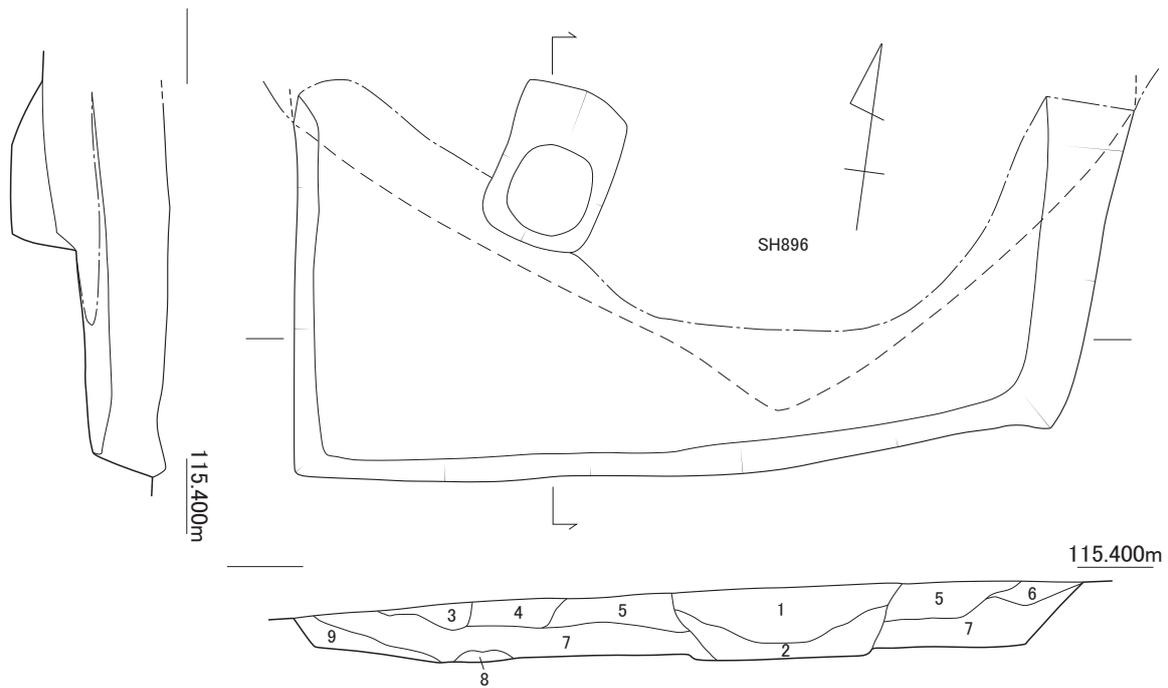


第167図 SH916出土遺物実測図(1/3・1/2)

遺構に帰属するものが混在している。黄褐色ロームを床面とすること、SH1049を切り、古墳時代後期の遺構に切られること等を勘案すると、古墳時代前期後半に位置付けられる可能性が高い。

SH731出土遺物(第145・146図)

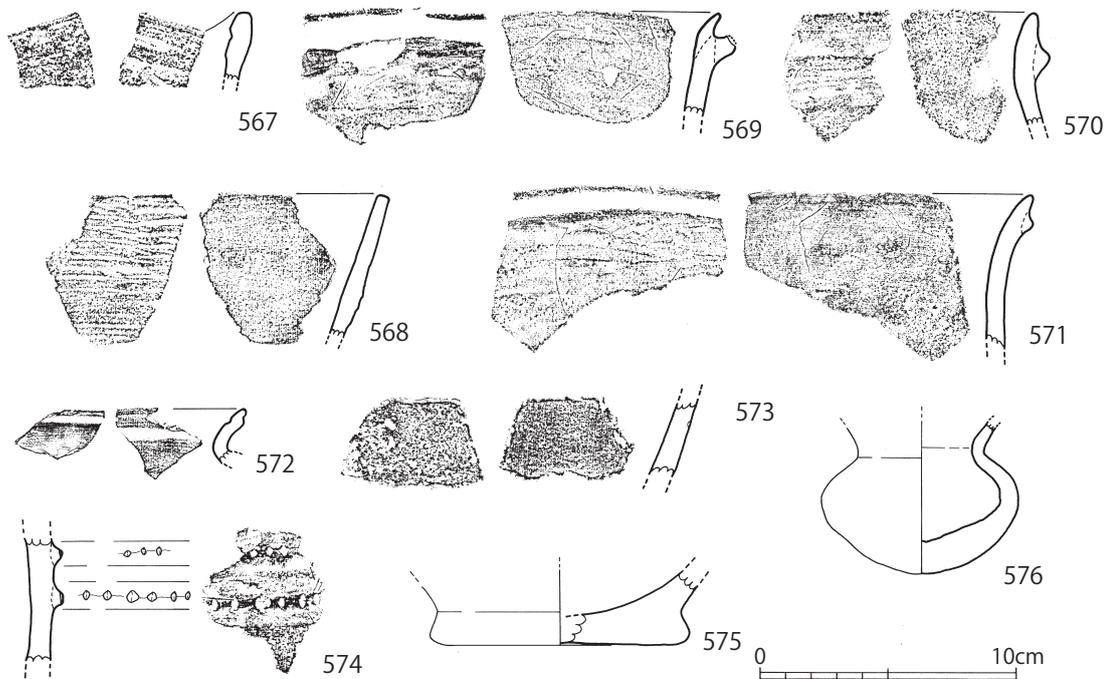
403・404は縄文土器である。外面に横位の区画沈線と末端が蕨手状になる沈線と、区画沈線内にRLの単節縄文を施す。後期前葉に位置付けられようか。404は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。405・406は弥生土器である。405は口縁端部を欠くが口縁直下の破片で、外面に



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、灰黄褐色土小粒少量含む (SH896埋土)
2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、地山土小粒少量含む (SH896埋土)
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、アカホヤブロック含む
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、地山土小粒少量含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土 (10YR2/2) ブロック混じり、アカホヤブロック少量含む
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり締まる、アカホヤブロック含む
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり締まる、地山土細粒混じり、アカホヤブロック少量含む
8. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、地山土ブロック混じる
9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり締まる、地山土小粒少量含む

0 2m

第 168 図 SH946 実測図 (1/50)



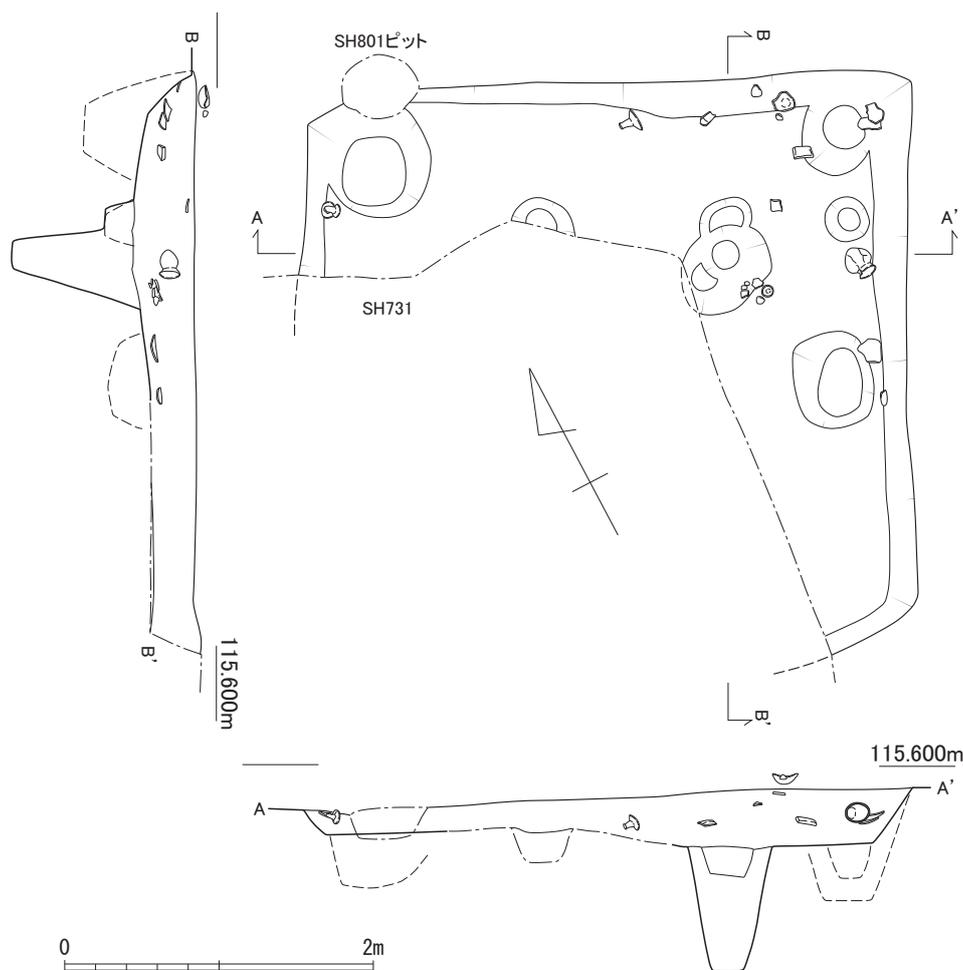
第 169 図 SH946 出土遺物実測図 (1/3)

1条の刻目凸帯を施す下城式の甕である。406は壺で、横位の多条沈線と、垂下する多条沈線を施す。下城式甕に伴う壺である。407は須恵器の器台であろう。408は壁土で、胎土にスサを含む。409は基石形を呈する土製品である。410は安山岩の円礫を素材とする磨石で、上下両面を磨面とする。411・412は打製石斧である。いずれも表面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。412は自然面に敲打痕がみられることから、石皿ないしは叩石から剥ぎ取った剥片を素材とした可能性がある。413は石製の管玉、414は鉄鏃の茎部である。415は石皿で、上下両面を使用面とする。

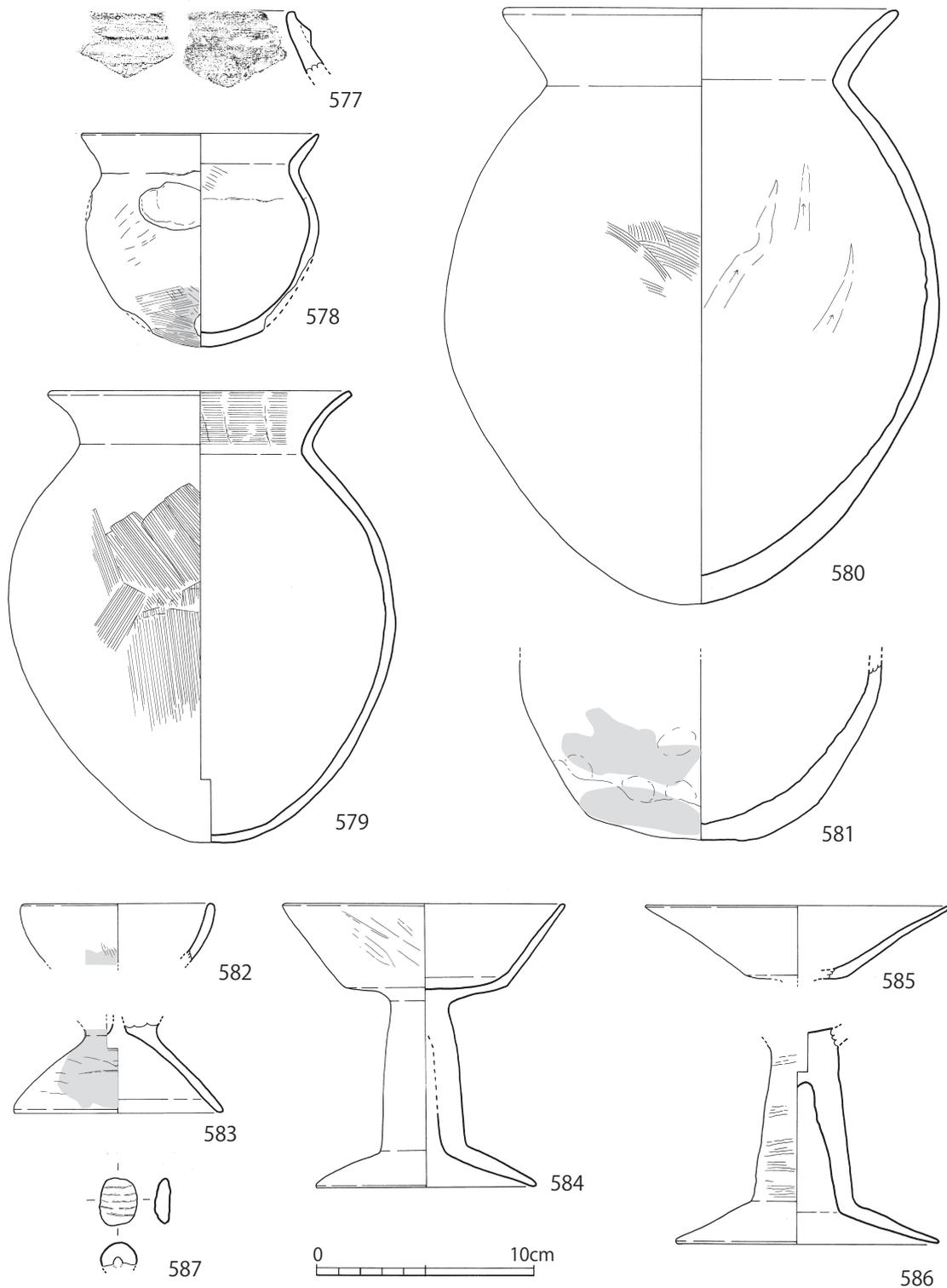
SH750 (第147図)

2区の南東隅部、H-5・H-6グリッドで検出した竪穴建物である。北部は縄文時代の竪穴建物SH956を切り、東端部は土坑SK747に切られている。北西隅部は古墳時代後期の竪穴建物SH801とわずかに重複するが、SH801を先に掘っており両者の前後関係は明らかではない。平面形状は方形を呈し、長辺5.28m以上、短辺5.06m、深さ0.44mを測る。壁面は斜めに立ち上がり、内部の断面形状は逆台形状を呈する。床面では7基のピットを検出しており、そのうちの北西側の1基を除いた、東西2間×南北1間の6基が支柱穴となる。

北側の壁の中央には竈が附属する。竈は黒褐色ないしは褐色の粘土を逆「U」字状に盛り上げて袖部を構築し、

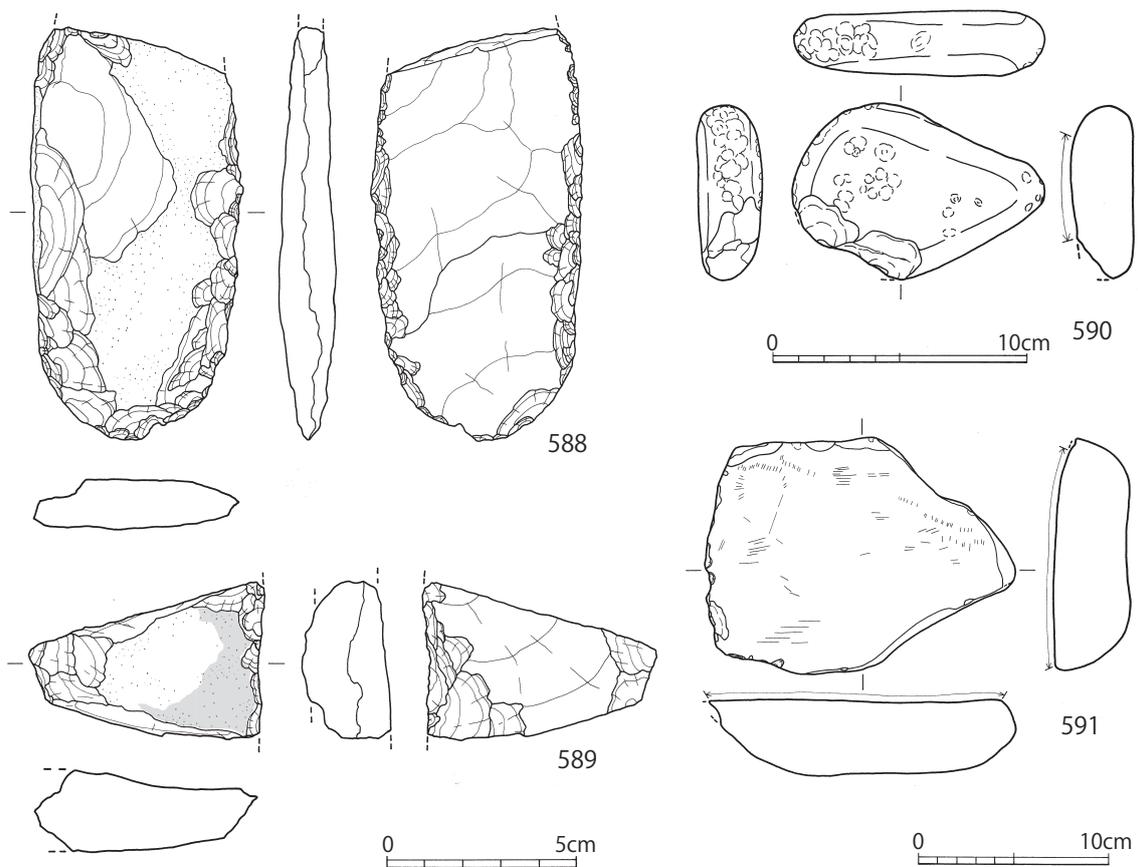


第170図 SH1049実測図 (1/50)



第 171 図 SH1049 出土遺物実測図① (1/3)

袖部に囲まれた中を焚口とする。焚口には土器埋置等の祭祀痕跡は認められなかったが、竈を埋めた上に、長さ 0.84 m、幅 0.60 m の扁平な安山岩の巨石が置かれていた。竈を封じる目的で置かれた可能性が高い。竈を完掘した後、その下面を精査したところ、焼土小粒の混じる土層が確認され、土坑のプランを検出した。土坑は鶏卵形に近い平面形状を呈し、長径 0.97 m、短径 0.84 m、深さ 0.34 m を測る。他の竪穴建物と同様に、竈構築前に部分



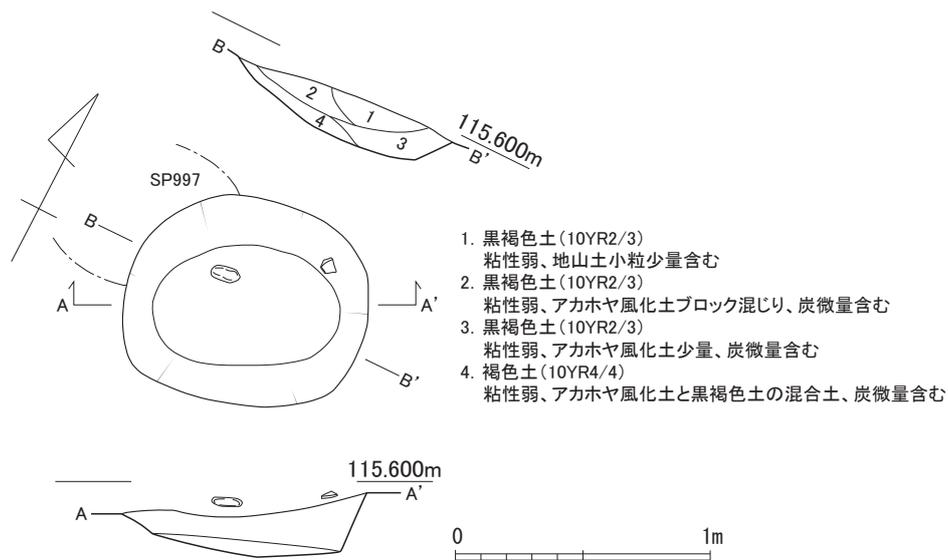
第172図 SH1049出土遺物実測図② (1/2・1/3・1/4)

的に掘り返して整地をして地盤を補強した痕跡である可能性が高い。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石斧、磨石が出土している。遺構の年代は、古墳時代後期（6世紀後半）に位置付けられる。

SH750出土遺物（第148図）

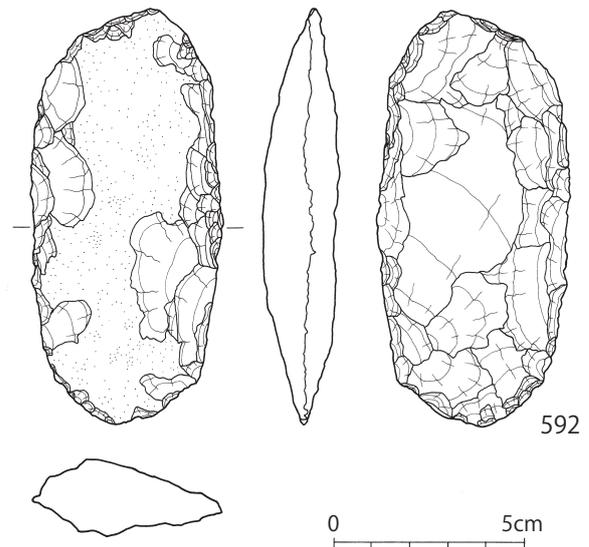
416～419は縄文土器である。416・417は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付ける深鉢で、晩期後葉の上菅生B式に比定される。418は晩期の浅鉢で、口縁は外反し端部は丸く肥厚する。419は浅鉢の頸部片で、外面に横位の条痕を施す。晩期前半に位置付けられよう。421・422は弥生土器である。421は壺で、外反する口縁の上部を肥厚し、外端部に鋸歯状の刻みを施し、上端には円形の浮文を貼り付ける。422は甕の底部で、底部は高い上げ底となる。423は須恵器の坏蓋で、天井部には回転ヘラケズリを施す。424・425は土師器の甕で、口縁は外反し、胴部は丸く膨らむ。426は土師器の甑で、寸胴形の器形を呈する。427は土師器の鉢か。口縁部直下に貫通する孔を穿つ。420は土師器の胴部片で、外面に種子状圧痕が認められる。熊本大学で分析を行ったところ、特定はできなかったがアズキに似た種子の圧痕であるとの結果が得られた（分析の詳細は第3分冊の第8章参照）。428・429は土師器高坏の坏部片で、428は内面に、429は外面にそれぞれ種子状の圧痕が認められる。いずれも分析を行ったが、種子を特定できなかった。430は角閃安山岩の円礫を素材とする磨石で、上面を磨面とする。431は泥岩製の打製石斧で、上下両面に煤の付着が認められる。432は安山岩の剥片である。



第173図 SK737 実測図 (1/30)

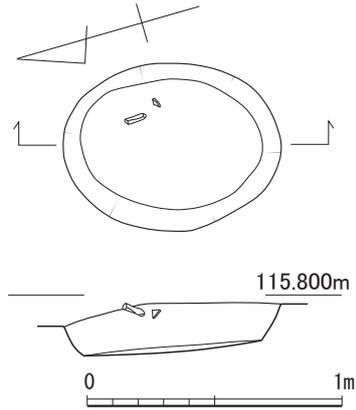
SH760 (第149図)

2区の南部、H-5・I-5グリッドで検出した竪穴建物である。北西部は縄文時代の竪穴建物SH955を、中ほどから南は古墳時代後期の竪穴建物SH29をそれぞれ切っている。平面形状は東西にやや長い方形を呈し、長辺5.00m、短辺4.83m、深さは比高で0.47mを測るが、標準的な深さは0.2~0.25m前後である。埋土は7層に分層されるが、1~3層は竪穴埋没後の掘り込みで、4・5層の上層と、6・7層の下層に大別される。壁面は斜めに立ち上がり、内部の断面形状は逆台形状を呈する。標準土層の第Ⅵ層を床面とし、この面で北東隅部に浅い土坑1基と、主柱穴となる4基のピットを検出した。北東の主柱穴の上面では完形の土師器坏(第150図444)が出土しており、柱を抜いて柱穴を埋めた後に埋置された可能性がある。また、南半部を中心に貼床層の広がりが確認された。その範囲はSH29とほぼ重なることから、SH29の貼床とも考えたが、SH29の推定プランをはみ出す所もあり、またSH29では貼床層が認められなかったことから、この貼床はSH760のもの判断した。おそらくはSH29と重複した部分の地盤が弱いために、貼床を入れて床面を補強したものであろう。



第174図 SK737 出土遺物実測図 (1/2)

また、北壁のほぼ中央で竈を検出している。竈は褐色の粘土を逆「U」字状に盛り上げて袖部を構築し、袖部に囲まれた内側を焚口とする。袖部の内側は壁面が被熱により赤変下部分も認められた。袖部の両先端には扁平な石材を立てて袖石とし、焚口の中央には支柱石が立つ。この焚口の前には方柱状の凝灰岩を置き、その西には同一石材とみられる折れた凝灰岩が立てられていた。この凝灰岩は本来天井部に渡されていたものとみられ、竈廃絶時に下ろされたものであろう。焚口の上には関係に近い土師器の坏や土器片があり、その上から大小の土師器甕(第150図442・443)が横倒しになった状態で出土した。また、竈の周囲からは土師器の甕や甌がまとまって、潰れたような状態で出土しており、竈の周囲に土器を並べた祭祀行為が行われていた可能性を示している。



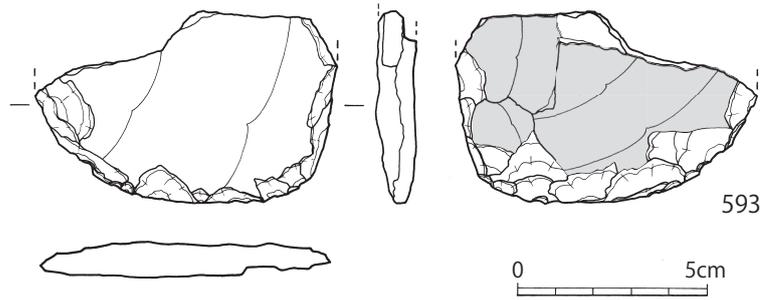
第175図 SK761 実測図 (1/30)

この竈を完掘した後にその下面を精査したところ、やはり焼土を含む埋土が確認され、土坑のプランを検出した。土坑は鶏卵形に近い平面形状で、上部に一部が張り出す。長径1.70m、短径1.24m、深さ0.47mを測る。北端部はテラス状の段が付くが、ここが煙出しのピットとなり、排煙していたものとみられる。この土坑は他の竈と異なり、竈構築前に部分的に掘り返して整地し、地盤を補強した痕跡と考えられる。

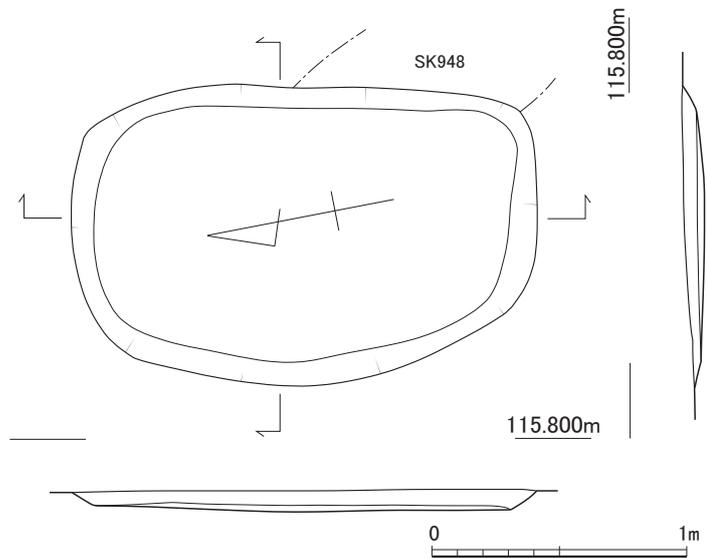
遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、半円形土製品、打製石斧、磨石等が出土している。特に竈やその周囲から出土したものが多い。遺構の時期は、古墳時代後期（6世紀後半）に位置づける。

SH760出土遺物（第150～152図）

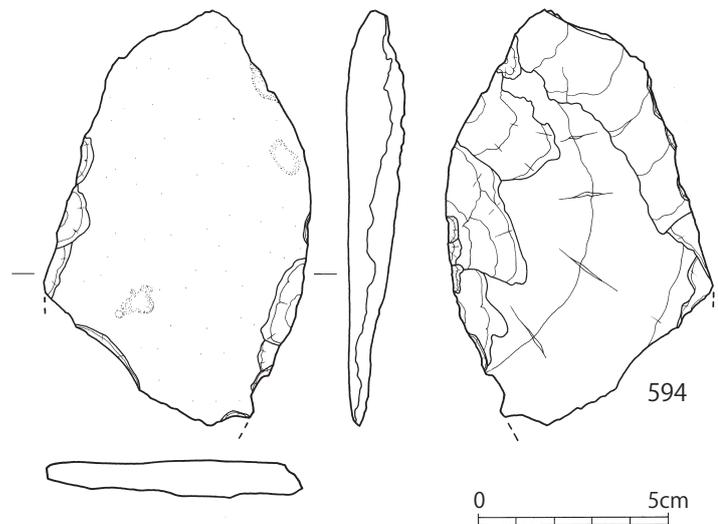
433～439は縄文土器である。433は頸部で屈曲し胴部が球状に膨らむ器形で、外面に横位の区画沈線と単節縄文RLを施す。後期中葉の太郎迫式に比定される。434は外面にランダムな条痕を施す。435は無文の深鉢である。436・437は浅鉢で、胴部で屈曲した後頸部から口縁が外反する。437は胴部屈曲部に沈線を施す。晩期後葉に比定される。438・439は深鉢の底部で、底



第176図 SK761 出土遺物実測図 (1/2)



第177図 SK783 実測図 (1/30)



第178図 SK783 出土遺物実測図 (1/2)

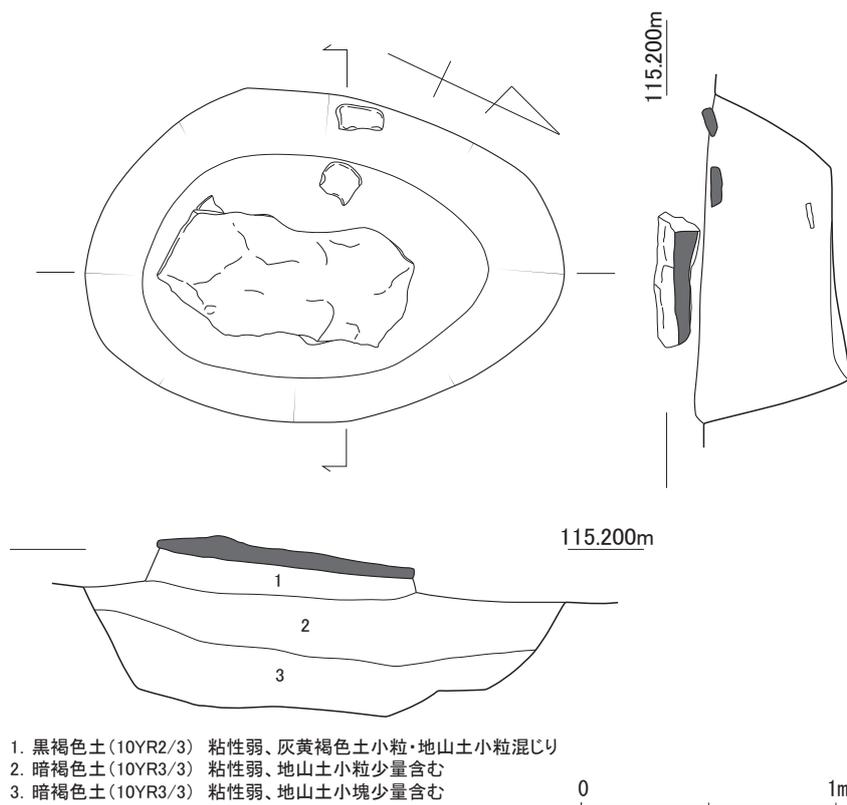
面周縁が接地し中央が凹む上げ底となる。440は弥生土器の壺で、口縁上端を肥厚・拡張し内端部が内側に突出する。口縁外面には鋸歯状の刻みを施す。後期初頭に位置付けられる。441～443は土師器の甕で、口縁部は外反し胴部は丸く膨らむ。442・443は竈の燃焼部から出土したもので、442は胴部の中位にヘラ書き線が認められる。444・445は土師器の坏で、底部はケズリを施す。444は北東側支柱穴の上面に置かれていたものである。446は土師器の甑で、口縁部は正円ではなく楕円形状を呈する。胴部中位には2箇所把手を貼り付け、中空となる底部の直上に外面側から貫通する孔を穿つ。447は土器片を転用し周縁を打ち欠いて半円形状とした土製品、448は土師

質焼成の管状土錘である。449～454は石器である。449はホルンフェルスの円礫を素材とする磨石で、上下両面を磨面とする。450は片岩製の磨製石斧で、上下両面は層状に剥離して失われ、わずかに刃部が残る。451～454は打製石斧で、石材はいずれも安山岩である。455は方柱状の凝灰岩で、側面には加工による面取りが施される。側面の一端には被熱痕が認められる。竈の前におかれていた石材と元は同一で、竈の天井石であったものを竈廃絶時に床面に下ろし、その際に折れた先端を立てて置いたものとみられる。

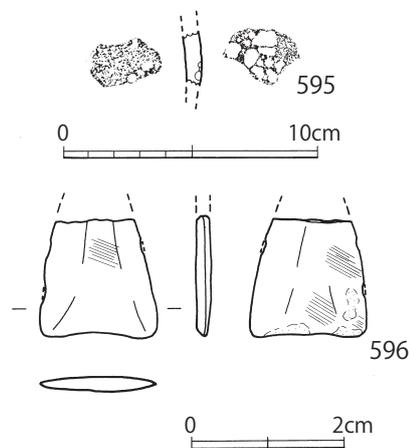
SH773 (第153図)

2区の北西部、F-4・F-5・G-4・G-5グリッドで検出した竪穴建物である。西辺の中央はSK727に切られ、中央北寄りではSK842を切っている。平面形状は方形であるが台形に近い。

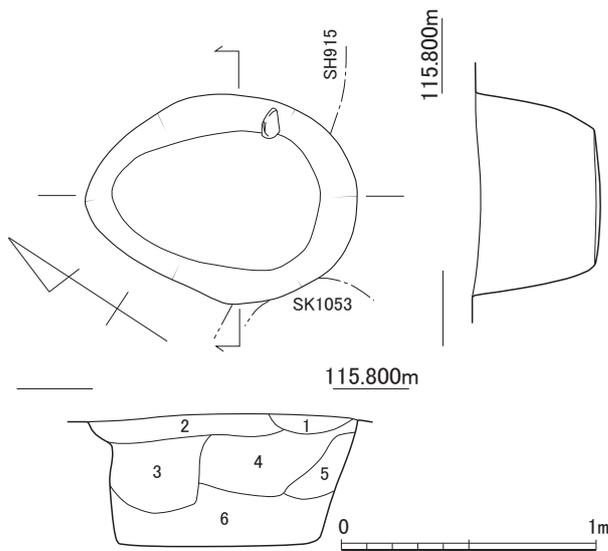
長辺3.96m、短辺3.89m、深さは0.50mを測る。南西側の大部分は古墳時代前期の竪穴建物SH896のプランを検出しているが、当初は別遺構とは判断がつかず、一部を掘り下げてしまっている。また、こうした状況もあり、床面では北壁沿いに2基のピットを検出しているが、南側では明確な遺構を見つけることができなかった。従って支柱の数や配置も不明である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器の他に打製石斧や石核、叩石等の石器、混入したものとして旧石器時代の流紋岩の石核が出土している。遺構の年代は、古墳時代前期後半に位置づける。



第179図 SK789実測図(1/30)



第180図 SK789出土遺物実測図(1/3・1/1)

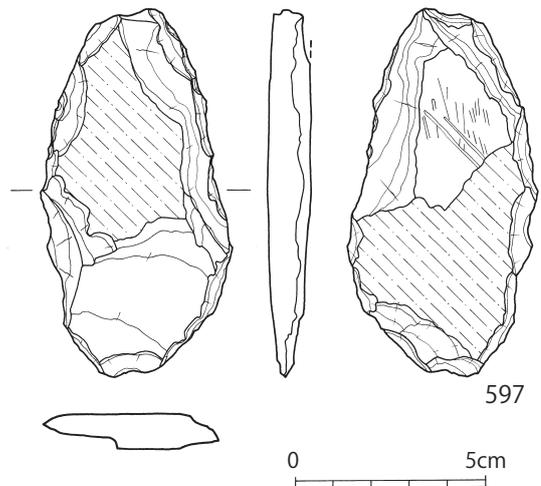


1. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、アカホヤ風化粒子少量・炭微量含む
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、炭微量・黄褐色土小粒微量含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性弱、黄褐色土小粒少量含む
4. 褐色土(10YR4/4) 粘性弱、アカホヤブロック混じり、黒褐色土が斑状に混じる
5. 黒褐色土(10YR2/3) やや粘性あり、黄褐色土ブロック混じる
6. 黒褐色土(10YR2/3) やや粘性あり、黄褐色土ブロック・アカホヤ少量、炭微量含む

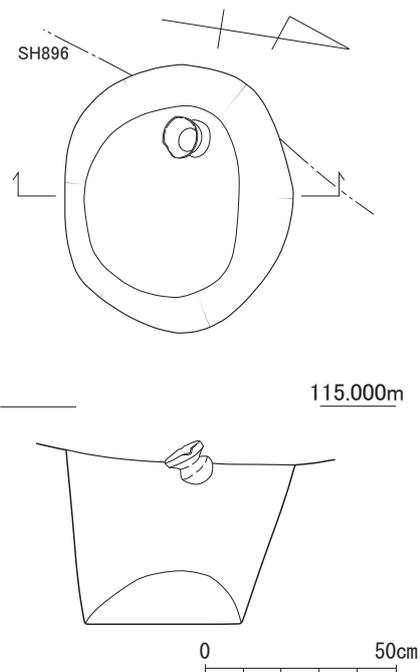
第181図 SK791 実測図 (1/30)

SH773出土遺物 (第154・155図)

456 は弥生土器の甕である。口縁部は外に折れ、端部はやや肥厚する。457 は土師器の甕で、口縁は外反し端部は丸くおさめる。458・459 は土師器の高坏で、坏部と脚部の接合は円盤充填による。460 は流紋岩の石核で、一部に原礫面を残す。旧石器時代の遺物の混入である。461 は安山岩の原石で、一部に剥離痕を残す石核である。打製石斧の素材として持ち込まれたものか。462・463 は打製石斧で、いずれも安山岩を素材とする。464 は蛇紋岩製の磨製石斧の破片で、表面に研磨整形による擦痕が認められる。465 は安山岩の円礫を素材とする叩石で、上面中央に敲打痕が集中的に残る。側面の一部には被熱の痕跡が認められる。



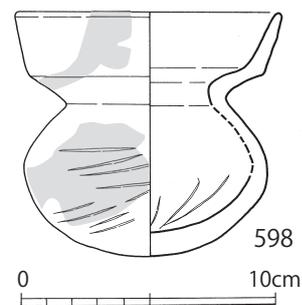
第182図 SK791 出土遺物実測図 (1/2)



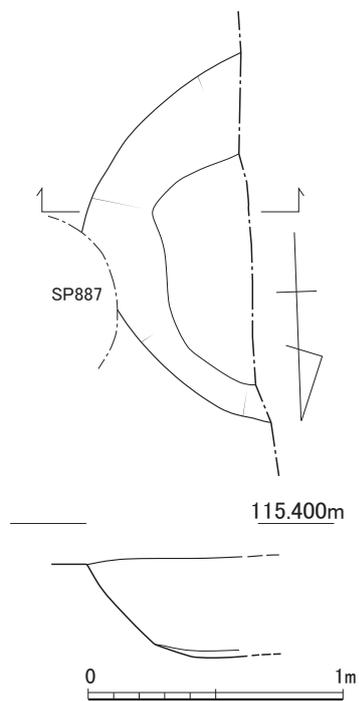
第183図 SK851 実測図 (1/30)

SH801 (第156図)

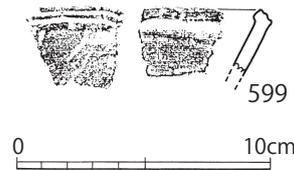
2区の中央部、G-5・H-5・H-6グリッドで検出した竪穴建物である。遺構の重複が著しく、中央から南西部にかけては古墳時代の竪穴建物SH731とSH1049、南は古墳時代後期の竪穴建物SH916、北東部は弥生時代の竪穴建物SH860、東は縄文時代の竪穴建物SH956、西は古墳時代後期の土坑SK933とそれぞれ複雑に切り合っている。SH731のところでも触れたが、SH731は本来SH801に切られる遺構であるが、調査する順番が前後して先に掘り下げてしまっており、



第184図 SK851 出土遺物実測図 (1/3)



第 185 図 SK888 実測図 (1/30)



第 186 図 SK888 出土遺物実測図 (1/3)

これにより南西側の遺構の状況が不明になってしまった。また、SH860も一段下げる段階まで切り合い関係を逆にとらえているなど、埋土が酷似するために混乱する状況があった。切り合い関係を整理すると、SH801が切る遺構は、年代的に古い順にSH956、SH860、SH1049、SH731、SH916・SK933となる。

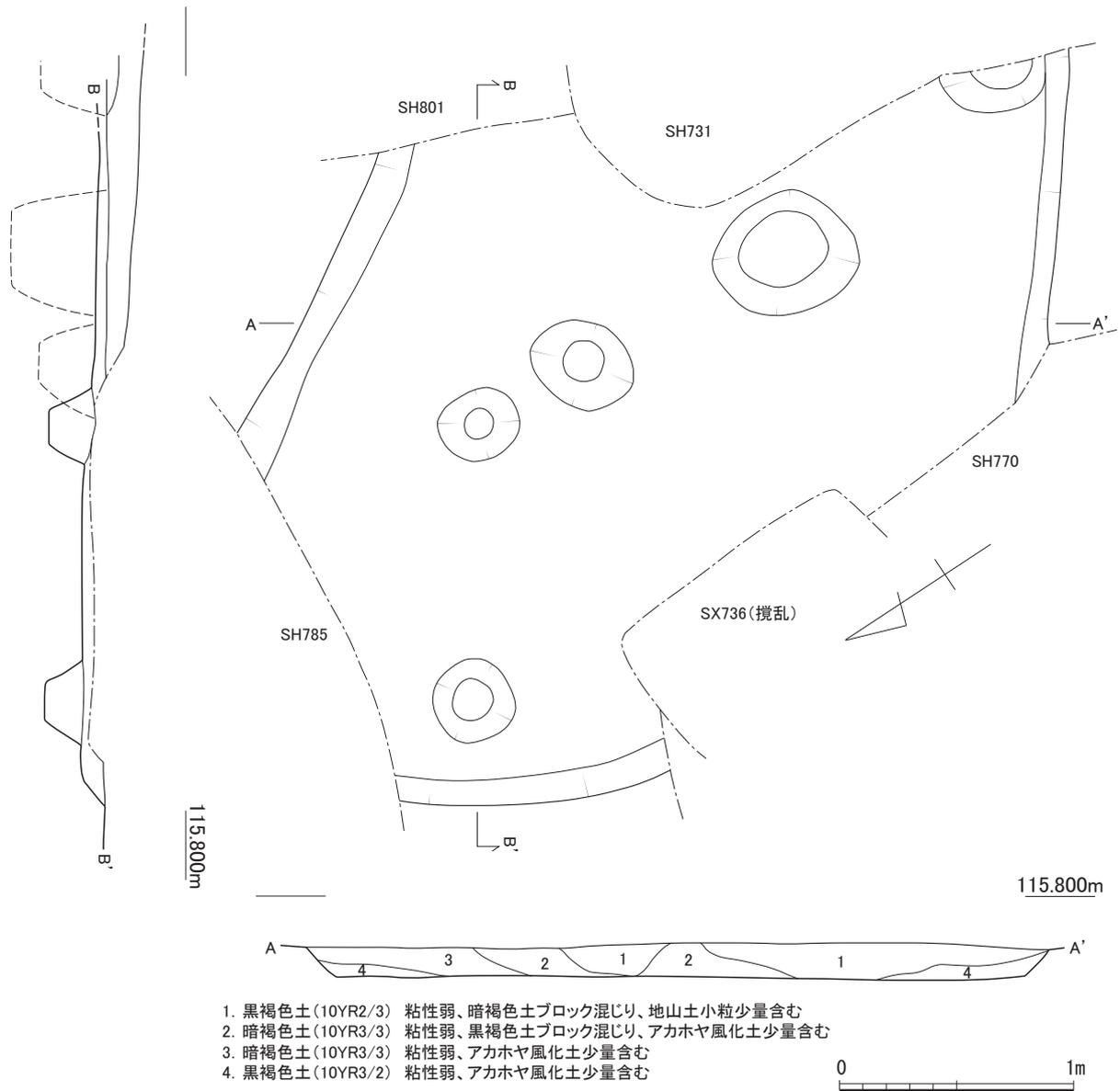
SH801の平面形状は方形で、長辺6.78m、短辺6.46m、深さは比高で0.58mを測る。埋土は4層に分層され、2~4層の下層の上を大きく上層の1層が被覆する。標準層序の第Ⅵ層を床面とし、この面で9基のピットを検出している。東側では南北に4基のピットが1列に並ぶように見受けられるが、西側でこれに対応するピットの並びはなく、支柱は4本となる可能性が高い。東壁際で5箇所の焼土の広がりを確認している。

また、北壁の中央には竈を付設する。竈は東側に長さ約0.65mの扁平な板石を1枚、西側には長さ約0.35~0.45mの板石2枚を並べ、短軸を上にして斜めに立てて袖石としている。袖石の角度は20~25°である。袖石の外側にはにぶい黄褐色の粘土を盛り上げて袖部を構築する。袖石の中が燃焼部で、その中央に支柱石と、その南に焼土面の広がりが認められた。燃焼部には廃絶時の土器埋置等は見られなかったが、竈の周囲で完形に近い土師器甕や鉢等が出土しており、土器を用いた何らかの祭祀行為が行われたものとみられる。竈を完掘した後、その下面を精査したところ、焼土・炭混じりの土層を埋めた土坑が検出された。土坑は不整形を呈し、長径1.18m、短径0.91m、深さ0.39mを測る。竈構築前に部分的に掘り返して整地し、地盤を補強した痕跡と考えられる。

SH801からは縄文土器、弥生土器、土師器、磨製石鏃、打製石斧、鉄鎌等の遺物が出土している。遺構の年代は、古墳時代後期(6世紀後半)に比定される。

SH801出土遺物(第157・158図)

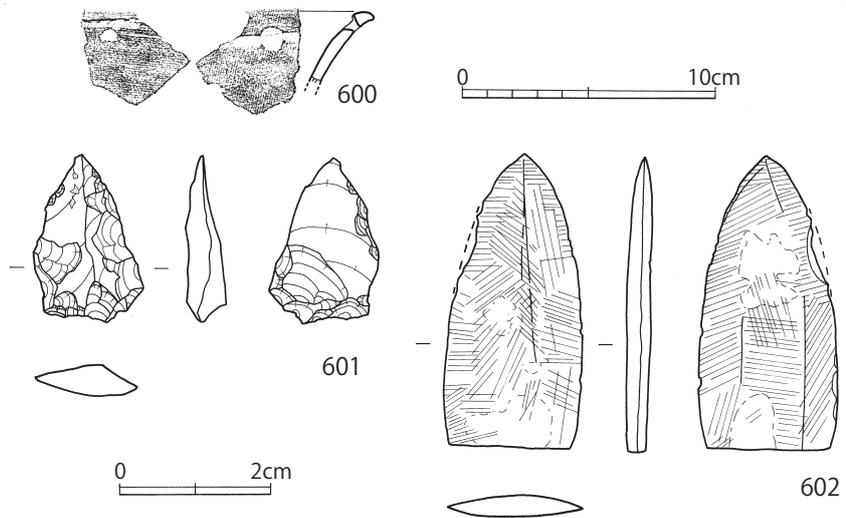
466~470は縄文土器である。466・467は外面が無文で、内面口縁下に1条の沈線を施す深鉢で、後期後葉に比定される。468は外面に横位の細沈線を施すもので、晩期前半の深鉢か。469は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。470は浅鉢の細片で、外面に赤色顔料の塗彩が認められる。471は弥生土器の壺で、口縁部を拡張し、外面に鋸歯状の刻みを、上端にハケ目を施す。472~479は土師器である。472は薄手の器壁をもつ甕で、古墳時代前期の搬入品とみられる。473~477は甕で、口縁は外反し、胴部は丸く膨らむ。478は鉢で、口縁部は短く外に折れる。479は鉢で、底面にはケズリを施し、一端に掘り込みの深い工具痕が残る。473~479は古墳時代後期に位置付けられる。480~482は石器である。480は粘板岩製の磨製石鏃で、基部を欠失する。481・482は打製石斧で、周縁部に細かく調整剥離を施す。石材はいずれも安山岩である。483は鉄製の手鎌で、刃部の両端を折り返す。



第 187 図 SK933 実測図 (1/30)

SH896 (第159・160図)

2区の北西隅部近く、F-4・G-4・G-5グリッドで検出した堅穴建物である。検出当初は数棟の堅穴建物が複雑に切り合ったものと認識して調査をすすめたが、最終的には同一の遺構で大きな方形の堅穴建物となった。長辺7.65m、短辺7.16m、深さは比高で0.98mを測る。北西隅部には短い張り出しがあり、切り合う堅穴建物のわずかな残存部としてこれをSH896Bとし

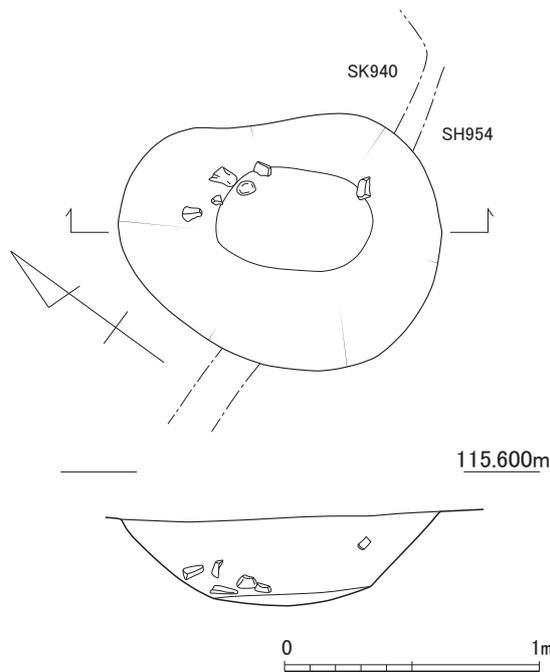


第 188 図 SK933 出土遺物実測図 (1/3・1/1)

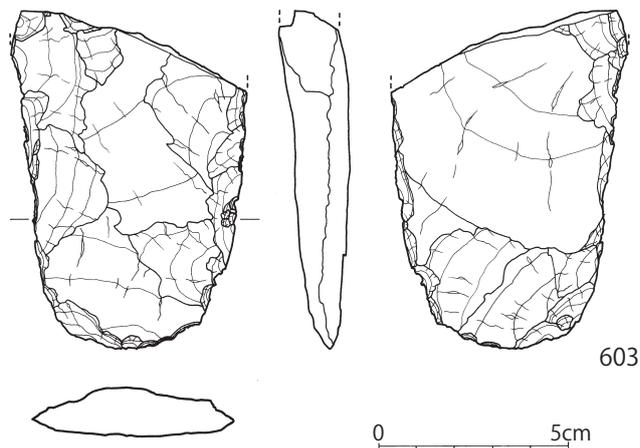
た。また、南東隅部にある張り出しはSH946として区別した。複数の遺構の切り合いという前提で調査を進めたため、遺構全体を通した土層断面の作成が十分に行えていないが、西側に設定したベルトでは、下層は細かい堆積が見られるが、上層は微妙な差異はあるものの黄褐色土粒の混じる黒褐色土が全体を被覆している。床面は黄褐色ローム質土で、中心に炉穴とみられる東西に細長い土坑と、床面で無数のピットを検出している。主柱穴は4基とみられ、また位置的にSH896Bの主柱穴(2本)と推定されるものもある。また、SH946との境目で焼土のつまった長方形の土坑を検出しているこの土坑はSH946の中心からは外れるが、SH896に付属するものにしては位置が合わないため、SH946の炉跡である可能性が高い。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨製石斧、叩石、鉄斧、鉄鏃、鉄刀子が出土している。特に鉄製品がやや多く出土している点は注意され、遺構規模としても古墳時代前期では最大規模の竪穴建物であり、集落の中核的な施設であった可能性が高い。

SH896出土遺物(第161~165図)

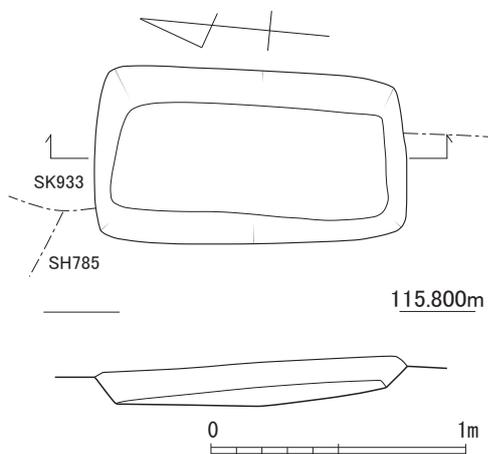
484~501は縄文土器である。484は内湾する立ち上がりで内面に縄文を施す。485は摩滅により不鮮明であるが、外面に半裁竹筒状工具によるC字状の爪形文を施す。これらは中期の船元式の可能性が高い。486は内湾する口縁の外面に横位の区画沈線と、区画内に単節縄文RLと、端部が鉤手状に折れる沈線を施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものである。487は外面が無文で、内面口縁



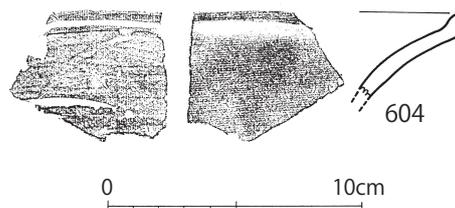
第189図 SK725実測図(1/30)



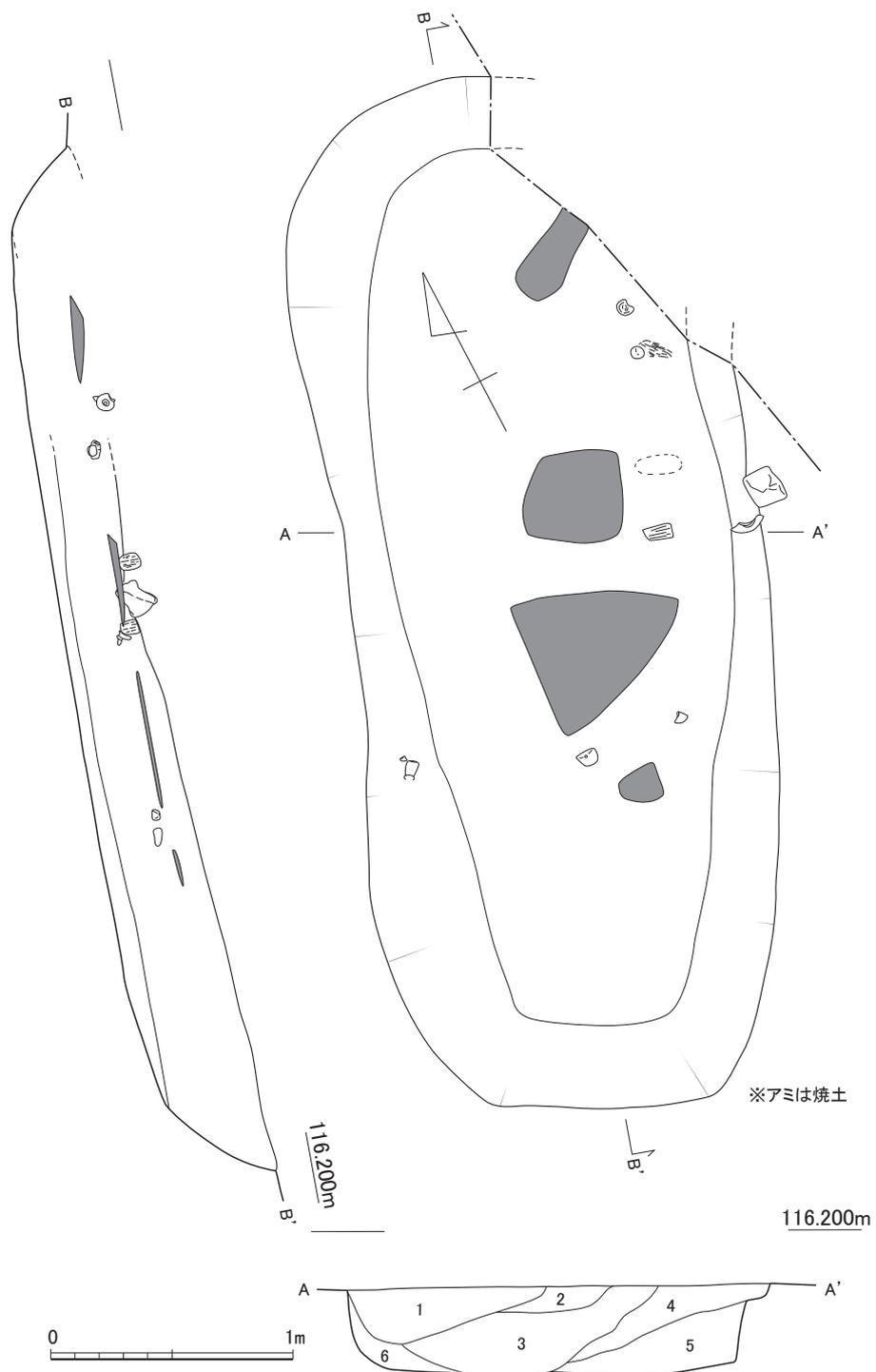
第190図 SK725出土遺物実測図(1/2)



第191図 SK736実測図(1/30)

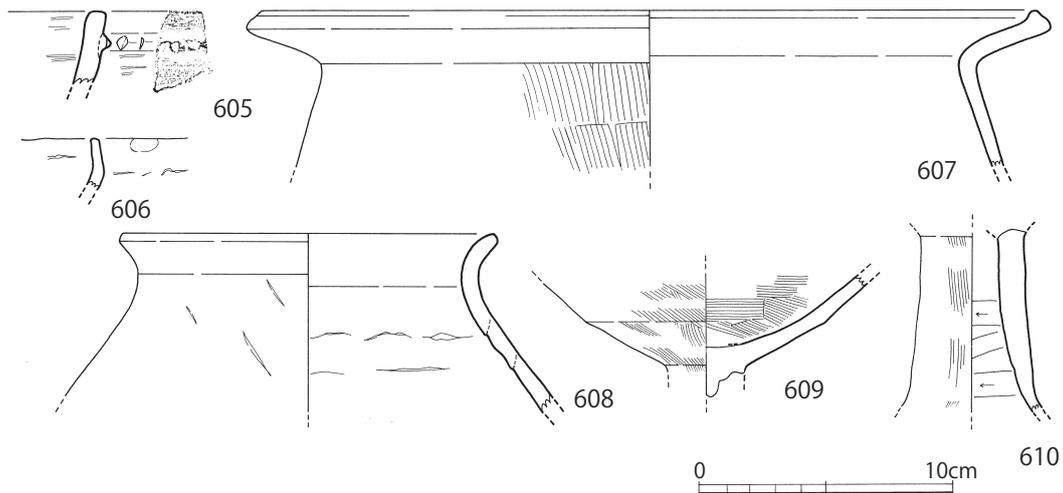


第192図 SK736出土遺物実測図(1/3)

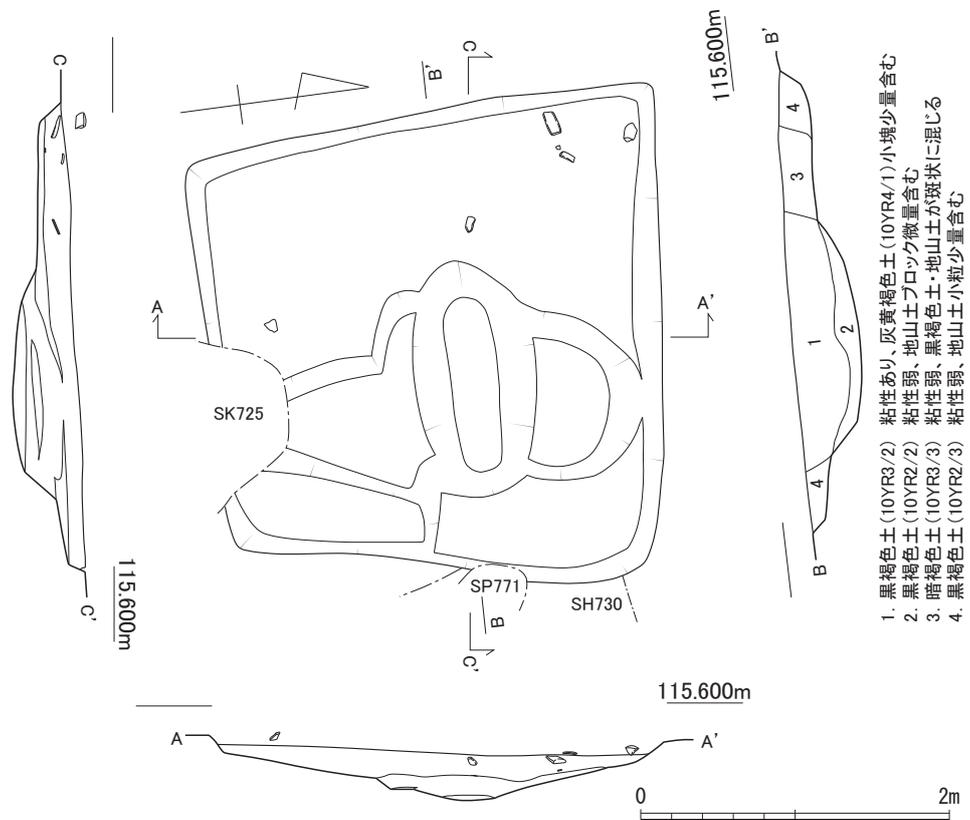


1. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり硬く締まる、黒褐色土(10YR2/2)ブロックを多量、焼土・炭細粒微量含む
2. 暗褐色土(10YR3/3) 粘性弱、黒褐色土(10YR2/2)小塊少量、炭・焼土粒少量含む
3. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり硬く締まる、地山土・アカホヤのブロック少量、焼土小粒・炭少量含む
4. 黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・炭塊混じる
5. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・炭少量含む
6. 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり硬く締まる、焼土小粒・炭微量含む

第 193 図 SK747 実測図 (1/30)

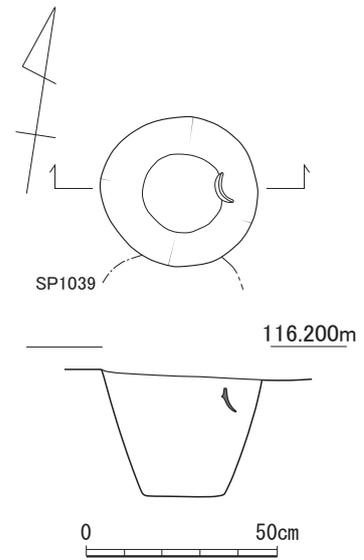
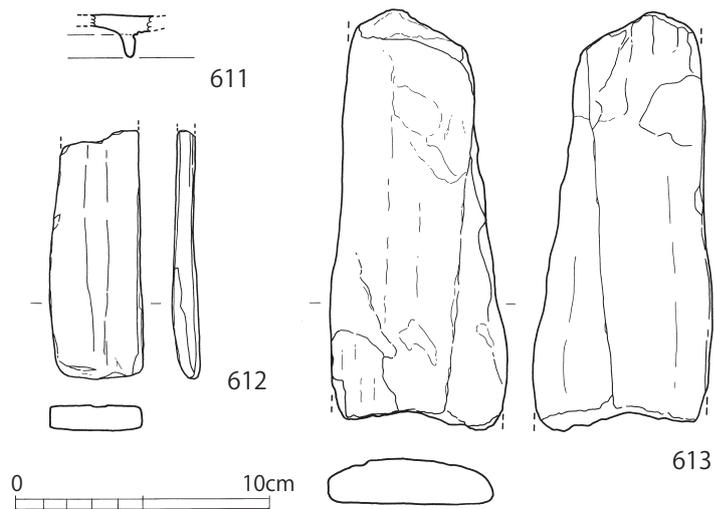


第194図 SK747 出土遺物実測図 (1/3)

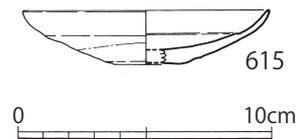
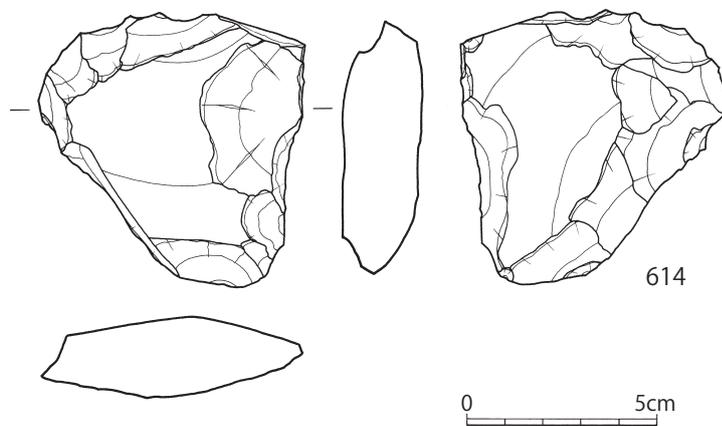


第195図 SK940 実測図 (1/50)

下に1条の沈線を施す。488~491は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。488は凸帯が幅広で高く、489・490は凸帯が高いのに対し、491は凸帯が微隆起線状である。492~494は無文の深鉢である。496・497は後期末葉の浅鉢で、外反する口縁の上端が上方に折れ、外面に1条の沈線と内面口縁下には沈線状の段が付く。496の内面には1箇所種子状の圧痕が認められる。499は浅鉢で、内面に種子状圧痕が認められる。500・501は口縁が内傾し端部が外反する浅鉢で、いわゆる逆「く」字口縁を呈する。晩期終末に位置付けられる。502~509は弥生土器である。502・503は中期の下城式甕に伴う壺で、弧状の多条沈線を施す。504・505は外面に多条の凸帯を巡らせる壺で、505は外面に赤色顔料の塗彩が認められる。506は壺の頸部で、1条の刻目凸帯を巡らせる。507は甕で、胴部屈曲部に刻みを施す。前期の所産か。508・509はいわ



第 197 図 SP759 実測図 (1/20)



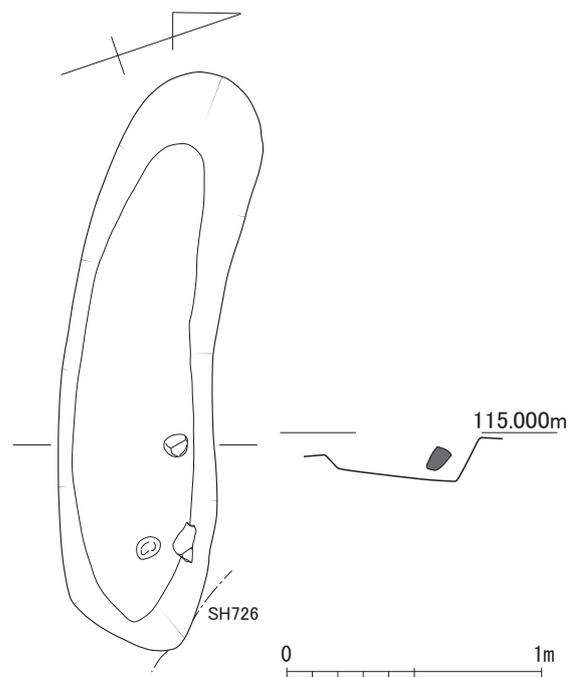
第 198 図 SP759 出土遺物実測図 (1/3)

第 196 図 SK940 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

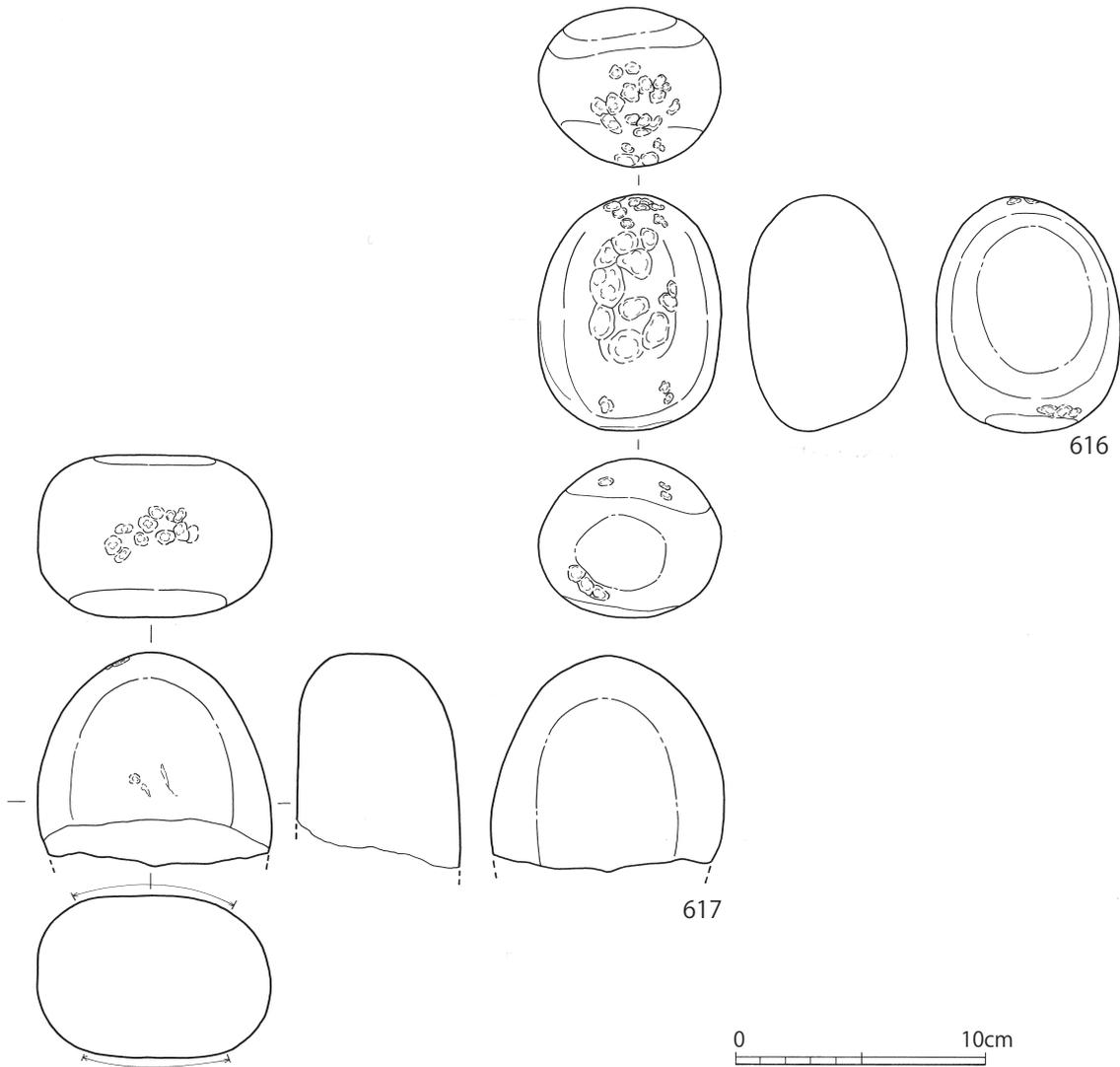
ゆる粗製甕で、509 は胴部に多条の粗い沈線を施す。

510～532 は土師器で、SH896 に伴うものである。510～514 は甕で、511・512 は小型品とみられる。いずれも口縁が外反し、胴部は丸く膨らむ。515～520 は壺である。515・516 は二重口縁壺か。518 は長頸壺、519・520 は小型丸底壺である。521～529 は高坏で、坏部は中位で屈曲し口縁は外に開く。坏部と底部の接合は円盤充填による。524・529 は内面にそれぞれ種子状圧痕が認められる。530・531 は器種不明、532 は甕の破片で、530・531 は外面に、532 は内面に種子状圧痕が認められる。495 は口縁端部に細かい刻みがみられることから縄文土器として図示してしまっただが、土師器の鉢の可能性が高い。口縁上端に 1 箇所、種子状圧痕が認められる。種子状圧痕が認められた資料は分析を行ったが、種子を特定できたものはなかった。

533～551 は石器である。533 は凹基無茎式の打製石



第 199 図 SD728 実測図 (1/30)



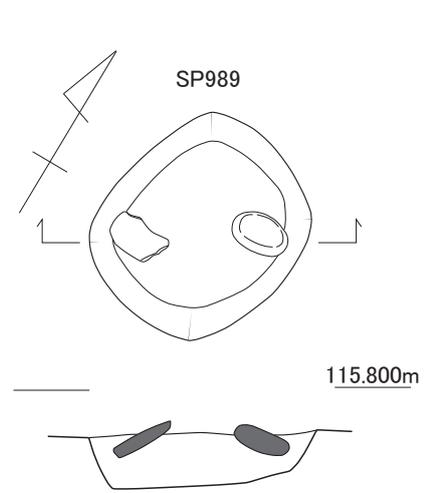
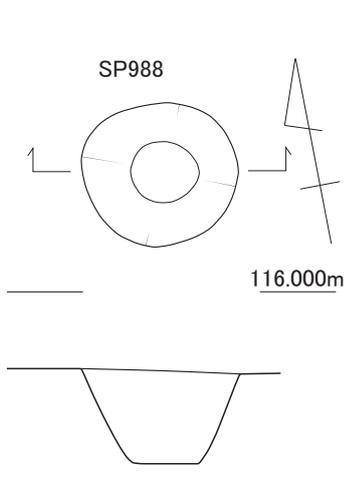
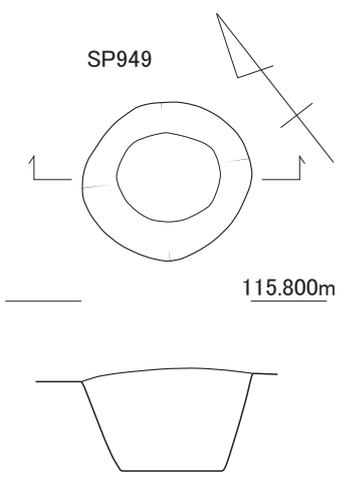
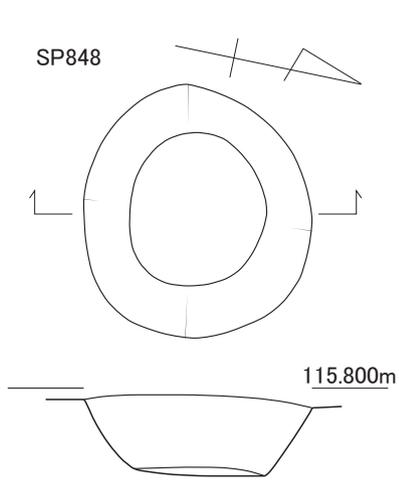
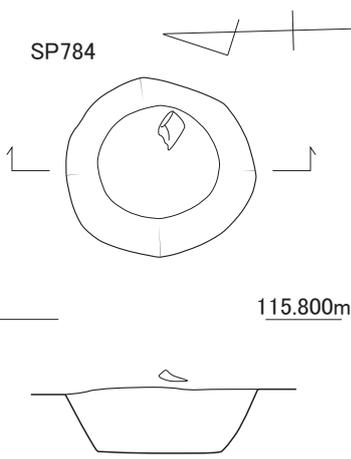
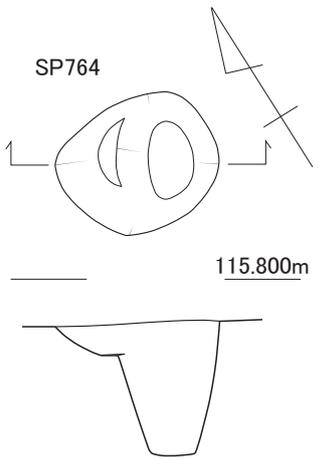
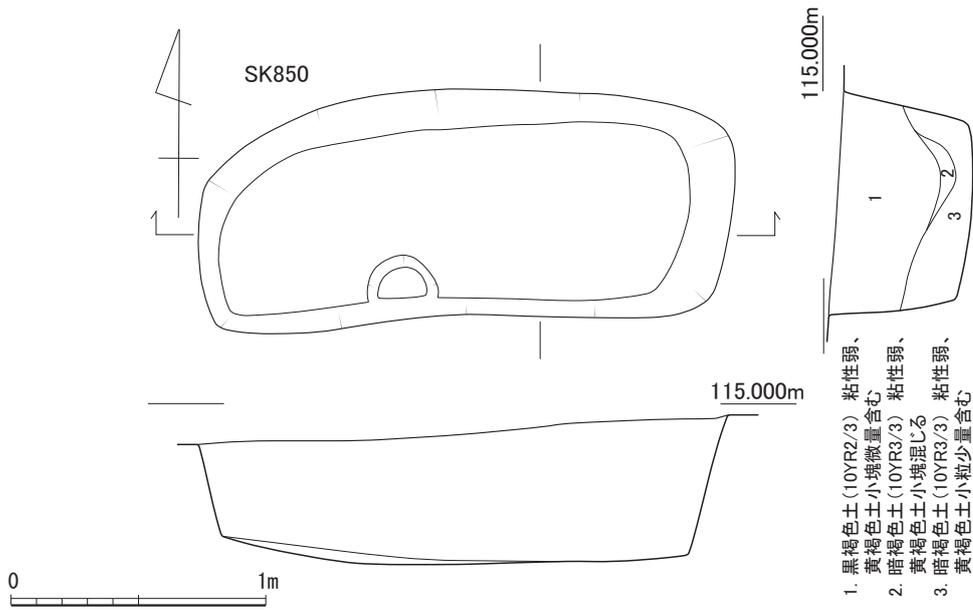
第200図 SD728 出土遺物実測図 (1/2)

鎌で、姫島産黒曜石を素材とする。534は粘板岩製の磨製石鎌で、先端部をわずかに欠く。535はチャート製の石鎌である。536は安山岩の剥片。537は磨製石斧であるが、全体に敲打痕や剥離痕を残しており、研磨段階の未製品の可能性が高い。538～544は打製石斧である。周縁に細かい調整剥離を施すが、544は剥離が乏しく未製品の可能性が高い。石材は542が千枚岩である他は安山岩である。545は磨製石斧の刃部片で、砂岩を素材とする。546は磨製石斧の破片で、表面に研磨による擦痕が残る。石材は千枚岩である。457～551は叩石で、547・548は礫の側面を使用し敲打痕が残る。549～551は細長い礫の上下両端を主な使用部とし、そこに集中的に敲打痕が認められる。549～551は石器製作に伴う叩石の可能性が高い。

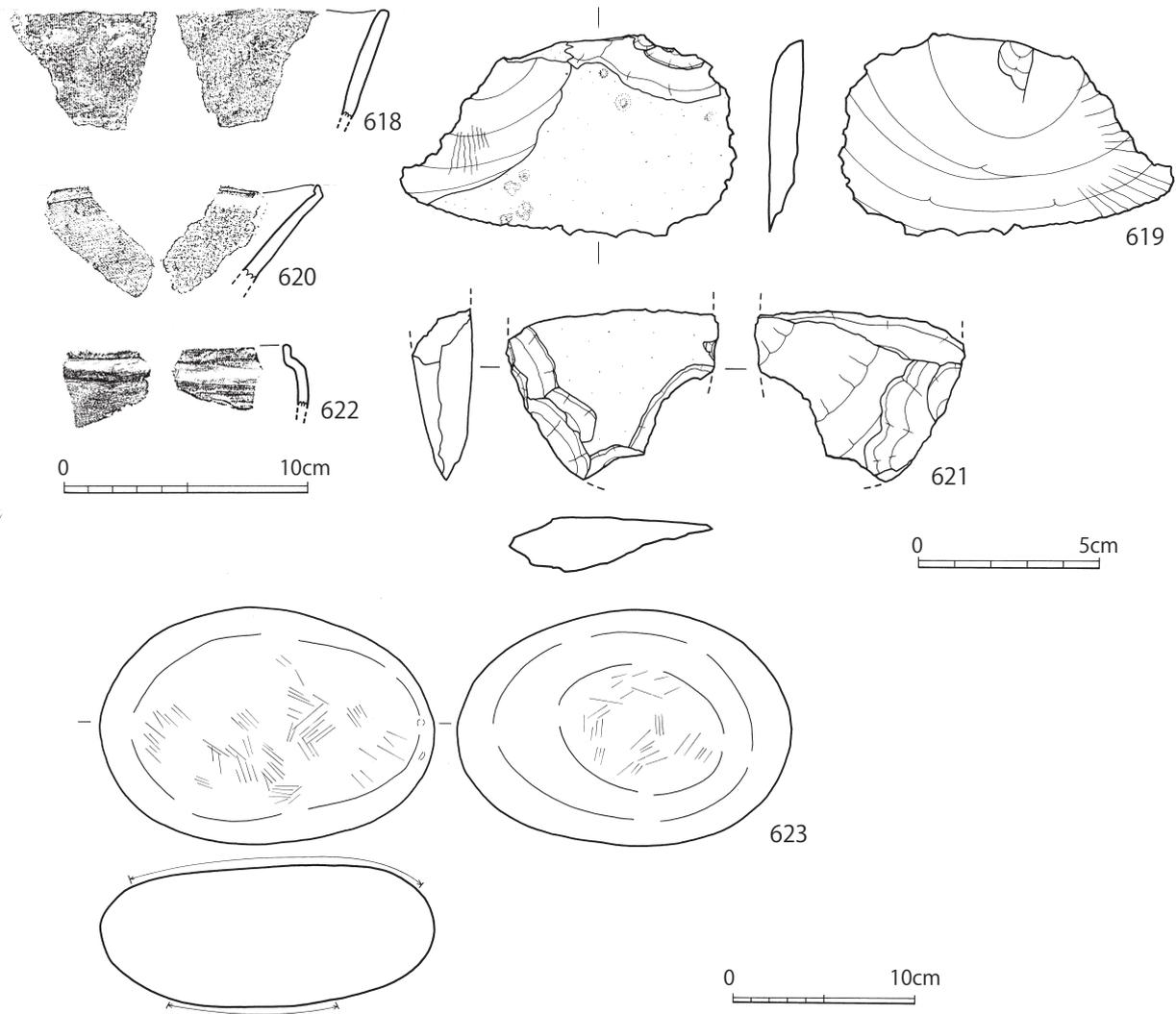
552～554は鉄製品である。552は板状鉄斧で、刃部は片刃である。553は鉄鎌で、茎部は断面径が丸く、身部は扁平となる。554は刀子である。

SH916 (第168図)

2区の南部中央、H-5グリッドで検出した竪穴建物である。北側は古墳時代前期の竪穴建物SH731と古墳時代後期の竪穴建物SH801と重複しており、本来であればSH916がSH731を切っているはずであるが、SH731を先に完掘した後にSH916を検出したため、前後が逆転している。平面形状はやや歪な方形を呈し、長辺4.34m以上、短辺2.60m以上、深さ0.44mを測る。埋土は4層に分層され、レンズ状の堆積となる。床面は標準土層の第



第201図 2区遺構実測図(1/30・1/20)



第202図 2区遺構出土遺物実測図(1/3・1/2・1/4)

VI層で、この面で7基のピットを検出しているが、支柱穴の配置は明確ではない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、壁土、打製石斧が出土している。須恵器の出土から、古墳時代後期後半の遺構と判断される。

SH916出土遺物(第167図)

555～561は縄文土器である。555～557は同一個体とみられるもので、外面は頸部を無文とし、胴部文様帯に単節縄文RLを施す。後期中葉の北久根山第二型式に併行するものであろう。558は胴部屈曲部に1条の沈線を施す。559・560は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。559は口縁に対して凸帯が平行にはなっておらず、凸帯が口縁を水平に巡るのではなく連弧状になる可能性もある。561は深鉢の底部である。562は土師器の壺で、内外面にミガキを密に施す。563は須恵器の坏蓋で、天井部は丸く回転ヘラケズリを施す。564は壁土で、胎土にスサを含み木舞の痕跡が残る。565・566は打製石斧である。566は背面・腹面ともに煤の付着が認められることから、火を受けたものとみられる。石材はいずれも安山岩である。

SH946(第168図)

2区の中央西寄り、G-4グリッドで検出した竪穴建物である。北側は大型の竪穴建物SH896に大きく切られており、残存する範囲はわずかしかない。平面形状は方形を呈し、長辺5.30m、短辺2.36m以上、深さ0.59mを測る。土層断面の層序は9層あり、うち1・2層はSH896の堆積層で、残る7層がSH946の土層である。床面は黄

褐色土ローム質土で、この面で検出できた柱穴等の遺構はないが、SH896との境目にある焼土の詰まった方形土坑は、位置的にSH896に付属するものの可能性は低く、SH946の炉跡である可能性が高い。検出した範囲に限られるが、柱穴がみられないため、支柱穴は2基の可能性が考えられよう。SH896の床面にあるピットのどれかが該当するものと思われるが、特定できていない。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。遺構の時期は、古墳時代前期後半に位置づける。

SH946出土遺物（第169図）

567～573は縄文土器である。567は波状口縁の深鉢で、口縁部内面に沈線状の段が付く。568は外面に粗い条痕を施す深鉢で、晩期前半であろう。569～571は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を巡らせるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。このうち569は凸帯の形状が特徴的で、外反させた口縁部の上に粘土を足して新たに口縁部を追加することで、凸帯状にしているようにも見える。凸帯の出現を考える上でポイントになりそうな資料である。572は浅鉢で、外反する口縁部の内外面に沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。573は深鉢の胴部で、外面に種子状圧痕が認められる。分析の結果は不詳であった。574・575は弥生土器である。574は口縁部を欠くが、外面に2条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式甕に比定される。575は甕の底部である。576は土師器の小型丸底壺で、口縁部を欠く。

SH1049（第170図）

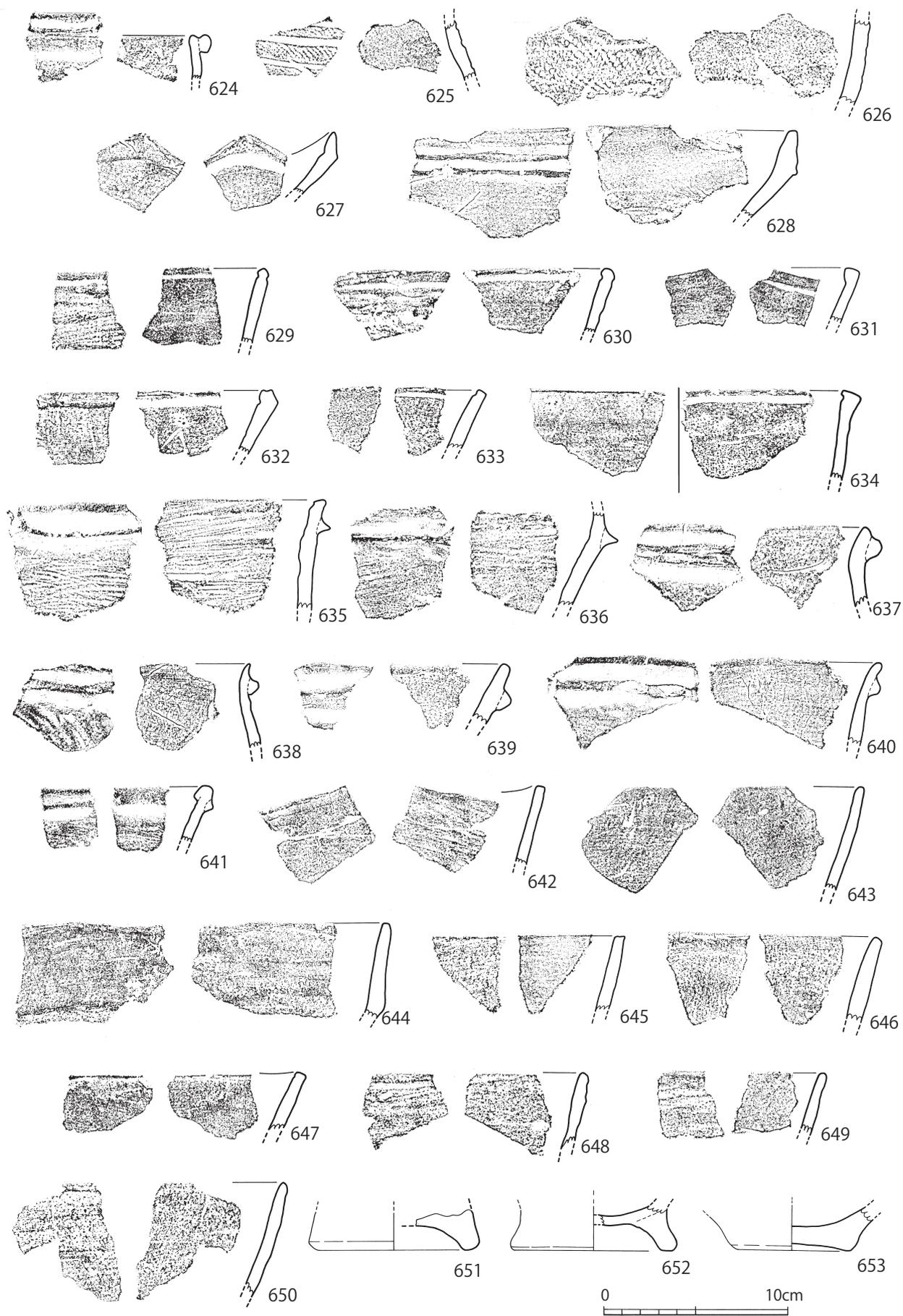
2区の中央、G-5・H-5グリッドで検出した竪穴建物である。上部は全面が古墳時代後期の竪穴建物SH801に切られ、南西部は古墳時代前期の竪穴建物SH731に大きく切られている。SH801を掘り下げる過程で、周囲が床面に達した深さでも中央部で床面がでないことから面的に精査したところ、方形に掘り込むプランを確認し、遺構の存在を把握した。平面形状は方形を呈し、長辺4.00m、短辺3.89m、深さ0.50mを測る。遺構の切り合いが多く、全体を通した土層断面の観察はできなかった。床面では6基のピットを検出しており、うち北東側中央寄りの深い柱が支柱穴になるとみられるが、その他の支柱穴は明確ではない。また、北東部を中心に関係の土師器甕や残りの良い高坏等の遺物の出土がみられた。遺物は縄文土器、土師器、土器片、打製石斧、礫器、石皿、土玉が出土している。出土遺物から、古墳時代前期後半の遺構である。

SH1049出土遺物（第171・172図）

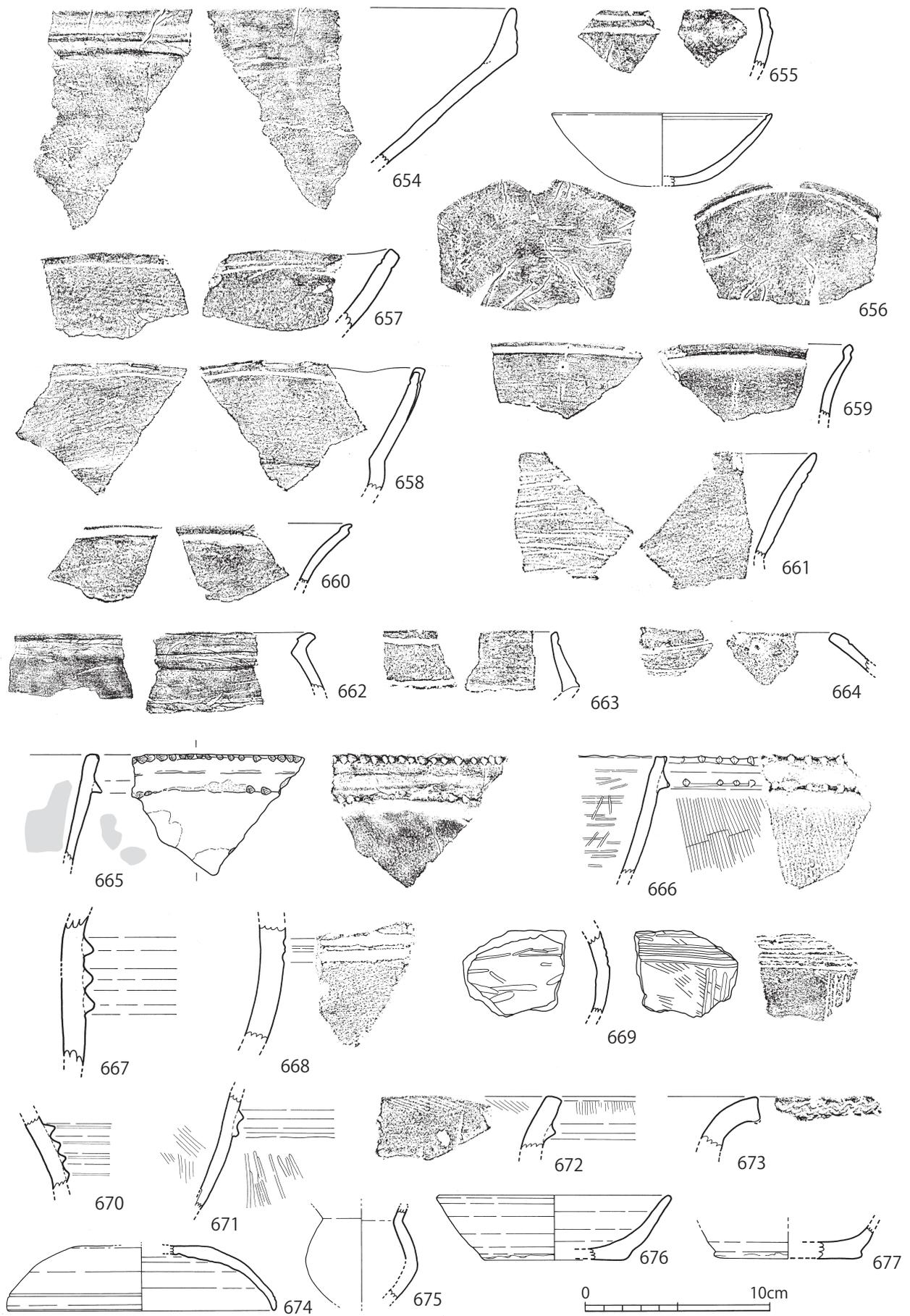
577は縄文土器である。口縁は内傾し、外面口縁下に1条の無刻目凸帯を貼り付けるもので、晩期後葉の上菅生B式に比定される。578～586は土師器である。578～581は甕で、口縁は外反し胴部は丸く膨らむ。外面には煤の付着が認められ、578は被熱のためか表面が大きく剥離している。582・583は小型器台で、582はボウル形を呈する受部、583は脚部である。584～586は高坏で、坏部は平坦な底面から屈曲して口縁が外に開く。脚部は下端で屈曲し、裾部が広がる。坏部との接合は円盤充填である。587は土玉で、外面に細線が巡る。588～591は石器である。588・589は打製石斧で、いずれも背面に自然面を残す剥片を素材とし、周縁に調整剥離を施す。589は背面原礫面に被熱の痕跡が認められる。石材は588が安山岩、589はデイサイトである。590は砂岩の円礫を用いた叩石で、左端部を中心に敲打痕が残る。側縁の一端を打ち欠いており、礫器に転用した可能性もある。591は泥岩製の石皿で、上面を使用面とし、細かい擦痕が認められる。

SK737（第173図）

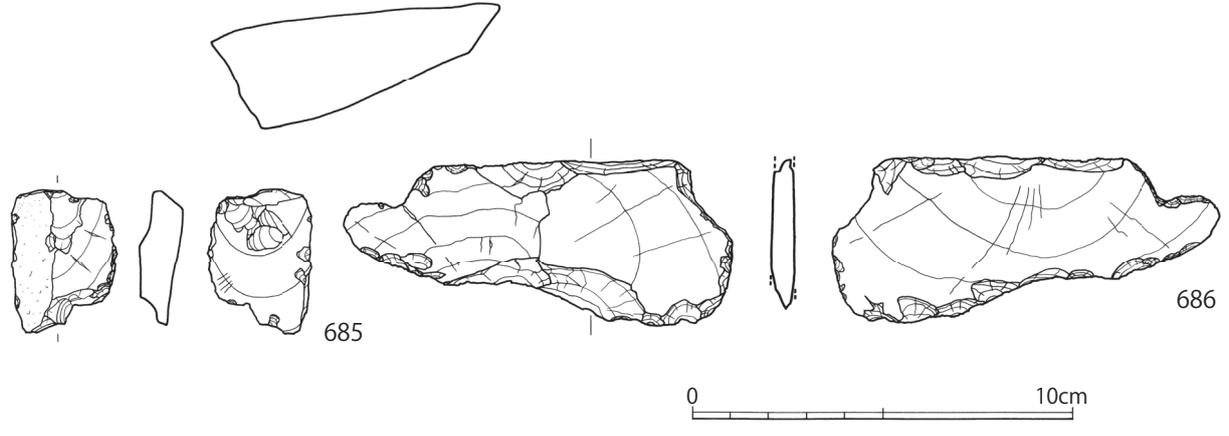
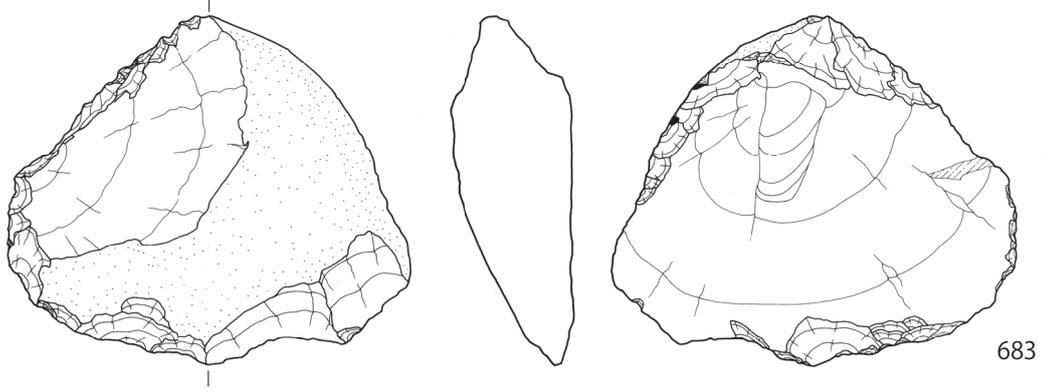
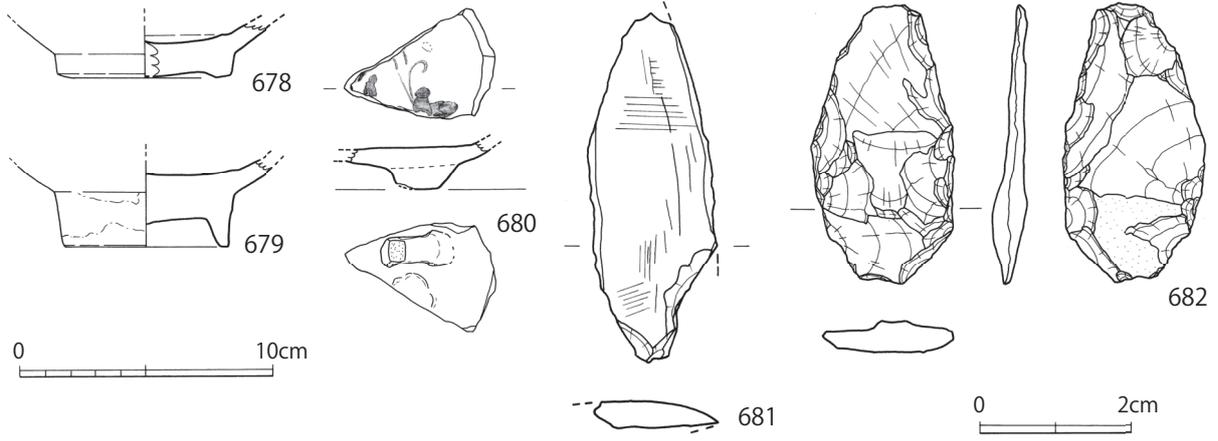
2区の中央西寄り、H-4グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、北西部ではピットSP997を切っている。長径0.97m、短径0.83m、深さ0.27mを測る。埋土は4層に分層され、細かい堆積状況を示す。遺物は中央の検出面あたりで打製石斧1点が出土した他、細片ながら縄文土器、土師器が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。



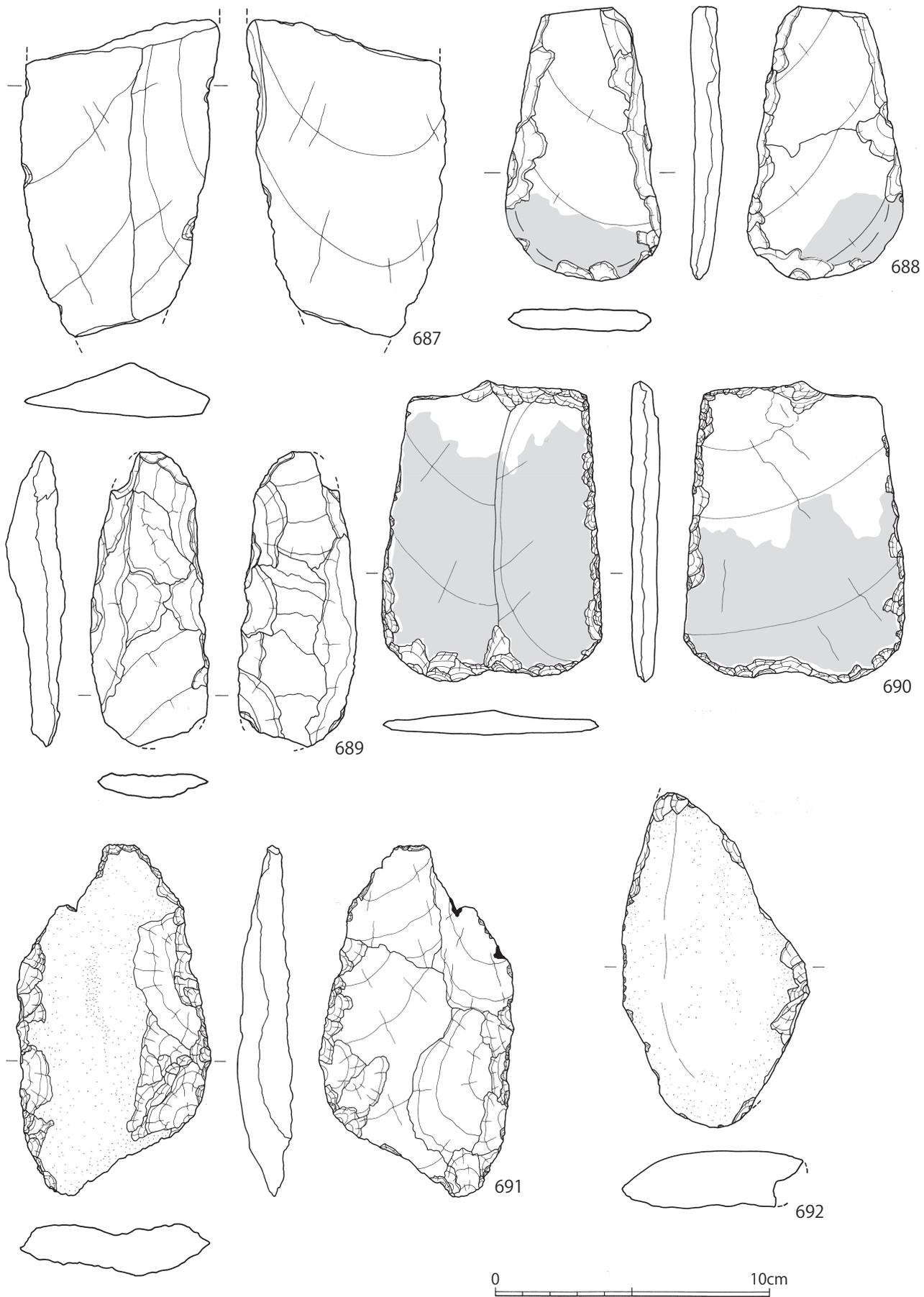
第 203 图 2 区出土遗物实测图① (1/3)



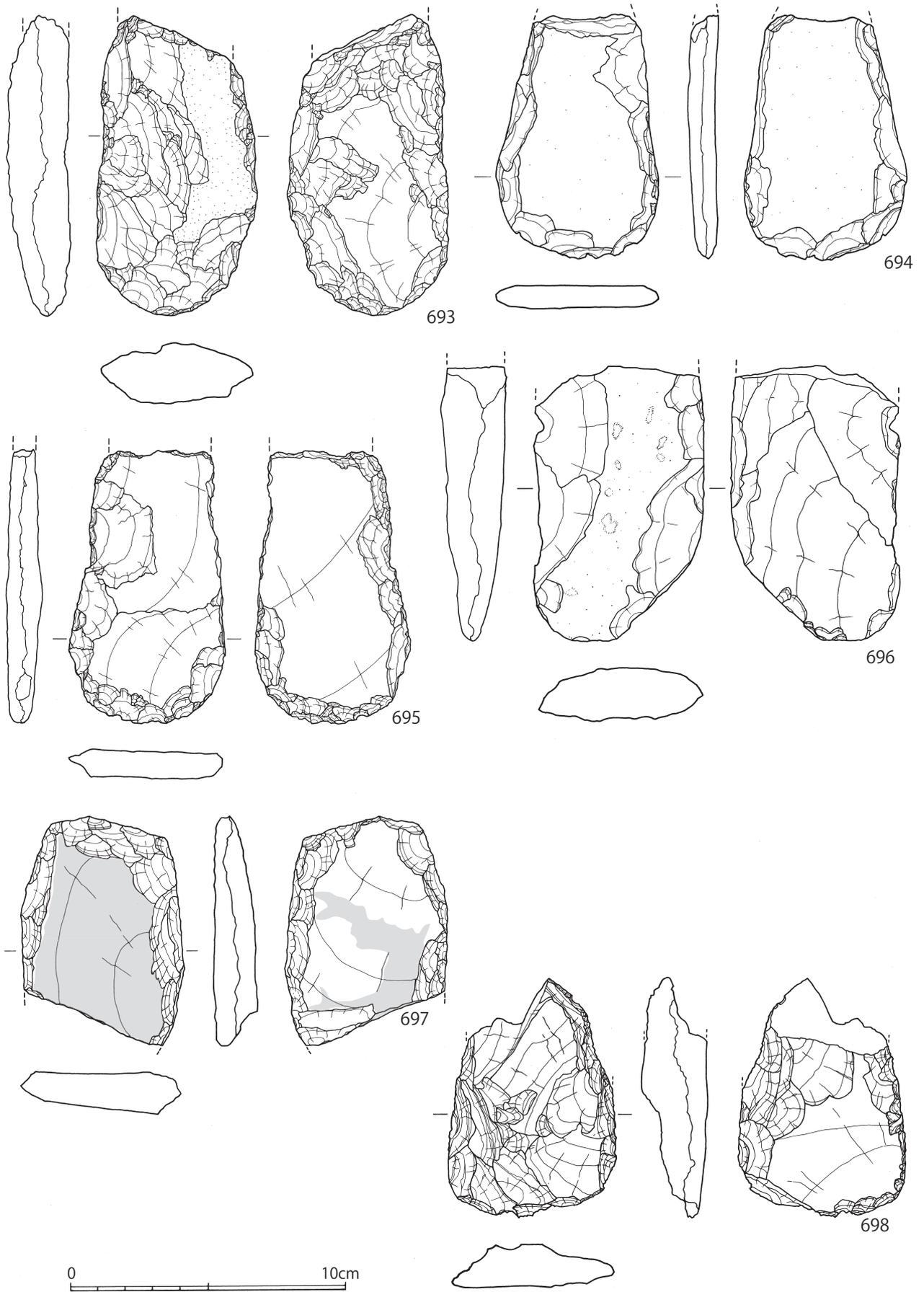
第 204 图 2 区出土遗物实测图② (1/3)



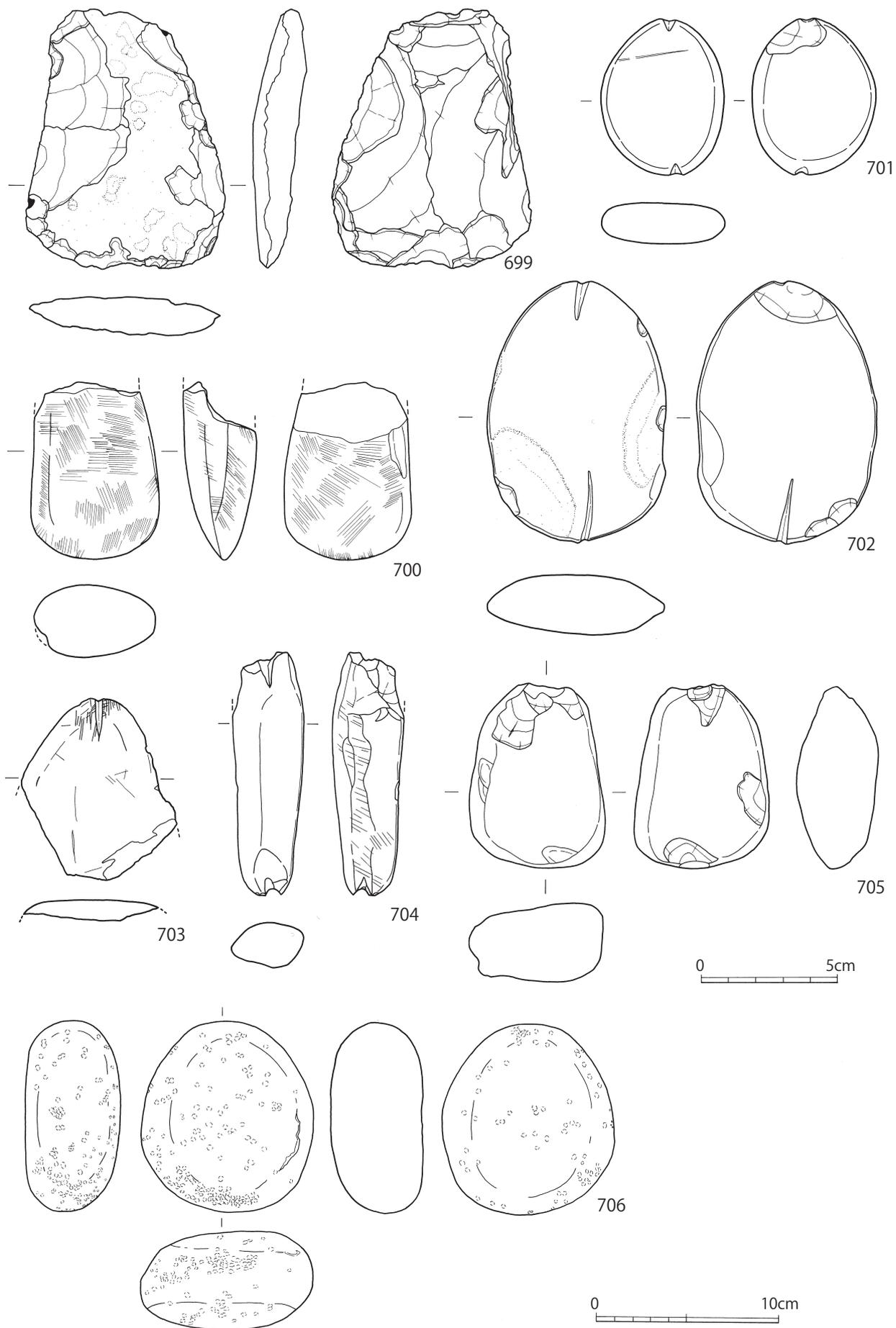
第 205 图 2 区出土遗物实测图③ (1/3 · 1/1 · 1/2)



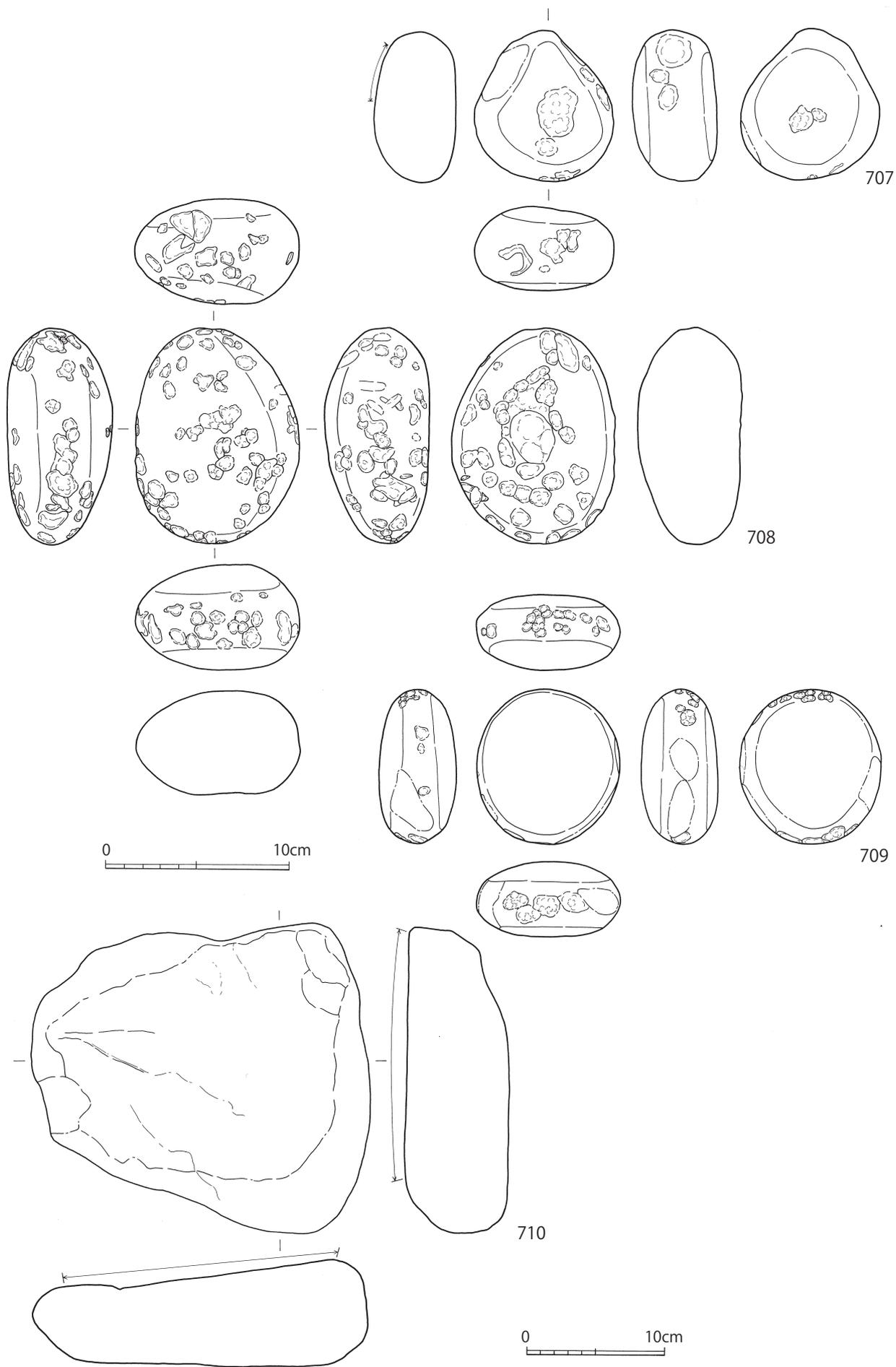
第 206 图 2 区出土遺物実測図④ (1/2)



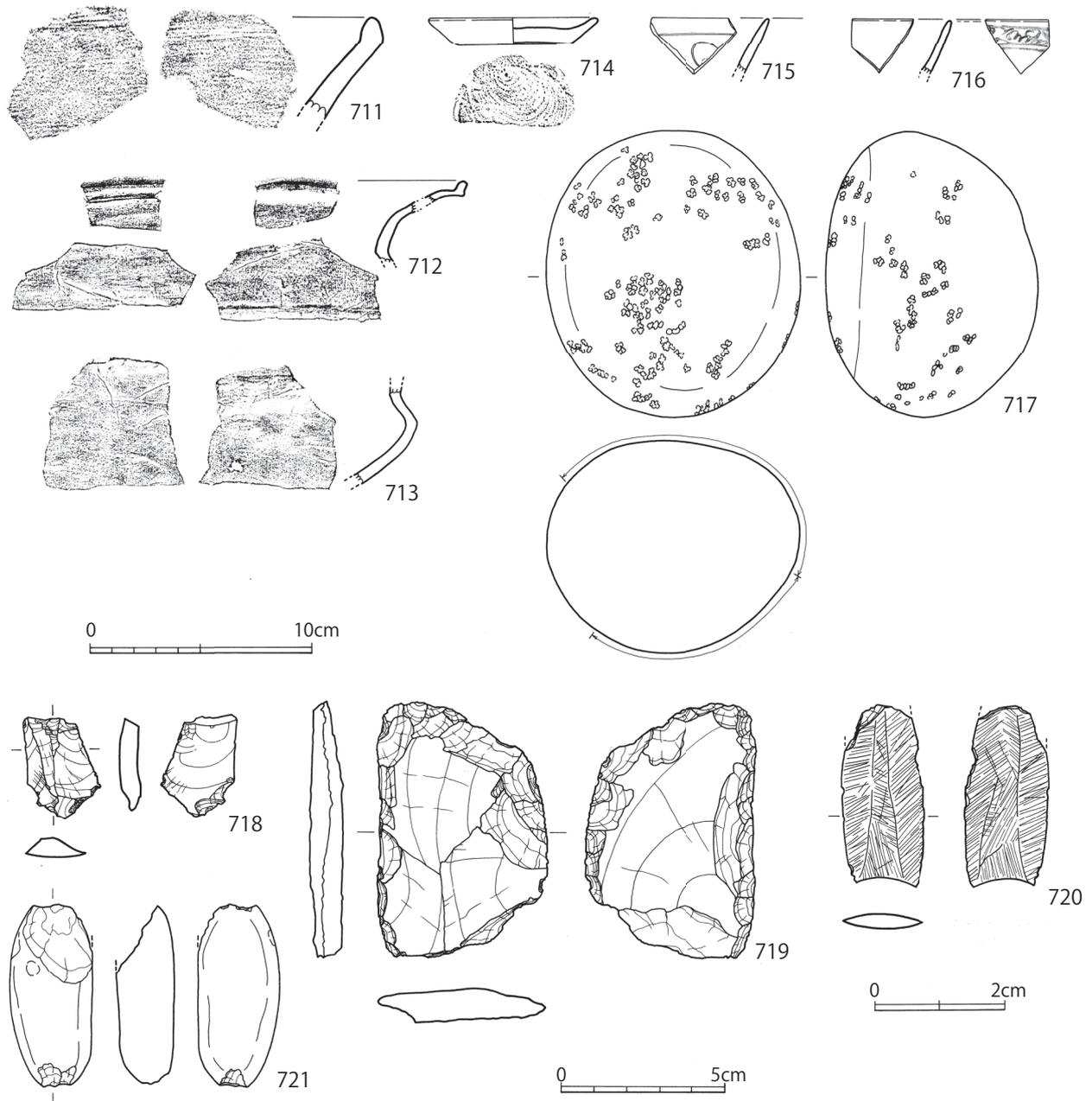
第207图 2区出土遺物実測図⑤ (1/2)



第 208 图 2 区出土遺物実測図⑥ (1/2 · 1/3)



第 209 图 2 区出土遗物实测图⑦ (1/3 · 1/4)



第210図 1・2区出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

SK737出土遺物 (第174図)

592 は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の剥片を素材とし、周縁部に細かい調整剥離を施す。

SK761 (第175図)

2区の南部、H-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SK955を切る土坑で、平面形状は略楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.66m、深さ0.20mを測る。遺物は土師器、打製石斧が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK761出土遺物 (第176図)

593 は打製石斧である。上部を欠失するが、刃部を中心に細かい調整剥離を施す。表面の一部には煤の付着が認められる。石材は泥岩である。

SK783 (第177図)

2区の中央西寄り、H-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みのある長方形を呈し、長辺1.84 m、短辺1.17 m、深さ0.09 mを測る。掘り込みは浅い皿状を呈し、床面は平坦である。遺物は縄文土器、土師器、打製石斧が出土している。遺物が少ないため時期比定の決め手を欠くが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK783出土遺物 (第178図)

594は打製石斧である。背面に自然面を残す安山岩の横長剥片を素材とし、周縁部に調整剥離を施すが、剥離は粗く未製品の可能性が高い。

SK789 (第179図)

2区の北西部、G-4グリッドで検出した土坑である。重機により表土を除去した際に扁平な安山岩の巨石が出土したため、その位置を止めて周辺の遺構検出を行ったところ、土坑の輪郭を検出した。位置的には古墳時代前期の大型竪穴建物SH896の上にあたり、その埋没後に構築された遺構である。平面形状は略楕円形を呈し、長径1.89 m、短径1.32 m、深さ0.62 mを測る。安山岩の板石は長さ約1.00 m、幅約0.50 mで、大人5~6人でようやく持ち上げることができるくらいの重さがある。こうした板石は、上田原東遺跡では竈を埋めた後にその上を封じるように置かれる例があるが、この周囲には竈はなく、この場所に置かれた理由は不明である。何か別のもの、痕跡の残りにくい有機物か何かを埋めて封をした、あるいは竪穴建物SH896の廃絶に伴い置かれた可能性もある。遺物は弥生土器、土師器、磨製石鎌が出土している。時期比定できる遺物に乏しいが、SH896との切り合いや土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK789出土遺物 (第180図)

595は器種不明の土器細片である。外面に無数の凹みがあり何らかの圧痕の可能性が考えられたが、分析の結果は不詳であった。596は磨製石鎌で先端部を欠失する。石材は蛇紋岩である。

SK791 (第181図)

2区の中央部、G-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH915を切る土坑で、平面形状は鶏卵形を呈し、長径1.07 m、短径0.82 m、深さ0.50 mを測る。埋土は6層に分層される。遺物は土師器、打製石斧が出土している。遺物が少なく遺構の時期比定は困難であるが、土師器の出土から古墳時代の遺構と判断する。

SK791出土遺物 (第182図)

597は打製石斧である。両面に節理痕のある千枚岩を素材とし、側縁部に調整剥離を施す。

SK851 (第183図)

2区の北西部、G-4グリッドで検出した土坑である。位置的には古墳時代前期の大型竪穴建物SH896の西壁の中央付近に位置し、これを切っている。平面形状は略円形を呈し、長径0.71 m、短径0.60 m、深さ0.47 mを測る。検出面の西壁寄りで、土師器の小型の

二重口縁壺の完形品が出土している。土師器壺は底部を下にして口縁部がやや傾いた状態で出土しており、元々は正位置で置かれていたものが土圧等で傾いたのであろう。何らかの土器を用いた祭祀行為の痕跡と思われる。出土土器から、古墳時代前期後半の遺構と判断される。

SK851出土遺物（第184図）

598 は土師器の小型二重口縁壺である。球状の胴部から頸部で屈曲し、口縁は外反した後中ほどで上方へ折れる。外面には黒斑が認められる。

SK888（第185図）

2区の中央西壁際、H-4グリッドで検出した土坑である。西側は調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、平面形状は円形を呈し、長径 1.47 m、短径 0.66 m、深さ 0.41 m を測る。遺物は縄文土器、土師器が出土しているが、時期比定できる遺物に乏しい。土師器が出土していることから、古墳時代の遺構と判断される。

SK888出土遺物（第186図）

599 は縄文土器である。口縁は外に開き端部がわずかに内に折れ、外面に 2 条の沈線を施す。口縁部の内側には段が付く。後期中葉の太郎迫式に比定される。

SK933（第187図）

2区の中央部、G-5・H-5グリッドで検出した土坑である。北は縄文時代の竪穴建物SH770、西はSH785とそれぞれ一部分が重複しているが、縄文時代の竪穴建物の方が先に検出して掘り下げており、この両者との平面での関係は押さえられなかった。一方、東は古墳時代の竪穴建物SH801・SH731と重複し、西の一部はSK736に切られている。SH731についても調査順序を間違えており、本来はSK933がSH731を切るものである。SK933は楕円形状の平面形状を呈するとみられ、長径 4.33 m 以上、短径 2.33 m 以上、深さ 0.27 m の規模を測る。埋土は 4 層に分層される。床面では 5 基のピット状遺構を検出している。遺物は縄文土器、土師器、土器片、磨製石鏃、石鏃未成品が出土している。土師器の出土から、古墳時代の遺構と判断される。SH770 から出土の須恵器が、SK933 との切り合い関係の把握ミスから取り込まれたものであるなら、SK933 は古墳時代後期ということになるが、可能性に止めておきたい。

SK933出土遺物（第188図）

600 は縄文土器である。口縁は外反し、端部は丸く肥厚する。口縁直下に補修孔を穿つ。601 は姫島産黒曜石の剥片に細かい調整剥離を加えて三角形に加工しており、打製石鏃の未製品と思われる。602 は黒色粘板岩製の磨製石鏃で、基部は平坦である。

第 5 節 古代・中世の遺構と遺物

2区における古代の遺構は土坑 4 基と少ない。中世の遺構はわずかにピット 1 基があるだけである。

SK725（第189図）

2区の北部中央、G-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH954と古代の土坑SK940の境目に位置し、この両者を切っている。平面形状はやや歪な円形を呈し、長径 1.27 m、短径 1.02 m、深さ 0.37 m を測る。内部の掘り込みは丸みをもち、断面形はボウル形を呈する。土坑の北半の床上から数点の遺物が出土している。遺物は土師器、打製石斧が出土している。年代比定できる遺物に乏しいが、SK940 との切り合い関係から古代以降の遺構である。

SK725出土遺物（第190図）

603 は打製石斧である。上半部を欠くが、周縁部に調整剥離を施す。石材は安山岩である。

SK736 (第191図)

2区の中央部、G-5・H-5グリッドで検出した土坑である。縄文時代の竪穴建物SH785と古墳時代の土坑SK933をそれぞれ切っている。平面形状は長方形を呈し、長辺1.23m、短辺0.71m、深さ0.19mを測る。掘り込みは逆台形状を呈し、床面はほぼ平坦である。遺物は縄文土器が出土しているが、重複するSH785から巻き込んだものである。他に年代比定できる遺物はないが、SK933との切り合い関係から古墳時代以降となり、SK933が古墳時代後期後半であるなら、SK933はそれ以降、古代にまで下る可能性が高い。

SK736出土遺物 (第192図)

604は縄文土器の浅鉢である。外反する口縁の端部を上方に折り、外面に1条の沈線を施す。後期末葉に位置付けられる。

SK747 (第193図)

2区の南東隅部、H-6グリッドで検出した土坑である。古墳時代後期の竪穴建物SH750の南東部と重複しており、SK747がSH750を切っている。北側の一端が調査区外に続くが、平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径4.40m、短径1.74、深さ0.49mを測る。埋土は6層に分層され、ほぼ全体に焼土や炭が混じっている。土坑の上部では4箇所焼土の広がり認められた。遺物は弥生土器、土師器が出土している。SH750との切り合い関係から古墳時代後期以降であり、古代に下る可能性がある。

SK747出土遺物 (第194図)

605・607は弥生土器である。605は外面口縁下に1条の刻目凸帯を巡らせるもので、中期の下城式甕に該当する。607は甕で、外反する口縁の端部を上方に摘み上げる特徴から中期に比定される。606は土師器の鉢か。608は土師器の甕で、口縁部は外反し端部は丸い。古墳時代後期に位置付けられる。609・610は土師器の高坏で、古墳時代前期の遺物である。

SK940 (第195図)

2区の北部中央、F-5・G-5グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形を基調としてやや台形状を呈し、北東隅部は古墳時代の竪穴建物SH730に、南辺の一端は古代の土坑SK725にそれぞれ切られている。遺構の規模は長辺3.28m、短辺3.12m、深さ0.34mを測る。遺構の形状や規模から竪穴建物の可能性も考えられたが、支柱穴等の付属する遺構が認められないことから土坑として扱った。埋土は4層認められ、3・4層を切って1・2層が掘り込む状況が見て取れる。土坑内部には不定形の掘り込みがあり、これが1・2層の掘り込みと一致する。つまり、この不定形土坑はSK940埋没後のもので、両者に直接の関係はない。その他に床面で検出された遺構はない。遺物は弥生土器、土師器、砥石、礫器が出土している。細片ではあるが古代の土師器が出土しており、古代の遺構と判断する。

SK940出土遺物 (第196図)

611は土師器の高台付椀である。612・613は砥石で、612は上面を、613は上下両面を使用面とする。石材はいずれも結晶片岩である。614は風化したホルンフェルスの周縁に粗い剥離を加えて刃部を作り出すもので礫器とした。縄文時代早期頃の石器が混入したものであろう。

SP759 (第197図)

2区の南東隅部、I-6グリッドで検出したピット状遺構である。平面形状は略円形を呈し、長径0.41m、短径0.39m、深さ0.43mを測る。ピットの上から白磁皿が出土しており、遺構の時期は中世前期に位置付けられる。

SP759出土遺物（第198図）

615 は中国産の白磁皿である。内面及び外面の上部に施釉し、外面下半から底部は露胎となる。

第6節 その他の遺構

本節では前節までで取り上げた遺構以外で、帰属時期が不明なものを中心に報告する。なお、ピット等小規模な遺構については詳述しないので、第3分冊巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SD728（第200図）

2区の北西隅部、F4グリッドで検出した溝状遺構である。東西に細長く延びるもので、長さ2.30 m、幅0.60 m、深さ0.25 mを測る。遺物は弥生土器の可能性のある土器片の他に叩石・磨石が出土しているが、時期比定できる遺物が全くなく、遺構の時期は不明である。

SD728出土遺物（第201図）

616 は砂岩の円礫を用いた叩石である。上面及び長軸の上下両端を使用しており、敲打痕が認められる。617 は角閃安山岩の円礫を素材とした叩石・磨石である。上面を磨面とし、上端側面を叩石としており敲打痕が残る。

2区遺構出土遺物（第202図）

618 はSP764 から出土した縄文土器で、無文の深鉢である。619 はSP784 から出土した安山岩の剥片で、背面に自然面を残す。こうした剥片は打製石斧によく見られ、619 も打製石斧の製作に伴って生じた残滓の可能性はある。620 はSP848 から出土の縄文土器で、口縁は波状を呈し、内面に1条の沈線を施す。621 はSP949 出土の打製石斧である。大部分を欠失するが、側縁に調整剥離が認められる。石材は砂岩である。622 はSP988 出土の縄文土器である。623 はSP989 から出土した台石である。砂岩の円礫を素材とし、上下両面を使用面として両面に細かい擦痕が残る。

第7節 包含層その他の出土遺物

表土除去時や遺構検出時等、遺構に伴わずに出土した遺物のうち主要なものを第203～209図に示す。

624～664 は縄文土器である。624 は口縁部に紐状の隆帯を貼り付けて拡張し、上端部に沈線状の凹みがみられる。後期の鐘崎式あたりに位置付けられようか。625 は横位の区画沈線に単節縄文RLを施す。626 は胴部片で、単節縄文RLを施す。627 は波状口縁の深鉢で、内面口縁下に1条の沈線を施す。これらは後期中葉に比定される。628 は口縁部が三角形に肥厚し、外面に凹線を巡らせるもので、後期後葉の三万田式である。629～634 は外面が無文で、内面口縁下に1条の沈線を施す深鉢である。後期後葉に比定される。635～641 は外面口縁下に1条の無刻目凸帯を施すもので、晩期後葉の上菅生B式である。635・636 は凸帯が高くシャープで、635 は凸帯が口縁に併行して1周するのではなく連弧状となる。637～640 は凸帯が高く、断面形状が蒲鉾状に丸みをもつ。上菅生B式に一般的な断面三角形の凸帯とは趣が異なり、635～640 は上菅生B式の中でも古相を示す可能性がある。642～650 は無文の深鉢である。651～653 は深鉢の底部で、651・652 は高台状に高い上げ底となる。654～663 は浅鉢である。654 は口縁が断面三角形に肥厚し、外面に2条の凹線を施すもので、後期後葉の三万田式に比定される。655 は内傾する口縁の外面に2条の沈線を巡らせる。656 はボウル形の浅鉢で、内面口縁下に1条の沈線を巡らせる。657・658 は外傾する口縁の内外面に粗い沈線を施す。659・660 は外反する口縁の端部が上方に折れ、内外面に1条の沈線を施す。これらは後期後葉～末葉に属する。661 は外面に粗い多条の沈線を施すもので、晩期前半に比定される。662 は内傾する頸部から口縁が外反し、端部は丸く肥厚する特徴から晩期後葉に位置付けられる。663 は口縁が逆「く」字状を呈し、外面に沈線を施す。晩期終末に比定される。664 は口縁が内傾

し、外面に細沈線文を施すもので、後期後葉の注口土器であろう。

665～673 は弥生土器である。665・666 は外面口縁下に1条の刻目凸帯を配し、口縁外端部に刻みを施す甕で、中期の下城式に比定される。667・668 はいわゆる粗製甕で、667 は多条の凸帯を、668 は沈線を施す。669～673 は壺である。669 は胴部で、横位の多条沈線と、そこから垂下する多条沈線が見られる。重弧文を施すもので、下城式に伴う壺である。670 は外面に断面三角形状、671 は断面「M」字状の凸帯を巡らせる。692 は外反する口縁の外面に刻みのない凸帯を貼り付ける。673 は口縁が強く外反し、端部に波状文を施す。674 は須恵器の坏蓋で、天井部は丸く、天頂付近に回転ヘラケズリを施す。675 は小型の土師器壺、676・677 は古代の土師器坏である。678・679 は白磁碗の底部で、678 は見込み部に段が付く。680 は施釉陶器の向付で、鉄絵で文様を描く。志野の製品である。

681～710 は石器である。681 は緑色片岩製の磨製石鏃片で、剥離痕が残る未製品とみられる。682 は黒色粘板岩製の磨製石鏃で、研磨痕がみられない整形段階の未製品である。683 はホルンフェルスの剥片の側縁に粗い剥離を施した礫器か。684 はホルンフェルスの剥片で、表面が風化している。683・684 は縄文時代早期頃の石器の可能性が高い。685 は緑色チャートの剥片である。686 は黒色粘板岩の剥片で、磨製石鏃の素材であろう。687 は凝灰岩の縦長剥片である。688 は周縁に剥離痕残る石斧であるが、刃部を研いでおり磨製石斧の未製品である。表裏面ともに煤の付着が認められる。689～699 は打製石斧である。690・697 は被熱の痕跡が認められる。691・692・696 は未製品か。石材は693・695・697 が安山岩、694 は緑色片岩、696 は閃緑岩、698 はホルンフェルス、699 はデイサイトである。700 は砂岩製の磨製石斧で、基部を欠失する。701～705 は石錘である。701～704 は素材礫の長軸にスリット状の切れ目を入れて縄掛け部を創り出す。石材は701 が砂岩、その他は粘板岩である。705 は打欠石錘で、砂岩の円礫の長軸部に粗い打欠きを加え縄掛け部とする。706～709 は叩石・磨石類である。706 は角閃安山岩の円礫を用いた叩石で、特に下端部を集中的に叩いている。707 は砂岩製の叩石で、上下両面の中央部に使用による凹みがみられる。708 は上下両面、側縁部に顕著な敲打痕を残す。709 は叩石・磨石で、上下両面を磨面、側縁部を叩石としている。710 は台石で、上面を使用面とする。

第210図は排土からの採集品であるが、出土場所が1区と2区のいずれかが特定できないものを掲載した。711 は縄文土器の深鉢で、外反する口縁の端部が上方に折れる。712・713 は縄文土器の浅鉢で、712 は外反する口縁の端部が上方に折れ、外面に1条の沈線を施す。713 は胴部の中位で屈曲する。714 は土師器小皿で、底面に回転糸切り離し痕が残る。715 は中国産の青磁碗、716 は中国・景德鎮窯の青花碗で、いずれも中世の遺物である。717 は砂岩の円礫を用いた叩石・磨石で、上面及び右側面に敲打痕が残る。718 は緑色チャートの剥片である。719 は安山岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、側縁部に調整剥離を施す。720 は磨製石鏃で、先端部を欠失する。石材は黒色粘板岩である。721 は細長い安山岩の円礫を用いた打欠石錘で、長軸両端を打ち欠いて縄掛け部を創り出す。

第1表 上田原東遺跡(1区) 遺物観察表(土器・陶磁器)

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調			胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	その他	
第9図	2 1区	SH662	縄文土器 深鉢		2.8+ α		沈線・研磨	ナ	にぶい、褐色	にぶい、赤褐色	少	少	少		
第13図	5 1区	SK571	縄文土器 浅鉢		2.4+ α		丁寧なナ、一部研磨	丁寧なナ、一部研磨	黒褐色	黒褐色	少	多	少		
第15図	6 1区	SK579 SX539	鉢		5.7+ α		沈線・縄文RL、ココ好方向の研磨	好方向の研磨	暗褐色	暗褐色	多	多	少		
	7 1区	SK579	深鉢		6.4+ α		ナリ後、ナキ	ナリ、ナリ後に、ナキ、ナ	暗褐色	暗赤褐色	少	多	少	外面黒斑あり	
8 1区	SK591	深鉢		8.5+ α		コナ、凸帯	コナ	にぶい、赤褐色	褐色	少	少	少			
9 1区	SK591	深鉢		6.0+ α		コナ、凸帯	コナ	赤褐色	赤褐色	少	少	少			
10 1区	SK591	深鉢		13.8+ α		ナ、ナ、後研磨	ナ、ナ、後研磨	黒褐色～褐色	黒褐色～褐色	多	多	少			
第17図	11 1区	SK591	深鉢		4.9+ α		ナ	研磨	にぶい、褐色	褐色	少	多	少		
	12 1区	SK591	深鉢		5.4+ α		ナ	ナ	褐色	にぶい、褐色	多	多	少		
13 1区	SK591	深鉢		4.8+ α		条痕	ナキ	暗赤褐色	暗赤褐色	少	少	少			
14 1区	SK591	浅鉢		1.8+ α		ナ、研磨	研磨	黒褐色	褐色	少	少	少			
第19図	17 1区	SK595	縄文土器 深鉢		2.8+ α		ナ、凹線文	ココ好方向の条痕	黄褐色	黄褐色	少	少	少		
第23図	23 1区	SK651	深鉢		4.6+ α		ナ、研磨	ナ	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	少	少	少		
第25図	24 1区	SK664	深鉢		3.1+ α		ナ、研磨	研磨	にぶい、褐色	にぶい、赤褐色	多	少	少		
第27図	25 1区	SK664	深鉢		4.2+ α		ナ、研磨	研磨	褐色	褐色	少	少	少		
	27 1区	SK666 1区検出	深鉢		6.9+ α		ナ	ナ	にぶい、赤褐色	赤褐色	多	多	少		
第29図	29 1区	SK675	縄文土器 浅鉢		2.6+ α		研磨	ナ	にぶい、赤褐色	褐色	少	少	少		
第33図	33 1区	SH600	弥生土器 甕		3.2+ α		コナ、ナ、刻目凸帯	コナ、ナ、ナキ	暗褐色	にぶい、黄褐色	少	少	少		
第35図	34 1区	SH667	弥生土器 甕		4.0+ α	(8.0)	ナ	ナ	褐色	にぶい、黄褐色	少	少	少		
第37図	35 1区	SH687	縄文土器 浅鉢		3.6+ α		ナキ、縄文	ナキ	暗赤褐色	暗赤褐色	少	多	多	縄文RL	
	36 1区	SH687	弥生土器 甕		3.7+ α		コナ	コナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	外面刻目	
第41図	40 1区	SD589	縄文土器 浅鉢		4.7+ α		刻目・縄文・研磨	ナ、研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	少	少	少		
第43図	41 1区	SD690	弥生土器 甕		2.1+ α	9.0	コ	ナ	浅黄色	にぶい、黄褐色	多	多	少	内面黒斑あり	
第45図	42 1区	SH535	縄文土器 深鉢		4.7+ α		コ方向のナ	ナ	黒褐色	黒褐色	多	多	少		
	43 1区	SH535	深鉢		3.4+ α		ナ	ナ	暗黄褐色	暗褐色	多	多	少		
第47図	44 1区	SH535	縄文土器 深鉢		3.8+ α		ナ、条痕	ナ、条痕	暗褐色	暗赤褐色	少	多	多		
	45 1区	SH535	縄文土器 浅鉢	(15.8)	4.4+ α		研磨	研磨	暗褐色	暗赤褐色	少	多	少		
第49図	46 1区	SH535	縄文土器 浅鉢		2.4+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	少	少	少		
	47 1区	SH535	縄文土器 浅鉢		3.5+ α		貝殻条痕文	ナキ	暗褐色	暗褐色	多	多	少		
第49図	48 1区	SH535	弥生土器 甕		3.7+ α		ナ	条痕文	暗赤褐色	黒褐色	多	多	少		
	49 1区	SH535	須置器 坏蓋		2.0+ α		回転ナ	回転ナ	灰緑色	灰緑色	少	多	多		
第47図	50 1区	SH535	土師器 甕		3.9+ α		剥離	コ方向のナ	淡赤褐色	暗灰褐色	少	多	少		
	51 1区	SH535 SX534	土師器 甕		4.9+ α		ナ	ナ	赤黄褐色	赤黄褐色	多	多	多	内面・底部黒斑あり	
第49図	52 1区	SH535	土師器 甕		4.5+ α		指圧痕・ナ	コ方向のナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多		
	55 1区	SH536	縄文土器 深鉢		2.2+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	少	少	少		
第49図	56 1区	SH536	縄文土器 深鉢		4.5+ α		ナ	ナ	暗褐色	にぶい、褐色	少	多	多		
	57 1区	SH536ナ SH536ナ	土師器 鉢		4.5+ α		ナ	ナ、指圧痕	にぶい、褐色	にぶい、黄褐色	少	少	少		
第49図	58 1区	SH536ナ SX583	土師器 甕	(15.4)	15.2+ α		工具ナ、ナ	工具ナ	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	少	少	少	外面やや赤変	
	59 1区	SH536ナ	土師器 甕	(16.2)	20.0	(8.0)	凹目・ナ、指圧痕・コナ	ナ、指ナ、コナ	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	少	少	多	外面やや赤変	
第49図	63 1区	SH537	縄文土器 深鉢		2.4+ α		精肉押型文	ナ	淡黄褐色	灰褐色	少	少	少		
	64 1区	SH537	縄文土器 鉢		4.7+ α		コナ、ナキ	コナ、ナキ	暗褐色	暗褐色	少	少	少		
65 1区	SH537	縄文土器 深鉢		3.0+ α		ナ、条痕文・突帯文	ナ	暗褐色	褐色	多	多	多			

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考	
							外面	内面	外面	内面	角四石	長石	石英		その他
第49図	66 1区	SH537	縄文土器 鉢		5.8+α		ヨコテ・巻貝条痕文後テ	ヨコテ・粗いミナキ	黒褐色	黒褐色～褐色	多	多	少	多	
	67 1区	SH537	縄文土器 浅鉢		2.9+α		研磨	研磨	暗褐色	暗褐色	少	少	少	少	
	68 1区	SH537	縄文土器 底部	6.0	1.2+α		テ・研磨	テ	淡黄褐色	暗褐色	少	多	少	多	
	69 1区	SH537	弥生土器 甕		6.7+α		ヨコテ・刻目突帯・好テ	ヨコテ・ミナキ	暗褐色	暗褐色	少	多	少	多	
	70 1区	SH537	弥生土器 壺		3.9+α		テ・附付突帯	テ	暗褐色	暗褐色	少	少	少	多	
	71 1区	SH537	土師器 小型丸底壺		9.9		ヨコテ・不定方向のN後テ	ヨコテ・粘土織目痕・指圧痕	暗灰褐色	暗褐色	少	多	少	多	内外面双附着 内面内容物の痕跡あり
	72 1区	SH537	土師器 甕		15.6		N目・ヨコテ	工具テ・ヨコテ・指圧痕	暗赤褐色	褐灰色	少	少			内面に米粒状の痕跡あり 外面被熱による剥離
	73 1区	SH537	土師器 甕		25.5		N後テ・ヨコテ	工具テ	明褐色	にぶい黄褐色	少	少			外面双附着 外面黒変あり
	74 1区	SH537	土師器 甕		19.7+α		ヨコテ・好方向のN後テ・N後テ方向のN後テ	ヨコテ・N後テ	褐色～にぶい褐色	褐色	少	少			内外面双附着
	75 1区	SH537	土師器 甕		25.7		ヨコテ・N後テヨコテ・N	ヨコテ・ヨコテ・N後テのちテ・指圧痕	暗褐色	暗褐色	多	多	少	多	内外面双附着
第50図	76 1区	SH537	土師器 甕	(14.0)	25.3		ヨコテ・N目	ヨコテ・テ・指圧痕・接合痕	褐灰色	灰褐色	少	少	多	多	外面双附着
	77 1区	SH537	土師器 甕		19.8+α		工具テ	ヨコテ・N後テ・ヨコテ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	多	多	外面双附着
	78 1区	SH537	土師器 壺	(10.6)	23.3		テ・N目後一部ミナキ・ヨコテ	テ・ヨコテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少	少	少	外面黒斑あり
	79 1区	SH537	土師器 壺		11.35		ヨコテ・テ	ヨコテ・テ	にぶい黄褐色～褐色	明黄褐色	少	少	少	少	外面黒斑多い 内外面黒斑あり
	80 1区	SH537	土師器 小型丸底壺		6.6+α		テ・N後方向のN	テ・指圧痕	褐色	褐色	少	少	少	少	
	81 1区	SH537	土師器 鉢		6.8～7.6		指圧痕・テ	テ	暗褐色	暗褐色	少	多	少	少	
	82 1区	SH537	土師器 ミナハ7 鉢		4.0+α	(5.2)	テ	工具テ	にぶい褐色	灰黄褐色	少	少	少	少	外面：黒斑あり
	83 1区	SH537	土師器 高環		3.7+α	4.6	テ・工具テ	しぼり痕・テ	褐色	褐色	少	少	少	少	
	84 1区	SH537	土師器 高環		11.3+α		N・N後テ・好テ	ヨコテ・テ	灰褐色	灰白色	少	多	少	多	内面へラ記号
	85 1区	SH537	土師器 高環		8.5+α	10.8	好テ・ヨコテ・ヨコテ	ハカテリ・ヨコテ	黄褐色	黄褐色	少	少	少	多	円盤充真 内外面黒斑あり
第54図	86 1区	SH537	土師器 高環		7.8+α	12.0	ヨコテ・N後ハカテリ	ハカテリ・ヨコテ	橙黄褐色	橙黄褐色	多	多	多	多	内外面黒斑あり
	87 1区	SH537	土師器 高環		9.4+α	(11.4)	テ・ヨコテ	テ・ヨコテ・テ	明褐色	明褐色	少	少	少	少	
	96 1区	SH610	土師器 鉢	(10.7)	3.35		ヨコテ・テ	テ	にぶい黄褐色	明褐色	少	少	少	少	内面赤彩
	100 1区	S-620	縄文土器 深鉢		4.4+α		テ	ミナキ	灰褐色	灰褐色	少	少	少	多	波状口縁
	101 1区	S-620d	縄文土器 深鉢		2.7+α		細文・沈線・研磨	テ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少			
	102 1区	S-620	縄文土器 深鉢		3.8+α		テ・突帯・テ	条痕・テ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少				
	103 1区	S-620a	縄文土器 浅鉢		3.1+α		テ	条痕・テ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	少	少			
	104 1区	S-620	縄文土器 浅鉢		2.4+α		テ	テ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少			1ヶ所穿孔あり
	105 1区	S-620d	弥生土器 甕		4.4+α		ヨコテ・好テ・刻目突帯	テ・指圧痕・ミナキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少	少	少	
	106 1区	S-620	弥生土器 壺		5.4+α		テ・ヨコテ・ハカテリ	工具テ	暗褐色	暗褐色	少	多	少	少	
第56図	107 1区	S-620c	弥生土器 壺		2.0+α		ヨコテ	ヨコテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少			口縁に浮文 外端縁刻み
	108 1区	S-620	弥生土器 壺		2.9+α		ヨコテ・テ・浮文	ヨコテ・テ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少		少	口縁に浮文 外端縁刻み
	109 1区	S-620(S-720)	弥生土器 高環		5.7+α		ミナキ	テ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少		多	脚部に透かし
	110 1区	S-620	土師器 甕	(18.8)	16.2+α		ヨコテ・N後方向のN	ヨコテ・N後方向のN	暗茶褐色	暗褐色	少	多	少	多	外面双附着
	111 1区	S-620	土師器 甕	(15.0)	7.5+α		好N後ヨコテ・工具テ	ヨコテ・好N後ヨコテ	黄褐色	黄褐色	少	少	少	多	
	112 1区	S-620	土師器 甕		18.7		ヨコテ・好N・ヨコテ・指圧痕	ヨコテ・テ・指圧痕	暗赤褐色	暗褐色	多	多	少	多	

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考	
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英		その他
第56図	1区	S-620	土師器	13.7	29		ヨナ・ナ 後ナ方向のナ・ナ	ナ 後斜位のナ・ナ・工具ナ	灰褐色	茶褐色	少	少	少	内面双付着	
	1区	S-620	土師器		6.6+α		ヨナ・ナ 後ナ・ナ	ヨナ・ナ 後ナ・ナ	暗黄褐色	暗茶褐色	少	多	多	外面双付着	
	1区	S-620	土師器		7.0+α		工具ナ	工具ナ・ナ	暗灰褐色	淡黒褐色	少	多	少	外面黒斑あり	
	1区	S-620	土師器	(9.8)	6.3~6.7	3.4	ナ 後ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	少	多	少		
第57図	1区	S-620	土師器	14.2	12.5~13.0	(11.6)	ヨナ・ナ 後ナ方向のナ・ナ 方向のナ・指圧痕	ヨナ・ナ 後ナ・ナ 指圧痕	橙褐色	暗橙褐色	多	多	少	多	円盤充真
	1区	S-620	土師器	14.8~15.3	4.7+α	14.1	ヨナ・ヨナ	ヨナ	橙黄色	橙黄色	少	少			
	1区	S-620	土師器		6.4+α	11.6	ヨナ・粗いナ方向のナ	ヨナ・粗いヨコ方向のナ・工具ナ	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	少	多	少	多	
	1区	S-620	土師器	16.2	12.3	11.5	ナ・ヨナ	ナ・ヨナ	橙褐色	にぶい橙褐色	少	少	少	少	内面二次焼成
第60図	1区	S-620	土師器	14.0	5.0+α	(6.8)	ヨナ・ナ 後ナ	ヨナ・ナ 指圧痕	暗褐色	暗褐色	少	多	少	多	円盤充真
	1区	S-620	土師器	(16.4)	4.4+α	(9.6)	ヨナ・ナ	ヨナ・ナ	明赤褐色	明赤褐色	少	少			
	1区	S-620	土師器		7.2+α		ナ 突帯	ナ 突帯	灰黄褐色	灰黄褐色	少	少			
	1区	S-604	弥生土器		2.0+α		ヨナ・刻目突帯	ヨナ	暗褐色	暗褐色	少	少			
	1区	S-604	土師器		9.4+α	6.0	ナ・指圧痕	ナ・指圧痕	にぶい橙褐色	にぶい黄褐色	少	多			
	1区	S-612b	縄文土器		2.0+α	(6.8)	ナ・工具ナ	工具ナ	暗褐色	暗褐色	少	少			
	1区	S-674	弥生土器		5.4+α		胎付突帯・工具ナ・ナ	工具ナ・ナ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	多	少	少		
	1区	S-558	縄文土器		4.1+α		楕円押型文	楕円押型文・ナ	茶褐色	茶褐色	多	多	少	少	
	1区	S-558	縄文土器		3.7+α		楕円押型文	ナ	黄褐色	黄褐色	少	多	少	少	
	1区	S-558	縄文土器		7.1+α		ナ	ナ方向のナ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	多	多	
	1区	S-558	縄文土器		6.5+α		研磨	ヨコ方向のナ・研磨	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	多	多	
	第68図	1区	SH570	弥生土器	2.5+α			ヨコ方向のナ・刻目	ヨコ方向のナ	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多	少	少
1区		SH570	弥生土器	3.1+α			ヨコ方向のナ・刻目	ヨコ方向のナ	茶褐色	茶褐色	少	多	少	少	
1区		SH570	弥生土器	3.7+α			ヨナ	ナ	青灰色	青灰色	少	少	少	少	臍部欠損か
1区		SH570	須恵器	8.4	1.65+α		回転ヨナ・回転ヨナ	回転ヨナ・回転ヨナ 後ナ	青灰色	青灰色	少	少	少	多	臍部欠損
第73図	1区	SD556A	土師器	10.6	2.3+α		回転ヨナ・回転ヨナ	回転ヨナ・回転ヨナ 後ナ	灰色	灰色				多	
	1区	SD556A	土師器	(13.0)	2.5+α		磨減	磨減	灰褐色	灰褐色	少	少		少	
	1区	SD556	土師器	14.0~15.2	14.2		粗いナ・底部未調整	ナ 方向のナ	橙黄褐色	暗茶褐色	少	多	少	少	
	1区	SD556	土師器	16.2	29.1+α		工具ナ 後ナ	ヨナ・指圧痕・凹目後ナ	明褐色	明褐色	多	少	少	少	外面一部黒変
第75図	1区	SX619	土師器	16.2	4.2+α		ナ・ナ方向のナ	ナ (全体的に剥離)	橙褐色	橙褐色	少	少			
	1区	SX556B	土師器		3.2+α		ナ方向のナ	ナ方向のナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	多	
	1区	SD556	縄文土器		3.5+α		ナ	ナ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	多	多	
	1区	SX556B	弥生土器		6.8+α		ナ 後ナ 刻目	ナ 後ナ 刻目	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多	多	多	外面双付着
第75図	1区	SD556A	土師器	(11.8)	5.7+α		ヨナ・ヨナ	ヨナ・ナ	淡褐色~淡赤褐色	淡褐色~淡赤褐色	多	多	多	多	外面赤彩あり
	1区	SD556	土師器		2.1+α	(7.0)	工具ナ・ヨナ・ナ	ナ	淡褐色	暗褐色	多	多	多	多	
	1区	SX619	縄文土器		6.1+α		研磨	研磨	暗褐色	暗褐色					
	1区	SX619	縄文土器		4.8+α		ナ	ナ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少	少	少	
	1区	SX619	縄文土器		5.2+α		条痕か・ナ	ナ	灰黄褐色	灰黄褐色	少	少			
	1区	SX619	縄文土器		2.4+α		研磨	研磨	暗褐色	暗褐色	多	多	多	多	
	1区	SX619	縄文土器		1.3+α		ヨナ	ヨナ	暗褐色	暗褐色	少	少			
	1区	SX619	弥生土器		4.2+α		ナ 後ナ 丁字ナ・文様・竹管 文	ナ 後ナ 丁字ナ・文様・竹管 文	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色					外面文様あり
1区	SX619	土師器	(14.8)	1.0+α	(2.8)	ナ	ナ	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色			少	少		
1区	SX619	土師器		8.4		回転ヨナ・回転糸切り	回転ヨナ	明褐色	明褐色	少	少		少		

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第79図	172 1区	SX547	縄文土器 鉢		3.6+α		条痕	30方向のナナ	暗黄褐色	暗褐色	多	多	少	
	177 1区	SX561	縄文土器 浅鉢		3.0+α		ナナ	ナナ	灰黄褐色	灰黄褐色	多	多	少	
第82図	179 1区	SK596	縄文土器 浅鉢		5.7+α		ナナ・研磨	研磨	黒褐色	褐色	少	少	少	
第86図	182 1区	SP633	縄文土器 深鉢		2.6+α		ナナ	シナキ	茶褐色	茶褐色	多	多	少	内面種子圧痕か
	183 1区	D-5 検出時	縄文土器 深鉢		4.8+α		シナキ・縄文	シナキ	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多	少	
	184 1区	E-4 E-5 検出時	縄文土器 深鉢		3.8+α		ナナ・縄文 RL・ナナ 後沈線	ナナ	暗茶褐色	暗茶褐色	少	多	少	
	185 1区	E-4・E-5 検出	縄文土器 深鉢		5.0+α		縄文 RL 後ナナ・シナキ	ナナ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	186 1区	C-5 検出	縄文土器 鉢		4.6+α		シナキ・沈線・竹管文	シナキ	暗褐色	暗褐色	多	多	少	
	187 1区	E-6 検出	縄文土器 深鉢		3.3+α		縄文 RL・シナキ	シナキ	暗茶褐色	茶褐色	少	多	少	
	188 1区	表土	縄文土器 深鉢		3.4+α		シナキ	シナキ	暗茶褐色	茶褐色	多	多	少	
	189 1区	C-5・C-6 検出	縄文土器 鉢		4.6+α		シナキ	シナキ	茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	190 1区	C-6 E-6 検出	縄文土器 深鉢		4.5+α		30方向のナナ・ナナ 後シナキ	30方向のナナ・シナキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	191 1区	D-5・D-6 検出	縄文土器 深鉢		5.8+α		シナキ	シナキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	192 1区	C-6 検出	縄文土器 深鉢		4.3+α		ナナ 後シナキ	シナキ	黒褐色	暗茶褐色	少	多	少	
	193 1区	B-5 検出	縄文土器 深鉢		3.9+α		シナキ	シナキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	194 1区	E-4・D-4 検出	縄文土器 深鉢		4.2+α		ナナ 後シナキ	ナナ 後シナキ	暗褐色	暗褐色	少	多	少	
	195 1区	C-5 検出	縄文土器 浅鉢		2.6+α		30方向のナナ	30方向のナナ	暗茶褐色	黒茶褐色	多	多	少	
	196 1区	E-4・D-4 検出	縄文土器 浅鉢		2.1+α		シナキ	シナキ	黒茶褐色	黒茶褐色	少	多	少	
	197 1区	D-5 検出	縄文土器 浅鉢		2.5+α		シナキ	シナキ	淡黄褐色	淡黄褐色	少	少	少	
第87図	198 1区	D-5 検出	縄文土器 浅鉢		3.4+α		シナキ	シナキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	縄文 RL
	200 1区	D-5 D-6 検出時	縄文土器 注口土器		2.3+α		シナキ・縄文	シナキ	暗灰褐色	暗灰褐色	少	多	少	
	201 1区	C-5 検出時	縄文土器 深鉢		2.4+α	(6.8)	ナナ	ナナ	茶褐色	茶褐色	多	多	少	
	202 1区	E-4・D-4 検出	弥生土器 甕		5.4+α		ナナ・ナナ・刻目	ナナ・シナキ	淡黄色	暗灰褐色	多	多	少	
	203 1区	C-6・E-6 検出	弥生土器 壺		4.2+α		ナナ 後ナナ・ナナ 後ナナ・浮文貼付	ナナ・ナナ	暗黄褐色	暗黄褐色	少	少	少	浮文
	204 1区	E-4・E-6 検出	弥生土器 壺		1.7+α		ナナ・文様	磨滅	淡黄褐色	淡黄褐色	多	多	少	
	205 1区	排土	土師器 环		2.9+α		回転ナナ・ナナ	回転ナナ	淡褐色	淡褐色	多	多	多	
	206 1区	表土	土師器 环		0.8+α		回転ナナ 後シナキ	回転ナナ 後シナキ	淡橙褐色	淡橙褐色	少	少	少	
	207 1区	E-4・E-5 検出	白磁 碗		3.0+α		施釉	施釉	淡褐色	淡褐色				玉縁口縁
	208 1区	表土	青磁 碗		1.7+α		拵目・施釉	拵目・施釉	灰褐色(胎土)	灰褐色(胎土)				同安溪
	209 1区	C-5・C-6 検出	青花 碗		1.7+α		施釉	施釉	白灰色	白灰色				景德鎮窯
	210 1区	表土	土師器 小皿	(8.0)	1.3	5.6	回転ナナ・回転糸切り離し	回転ナナ・仕上げナナ	橙褐色	橙褐色	少	多	多	
	211 1区	表土	土師器 小皿	(8.8)	1.2	(6.6)	回転ナナ・回転糸切り離し	回転ナナ・仕上げナナ	橙褐色	橙褐色	少	多	少	
	212 1区	表土	土師器 环		2.8		回転ナナ・回転糸切り離し	回転ナナ	暗橙褐色	暗橙褐色	少	多	少	
	213 1区	東壁	瓦質土器 火鉢		4.8+α		ナナ	ナナ 方向の工具ナナ・ナナ	灰褐色	灰褐色			少	

第2表 上田原東遺跡（1区）遺物観察表（石器）

挿図番号	区域	遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第3図	1		採集	角錐状石器	流紋岩	2.1	1.75	1.05	4.6	
第9図	3	1区	SH662	打製石斧	安山岩	16.2+ α	7.3	1.45	198.3	被熱あり
第11図	4	1区	SK557	剥片	流紋岩	4.3	3.2	0.8	6.8	旧石器
第17図	15	1区	SK591	打製石斧	安山岩	12.2	5.4	2.2	174.0	
	16	1区	SK591	打製石斧	安山岩か	14.9	6.7	1.9	230.0	
第19図	18	1区	SK595	楔形石器	腰岳産黒曜石	1.9	3.5	1.1	5.6	
	19	1区	SK595	打製石斧	テ 伊 仆	9.5	5.6	1.5	97.0	未成品
	20	1区	SK595	打製石斧	安山岩	9.0+ α	5.6	2.6	123.0	
	21	1区	SK595	打製石斧	安山岩	16.6	8.8	1.5	339.1	未成品
第21図	22	1区	SK642	敲石	砂岩	10.75	7.3	6.5	639.6	
第25図	26	1区	SK664	磨製石鏃	結晶片岩	3.7+ α	3.7	0.55	8.5	未成品
第27図	28	1区	SK666	打製石斧	安山岩	6.9+ α	5.4+ α	1.4+ α	52.0	
第29図	30	1区	SK675	打製石斧	安山岩	11.4+ α	7.1	2.1	187.6	
第31図	31	1区	SK691	剥片	安山岩 or 流紋岩	5.0	3.8	0.8	15.8	
	32	1区	SK691	磨石・敲石	泥岩	12.1	7.0	6.1	740.0	
第37図	37	1区	SH687	横刃型石器	安山岩	5.1	13.0	1.5	114.6	
	38	1区	SH687	打製石斧	安山岩	6.3+ α	5.4	1.7	51.6	
第39図	39	1区	SK665	打製石斧	安山岩	24.8	10.0	2.6	510.0	未成品
第45図	54	1区	SH535	打製石斧	安山岩	12.9	5.9	1.8	155.0	未成品
第47図	60	1区	SH536	砥石	砂岩	4.5+ α	4.9	1.7	60.0	
	61	1区	SH536	打製石斧	安山岩	12.1	5.4	2.2	203.0	
	62	1区	SH536	石皿	砂岩	35.1	26.0	12.0	16000.0	
第53図	89	1区	SH537	打製石斧	安山岩	14.8	4.9	4.05	301.7	89A～Cと接合
	89A	1区	SH537	打製石斧	安山岩	6.6+ α	4.9	2.05	94.6	
	89B	1区	SH537	打製石斧	安山岩	9.7+ α	4.6	2.15	138.8	
	89C	1区	SH537	打製石斧	安山岩	6.35+ α	4.7	1.8	68.2	未成品
	90	1区	SH537	打製石斧	安山岩	7.75	4.1	2.1	72.5	未成品
第54図	91	1区	SH537	打製石斧	テ 伊 仆	11.2	5.4	1.6	98.9	
	92	1区	SH537	打製石斧	安山岩	8.9+ α	7.9	2.1	172.9	
	93	1区	SH537	打製石斧	安山岩	8.3+ α	8.4	2.9	234.3	未成品
	94	1区	SH537	敲石	テ 伊 仆	7.7	6.3	3.3	220.5	
	95	1区	SH537	台石	砂岩	17.4	21.1	5.3	2730.0	
第54図	98	1区	SH610	敲石	花崗岩	9.1+ α	7.5	5.0	480.0	
	99	1区	SH610	剥片	チャート	4.4	3.7	1.5	16.9	
第57図	127	1区	SH620	磨製石鏃	粘板岩	2.4+ α	2.5	0.4	3.1	
第58図	128	1区	SH620	石皿	安山岩	31.2	36.5	7.6	1200.0	
第66図	138	1区	SD558	剥片	チャート	5.0	3.7	1.6	20.9	
第68図	147	1区	SH570	敲石	安山岩	14.0	11.4	6.8	1610.0	
第73図	156	1区	SD556A	投弾	不明	7.1	4.95	4.5	226.7	
	157	1区	SX556B	磨石	安山岩	8.8+ α	10.7+ α	5.3+ α	589.7	
	158	1区	SX556B	石皿	礫岩	30.9	26.8	13.95	15000.0	
	159	1区	SX556B	台石	安山岩	16.8	23.4	5.5	3560.0	
第75図	168	1区	SX619	打製石斧	玢岩か	10.75	5.7	1.4	115.2	
	169	1区	SX619	打欠石錘	安山岩	5.75	5.7	2.15	95.4	
第77図	171	1区	SX534	石皿	安山岩	22.5	25.5	8.5	6500.0	
第79図	175	1区	SX549	砥石	泥岩	8.1+ α	2.6+ α	1.8+ α	33.2	二次的加工あり
第84図	181	1区	SK616	打製石斧	玢岩か	9.6	5.6	1.2	86.1	
第88図	216	1区	C-5 検出	細石刃	流紋岩	2.1	1.0	0.15	0.4	
	217	1区	C-6 検出	剥片	流紋岩	2.2	3.6	0.6	2.7	旧石器
	218	1区	D-5 検出	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.45	0.6	
	219	1区	E-4・E-5 検出	打製石斧	安山岩	7.9+ α	4.0+ α	1.4+ α	53.8	
	220	1区	C-5 検出	磨製石斧	蛇紋岩	6.2+ α	6.2	2.4	84.8	
	221	1区	表土	敲石	安山岩	11.9	10.5	9.0	1570.0	
	222	1区	表土	敲石	テ 伊 仆	11.2	7.6	5.2	580.0	

第3表 上田原東遺跡（1区）遺物観察表（土製品）

挿図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第45図	53	1区	SH535	半円形状土製品	土器	3.4	3.1	0.6	6.6	
第50図	88	1区	SH537	板状土製品	土	4.0	5.3	0.9	19.5	
第54図	97	1区	SH610	半円形状土製品	土器	5.1	2.7	1.1	15.8	甕の転用
第57図	125	1区	SH620	半円形状土製品	土器	7.8	3.3	0.7	22.8	
第62図	132	1区	SK612	半円形状土製品	土器	4.2	3.3	0.8	11.1	
第73図	155	1区	SX556B	半円形状土製品	土器	5.9	3.7	0.6	17.3	
第79図	173	1区	SX548	半円形状土製品	土器	3.9	2.3	0.4	5.6	外面スス付着
	174	1区	SX548	土錘	土	3.7	1.3	1.3	5.9	穿孔 0.3cm
	176	1区	SX549	女兒人形	ビニール?	5.1+ α	(最大幅) 2.7	0.3	13.6	
第82図	180	1区	S-597	半円形状土製品	土器	3.0	3.4	0.7	8.0	
第87図	214	1区	調査区壁	土錘	土	4.6	1.2	1.2	6.1	穿孔 0.3cm

第4図 上田原東遺跡（1区）遺物観察表（金属製品）

挿図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第57図	126	1区	SH620	刀子	鉄	(9.3)	2.2	0.3	13.8	外面：一部木質残存
第68図	148	1区	SH570 加ト*	耳環	銅	(3.5)	0.6 ~ 0.7	0.8	14.3	銅芯地に鍍金、内径 1.9cm
第75図	170	1区	SX619	釘	鉄	(3.5)	0.6	0.3	2.0	
第79図	178	1区	SX614	銭貨	銅	2.2	2.2	0.1	4.3	10円硬貨か
第87図	215	1区	東壁	釘	鉄	(5.7)	0.2 ~ 0.5	0.2 ~ 0.5	5.9	

第5表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(土器)

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調			胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	
第95図	223	2区 SH770	細文土器	深鉢				ヨコテ・シキ	ヨコテ・シキ・沈線	暗灰黄褐色	にぶい黄褐色	少	少		
	224	2区 SH770	細文土器	深鉢				条痕・突帯	条痕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少		
	225	2区 SH770	細文土器	深鉢				条痕・ヨコテ	条痕	暗褐色	暗褐色	少	少		
	226	2区 SH770	細文土器	深鉢				ヨコテ・シキ	ヨコテ・シキ・沈線	暗褐色	暗褐色	少	少		
	227	2区 SH770	細文土器	浅鉢小				ヨコテ・シキ	ヨコテ・シキ	暗褐色	暗褐色	少	少		
	228	2区 SH770	細文土器	浅鉢				ヨコテ・シキ	ヨコテ・シキ	褐灰色	褐灰色	少	少		
	229	2区 SH770・検出	細文土器	浅鉢				ヨコテ	ヨコテ	暗赤褐色	暗赤褐色	少	少		
	230	2区 S-770	細文土器	浅鉢				テ	テ	灰黄褐色	灰黄褐色	少	少		
	231	2区 S-770a	須恵器	甕				回転ヨコテ	回転ヨコテ	灰白色	灰白色			少	
	237	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	茶褐色	茶褐色	多	多		
	238	2区 SH785	細文土器	浅鉢				ヨコテ・シキ	ヨコテ・シキ	暗茶褐色	茶褐色	多	多		
	239	2区 SH785	細文土器	深鉢				シキ	シキ	黄褐色	黄褐色	多	多		
	240	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	茶褐色～暗茶褐色	黄褐色～黒灰色	多	多		
	241	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	242	2区 SH785	細文土器	深鉢				条痕	条痕	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	243	2区 SH785	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	244	2区 SH785	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	245	2区 SH785	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	暗褐色	暗褐色	少	少		
	246	2区 SH785	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	黒茶褐色	暗灰黄褐色	少	少		
	247	2区 SH785	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	248	2区 SH785	細文土器	浅鉢				テ	テ	黄褐色	黒褐色	多	多		
	249	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	暗褐色	黒褐色	少	多		
	250	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
251	2区 SH785	細文土器	深鉢				テ	テ	黄褐色	黄褐色	多	多			
252	2区 SH871	細文土器	深鉢				テ	テ	にぶい褐色	明褐色	少	少			
253	2区 SH871	細文土器	鉢				テ	テ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少			
254	2区 SH871	細文土器	深鉢				ヨコテ・条痕	ヨコテ・シキ・沈線	暗褐色	にぶい黄褐色	少	少			
255	2区 SH871	細文土器	深鉢				条痕・テ	テ	暗褐色	暗褐色	多	多			
256	2区 SH871	細文土器	浅鉢				ヨコテ・シキ	ヨコテ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少			
257	2区 SH871	細文土器	浅鉢				ヨコテ	ヨコテ	にぶい黄褐色	暗灰褐色	少	少			
258	2区 SH871	細文土器	鉢				ヨコテ・テ	テ	明褐色	明褐色	少	少			
266	2区 SH915	細文土器	深鉢				テ	テ	黒褐色～浅黄褐色	にぶい黄褐色～黒褐色	少	少			
267	2区 SH915	細文土器	深鉢				ヨコテ・貼付突帯	ヨコテ	黒褐色	褐色	少	多			
268	2区 SH915	細文土器	深鉢				テ	テ	明赤褐色	褐灰色	多	少			
269	2区 SH915	細文土器	深鉢				ヨコテ・貼付突帯	ヨコテ	褐色	褐色	多	少			
270	2区 SH915	細文土器	深鉢				ヨコテ・テ	テ	褐色	褐色	少	少		内外面黒斑あり	
271	2区 SH915	細文土器	浅鉢				ヨコテ・沈線・シキ	ヨコテ	灰色	灰色	少	少			
272	2区 SH915・検出	細文土器	浅鉢				シキ	シキ	淡黄色	褐色	少	少			
273	2区 SH915	細文土器	底部				テ	テ	褐色	褐色	多	少			
274	2区 SH915	細文土器	深鉢				テ	テ	浅黄褐色	褐灰色	多	少			
277	2区 SH954	細文土器	深鉢				ヨコテ・貼付突帯・テ	ヨコテ・テ	茶褐色	茶褐色	多	少			
278	2区 SH954	細文土器	深鉢				ヨコテ・貼付突帯・テ	ヨコテ・テ	淡黄色	褐色	多	多			
279	2区 SH954	細文土器	深鉢				ヨコテ・貼付突帯・テ	ヨコテ・シキ	褐色	褐色	少	少			
280	2区 SH954	細文土器	浅鉢				ヨコテ・沈線・シキ	ヨコテ・シキ	淡黄色	灰褐色	少	少			

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第104図	281	2区 SH954	弥生土器		2.4+ α			刃キ		茶褐色		少		
	283	2区 SH955・SH760 H-5 検出	深鉢	(43.0)	42.1+ α		条痕後行・刃キ		暗褐色		多	多		
	284	2区 SH955	鉢		3.9+ α		刃キ・行		暗褐色		少	少		
	285	2区 SH955	深鉢		10.8+ α		刃キ・行		淡赤褐色		多	多		
	286	2区 SH955	浅鉢		3.7+ α		刃キ		暗褐色		少	少		
	287	2区 SH955	底部		1.7+ α	(7.0)	行		淡黄褐色		少	少		
	288	2区 SH955	底部		1.9+ α	(7.2)	行・刃キ・未調整		暗褐色		少	少		
	289	2区 SH956	深鉢		6.4+ α		刃キ後刃キ		黄褐色		少	少		
	290	2区 SH956	深鉢		4.2+ α		刃キ後刃キ・刃キ		暗茶褐色		少	少		
	294	2区 SH981	深鉢		6.8+ α		細文・刃キ		にぶい黄褐色		少	少		
295	2区 SH981	浅鉢		3.6+ α		行・沈線		にぶい黄褐色		少	少			
296	2区 SH981	鉢		3.5+ α		行		暗褐色		少	少			
297	2区 SH981	鉢		2.1+ α		条痕		にぶい黄褐色		少	少			
298	2区 SH981	鉢		4.3+ α		刃キ・条痕		にぶい黄褐色		少	少			
299	2区 SH981	深鉢		11.3+ α		刃キ・条痕か・行		にぶい黄褐色		少	少			
300	2区 SH981	深鉢		6.6+ α		刃キ		暗褐色		少	少			
301	2区 SH981	鉢		7.2+ α		行		にぶい黄褐色		少	少			
302	2区 SH981・SH785	深鉢		12.7+ α	(33.4)	行・刃キ		暗褐色		少	少		補修孔径 4mm	
第110図	303	2区 SH981	細文土器 注口土器か		1.6+ α		刃キ・沈線		にぶい褐色		少	少		
	304	2区 SH981	鉢		3.7+ α		刃キ・条痕		暗褐色		少	多		外面種子圧痕か
	305	2区 SH981	鉢		4.2+ α		行		暗褐色		少	多		内面種子圧痕か
	306	2区 SH981	鉢		3.1+ α		行		暗褐色		少	少		外面赤彩・種子圧痕か
	307	2区 SH981	鉢		3.5+ α		刃キ		暗褐色		少	少		外面赤彩・種子圧痕か
	308	2区 SH981	鉢底部		1.9+ α		条痕・行	丁寧な行	にぶい黄褐色		少	少		
309	2区 SH981	深鉢		1.5+ α	(6.0)	行		にぶい黄褐色		少	少			
310	2区 SH981	深鉢		1.9+ α	5.0	行・指圧痕		にぶい黄褐色		多	少		内面刃付着	
311	2区 SH981	深鉢		1.8+ α	5.5	刃キ・行		にぶい褐色		少	少		内面刃付着	
313	2区 SK1000	深鉢		3.7+ α		磨消細文・沈線・行・粗い刃キ	行・条痕	褐色		多	少			
第111図	314	2区 SK1000	深鉢		5.0+ α		刃キ・沈線	刃キ・沈線・刃キ	灰黄褐色		少	少		
	315	2区 SK1000	深鉢		10.6+ α		刃キ・行	刃キ・沈線・刃キ	にぶい黄褐色		少	少		
	319	2区 SK782	深鉢		6.0+ α		細文・沈線	行	暗褐色		少	多		
第113図	320	2区 SK782	深鉢		3.3+ α		刃キ・刃キ・行	刃キ	灰褐色		少	多		
	322	2区 SK898	浅鉢		3.2+ α		刃キ	刃キ	暗褐色～黒褐色		少	多		
第117図	323	2区 SK898	深鉢		2.0+ α		刃キ	刃キ	暗褐色		少	多		外面種子圧痕か
	324	2区 SK950	深鉢		4.3+ α		行・貼付突帯	行	黒褐色		少	少		
第121	325	2区 SK970	鉢	(33.0)	13.0		条痕文・行	刃キ	暗褐色		少	少		
	326	2区 SK970	浅鉢か		3.5+ α		刃キ・行	刃キ	にぶい黄褐色		少	少		
	327	2区 SK970	深鉢		2.5+ α	9.0	行	行	暗褐色		少	少		
	330	2区 SD774	深鉢		4.1+ α		刃キ・条痕・三角突帯	条痕	褐色		少	少		
第125図	331	2区 SD774	深鉢		1.5+ α	(7.4)	行	行	にぶい黄褐色		少	少		
	333	2区 SH815a	弥生土器		2.3+ α		刃キ後刃キ	刃キ	暗褐色		多	多		外面刃付着
第127図	334	2区 SH815	壺		2.4+ α		刃キ・口端矢羽根状文	刃キ	明褐色		少	多		
	335	2区 SH860	深鉢		4.7+ α		刃キ・研磨	刃キ・沈線・研磨	暗灰色		少	多		
第129図	336	2区 SH860	深鉢		4.6+ α		刃キ・条痕	行	黄褐色		多	少		
	337	2区 SH860	弥生土器		5.5+ α		行・刃キ・突帯・穿孔	刃キ・穿孔	明褐色		多	少		穿孔あり

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第129図	338	2区 SH860	弥生土器 壺		5.0 + α		珽	珽	珽	珽	少	少	少	
	339	2区 SH860	小型丸底甗	(10.8)	9.3		深鉢	珽	珽	珽				内外面灰附着
第133図	346	2区 SH29	縄文土器 深鉢		3.4 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少		
	347	2区 SH29	縄文土器 深鉢		3.5 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少		
	348	2区 SH29	縄文土器 深鉢		3.7 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少		
	349	2区 SH29	縄文土器 深鉢		6.6 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	350	2区 SH29	縄文土器 浅鉢		5.7 + α		浅鉢	珽	珽	珽	少	少		
	351	2区 SH29	縄文土器 浅鉢		1.6 + α		浅鉢	珽	珽	珽	少	少		
	352	2区 SH29	須恵器 坏蓋	13.4	3.8		坏蓋	珽	珽	珽	少	少		内外面打欠あり
	353	2区 SH29	土師器 坏	(14.9)	3.2 + α		坏	珽	珽	珽	少	少		内外面赤彩
	354	2区 SH29	弥生土器 壺		4.7 + α		壺	珽	珽	珽	少	少		内外面赤彩
	355	2区 SH29	土師器 甃		5.3 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
第134図	356	2区 SH29	土師器 甃	(22.0)	9.5 + α		甃	珽	珽	珽	多	多		
	357	2区 SH29	土師器 甃	(16.8)	32.1		甃	珽	珽	珽	少	少		外面灰附着か
	358	2区 SH29	土師器 甃	30.5	28.1		甃	珽	珽	珽	少	少		内外面黒斑あり
	359	2区 SH29	土師器 甃	32.6	31.2		甃	珽	珽	珽	少	少		内外面黒斑 片口縁
	360	2区 SH29	土師器 甃	16.7	31.5		甃	珽	珽	珽	少	少		外面灰附着 底部赤変
第135図	361	2区 SH29	土師器 甃	20.6	17.6 ~ 18.4	8.6	甃	珽	珽	珽	少	少		口径 18.5 ~ 21.6
	362	2区 SH29	土師器 甃	28.7	30.1 ~ 30.4	10.8	甃	珽	珽	珽	少	少		口径 24.9 ~ 28.7 穿孔 3 (未貫通 2)、 外面灰附着
第136図	363	2区 SH29	土師器 甃	25.2	31.6	10.0	甃	珽	珽	珽	少	少		口径 23.0 ~ 26.7 穿孔 2ヶ所 外面黒斑あり
	364	3区 SH29	土師器 甃		2.8 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		外面種子圧痕
第139図	372	2区 SH724	縄文土器 浅鉢		2.2 + α		浅鉢	珽	珽	珽	少	少		
	373	2区 SH724	縄文土器 深鉢		2.7 + α	(7.2)	深鉢	珽	珽	珽	少	少		
	374	2区 SH724	弥生土器 甃		3.0 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		内面黒変
	375	2区 SH724	弥生土器 甃		3.7 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
	376	2区 SH724	弥生土器 甃		2.2 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
	377	2区 SH724	弥生土器 甃		3.6 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
	378	2区 SH724	土師器 鉢	(15.6)	5.8 + α		鉢	珽	珽	珽	少	少		外面赤彩
	380	2区 SH726	縄文土器 浅鉢		2.5 + α		浅鉢	珽	珽	珽	少	少		内面種子圧痕
第141図	381	2区 SH726	弥生土器 甃		1.9 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
	382	2区 SH726	弥生土器 甃		2.3 + α		甃	珽	珽	珽	少	少		
	383	2区 SH726	土師器 壺		4.2 + α		壺	珽	珽	珽	少	少		
	385	2区 SH730	縄文土器 深鉢		2.9 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少		
	386	2区 SH730	縄文土器 深鉢		5.1 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	387	2区 SH730	縄文土器 深鉢		5.5 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	388	2区 SH730	縄文土器 深鉢		6.9 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	389	2区 SH730	縄文土器 深鉢		5.6 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	390	2区 SH730	縄文土器 深鉢		4.5 + α		深鉢	珽	珽	珽	多	多		
	391	2区 SH730	縄文土器 深鉢		5.7 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少		
392	2区 SH730 灰ト	縄文土器 深鉢		4.8 + α		深鉢	珽	珽	珽	少	少			

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考		
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英		その他	
第143図	393	2区 SH730	細文土器 深鉢		5.8+ α			細いミガキ	シキ・ナリ	黒褐色	褐色	多	多			
	389-2	2区 SH730	細文土器 深鉢		2.7+ α			条痕	条痕	暗褐色	暗褐色	少	少		内面種子圧痕か	
	394	2区 SH730	弥生土器 甃		3.0+ α			ヨコナリ・ナリ・貼付突帯	ナリ	にぶい黄色	にぶい褐色	少	少			
	395	2区 SH730	弥生土器 甃		4.6+ α			ヨコナリ・ナリ・貼付突帯	ナリ	黄褐色	にぶい褐色	少	少			
	396	2区 SH730	弥生土器 甃		3.6+ α			ヨコナリ・刻目突帯・ナリ	ナリ	褐色	褐色	少	少			
	397	2区 SH730	細文土器 深鉢		3.2+ α			ヨコナリ	ナリ・ナリ	褐灰色	にぶい褐色	多	多			
	398	2区 SH730	弥生土器 甃		1.8+ α			ヨコナリ・ナリ・シキ	ナリ・シキ	褐色	黒褐色	少	少			
	399	2区 SH730	土師器 鉢		5.4	7.7		ヨコナリ・ナリ	ヨコナリ・ナリ・ナリ	褐灰色	黄褐色	少	少		外面黒斑あり 内面赤色顔料	
	403	2区 SH731	細文土器 深鉢		5.7+ α			磨消細文瓦・ナリ	ヨコ方向のナリ(磨減ぎみ)	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多			
	404	2区 SH731	細文土器 深鉢		2.7+ α			ヨコナリ	ナリ後ナリ	暗茶褐色	黒褐色	多	多			
	第144図	405	2区 SH731	弥生土器 甃		3.2+ α			ナリ・ヨコナリ・刻目	ヨコナリ	暗褐色	暗褐色	多	少		
		406	2区 SH731	弥生土器 甃		2.5+ α			ナリ後沈線	ナリ後シキ	暗褐色	暗褐色	多	少		
		407	2区 SH731	須恵器 器台		2.9+ α			ヨコナリ	ヨコナリ	灰色	灰色	少	少		
		416	2区 SH750	細文土器 鉢		3.4+ α			ヨコナリ	ヨコナリ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	少	少		
417		2区 SH750	細文土器 深鉢		2.4+ α			ナリ	ナリ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少			
418		2区 SH750	細文土器 浅鉢		2.7+ α			ナリ・ヨコナリ	ナリ・ヨコナリ	淡赤褐色	淡赤褐色	多	多			
419		2区 SH750	細文土器 浅鉢		4.3+ α			条痕文	ナリ	灰褐色	灰褐色	多	多			
420		2区 SH750	土師器 甃		3.6+ α			ナリ	ナリ	淡褐色	淡褐色	多	少		内面種子圧痕か	
421		2区 SH750	弥生土器 甃		1.8+ α			ヨコナリ・ナリ・鋸歯状文	ヨコナリ・ナリ	淡褐色	淡褐色	少	少			
422		2区 SH750	弥生土器 甃		6.3+ α	(8.6)		ナリ・ヨコナリ	ナリ・ヨコナリ	茶褐色	赤褐色	多	多			
第148図		423	2区 SH750	須恵器 坏蓋		3.4	(11.8)		ヨコナリ・回転シキリ・切 り後ナリ	ヨコナリ	灰白色	灰白色	少	少		
		424	2区 SH750 坏ナド	土師器 甃		5.8+ α	(12.8)		ヨコナリ・ナリ	ヨコナリ・ナリ	淡黄褐色	淡赤褐色	少	少		
		425	2区 SH750	土師器 甃		8.8+ α	(19.2)		ヨコナリ・ナリ	ヨコナリ・ナリ・指圧痕	淡褐色	淡褐色	多	多		
		426	2区 SH750 坏ナド	土師器 甃		8.4+ α	(10.0)		ヨコナリ・ナリ	ヨコナリ・ナリ	淡褐色	淡褐色	多	多		
	427	2区 SH750	弥生土器 甃		5.3+ α			ヨコナリ・ナリ	ヨコナリ・ナリ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	多		口縁部穿孔あり	
	428	2区 SH750	弥生土器 高坏		3.8+ α			ヨコナリ・不定方向のナリ	ヨコナリ・不定方向のナリ	淡褐色	淡褐色	少	多		内面種子圧痕か	
	429	2区 SH750	土師器 高坏		3.2+ α			工具ナリ	工具ナリ	淡褐色	淡褐色	少	少		外面種子圧痕か	
	433	2区 SH760	細文土器 深鉢		2.8+ α			沈線文・磨消細文	ナリ	淡赤褐色	淡赤褐色	少	少			
	434	2区 SH760	細文土器 鉢		3.0+ α			条痕	ナリ	暗褐色	暗褐色	少	多			
	435	2区 SH760	細文土器 深鉢		5.2+ α			シキ	シキ	暗褐色	暗褐色	多	多			
	436	2区 SH760	細文土器 浅鉢		4.5+ α			条痕	条痕	黒灰色	黒灰色	少	少			
	437	2区 SH760	細文土器 浅鉢		5.8+ α			条痕	条痕	黒灰色	黒灰色	少	少			
	438	2区 SH760	細文土器 底部		1.9+ α	(5.0)		ナリ・ヨコナリ	ナリ	暗褐色	暗褐色	多	多			
	第150図	439	2区 SH760	細文土器 底部		2.5+ α	7.4		ナリ・ヨコナリ	ナリ	暗褐色	淡赤褐色	多	多		
440		2区 SH760	弥生土器 甃		3.0+ α	(16.0)		ナリ・鋸歯状文	ナリ	淡褐色	淡褐色～淡褐色	少	少			
441		2区 SH760 坏ナド	土師器 甃		8.3+ α	15.4		ヨコナリ・工具ナリ	ヨコナリ・工具ナリ	暗褐色	暗褐色	少	多			
442		2区 SH760 坏ナド	土師器 甃		32.3	(16.0)	5.4	ヨコナリ・記号	ヨコナリ・ナリ	淡褐色	暗褐色	多	多		外面へラ記号	
443		2区 SH760 坏ナド	土師器 甃		24.3	(13.2)	2.0	ヨコナリ・シキリ	ヨコナリ・ナリ	淡褐色	淡褐色	多	多			
444		2区 SH760 坏ナド	土師器 鉢		6.9	14.2		ヨコナリ・ナリ・ハナナリ	ヨコナリ・ナリ	淡赤褐色	暗褐色	多	多		器高 6.5～7.3	
445		2区 SH760 坏ナド	土師器 鉢		6.8	14.2		ヨコナリ・磨減・ハナナリ	ヨコナリ・ナリ・ハナナリ	淡褐色	淡黄褐色	多	多		口径 28.4～30.6 器高 31.2～31.7 穿孔あり 外面一部ハナナリ	
第151図	446	2区 SH760	土師器 甃	(30.6)	31.5	11.0	ヨコナリ・工具ナリ・ナリ	ナリ	黄褐色	黄褐色	多	多				
第154図	456	2区 SH773	弥生土器 甃		6.6+ α		ヨコナリ・好方向のナリ	ヨコナリ・シキ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少				

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第 154 図	457	2区 SH773	土師器		3.5+ α		ヨコテ	ヨコテ	褐色	褐色	多	少		
	458	2区 SH773・SH896	土師器	甃	1.8+ α		テ	テ	灰白色	灰白色	多	少		
	459	2区 SH773・SH896	土師器	高坏	8.0+ α		テ・工具テカ・テ	しぼり痕・テ	灰白色	灰白色	少	少		
	466	2区 SH801	縄文土器	深鉢	4.5+ α		テ後テキ	テ後テキ	黄褐色	黄褐色	少	少		
	467	2区 SH801	縄文土器	浅鉢	3.8+ α		テ後テキ	テ後テキ	黄褐色	黄褐色	多	多		
	468	2区 SH801	縄文土器	深鉢	3.8+ α		テ後テキ	テ	黄褐色	黄褐色	多	多		
	469	2区 SH801・SH916	縄文土器	深鉢	3.3+ α		ヨ方向のテ	テ後テキ	暗黄褐色	暗黄褐色	少	多		外面赤色顔料
	470	2区 SH801	縄文土器	浅鉢	2.2+ α		テ後テキ	テ後テキ	暗灰黄褐色	暗灰黄褐色	少	少		
	471	2区 SH801	弥生土器	甃	1.4+ α		ヨテ・甃籬文	ヨテ	暗褐色～暗褐色	暗褐色	多	多		
	472	2区 SH801	弥生土器	甃	5.6+ α	(16.9)	ヨテ・工具テ	ヨテ・指圧痕・テ	にぶい褐色	褐色	少	少		
	473	2区 SH801・テ	土師器	甃	10.6+ α	(14.2)	ヨテ・テ	テ・ヨテ	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多		外面・黒斑あり
	474	2区 SH801・SH916	土師器	甃	10.3+ α	(16.0)	テテ・ヨテ	テテ・ヨテ	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多		
	475	2区 SH801・SH916	土師器	甃	9.0+ α	(20.2)	指圧痕・テ・ヨテ	テテ・ヨテ	暗赤黄褐色	暗褐色	多	多		
	476	2区 SH801・テ	土師器	甃	17.7		ヨテ・ヨテ	ヨテ・ヨテ	淡橙赤褐色	淡橙赤褐色～黒褐色	多	少		
	477	2区 SH801・テ・SH860・検出	土師器	甃	16.0+ α	18.5	テテ・ヨテ	磨滅	灰白褐色～暗黄褐色	灰白褐色～暗黄褐色	多	少		外面黒斑あり
478	2区 SH801・テ・検出	土師器	鉢	13.2	24.3	テテ後テ・ヨテ	テ・ヨテ	淡褐色～黄褐色	淡褐色～黄褐色	多	少			
479	2区 SH801	土師器	鉢	9.9	15.4～17.0	テテテ・テ・ヨテ	ヨ方向のテ・ヨテ	暗黄赤褐色	暗褐色	多	多		外面工具痕	
第 158 図	484	2区 SH896 中央土坑	縄文土器	深鉢	2.4+ α		テ	条痕文	暗褐色	暗褐色	少	少		
	485	2区 SH896	縄文土器	深鉢	2.9+ α		半截竹管文	テ	褐色	褐色	多	少		
	486	2区 SH896	縄文土器	鉢	2.1+ α		縄文 RL・押点文	テ	淡赤褐色	淡赤褐色	少	少		
	487	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	3.7+ α		テキ	テキ	暗褐色	暗褐色	少	少		
	488	2区 SH896	縄文土器	深鉢	11.1+ α		条痕文・テ・ヨテ	条痕文後テ・ヨテ	暗黄褐色	暗褐色	多	少		
	489	2区 SH896	縄文土器	深鉢	3.0+ α		ヨテ・テ	テキ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少		
	490	2区 SH896	縄文土器	深鉢	2.5+ α		ヨテ	ヨテ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多		
	491	2区 SH896	縄文土器	深鉢	4.1+ α		ヨテ・テ・貼付突帯	条痕文・ヨテ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	少		
	492	2区 SH896	縄文土器	深鉢	5.4+ α		テテ後テキ	テキ	暗褐色	暗黄褐色	少	少		
	493	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	3.7+ α		テキ	テキ	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多		
	494	2区 SH896	縄文土器	深鉢	6.4+ α		テテ後テ	テ	暗茶褐色	茶褐色	多	多		
	495	2区 SH896	土師器	鉢	2.2+ α		テテ後テ	テキ	暗褐色	暗褐色	多	多		口縁部種子圧痕
	496	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	5.3+ α		テキ	テキ	茶褐色	暗茶褐色	少	少		内面種子圧痕
	497	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	2.5+ α		テキ	テキ	暗茶褐色～黒灰色	暗茶褐色～黒灰色	少	少		
	498	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	3.3+ α		テキ	テキ	茶褐色	黒灰色	少	少		
499	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	3.5+ α		テテ後テ	テキ	暗黄褐色	暗黄褐色	多	多		内面種子圧痕	
500	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	1.9+ α		テキ	テキ	灰黄褐色	灰黄褐色	少	少			
501	2区 SH896	縄文土器	浅鉢	3.2+ α		テキ	テキ	黒褐色	淡茶褐色	少	少			
502	2区 SH896	弥生土器	甃	4.0+ α		テテ後重弧文	テ	黄褐色	黄褐色	多	多			
503	2区 SH896	弥生土器	甃	3.4+ α		テテ後重弧文	テ	橙黄色	橙黄色	少	少			
504	2区 SH896	弥生土器	甃	2.9+ α		テテ	テ	褐色	暗黄褐色	少	多			
505	2区 SH896	弥生土器	甃	5.4+ α		テ・貼付突帯	テ	赤褐色	暗茶褐色	多	多		外面赤彩	
506	2区 SH896	弥生土器	甃	2.7+ α		テテ後ヨテ刺突文	テ	暗褐色	淡褐色	少	多			
507	2区 SH896	弥生土器	甃	3.1+ α		工具テ・刻目突帯	テ	淡褐色	淡褐色	多	多			
508	2区 SH896	弥生土器	甃	4.9+ α		ヨテ・テ	ヨテ・テ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多			
509	2区 SH896	弥生土器	甃	6.6+ α		平行線文・テ	テ	暗褐色	淡赤褐色	多	多			
510	2区 SH896	土師器	甃	5.1+ α	(15.6)	ヨテ	ヨテ	暗茶褐色	茶褐色	多	多			

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考	
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英		その他
第161図	511	2区 SH896	土師器	甃	(12.0)	6.2+ α	指圧痕・打・叩打	工具打・叩打	黒茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	多	少	多	多	外面双付着
	512	2区 SH896	土師器	甃		11.6+ α	舂・打・叩打・打	指打・叩打・工具打	暗褐色	暗褐色	多	多	少	多	外面黒斑 内外面双付着
第162図	513	2区 SH896	土師器	甃	(21.4)	20.7+ α	叩・叩打	叩・工具打・叩打	黄茶褐色	黄茶褐色	少	多	多	多	外面黒斑 内外面双付着
	514	2区 SH896	土師器	甃		11.3+ α	打	打後打	暗褐色	暗褐色	多	多	多	多	
	515	2区 SH896	土師器	壺	(19.8)	7.1+ α	叩打・工具打	叩打・工具打	淡橙褐色	淡橙褐色	少	多	多	多	
	516	2区 SH896	土師器	壺	(19.8)	7.1+ α	叩打・工具打	叩打・打	暗褐色	暗褐色	多	多	多	多	
	517	2区 SH896	土師器	壺		9.6+ α	叩打・磨滅	赤・痕・打・叩打・指圧痕	橙黄褐色	黄褐色	少	多	多	多	
	518	2区 SH896	土師器	小型丸底甃	10.0	11.6	叩打・打・工具打	叩打・工具打・指圧痕	淡黄褐色	淡黄褐色	多	多	多	多	外面黒斑
	519	2区 SH896	土師器	壺	(10.4)	4.2+ α	叩打・打	叩打・打	暗褐色	暗褐色	少	多	多	多	
	520	2区 SH896	土師器	小型丸底甃		6.8+ α	叩打・打・打	打・指圧痕	淡赤褐色	淡赤褐色	少	多	多	多	外面双付着
	521	2区 SH896	土師器	高坏	20.0	6.4+ α	叩打・打	叩打・打	淡赤褐色	淡赤褐色	少	多	少	多	外面双付着
	522	2区 SH896	土師器	高坏	(19.0)	4.7+ α	叩打	叩打・打	暗褐色	暗褐色	少	多	少	多	巴轆弁真
	523	2区 SH896	土師器	高坏	14.4	3.7+ α	叩打・打	叩打・打	淡赤褐色	淡赤褐色	少	多	少	多	挿入付加法
	524	2区 SH896	土師器	高坏		4.8+ α	打・打・打	叩打・打	暗褐色	暗褐色	多	多	少	多	内面種子圧痕か
	525	2区 SH896	土師器	高坏	(13.0)	7.7+ α	工具打・叩打	工具打・叩打・打	淡褐色	淡褐色	少	少	少	多	
	526	2区 SH896	土師器	高坏		2.9+ α	叩目	工具打・叩打・叩打	淡褐色	淡褐色	少	少	少	多	
527	2区 SH896	土師器	高坏	(11.6)	8.7+ α	打・叩打	叩打・打・叩打	淡赤褐色	淡赤褐色	多	多	少	多		
528	2区 SH896	土師器	高坏		8.4+ α	打・叩打	叩打・叩打	暗橙褐色	暗橙褐色	少	多	多	多	内面種子圧痕か	
529	2区 SH896	土師器	高坏		1.7+ α	叩打・打	叩打・打	暗橙褐色	暗橙褐色	多	多	多	多		
530	2区 SH896	土師器	土師器		1.9+ α	打	打	暗褐色	暗褐色	少	多	少	多		
531	2区 SH896	土師器	甃		2.7+ α	工具打	打	暗褐色	暗褐色	多	多	少	多	内面種子圧痕か	
532	2区 SH896	土師器	土師器		5.1+ α	太い打	叩打・打	暗褐色	暗褐色	多	多	少	多	内面種子圧痕か	
第167図	555	2区 SH916	縄文土器	深鉢		3.6+ α	縄文	打	暗茶褐色	暗茶褐色	少	多	少	少	
	556	2区 SH916	縄文土器	深鉢		5.4+ α	縄文 RL・打後打	打	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	少	
	557	2区 SH916	縄文土器	深鉢		8.3+ α	打・打	打	暗紫色～黒褐色	暗茶褐色	多	多	少	少	
	558	2区 SH916	縄文土器	深鉢		5.2+ α	条痕・打	条痕	淡黄褐色	暗灰黄色	少	多	多	多	
	559	2区 SH916	縄文土器	深鉢		6.5+ α	条痕・ナデ	条痕	黒褐色	暗褐色	多	多	少	多	
	560	2区 SH916	縄文土器	深鉢		2.9+ α	条痕	条痕	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	多	
	561	2区 SH916	縄文土器	深鉢	(8.0)	3.0+ α	打・打	打	暗茶褐色	暗茶褐色	少	多	多	少	
	562	2区 SH916	土師器	壺	(10.8)	10.5	打	打・打	暗赤褐色	暗赤褐色	多	多	少	少	
	563	2区 SH916	須恵器	坏蓋		3.3	回転打・工具打	回転打・打後打	淡黄褐色	淡黄褐色	多	多	多	少	
	567	2区 SH946	縄文土器	深鉢		2.7+ α	叩打・打	条痕・打	黒褐色	黒褐色	多	多	少	少	
568	2区 SH946	縄文土器	深鉢		5.7+ α	叩打・条痕か	打	茶褐色	茶褐色	多	少	少	少		
569	2区 SH946	縄文土器	深鉢		4.1+ α	打・貼付突帯	打	灰褐色	黒褐色～にぶい橙褐色	多	少	少	少		
570	2区 SH946	縄文土器	深鉢		4.5+ α	叩打・貼付突帯	叩打	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	少	少	少	少		
第169図	571	2区 SH946	縄文土器	深鉢		6.1+ α	打・貼付突帯	打	褐色	褐色	多	多	多	多	
	572	2区 SH946	縄文土器	浅鉢		2.2+ α	打	打	黒褐色	黒褐色	少	少	少	少	
	573	2区 SH946	縄文土器	深鉢胴部		3.1+ α	打後打	打	茶褐色	暗茶褐色	少	多	多	多	外面種子圧痕か
	574	2区 SH946	弥生土器	壺		4.9+ α	刻目突帯・打	打	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	少	少	少	少	
	575	2区 SH946	弥生土器	壺	(9.4)	3.0+ α	叩打・打	打	褐色	褐色	多	少	少	少	
	576	2区 SH946	土師器	小型丸底甃		6.1+ α	打	打	黒褐色	黒褐色	多	多	少	少	
	577	2区 SH1049	縄文土器	深鉢		2.9+ α	叩打・貼付突帯	打	褐色	褐色	多	少	少	少	内面黒斑あり
	578	2区 SH1049	土師器	甃		9.9	叩打・打・打	叩打・打・打	褐色	褐色	少	少	少	少	外面黒斑あり
第171図	579	2区 SH1049	土師器	甃		20.9	叩打・打・打	叩打・打・打	褐灰色	浅黄褐色	少	少	少	少	外面双付着 内面黒斑あり
	580	2区 SH1049・SH801・SH731	土師器	甃		27.6	叩打・打・打	叩打・打・打	浅黄褐色	褐色	少	少	少	少	内外面黒斑

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第171図	581	2区 SH1049	土師器	斐	8.4+ α		ナ・指正痕	ナ	にぶい黄褐色	褐色	少	少	少	外面黒斑あり
	582	2区 SH1049	土師器	器台	2.8+ α	(8.3)	ヨナナ・ナ	ヨナナ・ナ	淡黄色	浅黄褐色	少	少	少	外面黒斑あり
	583	2区 SH1049	土師器	器台	4.2+ α	9.6	ナ・ヨナナ	ナ・ヨナナ	褐色	褐色	少	少	少	外面黒斑あり
第171図	584	2区 SH1049・SH731	土師器	高坏	13.2	10.1	ナ後ナ・ナ・ヨナナ	ナ・ヨナナ	褐色	浅黄色	少	少	少	
	585	2区 SH1049	土師器	高坏	3.4+ α		ヨナナ・ナ	ヨナナ・ナ	灰白色	灰白色	少	少	少	
	586	2区 SH1049	土師器	高坏	10.0	(12.0)	ナ・ヨナナ・ナ	ナ・ヨナナ	灰白色～褐色	浅黄褐色	少	少	少	外面種子圧痕あり
	595	2区 SK789	不明	不明	2.2+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	外面黒斑あり
	598	2区 SK851	土師器	小野丸底壺	9.6		ナナ・ナ後ナ・ヨナナ	ナナ・ナ後ナ・ヨナナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
	599	2区 SK888	土師器	深鉢	2.6+ α		ナ・ナ後ナ・ナ	ナ後ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	穿孔0.9cm
	600	2区 SK933	土師器	浅鉢	3.0+ α		ナ・ナナ・ナ	ナナ・ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
	604	2区 SK736	土師器	浅鉢	3.5+ α		ヨナナ・ナ	ヨナナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
	605	2区 SK747	土師器	鉢	2.9+ α		ナ後ナ・ナ	ナ後ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
	606	2区 SK747	土師器	鉢	2.0+ α		ナ後ナ・ナ	ナ後ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
第184図	607	2区 SK747	土師器	鉢	6.2+ α	(30.4)	ナナ・ヨナナ	ナ・ヨナナ	暗褐色	暗褐色	多	多	少	
	608	2区 SK747	土師器	斐	7.0+ α	(14.6)	ヨナナ・ナ	ナ・ヨナナ	暗灰黄褐色	暗灰黄褐色	多	多	少	
	609	2区 SK747	土師器	高坏	4.8+ α		ナナ・ナナ後ナ	ヨナナ	暗褐色	淡赤黄色～黒褐色	少	多	少	凹部充填
	610	2区 SK747	土師器	高坏	7.1+ α		ナナ後ナ	ナナナリ	淡黄褐色	淡黄色	少	少	多	
	611	2区 S940	土師器	坏	1.7+ α		ヨナナ	ナ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少	少	
第198図	615	2区 SP759	白磁	皿	2.1	(2.6)	施釉・露胎	施釉	灰白色	灰白色				
	618	2区 SP764	土師器	深鉢	4.5+ α		ナ	ナ	黒褐色	暗赤褐色	少	少	少	
第202図	620	2区 SP848	土師器	深鉢	4.0+ α		ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	多	少	少	
	622	2区 SP988	土師器	深鉢	2.7+ α		ヨナナ・ナ	ヨナナ・ナ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少	少	
	624	2区 検出	土師器	深鉢	2.4+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	少	多	少	
	625	2区 検出	土師器	深鉢	3.3+ α		唐消細文RL・沈線	ナ	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少	
	626	2区 検出	土師器	深鉢	4.7+ α		細文RL・ナ	ナ	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	少	
	627	2区 H-5 検出	土師器	深鉢	1.2+ α		ナ	ナ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	多	多	少	
	628	2区 検出	土師器	深鉢	4.7+ α		ナ・ナ	ナ・ナ	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	少	
	629	2区 確認調査トナ	土師器	深鉢	4.1+ α		ナ・沈線	ナ・沈線	褐色	にぶい褐色	少	少	少	
	630	2区 H-4 検出	土師器	浅鉢	3.1+ α		ナ・ヨナナ	ナ・沈線	赤褐色	赤褐色	少	少	少	内面黒斑あり
	631	2区 調査区壁	土師器	浅鉢	3.0+ α		ヨナナ・ナ	ヨナナ・沈線・ナ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少	少	
第203図	632	2区 H-5 検出	土師器	深鉢	3.5+ α		ナ・ヨナナ	ヨナナ・ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	少	
	633	2区 検出	土師器	浅鉢	3.2+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	少	
	634	2区 S-775	土師器	深鉢	4.9+ α		ナ	ナ	灰褐色	にぶい褐色	少	多	少	
	635	2区 検出	土師器	深鉢	6.0+ α		条痕・ナ	条痕	暗褐色～黒褐色	暗褐色	多	多	少	
	636	2区 検出	土師器	深鉢	5.1+ α		巻貝条痕	条痕	暗褐色	暗褐色	多	多	少	
	637	2区 G-5 検出	土師器	深鉢	4.3+ α		ヨナナ・ナ・方形突帯	ヨナナ・ナ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少	少	
	638	2区 G-4 検出	土師器	深鉢	4.5+ α		ナ・突帯・条痕	ナ	暗褐色	暗褐色	少	少	少	
	639	2区 H-5 検出	土師器	深鉢	3.2+ α		ヨナナ・突帯	ヨナナ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	少	少	少	
	640	2区 検出	土師器	深鉢	4.5+ α		ナ・ナ	ナ	茶褐色	茶褐色	多	多	少	
	641	2区 G-5 検出	土師器	浅鉢	3.2+ α		ヨナナ・条痕・三角突帯	ヨナナ・条痕	暗褐色	暗褐色	少	多	少	
642	2区 調査区壁	土師器	深鉢	4.3+ α		ヨナナ・ナ	ヨナナ	暗褐色	暗褐色	多	多	少		
643	2区 G-4 検出	土師器	浅鉢	5.6+ α		ナ・ヨナナ	ナ	暗褐色	灰褐色	少	少	少		
644	2区 調査区壁	土師器	深鉢	5.2+ α		ヨナナ・ナ	ナ	褐色	黄褐色	多	少	少		
645	2区 検出	土師器	深鉢	4.1+ α		ナ後ナ・ナ	ナ	暗褐色	黄褐色	少	少	少		
646	2区 検出	土師器	深鉢	4.7+ α		ナ	ナ	暗褐色	暗褐色	多	多	少		
647	2区 G-5 検出	土師器	深鉢	3.1+ α		ナ・ナ	ナ	暗褐色	にぶい褐色	少	多	多		
648	2区 I-5 検出	土師器	深鉢	3.8+ α		巻貝条痕・ヨナナ	ナ	にぶい褐色	にぶい褐色	少	少	少		

挿図番号	区域	遺構	器種	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径	文様・調整		色調		胎土			備考
							外面	内面	外面	内面	角閃石	長石	石英	
第203図	649	2区	検出	細文土器	深鉢		条痕後ヅ	行'後ガキ	暗黄褐色	暗黄褐色	少	少	多	
	650	2区	I-6 検出	細文土器	深鉢		ヨコヅ・巻貝条痕	行'	赤褐色	褐色	少	少	少	
	651	2区	G-5 検出	細文土器	深鉢		行'		暗褐色	暗褐色	少	少	多	
	652	2区	検出	細文土器	深鉢	(8.6)	行'リ後ヅ	行'リ後ヅ	暗褐色	黒褐色	多	多	多	
	653	2区	表土	細文土器	深鉢	6.0	行'方向の行'	行'	暗褐色	にぶい暗褐色	多	多	多	
	654	2区	調査区壁	細文土器	浅鉢	8.5+ α	行'	行'	褐色	赤褐色	多	多	多	
	655	2区	G-5 検出	細文土器	浅鉢	3.3+ α	行'・沈線・沈線・沈線	行'・沈線	灰褐色	灰褐色	少	少	少	
	656	2区	表土	細文土器	浅鉢	4.0	行'・沈線	行'・沈線	灰褐色	灰褐色	多	多	多	
	657	2区	H-4 検出	細文土器	浅鉢	4.4+ α	行'・沈線	行'・沈線	灰褐色	灰褐色	多	多	多	
	658	2区	検出	細文土器	浅鉢	6.7+ α	行'	行'	黒褐色	黒褐色	多	多	少	
	659	2区	H-4 検出	細文土器	浅鉢	4.0+ α	行'・沈線	行'・沈線	にぶい赤褐色	暗褐色	少	少	少	
	660	2区	I-5 検出	細文土器	浅鉢	3.3+ α	行'・沈線	行'・沈線	にぶい褐色	黒褐色	少	少	少	
	第204図	661	2区	検出	細文土器	浅鉢	5.7+ α	条痕	行'	黒茶褐色	暗橙褐色	多	多	少
662		2区	確認調査トシ	細文土器	深鉢	3.2+ α	行'・沈線	行'・沈線	褐灰色	褐灰色	多	多	少	
663		2区	検出	細文土器	浅鉢	3.3+ α	行'	行'	黒褐色	黒褐色	多	多	少	
664		2区	表土	細文土器	注口土器	2.2+ α	行'・沈線・行'	行'	淡黄色	灰褐色	少	少	少	外面黒斑あり
665		2区	表土	弥生土器	甕	6.0+ α	ヨコヅ・刻目突帯・行'	行'	淡黄色	淡黄色	少	少	少	外面黒斑あり 内面黒斑あり
666		2区	検出	弥生土器	甕	6.4+ α	行'・ヨコヅ・刻目	行'・シガキ	黒茶褐色	黒茶褐色	多	多	多	
667		2区	G-5 検出	弥生土器	甕	7.7+ α	行'・行'	行'	暗褐色	暗褐色	少	少	多	
668		2区	検出	弥生土器	甕か	6.5+ α	行'・沈線	行'後ヅ	暗褐色	暗褐色	多	多	多	
669		2区	G-5 検出	弥生土器	甕	4.5+ α	行'後ヅ	行'後ヅ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	多	多	多	
670		2区	検出	弥生土器	甕	4.0+ α	行'	行'	暗茶褐色	暗茶褐色	多	多	多	
671		2区	検出	弥生土器	甕	6.4+ α	行'・行'後ヅ	行'後ヅ	黒褐色	暗茶褐色	多	多	少	
672		2区	検出	弥生土器	甕	2.4+ α	行'後ヅ	行'後ヅ	黄褐色	暗茶褐色	多	多	少	内面種子圧痕か
673		2区	検出	弥生土器	甕	3.0+ α	行'・櫛歯状文	ヨコヅ	黄褐色	黄褐色	多	多	少	
第205図	674	2区	表土	須臾器	坏蓋	(14.5)	行'・ヨコヅ	ヨコヅ	灰色	灰色	少	少	少	
	675	2区	表土	土師器	壺	5.2+ α	行'	行'	灰色	灰色	少	少	少	
	676	2区	G-5 検出	土師器	坏	3.55	行'・回転切り	ヨコヅ	褐色	褐色	少	少	少	
	677	2区	G-5 検出	土師器	坏	1.8+ α	行'	ヨコヅ	にぶい暗褐色	褐色	少	少	少	
	678	2区	検出	白磁	碗	2.1+ α	露胎	露胎	灰黄色	灰黄色				内面貫入あり
	679	2区	表土	白磁	碗	3.5+ α	施釉・露胎	施釉	灰白色	灰白色				玉縁碗
	680	2区	表土	陶器	向付	1.9+ α	施釉	施釉	灰白色	灰白色				志野焼
	711	1・2区	排土	細文土器	深鉢	4.7+ α	行'・条痕	行'・条痕	褐色	褐色	多	多	多	
	712	1・2区	排土	細文土器	浅鉢	3.7+ α	行'	行'	黒褐色	黒褐色	少	少	少	
	713	1・2区	排土	細文土器	浅鉢	4.4+ α	行'	行'	にぶい暗褐色	灰褐色	少	少	少	
	714	1・2区	排土	土師器	小皿	1.2	回転ヨコヅ・回転条切り	回転ヨコヅ・行'	褐色	褐色	少	少	少	
	715	1・2区	排土	青磁	碗	2.6+ α	施釉	施釉	初ノ灰	初ノ灰				龍泉窯
	716	1・2区	排土	青花	碗	2.5+ α	施釉	施釉	灰白色	灰白色				景徳鎮窯

第6表 上田原東遺跡(2区) 遺物観察表(石器)

挿図番号	区域	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	
第95図	232	2区	SH770	敲石・磨石	安山岩	10.3	10.7+ α	5.8	90.0	
	233	2区	SH770	打製石斧	安山岩	6.5+ α	6.2+ α	2.1+ α	80.0	
	234	2区	SH770	打製石斧	安山岩	8.8+ α	5.0+ α	1.9+ α	116.0	
	235	2区	SH770	打製石斧	安山岩	4.05+ α	5.7	0.65	20.4	
	236	2区	SH770	磨製石鏃	粘板岩	3.1+ α	1.4+ α	0.3	1.3	
第99図	259	2区	SH871	敲石	安山岩	6.1+ α	10.0	5.2	394.4	
	260	2区	SH871	スレバ-	安山岩	5.9	4.7	2.3	60.3	風化面あり
	261	2区	SH871	打製石斧	安山岩	8.3+ α	6.5	2.2	128.5	
	262	2区	SH871	打製石斧	安山岩	8.1+ α	4.3	1.7	72.3	
	263	2区	SH871	横刃型石器	頁岩	5.4	7.0+ α	0.75	29.5	一部風化あり
第100図	264	2区	SH871	石斧	砂岩か	11.4+ α	5.55	3.0	298.7	未成品
	265	2区	SH871	石皿	礫質安山岩	9.6+ α	12.2+ α	5.2	876.8	被熱あり
第102図	275	2区	SH915	打製石斧	安山岩	12.4+ α	7.4	2.4	208.7	未成品
	276	2区	SH915	打製石斧	砂岩	5.9+ α	5.6	1.9	71.0	
第104図	282	2区	SH954	磨石・敲石	砂岩	7.7+ α	9.7	6.6	670.0	
第108図	291	2区	SH956	スレバ-	金山産サカバ	5.5	8.8	0.7	50.3	
	292	2区	SH956	打製石斧	凝灰岩	14.7+ α	11.1	3.5	430.0	
	293	2区	SH956	打製石斧	テ 付 付	11.7	5.8	1.9	1470.0	
第110図	312	2区	SH981	打製石斧	緑色片岩 千枚岩 or	10.8	4.6	1.1	62.4	
第111図	316	2区	SK1000	打製石斧	テ 付 付	8.3+ α	6.3	1.5	98.6	
	317	2区	SK1000	十字形石器?	砂岩	9.9+ α	6.3+ α	2.1+ α	122.2	
	318	2区	SK1000	二次加工剥片	テ 付 付	5.7	11.3	2.9	181.1	
第115図	321	2区	SK812	打製石斧	安山岩	10.5+ α	5.3	2.5	141.7	
	321・ 368	2区	SK812・SH29	打製石斧 (接合資料)	安山岩	18.5	5.7	2.3	264.0	接合資料
第121図	328	2区	SK970	敲石	砂岩	10.7	9.1	5.2	680.0	
第123図	329	2区	SK1053	原石	流紋岩	6.0	13.0	3.6	387.6	全体的に摩滅
第125図	332	2区	SD774	打製石斧	安山岩	7.2+ α	5.4	2.8	171.6	
第129図	340	2区	SH860	敲石・磨石	砂岩	10.4	5.5	5.1	65.0	
	341	2区	SH860	打製石斧	泥岩か頁岩	8.2	4.6	1.2	50.2	
	342	2区	SH860	打製石斧	安山岩	12.4+ α	6.2	2.7	211.2	
	343	2区	SH860	打製石斧	不明	10.0+ α	6.9+ αか	1.7	103.1	
	344	2区	SH860	打製石鏃	姫島産黒曜石	1.9+ α	1.2+ α	0.4	0.5	
第131図	345	2区	SK776	打製石斧	安山岩	12.2+ α	6.3	1.4	107.8	
第136図	366	2区	SH29	紡錘車	蛇紋岩	3.7	3.8	0.9	20.6	穿孔径 1.0
	367	2区	SH29	打製石斧	安山岩	5.2+ α	7.2	1.3	57.7	
	368	2区	SH29	打製石斧	安山岩	9.4+ α	5.6	2.1	122.3	
	369	3区	SH29	切目石錘	粘板岩	10.7	2.8	1.15	50.8	
第137図	370	2区	SH29	石皿	砂岩	22.8+ α	25.1+ α	8.3~10.1	8,000.0	
	371	2区	SH29	石皿	安山岩	26.7	33.8	9.5	1500.0	
第139図	379	2区	SH724	打製石斧	安山岩	6.2	9.8	1.35	76.5	未成品
第141図	384	2区	SH726	打製石斧	安山岩	7.5+ α	4, 0	1.95	77.1	
第143図	401	2区	SH730	石ハ	砂岩	5.3+ α	2.4	1.85	17.3	
	402	2区	SH730	打製石斧	安山岩	10.45+ α	6.8	2.25	166.3	
第145図	410	2区	SH731	磨石	安山岩	5.3+ α	12.1	4.4	400.0	
	411	2区	SH731	打製石斧	安山岩	3.9+ α	6.1	2.0	54.3	
	412	2区	SH731	打製石斧	安山岩	10.7	6.0	2.2	134.4	石皿の転用か
	413	2区	SH731	管玉		2.3	0.5	2.0	0.8	
第146図	415	2区	SH731	石皿	安山岩	25.3	35.3	14.1	23200.0	
第148図	430	2区	SH750	磨石	角閃石安山岩	7.4+ α	5.4+ α	5.9	306.2	
	431	2区	SH750	打製石斧	泥岩	6.4+ α	4.8+ α	1.3	31.8	表裏面双付着
	432	2区	SH750	剥片	安山岩	4.0+ α	6.6	1.5	41.0	
第151図	449	2区	SH760	磨石	礫質片岩	10.6+ α	7.9	4.9	474.1	
第152図	450	2区	SH760	磨製石斧	片岩	6.7+ α	4.7	1.3	55.5	
	451	2区	SH760	打製石斧	安山岩	12.0+ α	7.0	3.1	241.6	
	452	2区	SH760	打製石斧	安山岩	6.5+ α	7.1	1.6	95.0	
	453	2区	SH760 カド	打製石斧	安山岩	5.4+ α	6.4	2.5	103.1	
	454	2区	SH760	打製石斧	安山岩	9.5+ α	6.5	1.5	127.4	
第154図	455	2区	S-760 カド	カド 袖石	凝灰岩	30.8+ α	20.3	16.4	8000.0	被熱あり
	460	2区	SH773	石核	流紋岩	8.7	3.3	2.6	74.0	旧石器
	461	2区	SH773	石核	安山岩	8.9+ α	14.3	7.0	1260.0	

挿図番号	区域	遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第 155 図	462	2 区	SH773	打製石斧	安山岩	10.7	5.0	1.0	51.7	未成品
	463	2 区	SH773	打製石斧	安山岩	9.4+ α	5.0	1.7	97.8	
	464	2 区	SH773	磨製石斧	蛇紋岩	7.0+ α	4.7+ α	1.3	49.7	
	465	2 区	SH773	台石	安山岩	13.5+ α	15.3+ α	4.9+ α	97.0	双付着
第 158 図	480	2 区	SH801	磨製石鏃	粘板岩	2.1	1.1	0.25	0.6	
	481	2 区	SH801	打製石斧	安山岩	9.3+ α	6.7	1.4	73.1	
	482	2 区	SH801	打製石斧	安山岩	13.9	5.7	2.8	244.3	
第 163 図	533	2 区	SH896	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.3	
	534	2 区	SH896	磨製石鏃	粘板岩	3.3+ α	1.2	0.25	1.8	
	535	2 区	SH896	石錐	チャート	2.7+ α	1.15	0.65	2.5	
	536	2 区	SH896	剥片	安山岩	7.3	3.8	1.7	56.6	
	537	2 区	SH896	磨製石斧	花崗岩か	13.6+ α	5.5+ α	3.0+ α	291.5	未成品
	538	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	13.9	6.0	2.05	260.3	
	539	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	8.0+ α	5.0+ α	1.3+ α	49.7	
第 164 図	541	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	6.0+ α	6.1	1.5	57.6	
	542	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	9.25+ α	7.6	1.8	157.7	未成品
	543	2 区	SH896	打製石斧	千枚岩	6.9+ α	5.0	1.4	65.6	
	544	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	13.6+ α	7.0	2.1	183.6	
	545	2 区	SH896	打製石斧	安山岩	19.0	6.8	4.5	640.0	未成品
	546	2 区	SH896	磨製石斧	砂岩	6.6+ α	5.1	3.05	124.7	
第 165 図	547	2 区	SH896	磨製石斧か	千枚岩	3.95+ α	4.7+ α	1.0	27.1	
	548	2 区	SH896	敲石	安山岩	9.1	6.5	5.9	51.0	
	549	2 区	SH896	敲石	砂岩	6.7	7.6	3.5	23.0	
	550	2 区	SH896	敲石	砂岩	15.6	6.8	4.3	59.0	
	551	2 区	SH896	敲石	砂岩	5.8	4.45	3.0	100.8	
第 167 図	565	2 区	SH916	打製石斧	安山岩か	10.5	4.2	1.5	71.6	
	566	2 区	SH916	打製石斧	安山岩	5.3+ α	4.9	1.5	54.8	表裏面被熱あり
第 172 図	588	2 区	SH1049	打製石斧	チャート	11.0+ α	5.6	1.5	119.8	
	589	2 区	SH1049	打製石斧	チャート	4.2+ α	6.2+ α	2.3+ α	59.0	一部被熱あり
	590	2 区	SH1049	礫器・敲石	砂岩	6.95	9.8	2.5	226.4	
	591	2 区	SH1049	石皿	泥岩	12.5	16.3	4.1	1140.0	
第 174 図	592	2 区	SK737	打製石斧	安山岩	11.0	5.0	2.0	117.7	
第 176 図	593	2 区	SK761	打製石斧	泥岩	5.1+ α	8.0	1.05	42.8	裏面被熱あり
第 178 図	594	2 区	SK783	打製石斧	安山岩	11.0+ α	7.0	1.5	97.3	
第 180 図	596	2 区	SK789	磨製石鏃	蛇紋岩	1.6+ α	1.5	0.2	0.8	
第 182 図	597	2 区	SK791	打製石斧	千枚岩	9.7	5.0	1.1	57.8	
第 188 図	601	2 区	SK933	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.5	1.2	未成品
	602	2 区	SK933	磨製石鏃	粘板岩	3.9	1.8	0.3	2.8	
第 190 図	603	2 区	SK725	打製石斧	安山岩	8.95+ α	6.2	1.35	99.1	
第 196 図	612	2 区	SK940	砥石	結晶片岩	9.8+ α	3.6	1.0	59.5	
	613	2 区	SK940	砥石	結晶片岩	16.5	7.0	1.8	328.8	
	614	2 区	SK940	礫器	礫	7.2	7.0	2.1	123.9	
第 200 図	616	2 区	SD728	敲石	砂岩	9.5	7.3	6.2	630.0	
	617	2 区	SD728	磨石・敲石	角閃安山岩	8.6+ α	9.3	6.4	730.0	
第 202 図	619	2 区	SP784	剥片	安山岩	5.5	9.1	0.9	49.2	
	621	2 区	SP949	打製石斧	砂岩	4.7+ α	5.8	1.7	31.5	
	623	2 区	SP989	台石	砂岩	13.0	18.25	7.9	2770.0	
第 205 図	681	2 区	H-6 検出	磨製石鏃	緑色片岩	4.6+ α	1.7+ α	0.4+ α	3.3	未成品
	682	2 区	G-5 検出	磨製石鏃	粘板岩	3.7	1.9	0.5	2.1	未成品
	683	2 区	G-4 検出	礫器	礫	9.3	10.6	3.2	331.1	縄文早期
	684	2 区	確認調査トレンチ	剥片	礫	10.7+ α	10.8+ α	2.9	265.3	縄文早期
	685	2 区	検出時	剥片	チャート	3.8	2.7	1.2	11.1	
	686	2 区	G-5 検出	剥片	粘板岩	4.4	10.2	0.7	29.9	
第 206 図	687	2 区	G-4 検出	剥片	凝灰岩	11.8+ α	7.3	2.0	124.6	
	688	2 区	I-6 検出	磨製石斧	チャート	10.1+ α	5.7	1.2	72.8	表裏面被熱
	689	2 区	確認調査トレンチ	打製石斧	チャート	10.9+ α	4.3	2.1	88.2	
	690	2 区	表土	打製石斧	安山岩	11.1	8.1	1.1	113.8	表面・裏面被熱
	691	2 区	G-4 検出	打製石斧	安山岩	13.0	7.1	2.0	160.5	未成品
	692	2 区	表土	磨製石斧	花崗岩か	12.4+ α	6.9+ α	2.1+ α	234.6	未成品

挿図番号	区域	遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第 207 図	693	2 区	確認調査トレンチ	打製石斧	安山岩	11.1+ α	5.8	2.3	180.0	
	694	2 区	確認調査トレンチ	打製石斧	緑色片岩	9.0+ α	5.9	1.1	88.1	
	695	2 区	G-5 検出	打製石斧	安山岩	10.0+ α	5.7	1.3	96.2	
	696	2 区	検出	打製石斧	閃緑岩	10.1+ α	6.2	2.4	163.1	
	697	2 区	H-5 検出	打製石斧	安山岩	8.5+ α	6.0+ α	1.6+ α	102.1	二次被熱
	698	2 区	F-5 北壁	打製石斧	緑色片岩	8.8+ α	6.1	2.3	124.4	
第 208 図	699	2 区	検出	打製石斧	テ 付 朴	9.6	7.3	1.9	133.9	
	700	2 区	表土	磨製石斧	砂岩	6.5	4.6	2.6	101.5	
	701	2 区	G-4 検出	切目石錘	砂岩	5.7	4.5	1.5	58.1	
	702	2 区	表土	切目石錘	粘板岩	9.6	6.6	2.1	190.8	
	703	2 区	検出	切目石錘	粘板岩	6.6+ α	5.65	0.75+ α	34.4	
	704	2 区	検出	切目石錘	粘板岩	8.9	2.6	1.7	59.2	
	705	2 区	G-5 検出	打欠石錘	砂岩	6.8	5.0	2.9	153.8	
第 209 図	706	2 区	東壁	敲石	角閃石安山岩	10.5	9.4	5.1	748.0	
	707	2 区	G-6 検出	敲石	砂岩	8.3	7.6	4.5	396.1	
	708	2 区	表土	敲石	テ 付 朴	11.8	8.8	5.6	718.6	
	709	2 区	表土	磨石・敲石	砂岩	8.5	7.7	4.1	401.2	
	710	2 区	H-6 調査区壁	台石	礫岩	24.1	24.6	7.5	6620.0	
第 210 図	717	1・2 区	排土	敲石・磨石	砂岩	13.2	11.6	9.7	2060.0	
	718	1・2 区	排土	剥片	チャート	3.1	2.25	0.6	4.6	
	719	1・2 区	排土	打製石斧	安山岩	7.8	5.2	1.0	53.5	
	720	1・2 区	排土	磨製石鏃	粘板岩	2.8	1.25	2.05	1.1	
	721	1・2 区	排土	石錘	安山岩か	5.6	2.5	1.8	38.0	

第 7 表 上田原東遺跡 (2 区) 遺物観察表 (土製品)

挿図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第 143 図	400	2 区	SH730	半円形状土製品	土器	3.2	2.6	0.75	7.3	下城式甕の転用
第 145 図	408	2 区	SH731	壁土	土	6.4	6.5	4.1	107.7	
	409	2 区	SH731	円形土製品	土	3.6	3.2	1.3	14.3	
第 151 図	447	2 区	SH760	半円形状土製品	土器	3.8	2.9	1.05	12.4	弥生甕の転用
	448	2 区	SH760	土錘	土	3.0+ α	1.4	1.4	5.9	穿孔径 0.4
第 167 図	564	2 区	SH916	壁土	土	8.6	5.0	3.3	70.9	
第 171 図	587	2 区	SH1049	土玉	土	2.2	1.7	0.7	4.5	穿孔径 0.4

第 8 表 上田原東遺跡 (2 区) 遺物観察表 (金属製品)

挿図番号	区域	遺構	種類	素材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
第 136 図	365	3 区	SH29	鉄鏃	鉄	3.7+ α	3.1+ α	0.2	8.1	
第 145 図	414	2 区	SH731	鉄鏃	鉄	19.3	0.5 ~ 0.7	0.5 ~ 0.7	26.8	
第 158 図	483	2 区	SH801	手鎌	鉄	9.3	2.9+ α	0.2	20.7	
第 165 図	552	2 区	SH896	板状鉄斧	鉄	9.8+ α	4.2	0.6	129.3	
	553	2 区	SH896	鉄鏃	鉄	7.4+ α	0.5 ~ 1.6	0.2 ~ 0.5	9.0	
	554	2 区	SH896	刀子	鉄	5.3+ α	1.8	0.3	11.5	

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第28集

上田原東遺跡

－県道三重新殿線（牟礼前田工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－

（第1分冊）

2024（令和6）年3月29日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印刷 明治印刷株式会社
〒872-0001 大分県宇佐市大字長洲607
TEL 0978-38-0135
